

青森県埋蔵文化財調査報告書 第302集

# 上野尻遺跡Ⅱ

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会





青森県埋蔵文化財調査報告書 第302集

# 上野尻遺跡Ⅱ

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会





# 序

青森市の東部、野内川の北には縄文時代以降の遺跡が多数あります。これらのなかで今まで山野峠遺跡（後期。久栗坂地区）・長森遺跡（晩期。矢田地区）・大浦貝塚（晩期。野内地区）などが調査されており、本県の縄文文化を語るうえで欠かすことのできない遺跡として知られています。

平成7年に、青森県総合運動公園の移転に伴い、宮田地区が青森県新総合運動公園の建設予定地となり、当センターによって予定地内の確認調査が行われてきました。その結果、あらたに上野尻遺跡・山下遺跡・米山(2)遺跡など7ヶ所の遺跡が発見されました。

この宮田地区の本格的な発掘調査は、平成9年から当センターによって開始されており、平成10年までに、縄文時代や平安時代の集落跡のほか、中世以降とみられる遺構なども発見され、この地区一帯に縄文時代以来の人々の歴史が埋もれていることが明らかになりました。

平成11年には、平成9年に引き続いて上野尻遺跡の第2次調査が行われました。この調査によって、縄文時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などが発見され、さらに埋もれていた旧河川からは後期・晩期の土器・石器類が多数出土しました。この調査によって、上野尻遺跡は縄文時代後期から晩期にかけて営まれた集落跡であることが確認されました。

なお、この上野尻遺跡から、平成12年度の調査で環状に配置された掘立柱建物跡群が発見され、この区域が保存されることとなりましたので付記します。

この調査報告書は、平成11年の調査結果をまとめたもので、この地域の歴史を探る資料として、今後の調査・研究、文化財の保護・普及活動等を行ううえでご活用いただければ幸いです。

発掘調査の実施及び出土品の整理・調査報告書の作成にあたり、種々ご指導・ご協力いただいた方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成13年3月

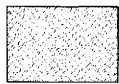
青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫

## 例 言

- 1 本報告書は、平成11年度に青森県新総合運動公園建設事業に伴い発掘調査を実施した青森市上野尻遺跡の調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集・発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号01278として登録されている。
- 3 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集・作成した。なお執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記した。
- 4 本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、国土地理院発行の5万分の1地形図を複製したものである。
- 5 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は不同である。
- 6 試料の分析・鑑定などについては、次の方々に依頼した。

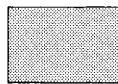
石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山 力
放射性炭素年代測定		株式会社地球科学研究所
出土炭化材・土壌のリン・カルシウム分析及び樹種同定		パリーノ・サーヴェイ株式会社
- 7 出土遺物のうち剥片石器の実測・トレース図の作成は、株式会社アルカに委託した。また、遺物の写真はシルバークローム及びフォトスタジオらに依頼した。
- 8 堆積土層等の色調観察には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）を用いた。
- 9 遺物の計測値は最大値であるが、破片については（ ）を付して残存最大値を示した。
- 10 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 挿図中で使用したスクリーンパターンは以下の通りである。



焼土・被熱痕



炭化物



礫石器磨痕



# 目 次

序  
例言  
目次

## 第1章 発掘調査の経過

第1節 調査要項	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	3
第4節 遺跡の地質と基本層序	4

## 第2章 A区検出遺構と出土遺物

第1節 土坑	11
第2節 土坑群	21
第3節 ピット群・ピット	57
第4節 性格不明遺構	58
第5節 旧河川跡の遺物	62
第6節 遺構外の遺物	117

## 第3章 C区検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡	130
第2節 土坑	132

## 第4章 D区検出遺構

第1節 竪穴状遺構	135
第2節 土坑	135
第3節 溝状土坑	137
第4節 ピット群	138

## 第5章 自然科学的分析

第1節 出土炭化材の放射性炭素年代測定	142
第2節 リン・カルシウム分析及び樹種同定	145
遺物観察表	149

## 第6章 まとめ

引用参考文献	172
--------	-----

写真図版

抄録

# 挿図目次

図1	遺跡位置図	
図2	調査対象区域図	
図3	基本層序 (1)	6
図4	基本層序 (2)	7
図5	A区遺構配置図	8
図6	C区遺構配置図	9
図7	D区遺構配置図	10
図8	第101・102・103・105号土坑、 第104号性格不明遺構、出土遺物	12
図9	第105号土坑 (2)	14
図10	第105号土坑 出土遺物 (1)	15
図11	第105号土坑 出土遺物 (2)	16
図12	第106・110号土坑、出土遺物	18
図13	第118・140号土坑、出土遺物	20
図14	第113号土坑	22
図15	第113号土坑 出土遺物 (1)	23
図16	第113号土坑 出土遺物 (2)	24
図17	第114・115・148・149号土坑、 第111号性格不明遺構	27
図18	第114・115・148・149号土坑	28
図19	第114号土坑 出土遺物 (1)	29
図20	第114・115号土坑 出土遺物	30
図21	第148号土坑 出土遺物 (1)	32
図22	第148号土坑 出土遺物 (2)	33
図23	第148・149号土坑 出土遺物 (1)	35
図24	第149号土坑 出土遺物 (2)	36
図25	第149号土坑・第111号性格不明遺構 出土遺物、 第123・124号土坑	38
図26	第123・124・125・126・141号土坑	40
図27	第125・126・141号土坑 出土遺物	42
図28	第126号土坑 出土遺物 (1)	43
図29	第126号土坑 出土遺物 (2)	44
図30	第141・127・129・131号土坑	47
図31	第129・131号土坑	48
図32	第129号土坑 出土遺物 (2)	50
図33	第129号土坑 出土遺物 (3)	51
図34	第129号土坑 出土遺物 (4)	52
図35	第129・131号土坑 出土遺物	53
図36	第131・142・143号土坑	55
図37	第101号ピット群	57
図38	第101号ピット、第101・106・107・108号 性格不明遺構	59
図39	旧河川跡及び基本層序	63
図40	第103号遺物集中区①	68
図41	第103号遺物集中区① 土器 (1)	69
図42	第103号遺物集中区① 土器 (2)	70
図43	第103号遺物集中区① 土器 (3)、 遺物集中区②-1	71
図44	第103号遺物集中区②-2	72
図45	第103号遺物集中区② 土器 (1)	73
図46	第103号遺物集中区② 土器 (2)	74
図47	第103号遺物集中区② 土器 (3)、 遺物集中区③	75
図48	第103号遺物集中区③ 土器 (1)	76
図49	第103号遺物集中区③ 土器 (2)、 その他土器 (1)	77
図50	第103号遺物集中区 その他土器 (2)・石器	78
図51	旧河川跡出土土器 (1) 1層	85
図52	旧河川跡出土土器 (2) 1・2・3層	86
図53	旧河川跡出土土器 (3) 3層-2	87
図54	旧河川跡出土土器 (4) 3層-3	88
図55	旧河川跡出土土器 (5) 3層-4	89
図56	旧河川跡出土土器 (6) 3層-5	90
図57	旧河川跡出土土器 (7) 3層-6	91
図58	旧河川跡出土土器 (8) 3層-7、10層	92
図59	旧河川跡出土土器 (9) 10層-2	93
図60	旧河川跡出土土器 (10) 10層-3	94
図61	旧河川跡出土土器 (11) 10層-4、13層	95
図62	旧河川跡出土土器 (12) 13層-2	96
図63	旧河川跡出土土器 (13) 13層-3、旧河川跡一括	97
図64	旧河川跡出土石器 (1)	99
図65	旧河川跡出土石器 (2)	100
図66	旧河川跡出土石器 (3)	101
図67	旧河川跡出土石器 (4)	102
図68	旧河川跡出土石器 (5)	103
図69	第101号遺物集中区 遺物出土位置図	108
図70	第101号遺物集中区 出土遺物 (1)	109
図71	第101号遺物集中区 出土遺物 (2)	110
図72	第101号遺物集中区 出土遺物 (3)	111
図73	旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (1)	112
図74	旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (2)	113
図75	旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (3)	114
図76	第101号遺物集中区・ 旧河川跡西半部出土石器	115
図77	旧河川跡西半部 (縄文時代晩期後葉出土区) 出土石器	116
図78	遺構外出土土器 (1)	120
図79	遺構外出土土器 (2)	121
図80	遺構外出土土器 (3)	122
図81	遺構外出土土器 (4)	123
図82	遺構外出土土器 (5)	124
図83	遺構外出土石器 (1)	125
図84	遺構外出土石器 (2)	126
図85	遺構外出土石器 (3)	127
図86	遺構外出土石器 (4)	128
図87	遺構外出土石器 (5)	129
図88	第101号竪穴住居跡、出土遺物	131
図89	第128・138・139・145号土坑、 出土遺物	134
図90	第101号竪穴状遺構、 第121・122・130号土坑	136
図91	第101・102号溝状土坑	138
図92	第102号ピット群 (1)	139
図93	第102号ピット群 (2)	140
図94	第102号ピット群 (3)	141



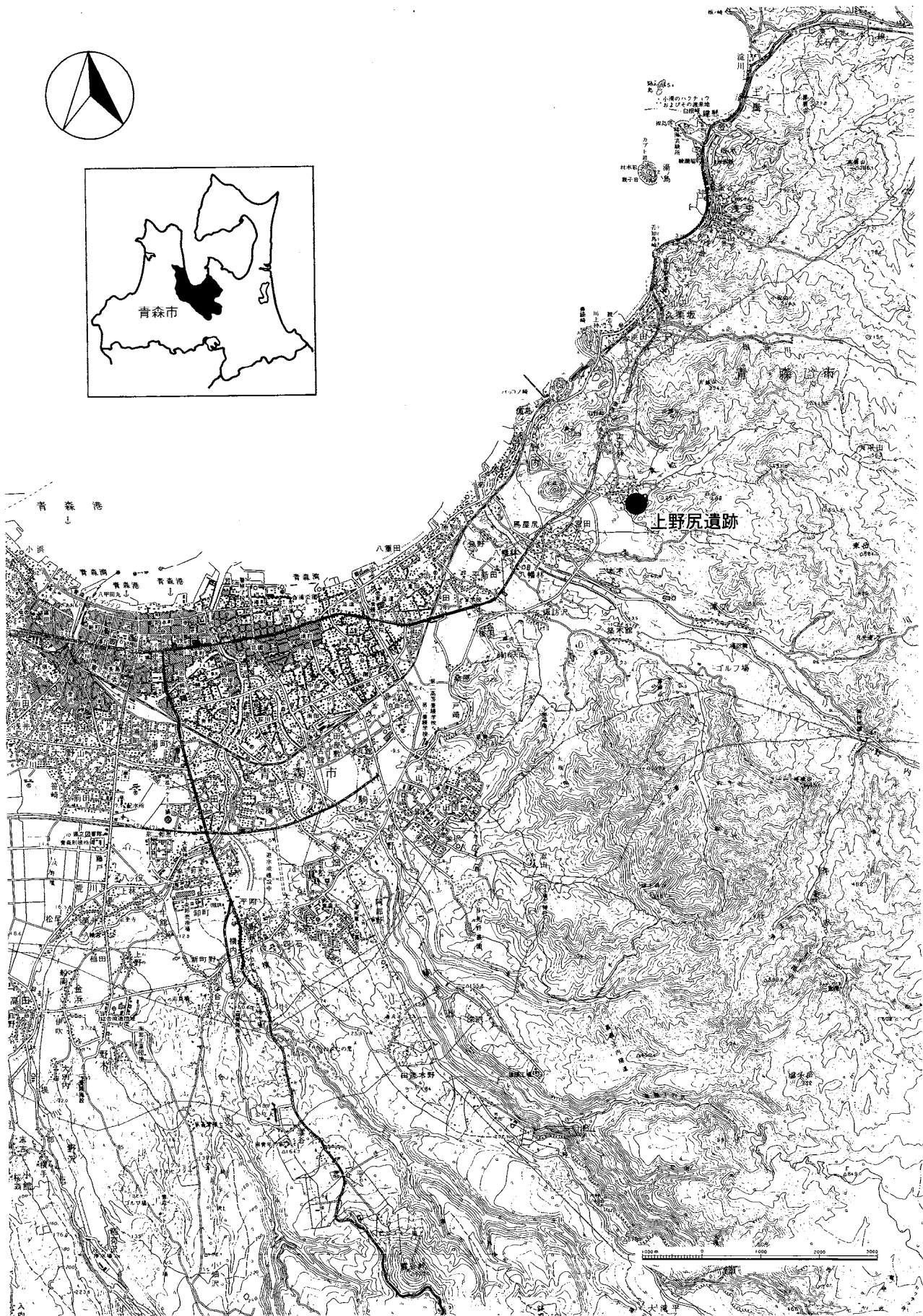


图1 遺跡位置図

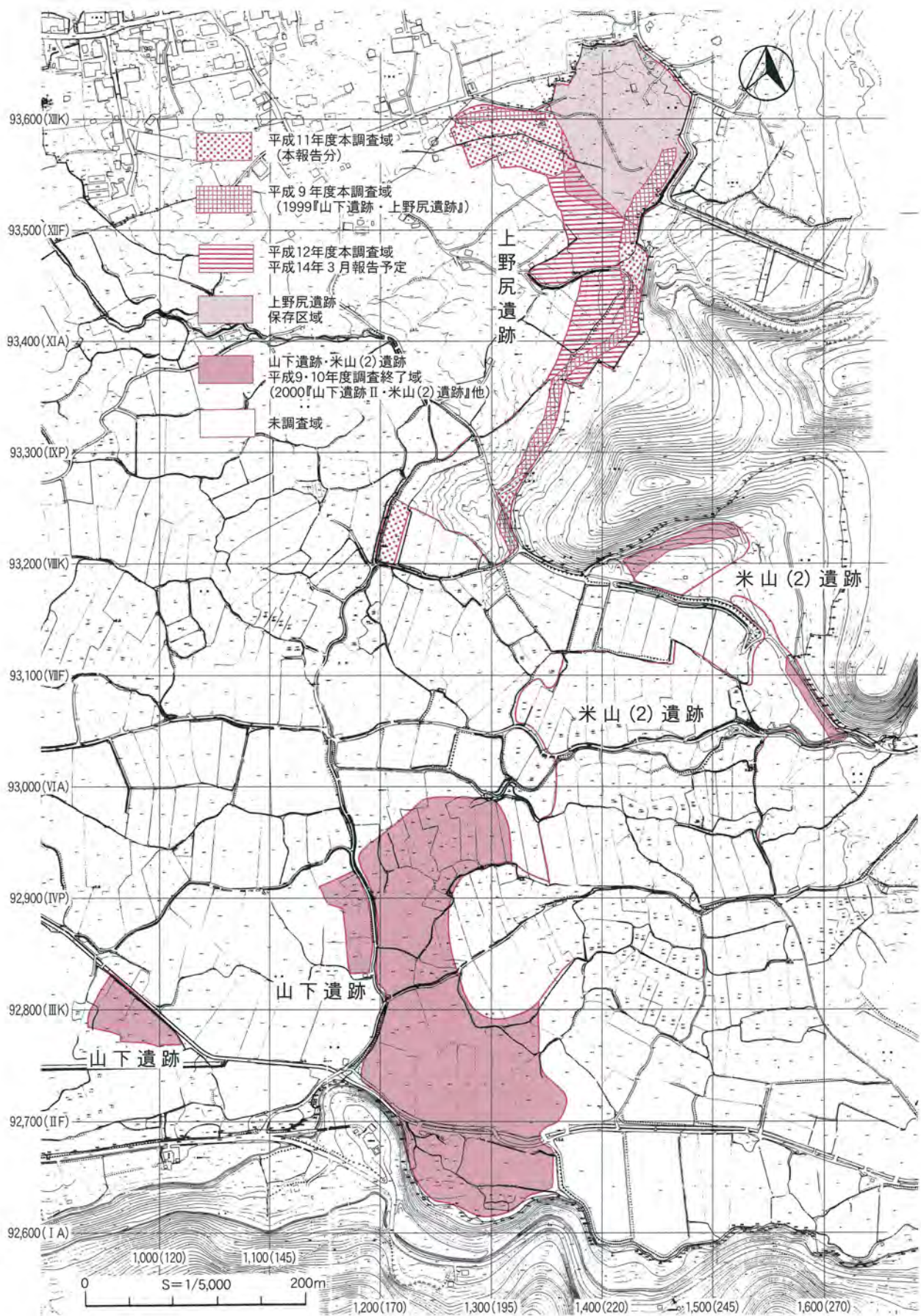


图2 調査対象区域図



# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

青森県新総合運動公園建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市上野尻遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

### 2 発掘調査期間

平成11年4月21日から11月12日まで

### 3 遺跡名及び所在地

上野尻遺跡 青森市大字矢田字上野尻54ほか  
(青森県遺跡台帳番号 01-278)

### 4 発掘調査面積

8,000㎡

### 5 調査委託者

青森県土木部都市計画課

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関

青森市教育委員会

### 9 調査体制

調査指導員	市川 金丸	青森県考古学会会長（考古学）
調査協力員	池田 敬	青森市教育委員会教育長
調査員	松山 力	八戸市文化財審議委員（地質学）
調査員	葛西 勳	青森短期大学助教授（考古学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所 長	中島 邦夫
	次 長	成田 誠治
	総務課長	成田 孝夫（現、青森県工業振興課課長補佐）
	調査第二課長	福田 友之
	文化財保護主事	工藤 由美子
	文化財保護主事	永嶋 豊
	調査補助員	藤谷 麻美、長谷川浩平、舘岡 杏子、工藤 美希

## 第2節 調査の方法

### 1 グリッドの設定

グリッド番号の呼称は、新総合運動公園用地内の平成8・9・10年度の調査のものを踏襲している。グリッドは4×4mで1単位とし、公共座標の軸に合わせ、公共座標X=92,680、Y=644をII A-30とした。X軸の南北方向はローマ数字とアルファベットの組み合わせで呼称し、Y軸の東西方向は算用数字で呼称した。X軸で使用するアルファベットはA～Tまでとし、グリッド名は南西隅の交点を用いて表した。

### 2 調査の手順

まず、調査区に2m×2mのトレンチを数ヶ所設定し、人力で掘り下げを行った。その結果、遺物の出土状況・遺構の分布密度がおおよそ把握できたため、重機による表土除去を行った。遺物包含層・遺構確認には、上層より分層発掘による掘り下げを行った。

遺物の取り上げは、ローマ数字で表記した基本層序に従い、グリッド単位・層単位を基本として行った。良好な遺物または遺物の出土状況の場合は、できる限り座標値・標高の記録をした。

### 3 遺構の調査

遺構の調査は四分法及び二分法により、土層観察のためのベルトを設けて行った。実測は簡易遣り方測量によるものとした。遺構の実測図の縮尺は、必要に応じて10分の1・20分の1を使用することにした。遺構名は、種別ごとに確認順に付した。調査時には種別ごとに1番から付していたが、調査が複数年度にわたっているため、各調査年度分の遺構がそれぞれ区別できるように、整理時に平成11年度調査分については、すべての遺構を101番からとした。

遺構内の堆積土については、上位から下位に向かって順に算用数字を付した。土層観察にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）を用いて注記した。

### 4 写真撮影

写真撮影は適宜行うこととし、主としてカラーリバーサル及びモノクロームネガの2種類のフィルムを用いた。ただし、遺構や遺物の状況に応じて、カラーネガフィルムやポラロイドカメラも使用した。

### 第3節 調査の経過

4月13日、原因者との打ち合わせにより、今年度調査予定区の3分の2ほどの範囲がまだ調査に入れないことがわかった。調査に入れない部分の大部分(a区)は、買収は終わっているが上物の撤去が終わっていない地域であり、調査に入れるのは6月以降になるということだった。残りの部分(b区)はまったくの未買収区であるという。

4月21日、調査機材を搬入し調査を開始した。まず調査に入れる地域の北西側にトレンチを入れ、遺物の出土状況・遺構の分布状況などを確認していった。

その結果、北西側には旧河川跡が東西に走っていることがわかり、遺物も多量に出土した。

5月26日、a区の調査が可能になったという連絡があったので、a区の調査も開始した。

6月28～7月2日まで、重機による表土剥ぎを行った。

7月7日、b区(調査区域図のB区・C区)の買収が終了し、C区はただちに調査に入れるがB区は1ヶ月後から調査に入れるということになった。

7月14日、文化課より今年度の調査予定地区外である遺跡の南端(調査区域図のD区)1,000㎡の調査を優先し、今年度中に終わらせて欲しい旨の依頼があったため、ただちにトレンチを設定し、粗掘りを開始した。

8月3～6日、D区の重機による表土剥ぎを行った。終了後掘り下げを行ったが、遺物がほとんど出土しないため、9月7日にも重機を入れ、掘り下げを行った。同時にC区にも重機を入れた。

8月19日にはB区も調査可能となり、上物の撤去終了後にトレンチによって土壌堆積状況・遺物出土状況を確認し、9月8～10日に重機による表土剥ぎを行った。その結果、B区からは遺物も遺構も確認されなかった。

9月に入り、多量の降雨で調査区北西側の旧河川跡が水没し、調査は難航した。10月28日には記録的な大雨のため全く作業ができず、当初10月29日までの調査期間を延長して、11月12日までの期間、職員・補助員による調査を行った。

11月15日、C区が市道矢田2号線に隣接しているため、事故防止のため重機による埋め戻しを行って、平成11年度のすべての調査を終了した。

なお、平成12年度にも11年度に引き続き調査を行ったが、12年度の調査では遺跡北東側に掘立柱建物跡群を確認し、掘立柱建物跡群とそれに伴う一部の遺構の保存が決定されたため、遺跡保存区もあわせて調査対象区域図(図2)に含めた。

(工藤 由美子)

## 第4節 遺跡の地質と基本層序

### ①遺跡の位置・地形

上野尻遺跡は、陸奥湾の南奥部に広がる青森平野の東北端の青森市矢田地区に位置する。

新総合運動公園建設予定地内は北・東・南を急傾斜面で囲まれた洪積台地・沖積地上に立地し、近年まで多くの水田やリンゴ畑が営まれていた。このうち上野尻遺跡からは、間近の山稜によって八甲田山こそ見えないが、西南西方向に岩木山をのぞむことができる。

上野尻遺跡は北西～北東側を片越山山塊(標高295m)、東～南側を東岳山塊(標高684m)によって囲まれており、それらの山塊から延びる幅数百m程度の狭小な尾根状地形が遺跡周辺の平地部に幾筋か延びている。

遺跡北側500mには貴船川が、南側1.5kmには野内川が西進し沖積地を形成し、野内地区にて陸奥湾に注いでいる。土石流堆積物の礫層や砂が、遺跡地内に非常に多く見られることは、幾度にもわたる貴船川や谷状地形における大水時の氾濫が当遺跡の地理的環境形成に影響を与えたことを示唆している。

松山 力は、上野尻遺跡周辺の地形区分図を作成し、沖積地を下位面・中位面・上位面の3面に分け、洪積台地を下位面・上位面の2面に分けている(1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』)。山塊から続く急傾斜面から洪積上位面、洪積下位面、沖積上位面、沖積中位面、沖積下位面と標高を下げていく。上野尻遺跡は標高28～35mの洪積下位面、沖積上位面、沖積中位面からなる。

平成8年の試掘調査および範囲確認調査によって、予定地内の上野尻遺跡、米山(2)遺跡、山下遺跡、玉水(2)遺跡の存在および範囲を確認し、平成9年度より継続して本調査中であり、『山下遺跡・上野尻遺跡』(中村・杉野森 1999)・『山下遺跡Ⅱ 米山(2)遺跡』(畠山・永嶋 2000)が刊行されており、縄文時代後期や平安時代の集落跡、中世の井戸跡やカマド状遺構等が検出されている。このうち上野尻遺跡は南北幅約420m・東西幅約280m、遺跡面積30,800㎡(平成11年度調査終了時点)である。

平成11年度の調査では、洪積下位面上の遺跡北側部分と南側部分の調査を行った。遺跡の北側部分では、縄文時代後期後葉の遺物が多く出土した旧河川(沢)跡・土坑群・柱穴跡・中近世以降の小ピット群、遺跡南側部分では縄文時代後期の竪穴住居跡・中近世以降の小ピット群と土坑と竪穴状遺構が検出されている。

平成8・9・11年度の調査結果により、上野尻遺跡は縄文時代後期後葉期を主体とし、縄文時代中期・後期・晩期、弥生時代前期、中近世以降に利用されたものと考えられる。

なお、小字名である「上野尻」は近世より続く地名であり、『青森県の地名』(平凡社1982)によれば、当初長森村であったが、明治11年に支村であった矢田村に合併されている。上野尻遺跡の北東約500mの貴船川沿いの緩斜面には長森遺跡が所在し、縄文時代晩期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と考えられる柱穴跡が検出されている。また上野尻遺跡の北北西1.5kmの山稜部に位置する山野峠遺跡では石棺墓群をはじめとする縄文時代後期前葉の墓域が検出されている。



## ②基本層序（図3・4）

平成11年度の調査区は、平成9年度調査区のB区とC区の間を主体としている。松山はB区を山地急斜面下の浅い小谷の谷頭の底部、C区を山地急斜面下の緩傾斜地ととらえている。

平成11年度調査では、A区北端部のXⅢI-219グリッド、A区の縄文時代後期土坑群付近のXⅡO-213グリッド、C区のⅧP-202グリッド、遺跡の南端部のD区のⅧT-175グリッドの4ヶ所で、土層断面図を作成した。

北側調査区では、土層観察用のグリッドを深掘りし、層名は、ローマ数字を用いて新たに命名・記録し、表土(第Ⅰ層)直下には遺物包含層である黒褐色の第Ⅱ層が見られ、第Ⅲ層以下の黄褐色ローム層、または千曳浮石層混じりの土層では遺物は出土していない。遺構確認は、第Ⅲ層以下で行った。表土と第Ⅱ層の区別は、植物の影響を多く受けた上方の土層を表土と呼称した。

各地点によって、第Ⅲ層以下の様相は異なっているが、第Ⅰ層と第Ⅱ層に関してはほぼ共通している。

(永嶋 豊)

【A区 XIII I-219グリッド】 (図3a)

緩斜面に位置し、XIII J-216中心に遺物がⅡ層中からややまとまって出土した。降下火山灰の2次堆積土が多い。Ⅱ層に千曳浮石層の若干の混入が見られ、Ⅲ・Ⅵ層以下はそれ以前の堆積と考えられる。

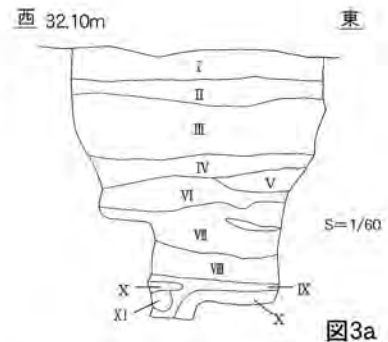


図3a

XIII I-219

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	表土。にぶい黄褐色パミス微量混入。	10YR2/3	黒褐色	シルト	有	やや有
II	にぶい黄褐色や浅黄褐色パミス少量混入。	10YR3/3	暗褐色	シルト	かなり有	やや有
III	にぶい黄褐色や浅黄褐色パミス少量混入。	10YR4/4	褐色	シルト	かなり有	やや有
IV	浅黄褐色パミス微量混入。	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	非常に有	ほとんど無
V	φ 4~10cmの礫を含む。浅黄褐色パミス微量混入。	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	やや有	有
VI		10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	やや有
VII	φ 1cm程度の黒色土ブロック少量混入。	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有
VIII	φ 3cm以下のにぶい黄褐色パミス微量混入。	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	やや有
IX	灰黄色パミス少量混入。	10YR5/6	黄褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
X		10YR6/2	灰黄色	粘土質シルト	有	有
XI		10YR4/6	褐色	シルト質砂	非常に有	無

【A区 XII O-213グリッド】 (図3b)

付近では縄文時代後期後葉を主体に多くの土坑が確認された。少数ではあるが、縄文時代後期前葉の土坑も見られる。Ⅰ層が表土、Ⅱ層が遺物包含層、Ⅲ層以下は沖積地に堆積した流れ込みのロームを主体とする。Ⅵ~Ⅸ層は千曳浮石層の2次堆積土と考えられる。

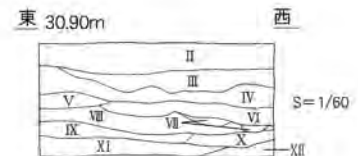


図3b

XII O-213

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
II	表土直下の遺物包含層。φ 5mm以下のローム粒・炭化物を微量含む。	10YR2/3	黒褐色	シルト	有	やや有
III	Ⅱ層が中量混入。	10YR4/3	黒褐色	粘土質シルト	有	やや有
IV	黒褐色土が少量混入。	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	かなり有	やや有
V	Ⅳ層の土層に鉄分が微量混ざったもの。	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	かなり有	有
VI	千曳浮石層の2次堆積層。	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有	やや有
VII	Ⅵ層よりやや砂質が強い。φ 5mm以下のパミスごく微量を含む。千曳浮石層の2次堆積層。	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	有	やや有
VIII	砂質と粘土質の混じった土層。φ 10mm以下のパミスごく微量を含む。千曳浮石層の2次堆積層。	10YR5/6	濁灰色	粘土質シルト	有	やや有
IX	Ⅷ層よりやや砂質。千曳浮石層の2次堆積層。	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	かなり有	やや有
X	φ 10mm以下の小礫を微量を含む。	10YR4/6	褐色土	シルト質粘土	やや有	有
XI	φ 20mm以下の小礫を微量を含む。	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土	かなり有	かなり有
XII	Ⅺ層よりピンクで、粘性が強い。	10YR7/4	にぶい黄褐色	粘土	かなり有	有

図3 基本層序(1)

## 【C区 VIII P-202グリッド】 (図4a)

山稜からの急斜面が傾斜を変え、緩斜面に移行する地形で、洪積台地下位面に位置する。縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡1軒が検出された。

平成10年度には約100m東方の米山(2)遺跡において、同様の立地条件で、同期の竪穴住居跡4軒が整然と並んで検出された。I層は表土と遺物を包含する土層、II層が千曳浮石層に相当し、IV～IX層まで鮮やかな赤褐色の非常に締まりの良いローム層が厚く堆積している。この赤褐色のローム層は青森市から野辺地町にかけてみられ、八戸地方の高館火山灰に対比される可能性がある。

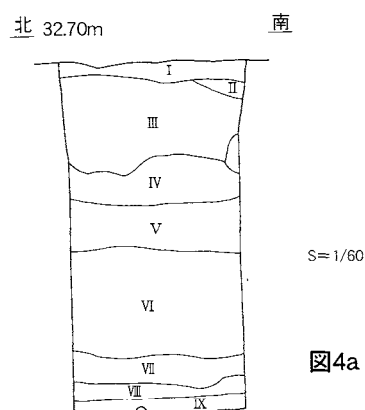


図4a

## VIII P-202

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	表土。明黄褐色パミス粒少量混入。	10YR4/3	暗褐色	シルト	あまり無	無
II	明黄褐色パミス少量混入。	10YR5/6	黄褐色土	シルト	有	無
III	赤褐色粒中量混入。	7.5YR5/6	明褐色	粘土質シルト	非常に有	やや有
IV	明黄褐色パミス微量混入。	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
V	明赤褐色のブロックが少量混入。	5YR4/6	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
VI	黒色のブロックがまだらに微量混入	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
VII	黒色のブロックがごく微量混入	5YR4/6	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
VIII	黒色のブロックがごく微量混入	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
IX	明黄褐色パミスが少量混入	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有

## 【D区 VIII T-175グリッド】 (図4b)

上野尻遺跡の最南端部であり、縄文時代の遺物・遺構は希薄であるが、中近世以降と考えられる小ピット群と土坑と竪穴状遺構が検出された。

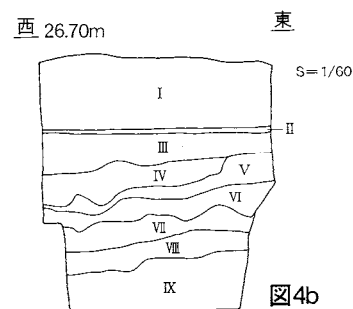


図4b

## VIII T-175

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	灰黄色・明黄褐色パミス少量混入。褐色の鉄分中量含む。水田の影響有。	10YR3/1	黒褐色	シルト	非常に有	無
II	灰黄色・明黄褐色パミス微量混入。褐色の鉄分多量に含む。水田の影響大。	10YR2/1	黒色	シルト	非常に有	無
III	明黄褐色・褐色土パミス微量混入。十和田b火山灰微量に混入。縄文時代晩期～平安時代に形成された土層。	10YR2/1	黒色	シルト	有	無
IV	にぶい黄褐色パミス少量、黒色の粒子微量混入。	10YR2/1	黒色	シルト	無	無
V	明黄褐色パミス中量混入、漸移層	10YR2/2	黒褐色	シルト	有	無
VI	明黄褐色パミス中量混入、漸移層	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	有	やや有
VII	φ1～5mmのパミスを多く含む。岩片の混入も目立つ。千曳浮石層	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	非常に有	あまり無
VIII	φ2～3mmのパミス粒少量混入。	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	非常に有	やや有
IX	灰黄色のパミス粒少量混入。千曳浮石層堆積以前の土層。X IIII-219のIII層に対応。	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土質	非常に有	有

図4 基本層序(2)

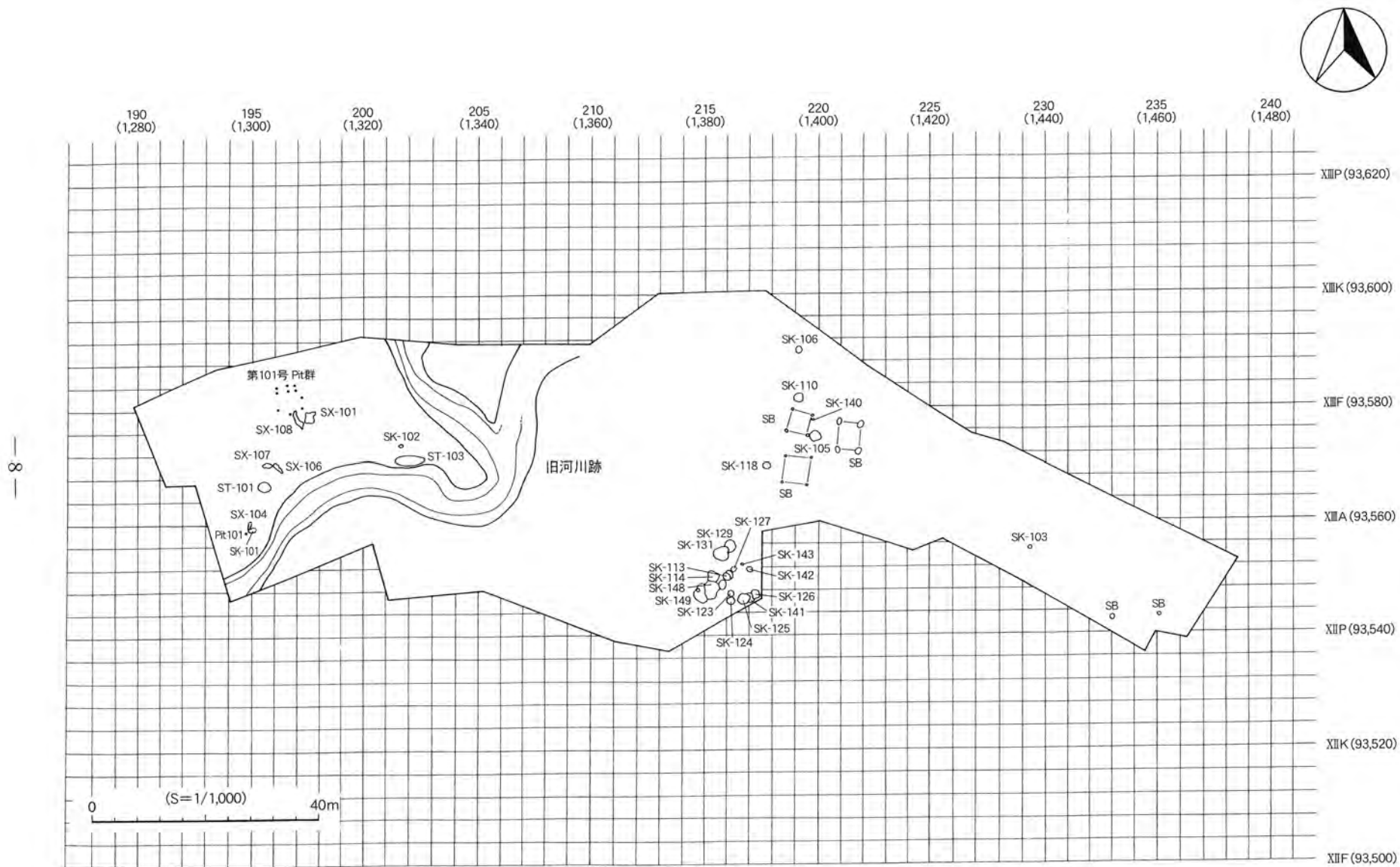


图5 A区遺構配置図

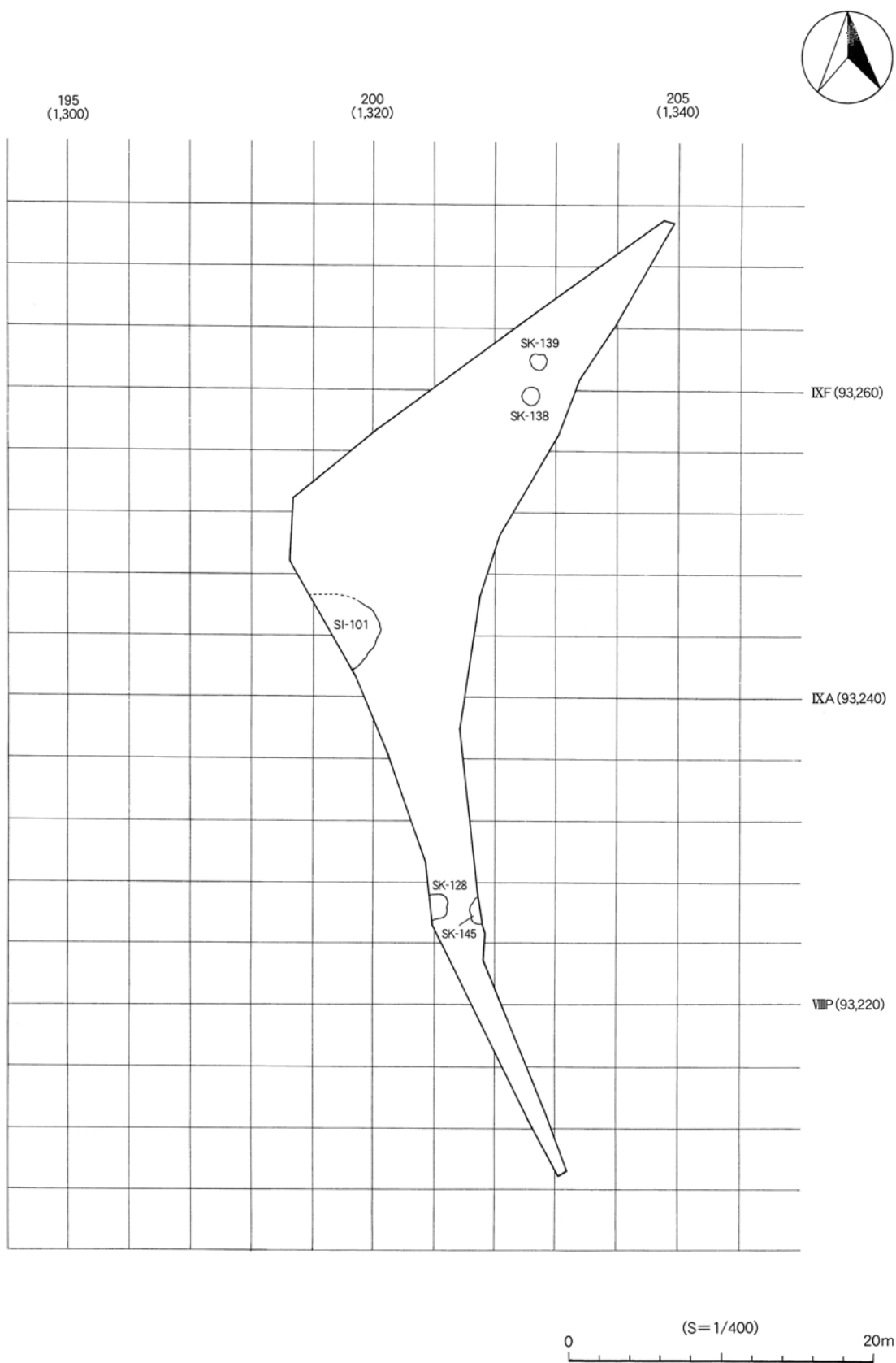


図6 C区遺構配置図



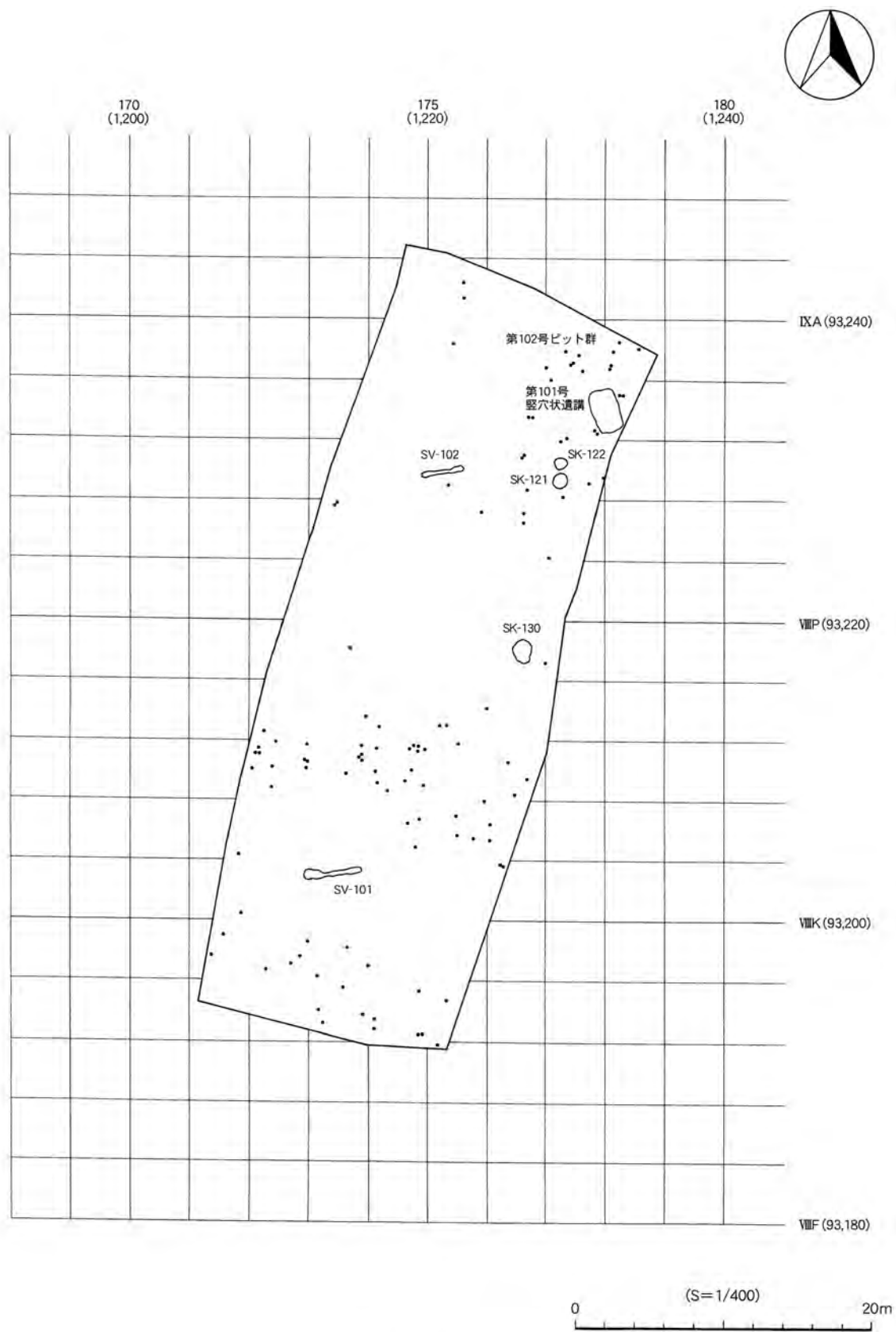


図7 D区遺構配置図

## 第2章 A区検出遺構と出土遺物

遺構は、土坑23基・ピット群1基・ピット1基・性格不明遺構5基・掘立柱建物跡3棟を検出した。そのうち、掘立柱建物跡3棟と平成11年度の調査時には土坑としていたもので平成12年度の調査により掘立柱建物跡に組まれた土坑2基については、来年度以降にまとめて報告することとし、本節からは除外した。なおXⅡQ-215～XⅡT-217グリッド付近で、15基の土坑が集中して検出され、この地域のみ「第3節 土坑群」として報告している。

### 第1節 土坑

#### 第101号土坑（図8）

〔位置・確認〕 XⅡT-194・195グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 第104号性格不明遺構と重複し、第104号性格不明遺構を切っている。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形を呈し、開口部推定長軸1m39cm×短軸77cm、底部推定長軸1m24cm×短軸60cm、深さ14cmである。土坑の北側中央部に土器を検出したが、本土坑との関係は不明である。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

〔堆積土〕 7層に分層した。全体に黒褐色土・暗褐色土が堆積し、土坑の東側には褐色土が堆積している。また、3層には焼土が多量に混入している。

〔出土遺物〕 確認面及び1・2・6・7層から土器が出土した。特に7層からの出土が多い。遺構全体から出土しているが、北東側に集中している。図示したのは破片3点である。出土遺物は平箱で1/3箱分で、総重量は約2.2kgである。すべて縄文時代中期末葉の土器に相当する。

〔小結〕 出土遺物により、縄文時代中期末葉の遺構と思われる。

#### 第102号土坑（図8）

〔位置・確認〕 XⅢD-201グリッドに位置する。黒褐色土のいびつな楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形はいびつな楕円形で、開口部長軸73cm×短軸64cm、底部長軸53cm×33cm、深さ19cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がっている。底面は平坦で、礫を含んでいる。

〔堆積土〕 2層に分層した。上位に黒褐色土、下位に褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕 土器破片が平箱で約1/6箱分出土した。総重量は0.38kgである。すべて小破片で、図示したのは破片2点である。図8-1は縄文時代後期中葉の土器、2は縄文時代後期の土器に相当する。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

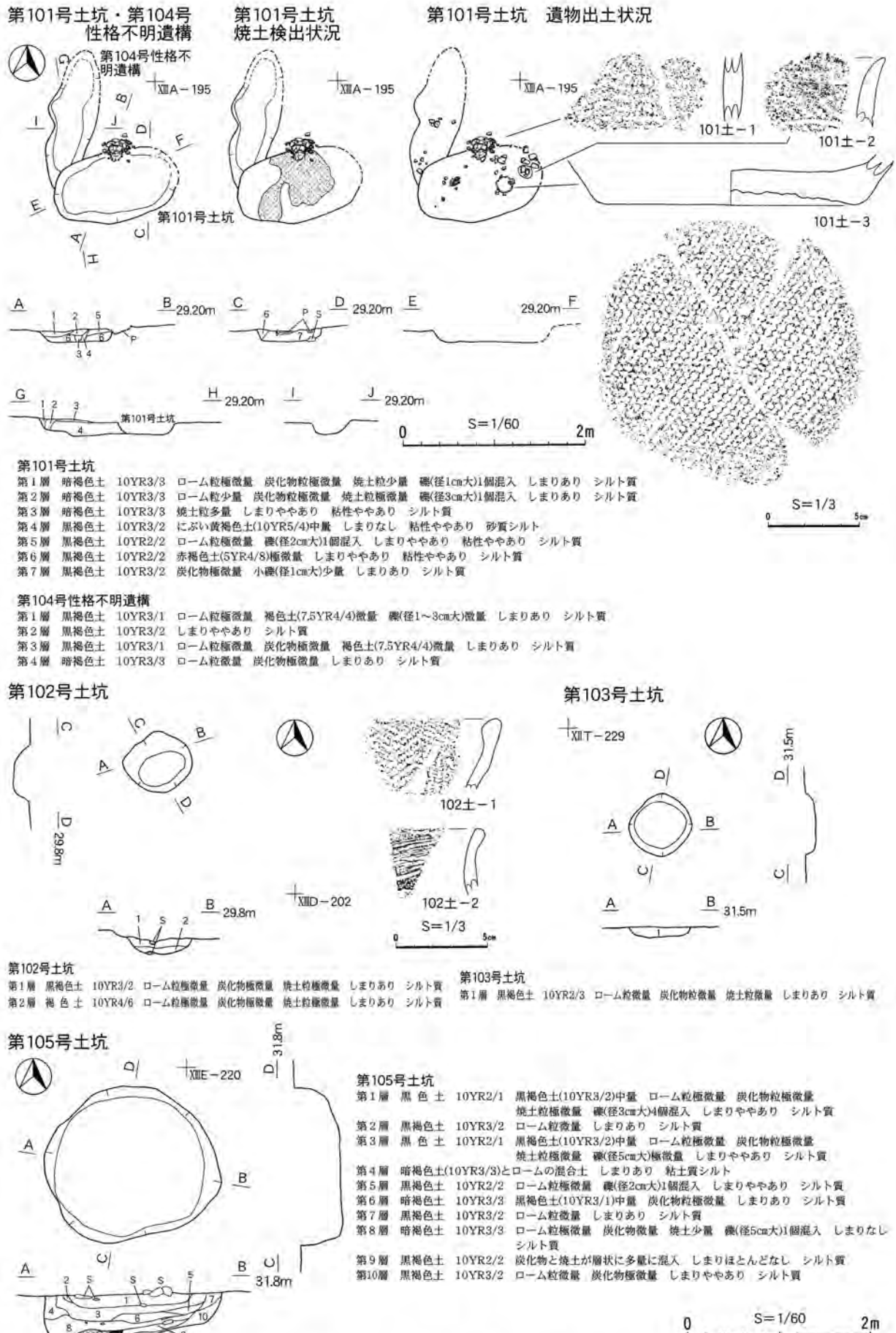


図8 第101・102・103・105号土坑、第104号性格不明遺構、出土遺物

## 第103号土坑（図8）

〔位置・確認〕 XⅡS-229グリッドに位置する。黒褐色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形はいびつな楕円形で、開口部径69cm、底部長軸57cm×短軸51cm、深さ11cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

〔堆積土〕 黒褐色土の単層である。

〔出土遺物〕 なし。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

（工藤 由美子）

## 第105号土坑（図8～11）

〔位置・確認〕 XⅢD-219・220グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形を呈し、開口部長軸1m97cm×短軸1m68cm、底面長軸1m63cm×短軸1m52cm、深さ60cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。

〔堆積土〕 10層に分層した。上位に黒色土、中位に暗褐色土、下位には黒褐色土と焼土・炭化物が層状に堆積している。

〔出土遺物〕 土器・石器が多数出土した。遺物は、確認面及び1・3・5・6・8・9・10層から出土し、特に8・9層に集中している。上位・下位とも遺構の中央付近に土器が集中し、壁際からはほとんど出土していない。とくに中位から下位にかけては遺構の中央よりやや北西側に集中している。図示した土器破片数は57点、石器は7点である。

土器は平箱で約1箱分出土した。縄文時代中期末葉・縄文時代後期後葉の土器である。大半は縄文時代後期後葉の土器であるが、上位には縄文時代中期末葉の土器が目立ち、下位には後期後葉の土器が目立つ。器種は深鉢が主体で、全体の65%ほどにあたる。その他、鉢・壺・注口などが出土している。主体は無文・無文+貼瘤・羽状縄文・縄文の土器であり、無文が全体の約40%を占める。土器の総重量は5.06kgである。

石器は多数出土しており、尖頭器が1点、石匙が1点、二次加工ある剥片が1点、使用痕ある剥片が3点、フレイク43点、チップ80点が出土している。中でも9層からはフレイク10点、チップ52点が集中して出土している。また焼けた礫が多く出土していることも、当土坑の特徴である。

S1は1層出土の玉髓質珪質頁岩の尖頭器である。両面の縁辺部に二次調整を加え、厚みのある刃部を形成している。基部付近はやや広がりを見せている。

S2は磨製石斧の基部のような形態を呈するが、石材は縄文時代後期前葉の三角形岩板に用いられる軟質の細粒凝灰岩で、片面が平坦に整形されており、石製品と考えた。

S3は縦長剥片を素材にした大型の横型石匙である。最も厚い打面側をつまみ部分に利用せずに、刃部側の一端に配置している。つまみと反対側の刃部は腹面側のみ二次調整が施され、つまみ側は

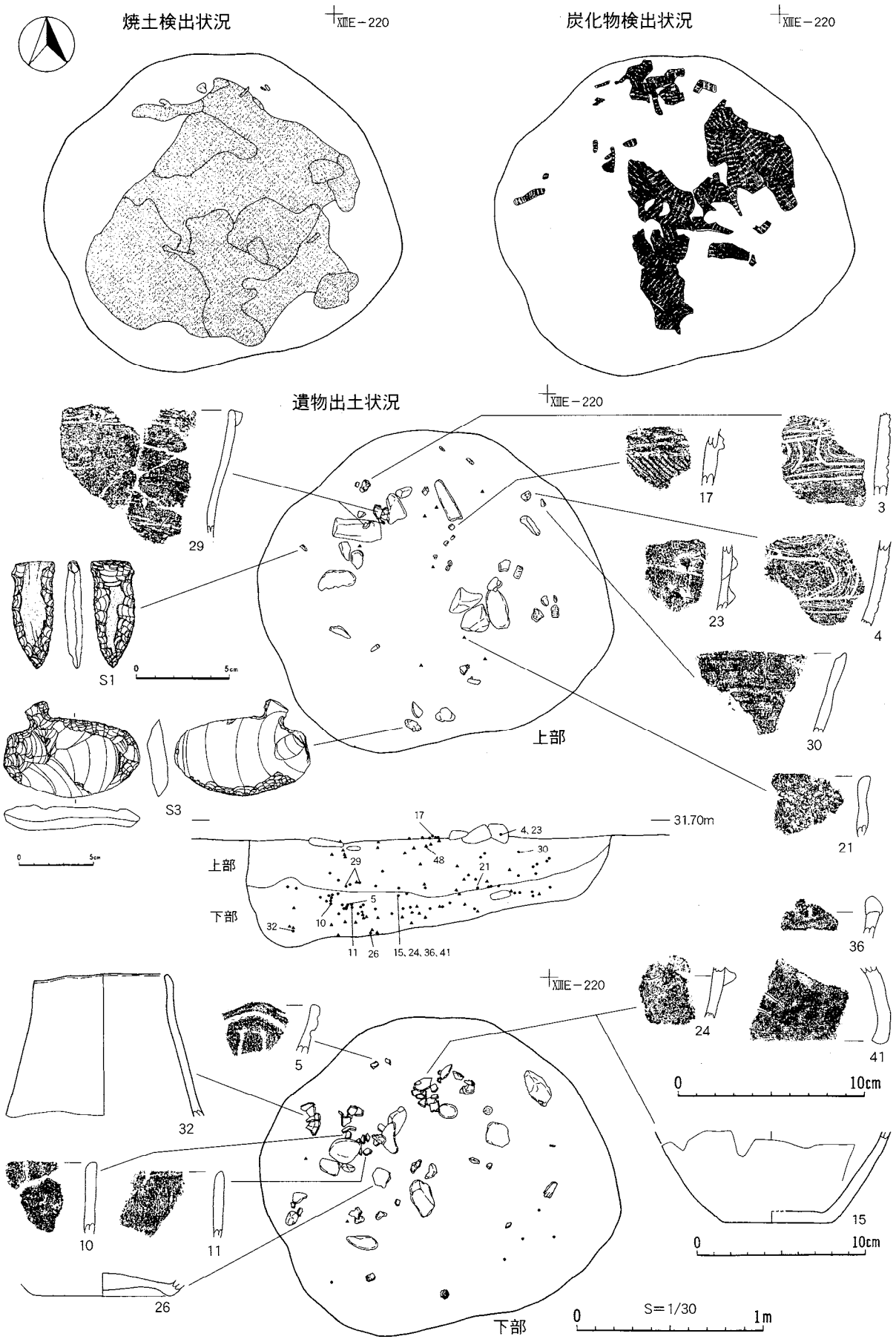


図9 第105号土坑(2)

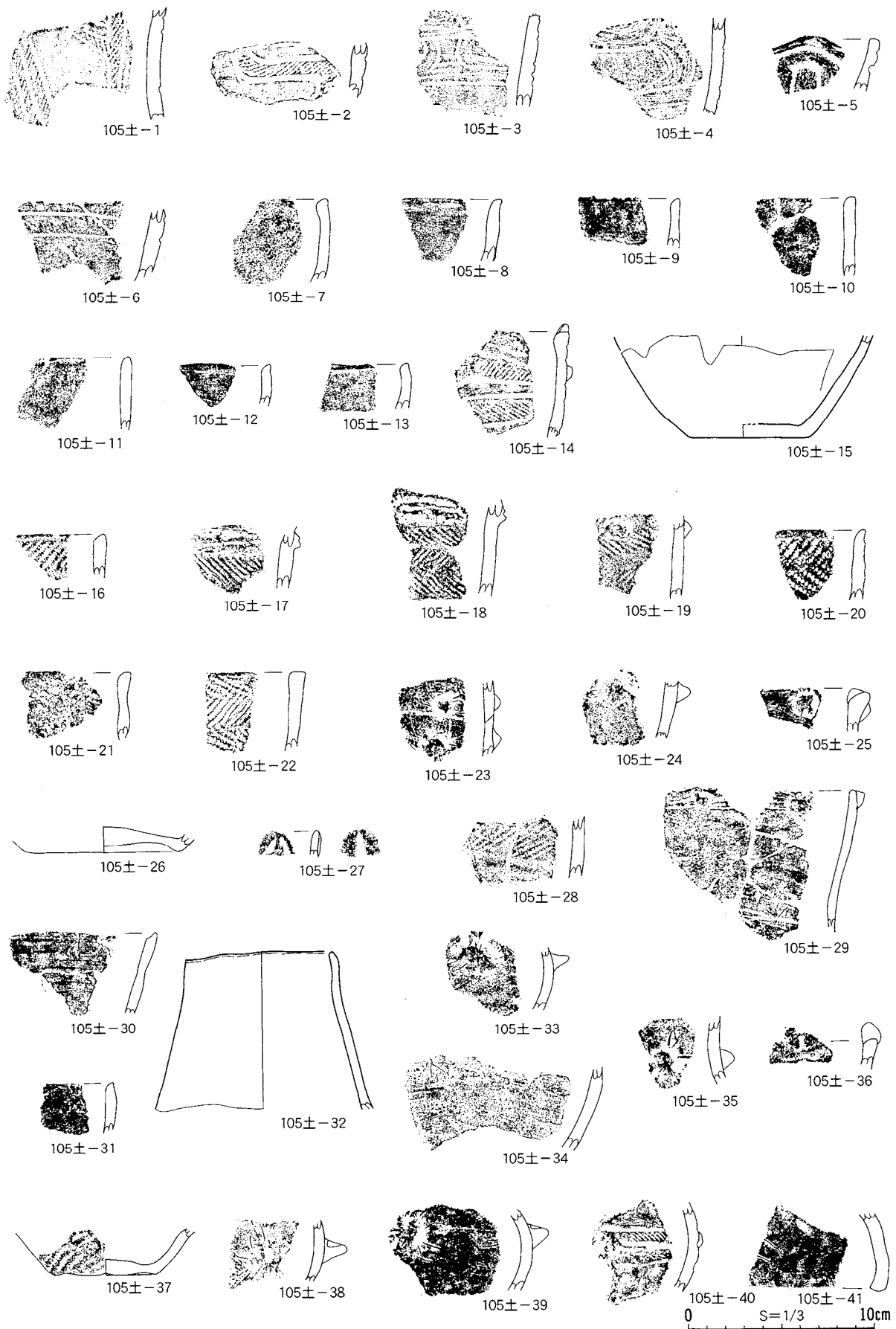


図10 第105号土坑 出土遺物(1)



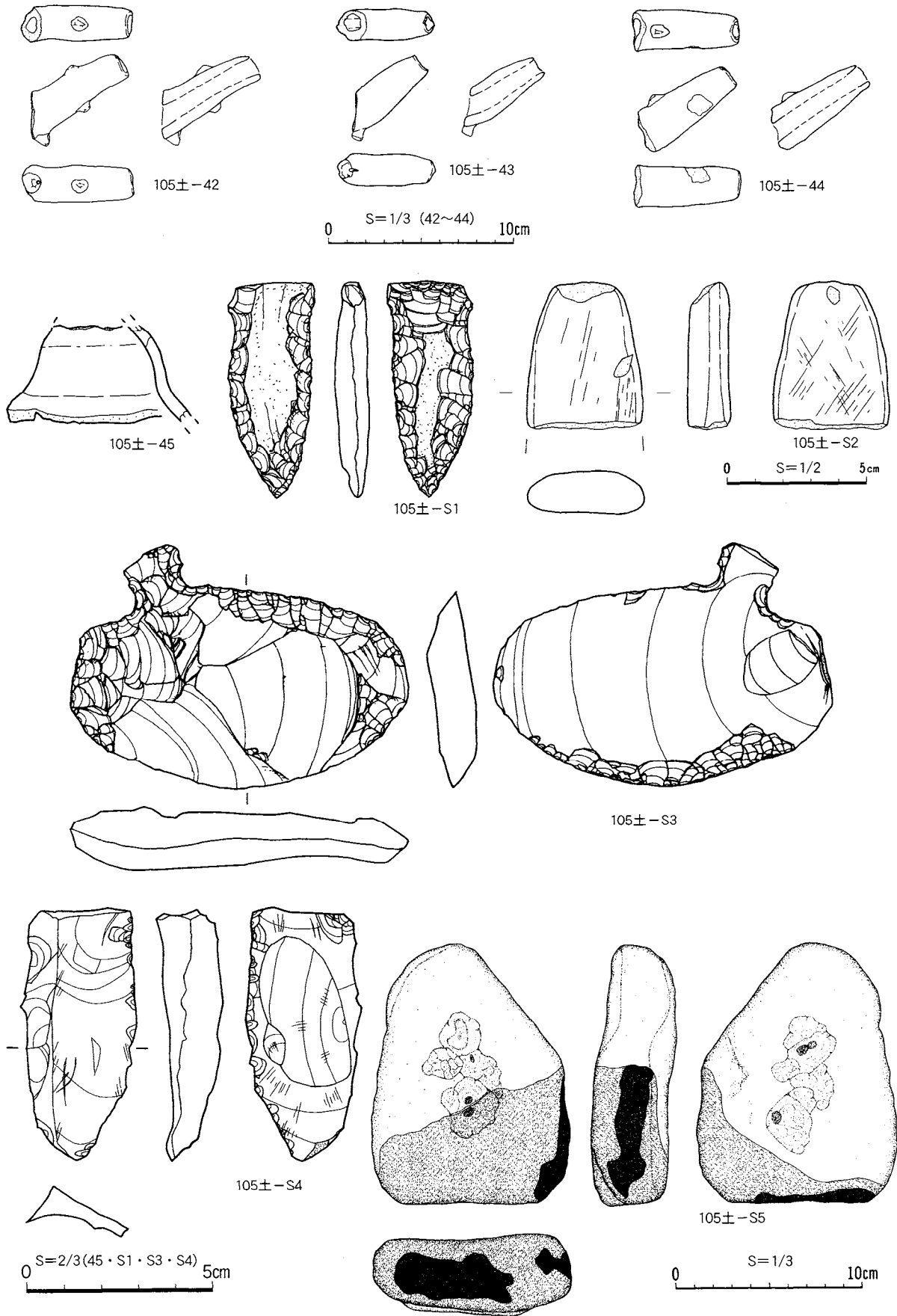


图11 第105号土坑 出土遺物(2)

背面側にのみ二次調整が施されている。

S4は縦長剥片を利用した二次加工ある剥片である。被熱痕が明瞭であり、焼けハジケも数ヶ所認められる。

S5は両面に深めの凹みが2～3箇所残された被熱した凹石である。図中で付着物としたスクリーン部分は、石の表皮が被熱によって黒色化したものである可能性が高い。

当土坑の特徴として、焼け礫が非常に多い。特に1層と9層から集中して出土し、1層で4点、9層で11点、10層で1点の焼け礫を取り上げた。1層出土の焼け礫の総重量は6kgである。9層出土の焼け礫は、小さいものはφ6cmで重量0.4kg、大きなものは長さ18cmで重量3.3kgであり、総重量は10.6kgに達する。10層出土の焼け礫は1点のみで、重量1.8kgである。

[小結] 出土遺物により、縄文時代後期後葉の遺構と思われる。

なお、多数の遺物と底面近くから検出した焼土・炭化物により墓穴の可能性があったため、9層から採取した炭化材と10層から採取した土壌のリン・カルシウム分析を行った。しかし、墓と断定できる資料は得られなかった（第5章第2節参照）。

(工藤 由美子、石器は永嶋 豊)

#### 第106号土坑 (図12)

[位置・確認] XⅢH-218・219グリッドに位置する。黒褐色土の円形プランと多量の土器をもって確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、開口部長軸1m15cm×短軸1m8cm、底部長軸93cm×短軸90cm、深さ18cmである。

[断面・底面] 壁は北側・東側は底面からやや開くように立ち上がり、南側・西側では緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土の単一層である。

[出土遺物] 確認面から1層にかけて平箱1/3箱分の土器がまとまって出土した。すべて縄文時代後期後葉の土器であり、無文と羽状縄文が主体である。図示したのは5点で、土器の総重量は1.96kgである。

[小結] 出土遺物により、縄文時代後期後葉の遺構と思われる。

(工藤 由美子)

#### 第110号土坑 (図12)

[位置・確認] XⅢF-218・219グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、開口部長軸1m64cm×短軸1m48cm、底部長軸1m49cm×短軸82cm、深さ80cmである。

[断面・底面] 断面形は方形で、底面は平坦である。

[堆積土] 12層に分層した。上位と下位に黒色土、中位に黒褐色土、壁際と底面にやや明るめの土が堆積し、全体に炭化物が混入している。

[出土遺物] 各層から土器が出土したが、とくに1・3・4層からの出土が多く、下位にいくに従っ

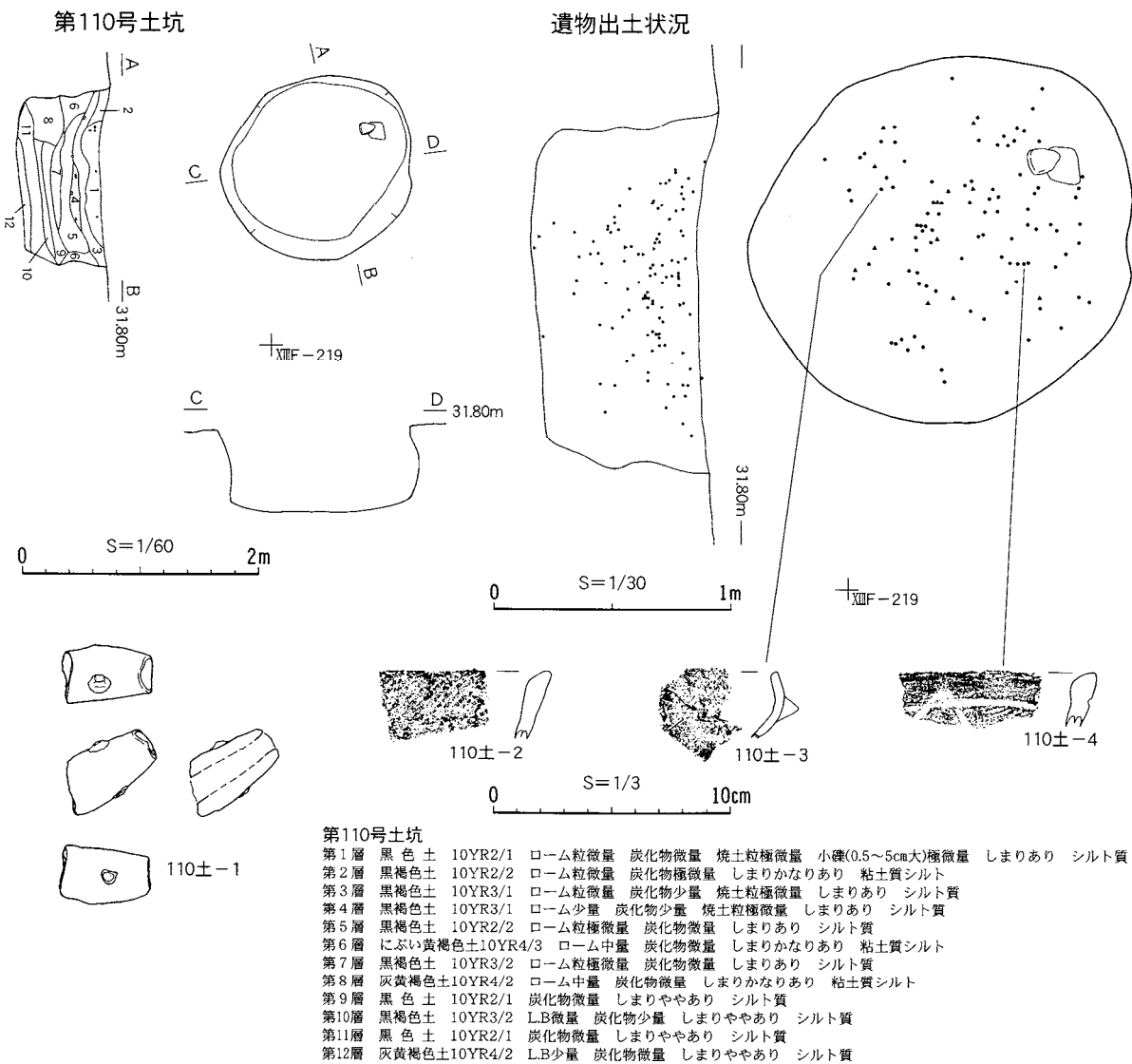
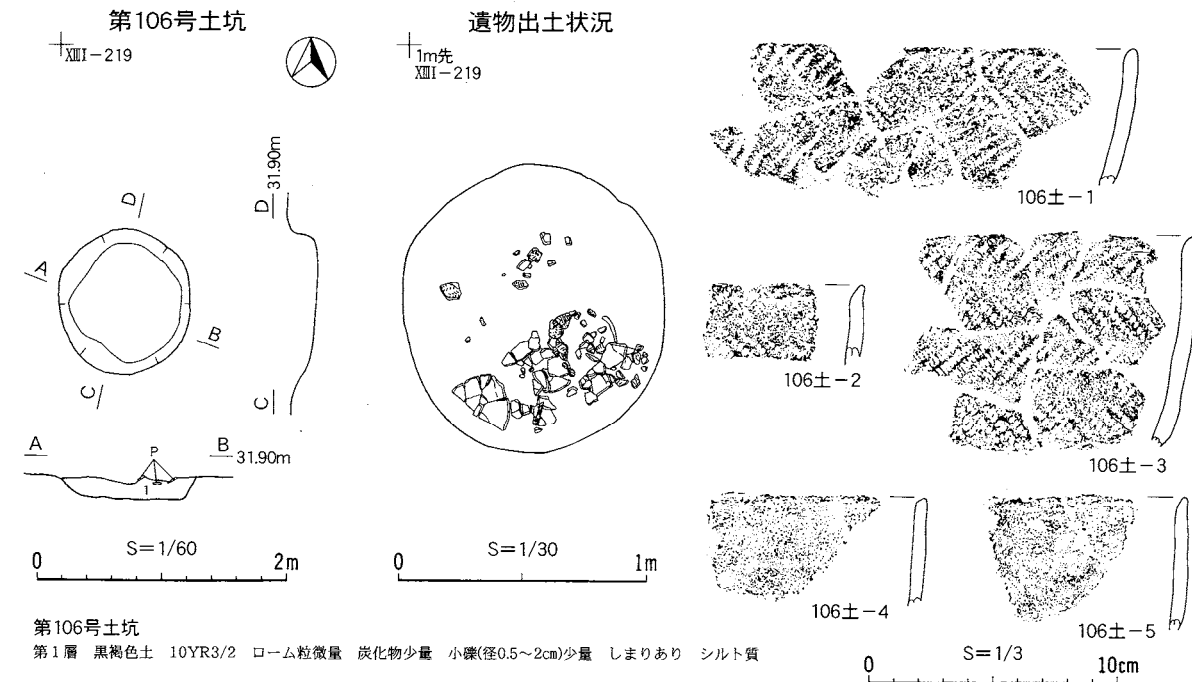


図12 第106・110号土坑、出土遺物

て出土数は少なくなる。図示したのは4点で、110土-4は縄文時代後期中葉の土器、その他は後期後葉の土器に相当する。土器総数は平箱で1/3箱分で、土器の総重量は1.42kgである。無文と羽状縄文が多数を占め、その大半が後期後葉の土器である。

石器は、フレイク6点、チップ13点が出土している。また20cm×15cm×3cm大の扁平な板状礫が12層から出土している。

[小結] 出土遺物により、縄文時代後期後葉の遺構と思われる。

(工藤 由美子、石器は永嶋 豊)

### 第118号土坑 (図13)

[位置・確認] XⅢC-217グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形で、開口部長軸1m38cm×短軸1m、底部長軸1m29cm×短軸92cm、深さは55cmである。

[断面・底面] 断面形は方形で、底面は北西側が低くなっている。

[堆積土] 5層に分層した。上位に黒・暗褐色土、中位に黒色土、下位に褐色土が堆積しており、上位からは焼土が検出された。焼土の厚さは4～8cmほどである。

[出土遺物] 土器は上位から少量出土した。図示したのは4点で、いずれも縄文時代中期末葉の土器に相当する。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第140号土坑 (図13)

[位置・確認] XⅢE-219グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、開口部長軸54cm×短軸41cm、底部長軸30cm×短軸21cm、深さは21cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面はレンズ状に中央部がくぼんでいる。

[堆積土] 2層に分層した。ロームを多量に含む黒褐色土が堆積している。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

なお、調査時に第107～109号・112号・117号・119号・120号・135～137号・146号・147号とした各土坑は、後に掘立柱建物跡の柱穴であることが判明したため、ほかの第104号・111号土坑とともに欠番とした。

(工藤 由美子)



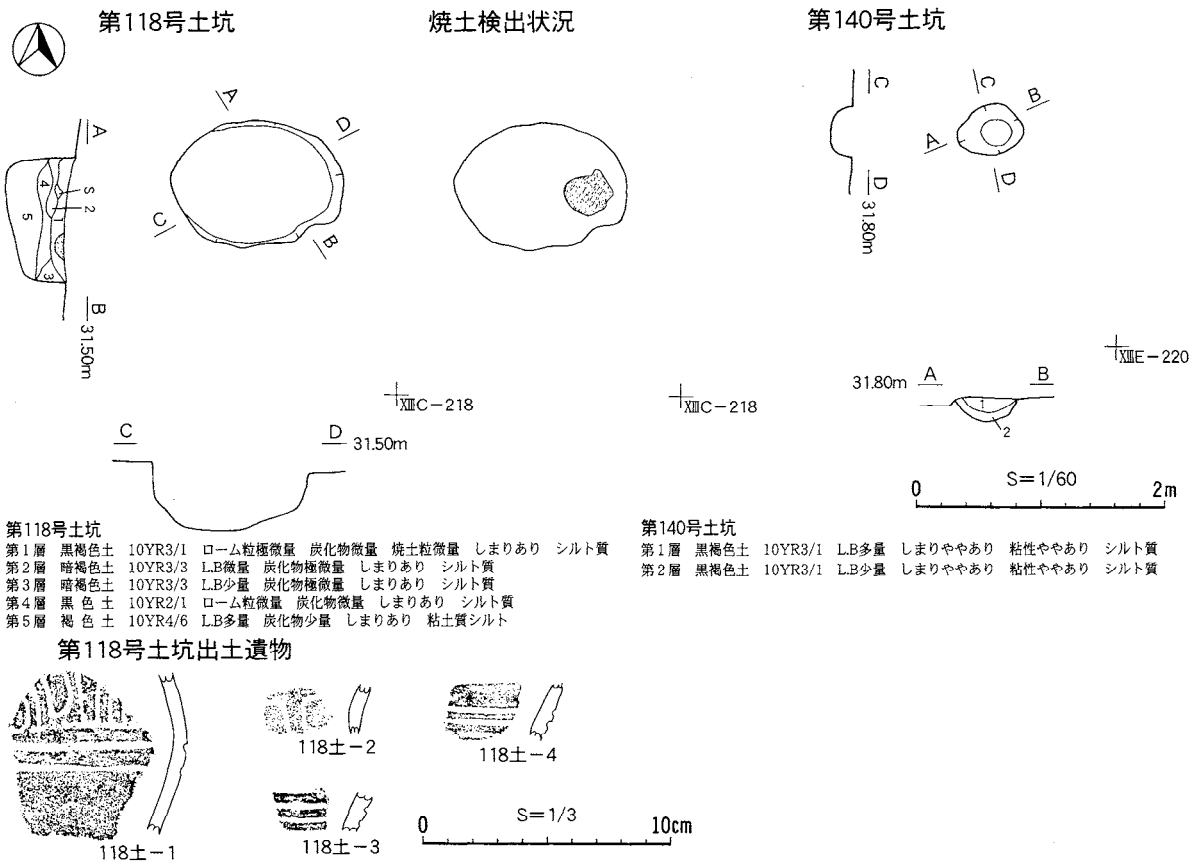


図13 第118・140号土坑、出土遺物

## 第2節 土坑群

XⅡQ-215～XⅡT-217付近で、15基の土坑を検出した。遺構内出土遺物は主に、縄文時代後期前葉と後期後葉の遺物に分けられる。

遺物は土坑廃絶後の埋没過程に、投げ込まれたような状態で出土するものが多い。しかし第113号土坑では、覆土中位付近に焼土が厚く堆積し、二次焼成の痕跡をよく残す煮沸用のほぼ完形の深鉢が出土しており、埋没過程の土坑（窪み）内で煮沸または火を焚く行為が行われたものと考えられる。

明らかに縄文時代後期前葉であると考えられる土坑は、第115号土坑だけである。また第127・131号土坑も後期前葉の土坑の可能性が高い。他の土坑は両時期の遺物を含むものの後期後葉の遺物の方が多いか、不可解ではあるが後期前葉の遺物より下層から検出されているものが多く、後期後葉に掘削・廃絶されたものが主体を占めると推定される。

### 第113号土坑（図14～16）

〔位置・確認〕 XⅡR-215・216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。当初は平面プランの形より2つの土坑の重複を想定していたが、覆土層位の観察により1つの土坑と判断した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸180cm×短軸150cm、底部長軸150cm×短軸140～160cm、深さ60cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、西半分はフラスコ状にオーバーハングしている。

〔堆積土〕 12層に分層し、黒褐色土を主体としている。覆土中位に焼土層5層が厚く堆積している。自然堆積と考えられるが、焼土層は明らかに人為的な作用によるものであり、遺物は上層から多く出土している。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は13.436kgで、掲載土器は2.443kgである。大半の遺物が焼土層より上層からの出土であり、縄文時代後期後葉と考えられる大型の深鉢や注口部片が出土している。

1層には後期前葉の遺物が若干含まれるが、後期後葉と考えられる遺物が主体であり、無文の深鉢（5～8）、羽状縄文の深鉢（11～16）、単節斜縄文の深鉢（18～21）、無文の鉢（23・25）・壺（26）・高坏と思われる台部（28）がある。20の肩部に付された横長瘤は、平らな上面側に刻みが一つ施されている。

2層出土の35・36は、1層出土の11・12と同一個体である。肥厚した口唇部上に、頂部に刻み目を施した瘤状突起を二個一対で付しており、後期末葉とみられる。縄文は異原体羽状であるが、節が明瞭ではなく、無節の可能性もある。

4層からはほぼ完形となる38や比較的丁寧な縄文帯を有する41や46が出土している。38は口径33.2cm・推定器高38cmの大型の深鉢である。40は頂部に刻みを有する突起の口縁部側に瘤を貼付したもので、動物の顔のようにも見える。

5層（焼土層）からは、薄手の台付深鉢と考えられる台部が出土している。層位不明の覆土出土したものには刻み目のある瘤が付された無文の注口部などがある。

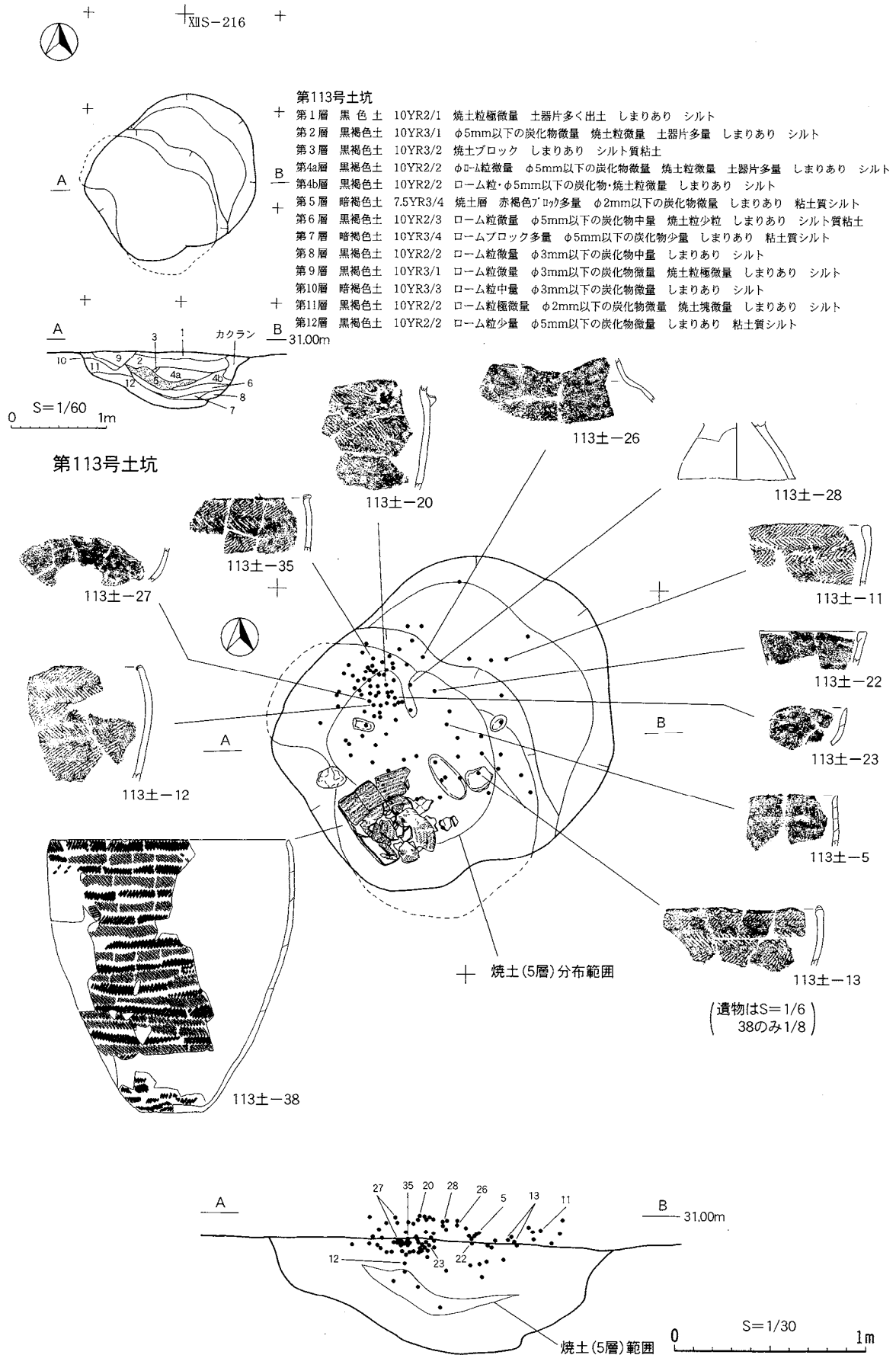


図14 第113号土坑

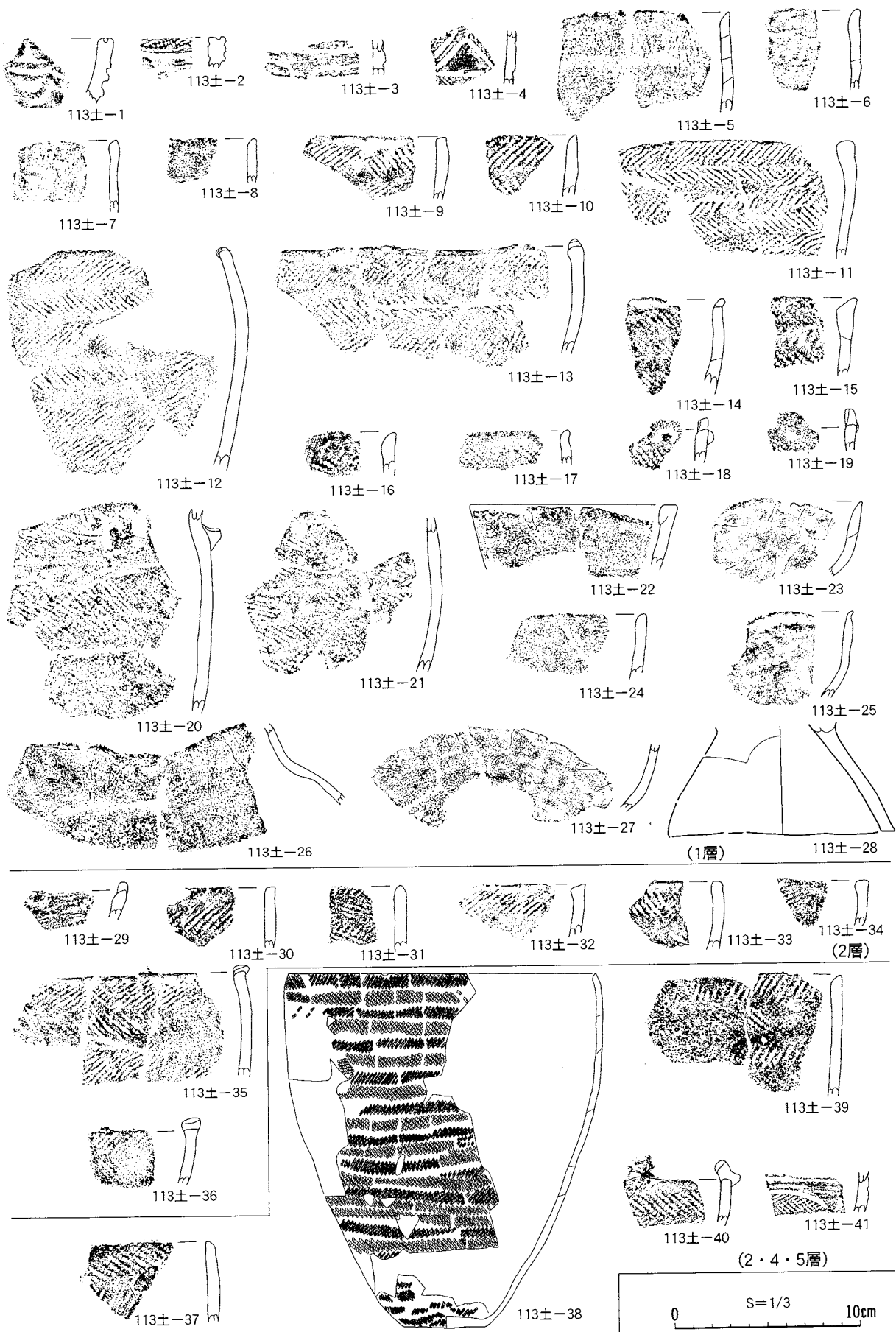


図15 第113号土坑 出土遺物(1)

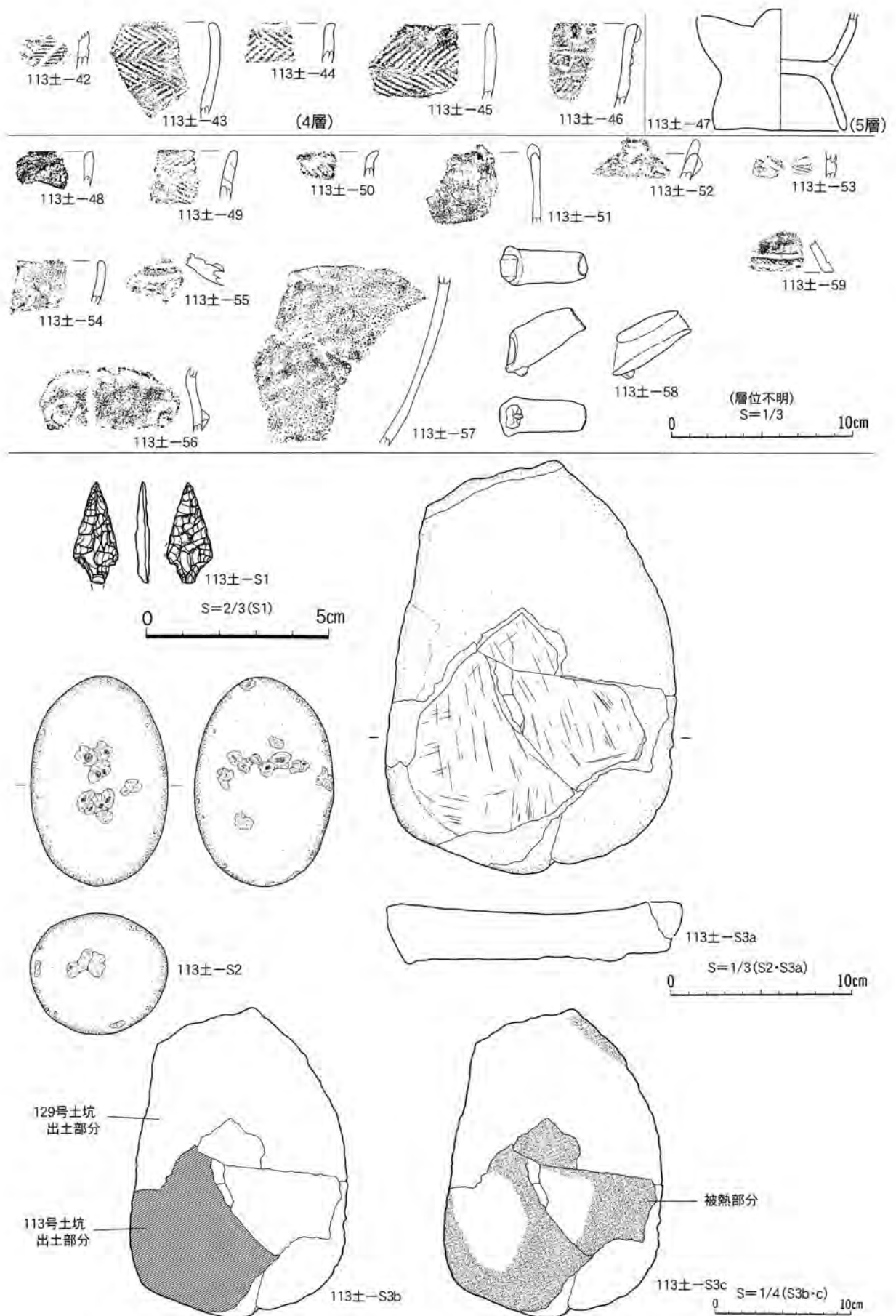


図16 第113号土坑 出土遺物(2)



粗製深鉢の口唇部形態には体部と同じ厚さのもの他に、肥厚するもの、内傾（内削ぎ）するものが見られる。

石器は石鏃1点・使用痕ある剥片3点・フレイク26点・チップ22点が出土している。S1は基部をやや欠損する有茎石鏃であるが、基部に固定用と考えられる黒色の付着物が認められる。S2は両面に凹み部が見られ、端部の片面に叩き痕が認められる。S3は破損した石皿で、使用面側の縁辺部がやや盛り上がっている。使用面側は半分ほど残存し、他は石皿の厚さの1/3程度で薄く規則的に剥落し、欠損している。全体に被熱痕が見られるが、破損が焼けハジケによるものか使用によるものか不明である。この石皿は大部分が第129号土坑出土であり、使用面の一部のみが当113号土坑出土である。このことより、両土坑は廃絶後に、同時期に埋まりきれない凹みであったことがわかる。

5層からは、長さ32cm、幅10～13cm、重さ4.3kgの細長い焼け礫が出土している。

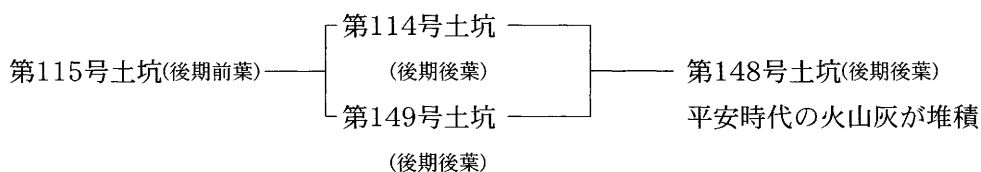
〔小結〕覆土中位付近に焼土層の形成が見られ、ここで火を焚く行為が行われたものと考えられる。

また焼土形成以後は、ごみ捨て穴として利用されたものと考えられ、焼土より上位の各層から羽状縄文が施される深鉢などの縄文時代後期後葉の土器片が、数多く出土している。有文の土器片は、少なくかつ小片である。41は縄文帯構成の文様が施される壺・注口であるが、モチーフは不明である。12・13・35・36の刻み目入りの瘤状突起、20の上面刻み目入りの横長瘤、内傾（内削ぎ）する口唇部等は、十腰内Ⅳ式以前には認められず、十腰内Ⅴ式以降の要素と考えられる。縄文時代後期後葉以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第114・115・148・149号土坑（図17・18）

XⅡQ-214～XⅡR-215グリッドの第Ⅲ層上面において5m×6m程の黒褐色土の不整楕円形プランとして確認した。プラン検出時には、住居跡や土坑の重複の可能性が高いと考え、長軸方向に1条・短軸方向に3条のベルトを設定して、当初は「第111号性格不明遺構」として調査を行った。その結果、少なくとも4つの土坑が重複していることが確認された。第111号性格不明遺構として調査していたときに、取り上げた少数の遺物は、帰属土坑が不明であるので、そのまま「第111号性格不明遺構出土遺物」として報告した。壁が明瞭に立ちあがり、比較的円形を呈するものを第114号土坑・第115号土坑とし、全体の形態がはっきりしないものや浅いものを第148号土坑・第149号土坑とした。

新旧関係は、縄文時代後期前葉の第115号土坑が最も古く、縄文時代後期後葉の第148号土坑が最も新しい。第114号土坑と第149号土坑は、共に縄文時代後期後葉と考えられるが、新旧関係は不明である。第148号土坑の覆土には、十和田a火山灰(To-a)と白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)という10世紀前半と考えられている降下火山灰の堆積が見られる。第148号土坑では、これらの火山灰より下位の覆土では、縄文時代後期後葉の遺物が数多く含まれており、土坑の構築および廃絶は近い年代を想定している。縄文時代晩期の始まりを約3,000年前とし、当土坑の年代を仮に3,100年前のものと考えると、約2,000年後の平安時代にはまだ、火山灰が堆積するほどの凹みが存在したことになる。



## 第114号土坑（図17～20）

〔位置・確認〕 XⅡQ-215グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 第115号・第148号土坑と重複する。本土坑は第115号土坑より新しく、第148号土坑より古い。

〔平面形・規模〕 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸3m×開口部短軸推定2m70cm、底部長軸1m70cm×短軸1m68cm、深さ82cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がるが、一部分のみ、フラスコ状に底部付近がオーバーハングしている。底面は中央付近でやや低くなる。

〔堆積土〕 黒色・黒褐色の土を主体とし、5層に分層し、さらに細分した。遺物は3層以下の比較的深い部分から出土している。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は3.614kgで、掲載土器は2.786kgである。大半の遺物が3層以下からの出土である。1はLRの単節斜縄文が施される小型深鉢の胴部～底部である。2と4は、同一個体となる深鉢である。上下幅1～1.5cm程度のRL縄文が全面に施される。φ3mm以下の小礫・砂粒を非常に多く含み、炭化物の付着が両面共に明瞭である。上下段の縄文間に隙間を有する特徴から後期後葉であると考えられるが、0段多条の羽状縄文ではなく、口唇部の肥厚も顕著ではなく、砂粒の混和も非常に多く、つくりはやや粗雑であり、縄文時代後期後葉の中でも新しい様相を示すものと考えられる。3は無文の煮沸用の鉢である。瘤状突起の特徴を残さない、頂部二又の突起が複数個セットで付される。突起の刻みは、頂部というよりも内面側を意識しており、これも後期後葉の中でも新しい様相を示すと考えられる。

当土坑の図版には、7点の注口部が掲載されているが、遺物整理業務において混乱をきたし、第114号・115号・148号・149号土坑・第111号性格不明遺構出土の、注口部の出土地の特定ができず、第114号土坑出土としてしまった。よってそれぞれがどの遺構から出土したものは不明であり、資料的価値の低下を招いたことは、大きな反省点である。

5は、2・3本一単位の沈線と根元付近に刻みを有する横長の瘤やφ6～8mmの瘤が付される。根元側の接着部全面にアスファルトが明瞭に残存する。6も同様に3本一単位の沈線に、両側面と下面にφ6mm程の瘤が付される。7は注口部中位付近の上下面にφ8mm程の瘤を貼付している。その瘤を起点として、左右対称に木葉状縄文帯が配され、根元付近には弧状縄文帯が配される。縄文は異原体羽状とLR単節である。8は注口部根元下面のφ6mm程の瘤を起点にし、下面と左右両面に木葉状縄文帯が配される。縄文はRL単節のみである。9～10は無文のものであり、上下面の中位から根元付近に瘤を付すものである。

12は、土製品の一部分と考えられ、上下両端とも折れ面である。

石器はフレイク5点、チップ6点が3～5層で出土している。

〔小結〕 縄文時代後期後葉の新しい段階の様相を示す遺物が見られる。

## 第115号土坑（図17・18・20）

〔位置・確認XⅡ〕 XⅡR-215グリッドに位置する。当初、未確認であったが、第114号土坑・第

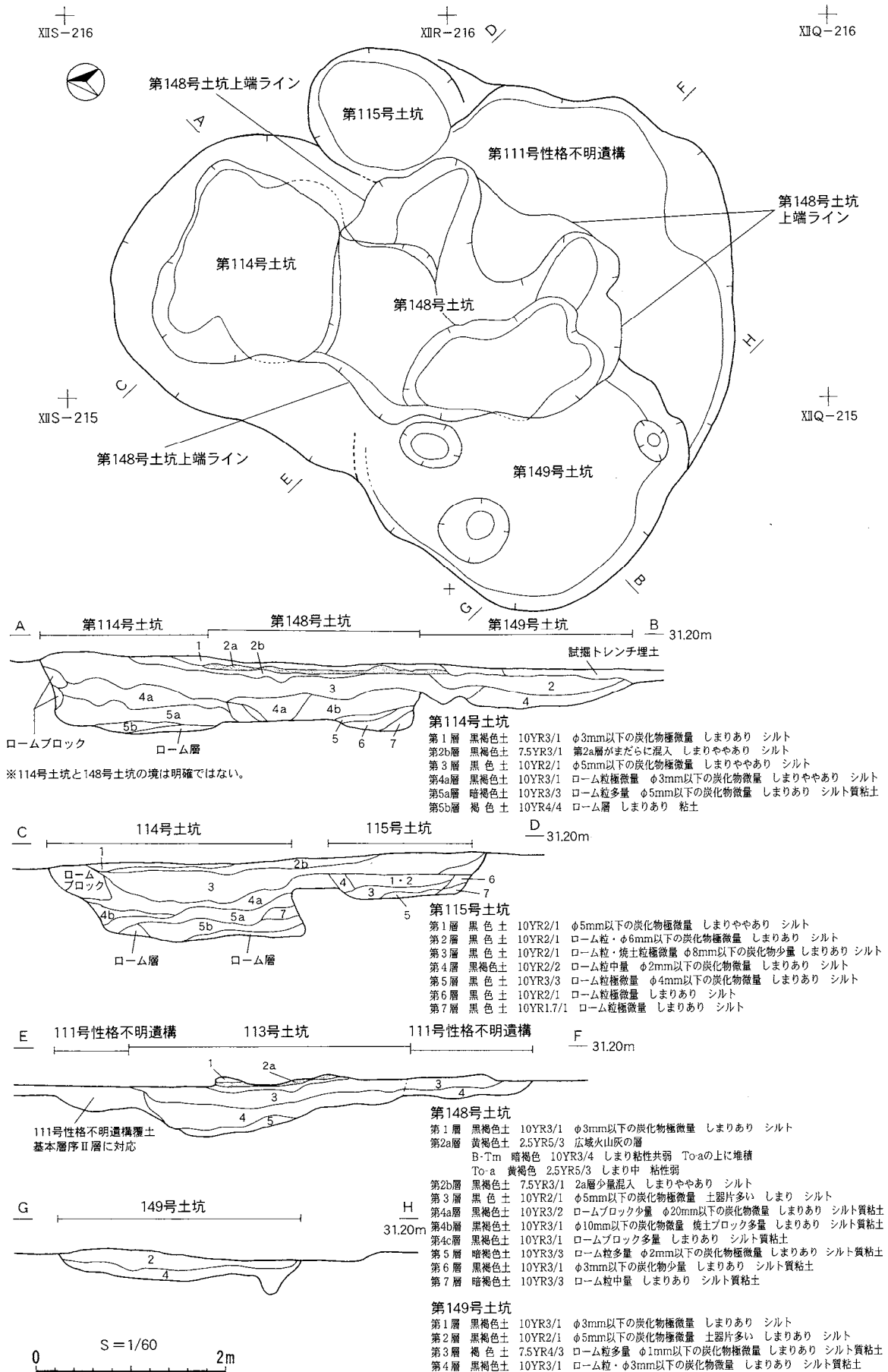


図17 第114・115・148・149号土坑、第111号性格不明遺構

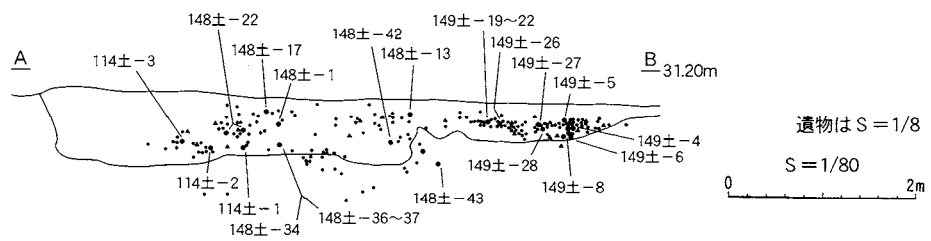
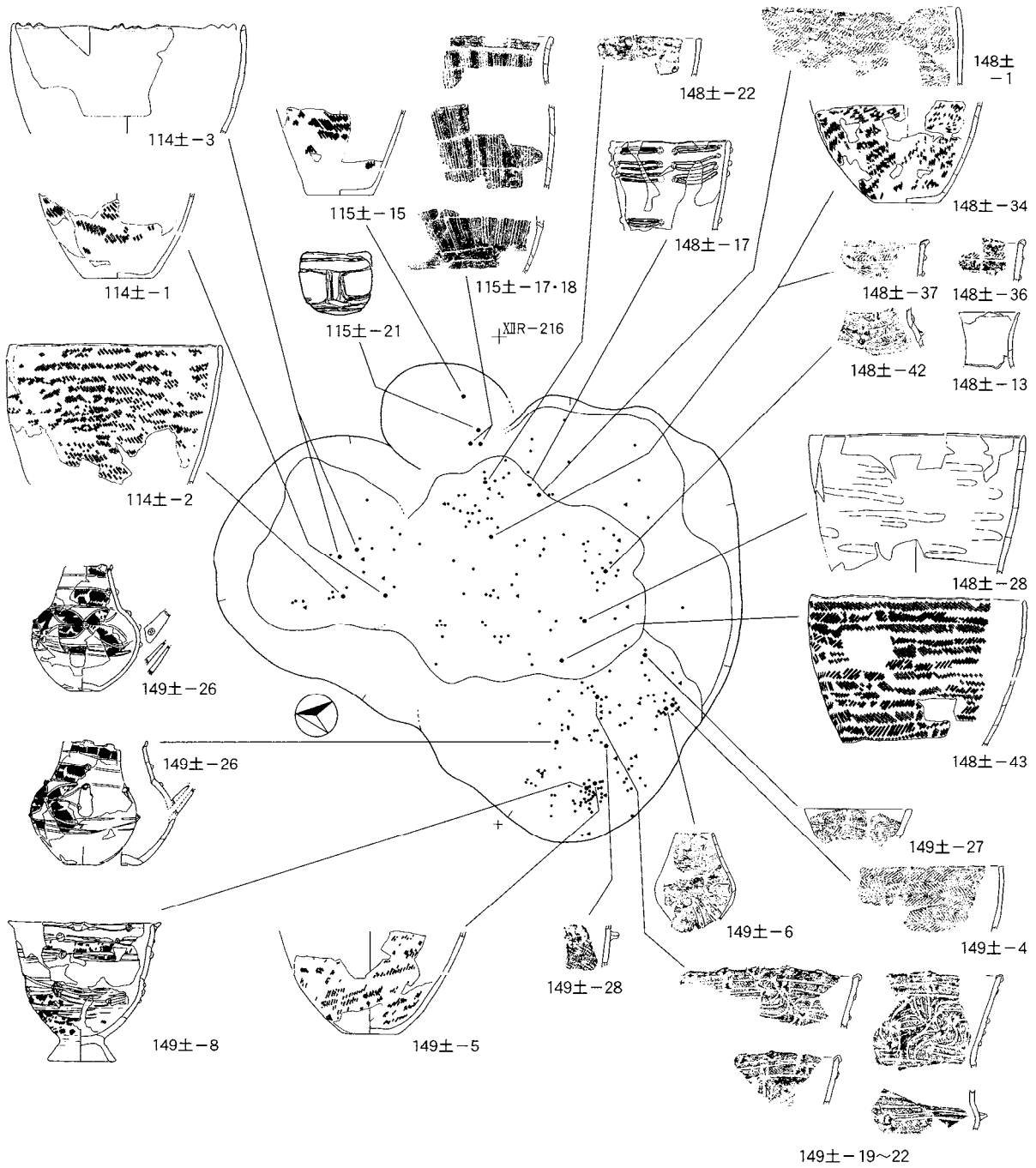


図18 第114・115・148・149号土坑

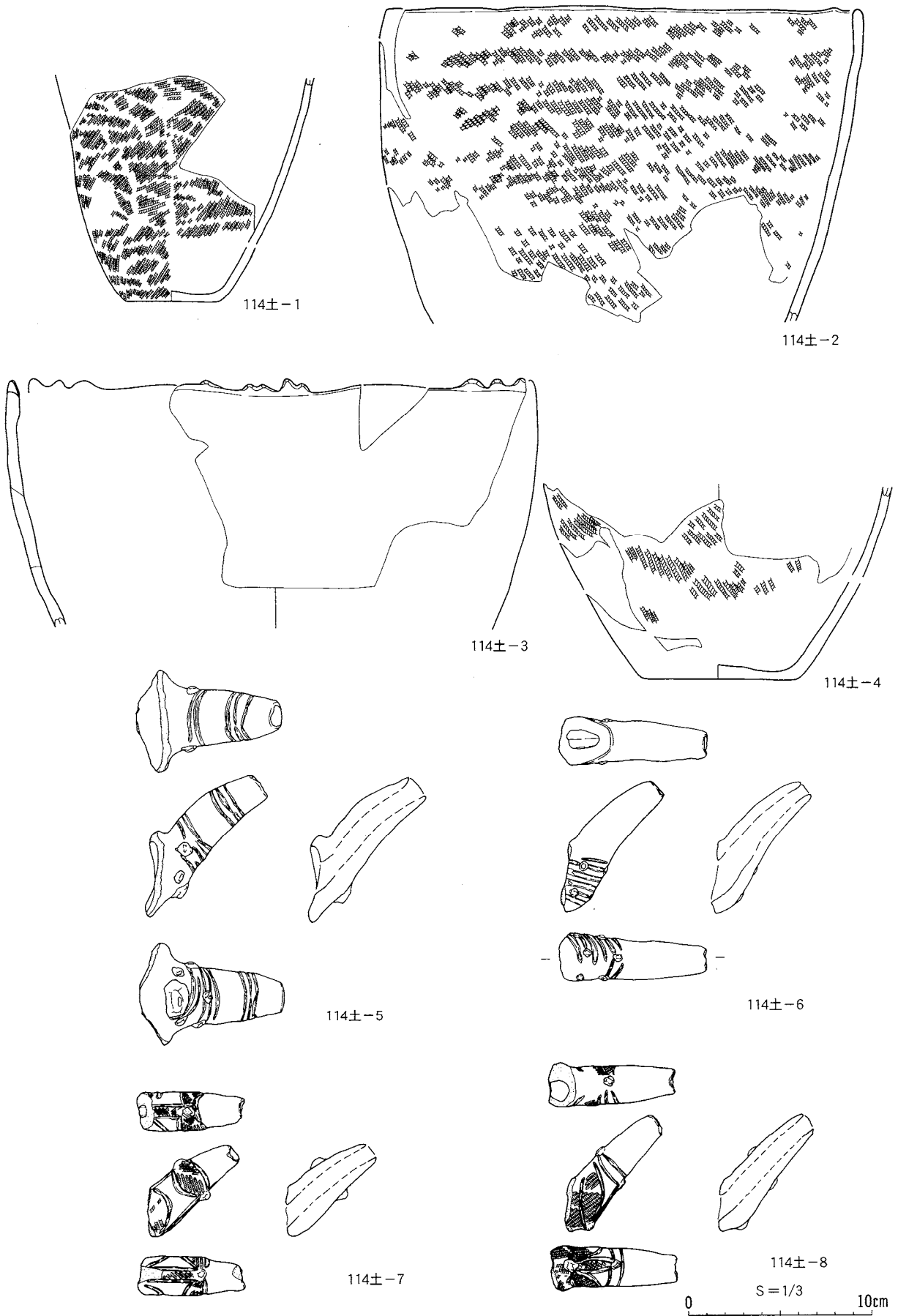


图19 第114号土坑 出土遺物 (1)

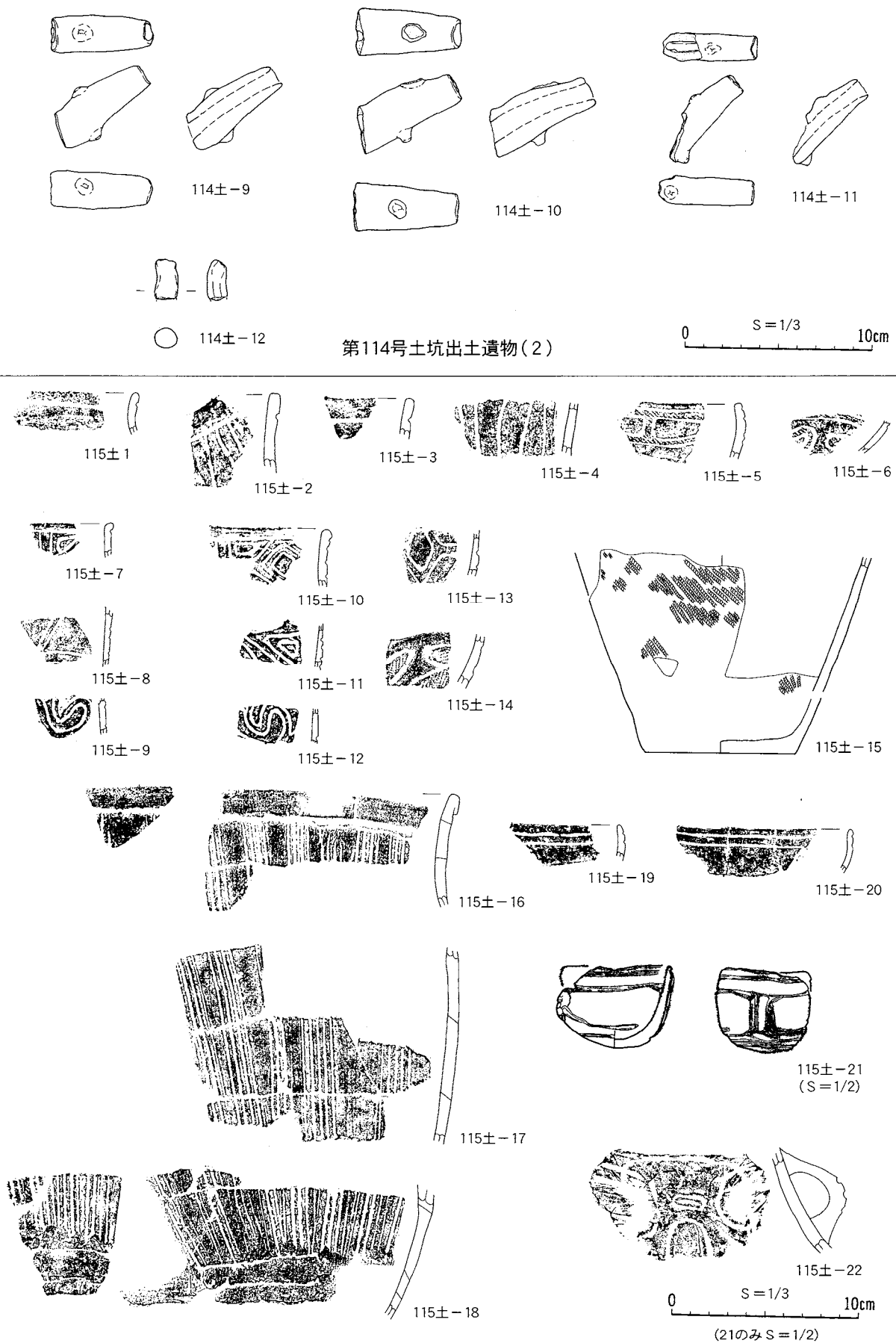


図20 第114・115号土坑 出土遺物



148号土坑調査中に、縄文時代前期前葉の遺物を含む黒色土で構成される本遺構を確認した。

[重複] 第114号土坑・第148号土坑と重複する。本土坑が最も古い。

[平面形・規模] 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸推定1 m70cm×開口部短軸推定1 m20cm、底部長軸1 m40cm×短軸1 m8 cm、深さ24cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土を主体とし、7層に分層した。

[出土遺物] 出土土器の総量は1.679kgで、掲載土器は0.719kgである。すべての土器片が縄文時代後期前葉に帰属する。最も目を引くのは、16～18の4～6本一単位の櫛歯状工具による縦位の条線が施された深鉢である。1本の条線の幅は約2 mm程であり、しっかり深く施文されており、調整ではなく明らかに装飾を意識して施文されている。口縁部は折り返し口縁である。接合帯で割れる傾向にあるが、つくりは非常に丁寧な土器と言えよう。7～13は、小型有文深鉢である。2～4は同一個体の波状口縁の深鉢である。これは左右対称のVの字形の沈線文が施されるものか。5は有文小型鉢である。21は2単位の楕円文が施される袖珍土器または土製品である。側面片側に肥厚する部分があるが、欠損している。22は橋状把手を有する壺形土器である。

石器はフレイク1点とチップが3点出土している。

[小結] 出土した土器などから、縄文時代後期前葉には廃絶された土坑である。

#### 第148号土坑 (図17・18・21～23)

[位置・確認X II] X II Q・R-215グリッドに位置する。第114・115号土坑、第149号土坑と重複しており、当初は判別できなかった。調査が進むうちに、本遺構の中端のラインを確認することができ、おおよその形態を判別した。また第Ⅲ層上面において、本遺構の上部を中心に平安時代の広域火山灰2枚(十和田a・白頭山-苦小牧火山灰)が堆積しており、範囲を認識するための目安となった。

[重複] 第114号土坑・第115号土坑・第149号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。

[平面形・規模] 不整楕円形の平面形を呈し、中端での長軸推定3 m20cm・短軸2 m56cm・深さ68 cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は東から西に向ってやや傾斜している。

[堆積土] 黒褐色の土を主体とし、7層に分層し、さらに細分した。遺物は上層から下層まで、出土している。

[出土遺物] 出土土器の総量は7.823kgで、掲載遺物は4.723kgである。後期後葉の遺物が主体となるが、後期前葉の遺物も混じる。3層の2～5、4層の18～21は同一個体である。口縁内面沈線を有する深鉢と考えられ、体部には入組み渦状文が施される。

粗製深鉢は、28や43から観察できるように、口唇部が急角度で内傾(内削ぎ)するものが多い。当土坑出土の土器群は、15・42の上面刻目横長瘤の存在、2本1単位の沈線が瘤と瘤を結ぶ17や瘤状突起の内面に刻みを入れる手法の36～39から、縄文時代後期後葉の新相を示すものと考えられる。13は無文の細首の壺である。14～16は肩部や胴部に瘤が付される壺・注口である。17は類例は見当たらず、弘前市鬼沢猿沢遺跡第2号土坑出土の深鉢(2)のように、頸部で屈曲する下膨れの器形であろうか。28は急角度で口唇部が内傾(内削ぎ)し、外面に粗雑なミガキが施される無文の深鉢で

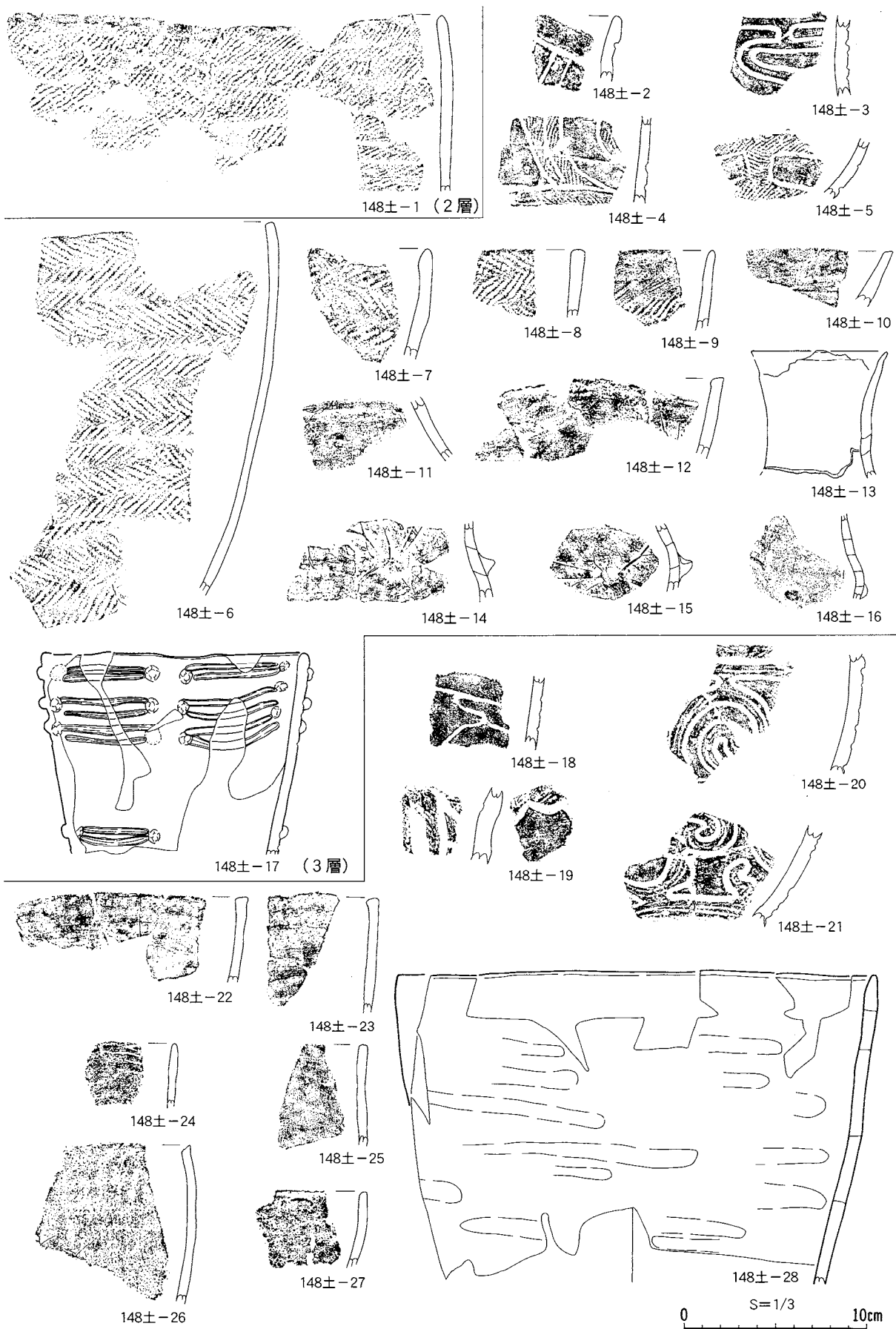


図21 第148号土坑 出土遺物(1)

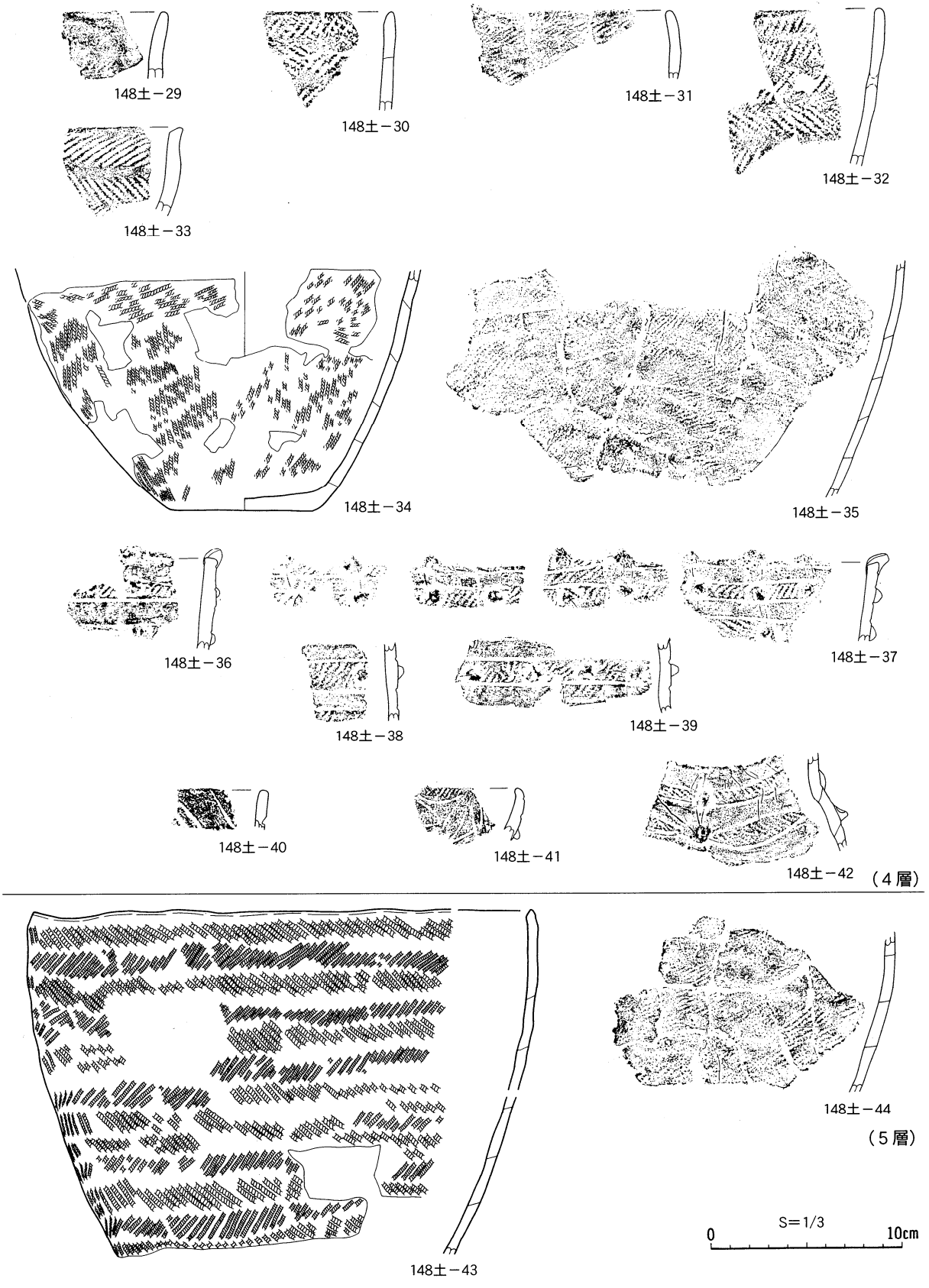


図22 第148号土坑 出土遺物(2)

ある。4層からは無文の深鉢の出土が多い。36～39は口縁部に内面刻目瘤状突起が施され、口頸部の横走縄文帯にも、突起の位置に対応してφ8mm程の突起が付される。42は木葉状縄文帯が肩部に横位に配される。

5層出土の43は、口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）し、LRのみ0段多条である異原体羽状縄文が施される。口唇部外側がつまみ出したようにやや突出する。

石器は使用痕ある剥片6点、フレイクが34点、チップが51点出土した。図示したのは、礫石器4点である。S1～S3は凹石に分類した。S1は表裏両面と側面に深めの凹みが一箇所ずつ見られる。S2は表裏両面に浅めの凹みが、S3は片面に三箇所、もう片面に一箇所の凹みが見られる。S4は叩石で、礫の一端に叩きによるものと考えられる破損箇所が認められる。

〔小結〕縄文時代後期後葉の遺物を多く出土し、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

### 第149号土坑（図17・18・23～25）

〔位置・確認XⅡ〕XⅡQ・R-214・215グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土のプランとして確認した。

〔重複〕第148号土坑と重複する。本遺構のほうが古い

〔平面形・規模〕東側を欠損するが、隅丸方形であるように思われる。開口部推定長軸3m20cm×短軸推定2m84cm、底部長軸2m82cm×短軸2m50cmである。深さは40cmと比較的浅い。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面はやや傾斜が見られる。

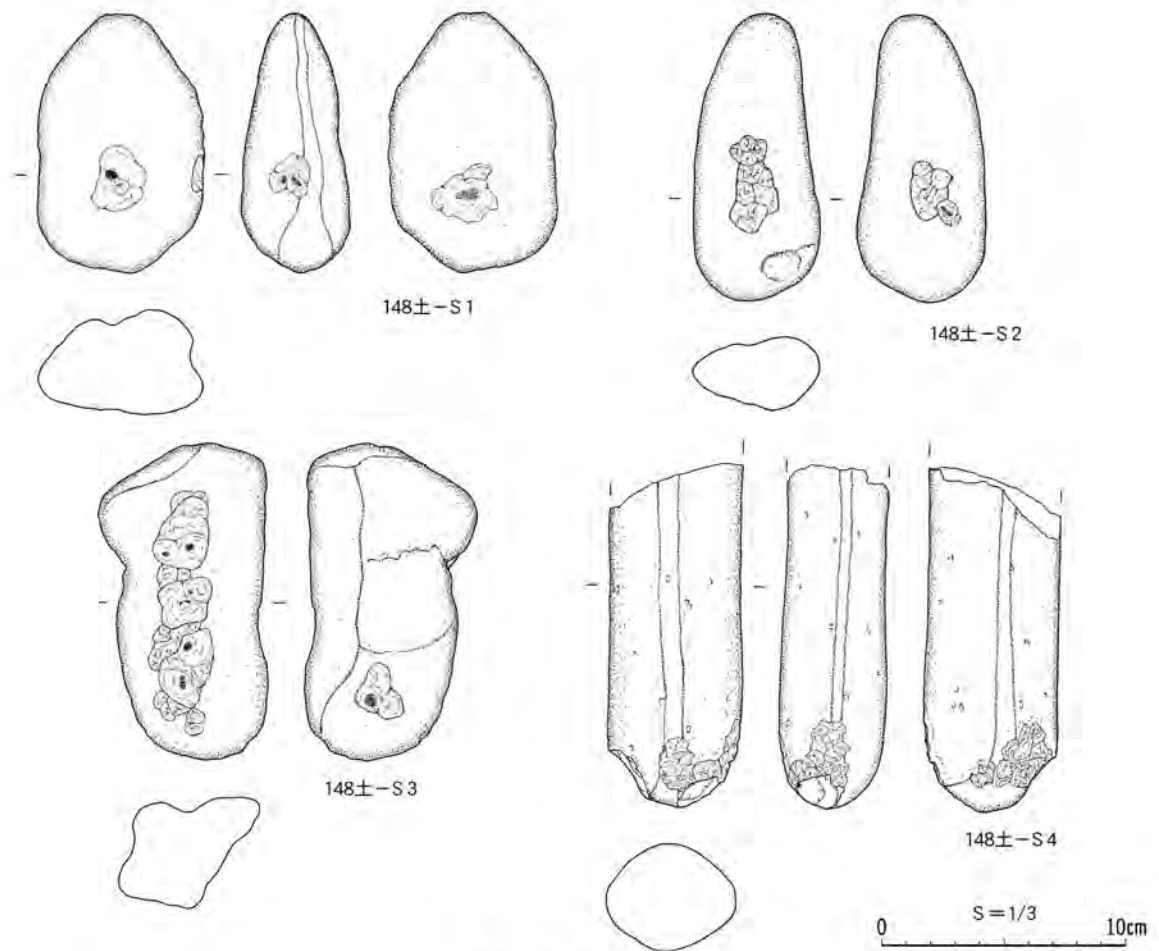
〔堆積土〕黒色の土を主体とし、4層に分層した。遺物は2層以下から多く出土している。

〔出土遺物〕出土土器の総量は5.75kgで、掲載遺物は2.442kgである。2層出土遺物の3・4は0段多条ではない異原体羽状縄文が施される、やや口唇部が内傾する深鉢で、同一個体である。5はLR斜行縄文が施される深鉢の体部下半～底部である。6は外面に非常に丁寧なミガキが施された、無文の小型壺である。8は上下3段の瘤間を2～3条の横走沈線で結ぶ。口縁部には上面が平坦または凹状になる大型横長瘤が付される。器面調整、沈線、瘤の刻み、縄文などそのほとんどの要素が粗雑な様相である。上から3段目の文様は意図的に一つおきに瘤をやや上下させ、鋸歯状沈線となっているように見える。

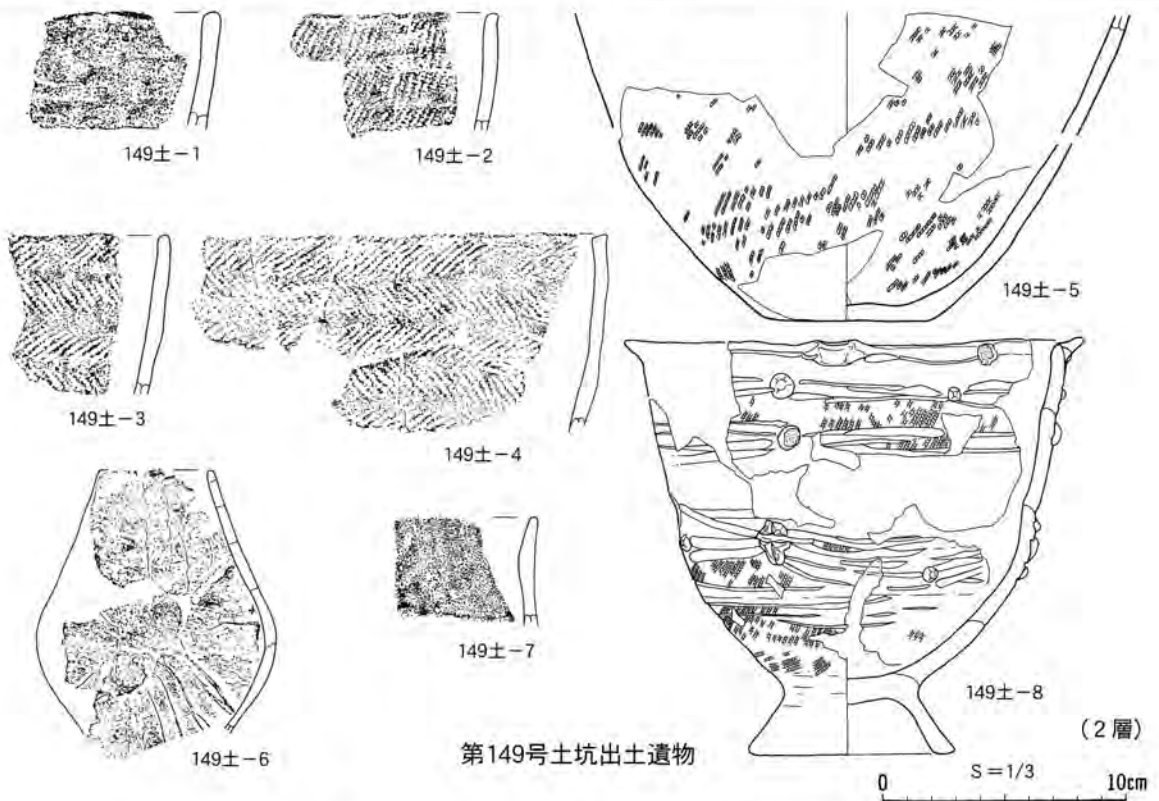
3層出土遺物は、後期前葉の深鉢片が2片（9・10）混じるが、概ね後期後葉の新相を示すものが主体である。12は0段多条であるが、14・15は違う。17・18は内面刻目突起が付される。19～22は頸部で屈曲する有文深鉢である。縄文帯中にスリット状の分割線を有する、鍵状入組み縄文帯である。φ6～7mmの瘤が入組み縄文帯の交点や屈曲点に多く付される。26は肩部に木葉状縄文帯が4個一単位で4単位配される注口土器である。縦方向の細長い縄文帯が各単位を区切る。口縁部には内面刻目突起が付され、新相の様相を示す最下層4層から出土した、27は口唇部が非常に平坦で、あるいは台部の可能性もある。28は上面刻目横長瘤が付された粗製深鉢である。

石器は石鏃4点、使用痕ある剥片が11点、フレイク22点、チップ18点が出土した。S1は側縁が丸みを帯びる有茎平基、S2・S3は側縁が直線的で基部が尖る。

S6は、青森県六ヶ所村の大石平遺跡において多く出土し、「大石平型石筥」と命名されたものである。従来石筥・石匙・ナイフ・両面加工石器・エンドスクレイパーと呼称されてきたが、時間的・地



第148号土坑出土遺物



第149号土坑出土遺物

図23 第148・149号土坑 出土遺物 (1)

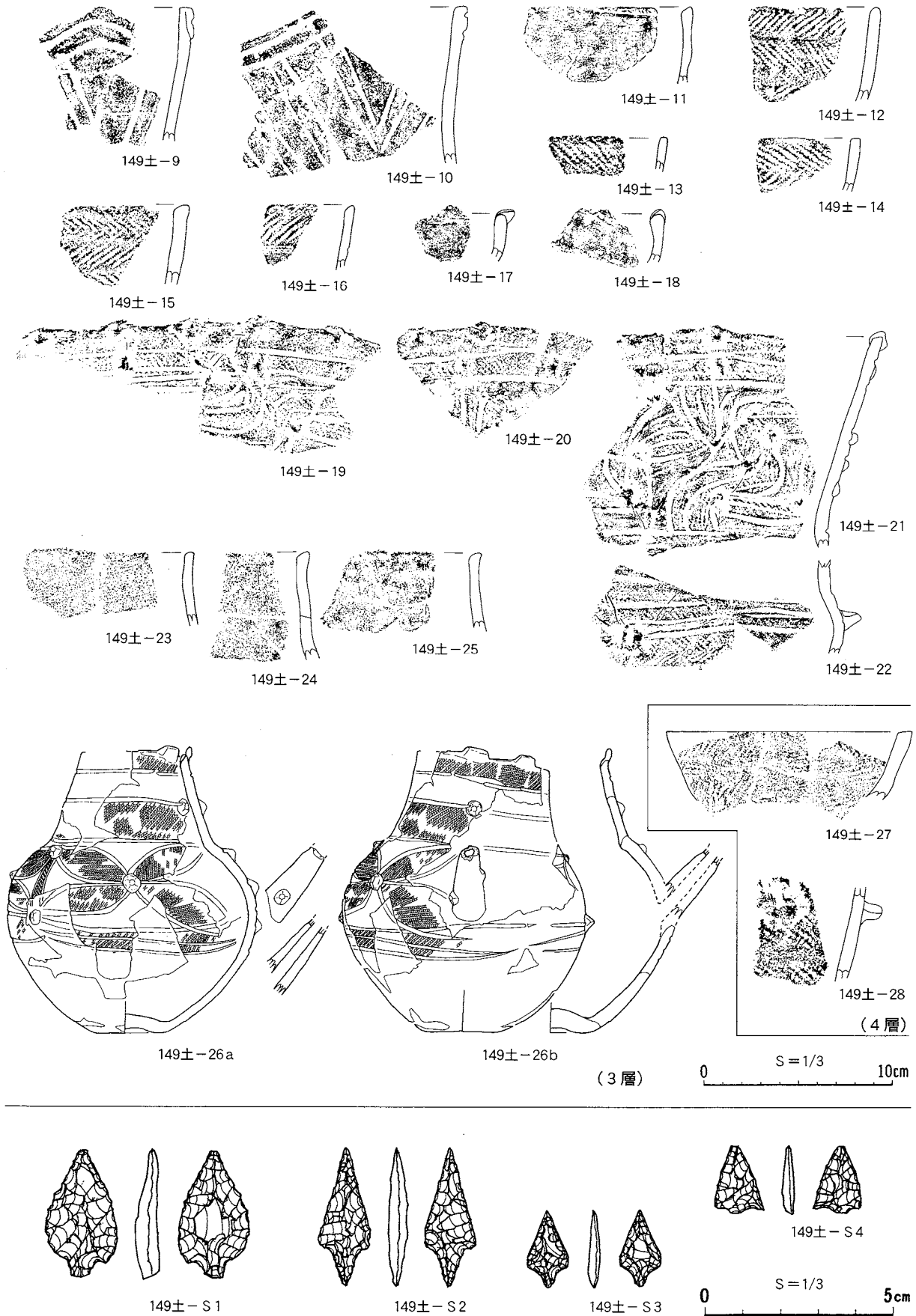


図24 第149号土坑 出土遺物(2)



域的に限定された分布を示す類型である為、石筥とは区別された。畠山昇は大石平遺跡報文中で類例を挙げ、北海道南部地方・青森県・岩手と秋田県の北部の縄文時代中期末葉～後期前葉に多く見られ、特に縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式期）に特徴的であるとしている（畠山 1986）。当遺跡出土のS6は、刃部側が楕円形を呈する「大石平型石筥a類」である。S8は表裏両面に深めの凹みが見られ、側面と端部に叩き痕が残る。

〔小結〕縄文時代後期後葉の十腰内Ⅴ群またはそれ以降の土器が出土しており、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第114号土坑・第115号・第148号・第149号土坑出土遺物（図25）

重複していた第114号・第115号・第148号・第149号土坑を、当初「第111号性格不明遺構」の名称を与えて調査を行った。ベルトを設定して精査を開始し、各土坑を確認していった。しかし、土坑として捉えられない浅い凹み部分出土の遺物などは、第111号性格不明遺構出土として取り上げた為、ここで遺物のみ触れることにする。なお遺物No.は、「SX111-1」などと表現する。

1と2は無文の深鉢または鉢である。2は無文の小型壺・注口である。4は穿孔瘤が付される壺の頸肩部である。大湊近川遺跡で多く出土しているが、出土遺跡は少ない。しかもすべてが横方向の穿孔であり、当遺跡例は上下方向の穿孔と判断した。

石器は、3点図示した。S1は縦長の剥片を利用したスクレイパーである。打面側以外の3つの縁辺には細かい二次調整または使用による微細剥離が見られる。S2は自然面が残る小型の縦長剥片の片面に二次調整が見られ、大石平型石筥の未製品とも考えたがスクレイパーに分類した。S3は上半部が破損した有茎凸基の石鏃である。

#### 第123号土坑（図25・26）

〔位置・確認ⅩⅡ〕ⅩⅡQ-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の円形プランとして確認した。第124号土坑の北側に位置する。

〔重複〕重複はないが、第124号土坑が南側に近接する。

〔平面形・規模〕円形の平面形を呈し、開口直径1m5cm程度、底部直径95cm程度、深さ18cmである。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開いたり、直立気味に立ちあがる。底面は平坦である。

〔堆積土〕4層に分層し、黒色土を主体とする。第124号土坑の堆積土と類似している。

〔出土遺物〕出土土器の総量は2.893kgで、掲載遺物は2.442kgである。1は重弧文または渦巻状文が施された、縄文時代後期前葉の壺の体部である。

2・3は、LRのみ0段多条の異原体羽状縄文が施される深鉢で口唇形態がやや異なるが、胎土の含有物・焼成から判断して、同一個体である。2の口唇部を観察すると、最上部の折り返し部をナデ調整で段差を無くす意図が感じられる。4は8mm×4mmの縦長瘤が付される深鉢の口縁部で、口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）する。5～7は同一個体と考えられる、無文の壺・注口の口頸部である。口唇部はやや外側につまみ出したようであり、頸部に上面刻み横長瘤が付される。

石器は使用痕ある剥片が1点、フレイク14点、チップ15点が出土した。

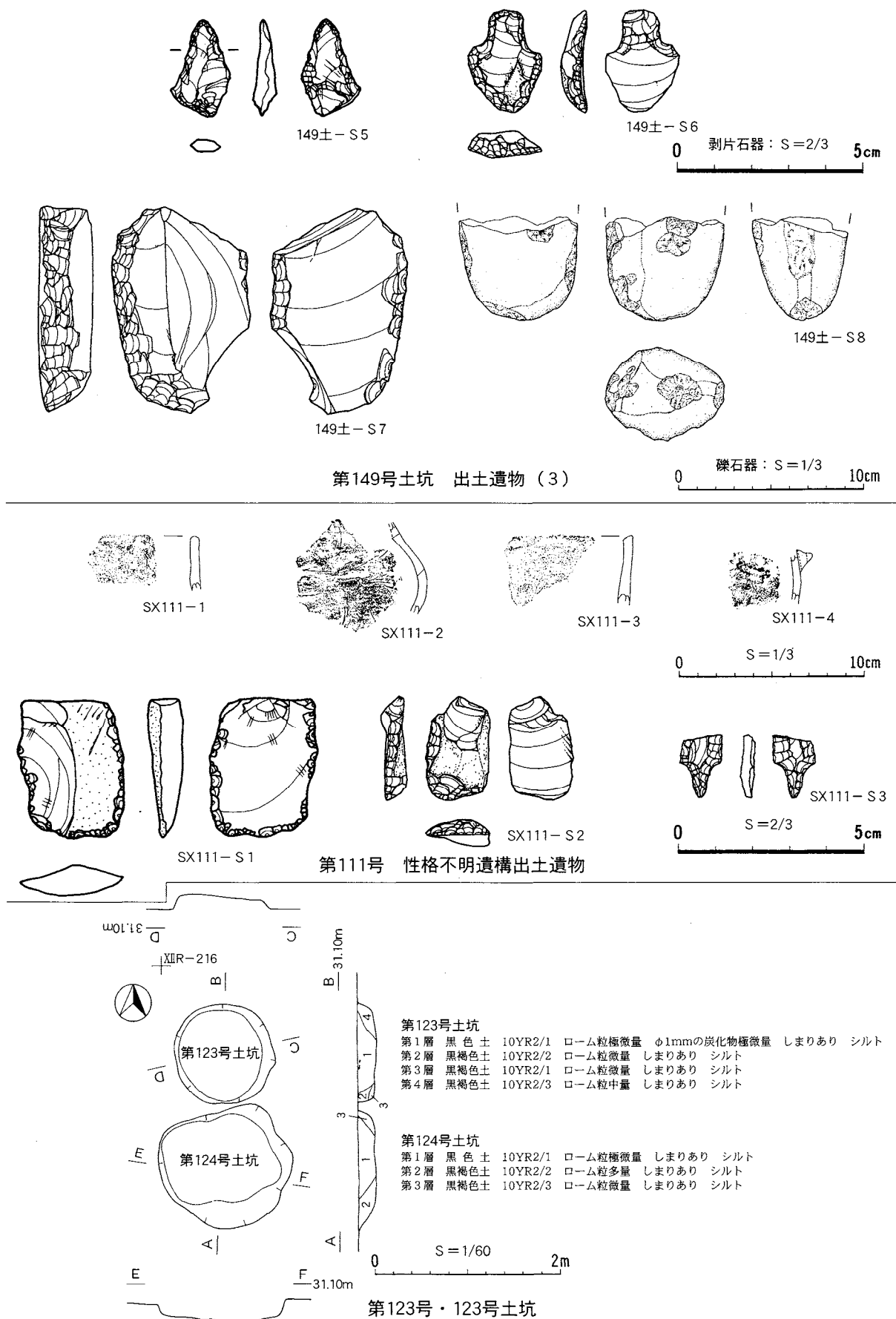


図25 第149号土坑、第111号性格不明遺構 出土遺物・第123・124号土坑

[小結] 第124号土坑と近接し、覆土もほぼ一致する為、ほぼ同時期に埋没したものと考えられる。遺物の出土は多くないが、その中でも縄文時代後期後葉の遺物が主体を占め、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第124号土坑 (図25・26)

[位置・確認XⅡ] XⅡQ-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の円形プランとして確認した。第123号土坑の南側に位置する。

[重複] 重複はないが、第123号土坑が北側に近接する。

[平面形・規模] 長楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1 m44cm・短軸1 m22cm、底部長軸1 m20cm・短軸90cm、深さ18cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開いたり、直立気味に立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 3層に分層し、黒色土を主体とする。

[出土遺物] 出土遺物の総量は0.329kgで、掲載遺物が0.129kgである。1は口唇部が急角度で内傾(内削ぎ)する無文の深鉢口縁部である。2は縄文帯に、非常に節の小さい0段多条の異原体羽状縄文と縦16mmの大型縦長瘤が付される壺・注口の頸部である。

石器はフレイク1点のみが出土した。

[小結] 覆土も第123号土坑と似ており、両土坑の埋没時期は近いものと考えられる。遺物は少数ではあるが、図示した1・2は縄文時代後期後葉の土器である。

#### 第125号・第126号・第141号土坑

3つの土坑が、横に並んで重複していた為、ここで順番に説明する。

#### 第125号土坑 (図26・27)

[位置・確認] XⅡQ-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の楕円形プランとして確認した。

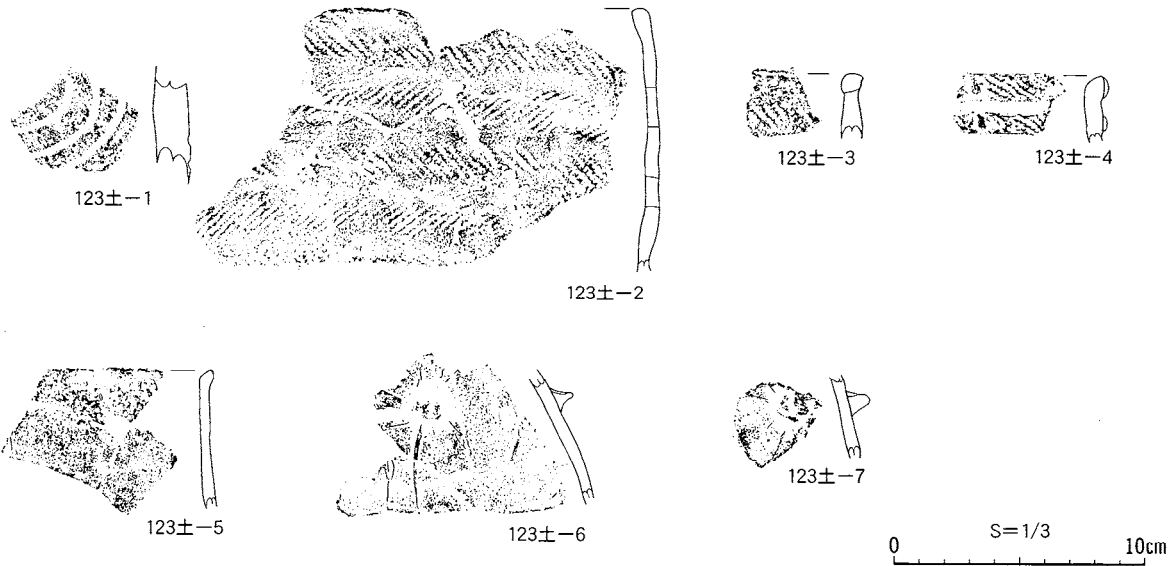
[重複] 第141号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。

[平面形・規模] 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸2 m20cm×短軸1 m90cm、底部長軸2 m×短軸1 m60cm、深さ42cmである。

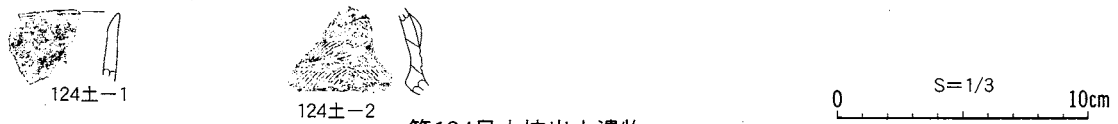
[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は北から南に向って緩やかに傾斜し、東西方向では中心部がやや高くなる。

[堆積土] 黒褐色の土を主体とし、8層に分層した。遺物は1層など上層から多く出土している。

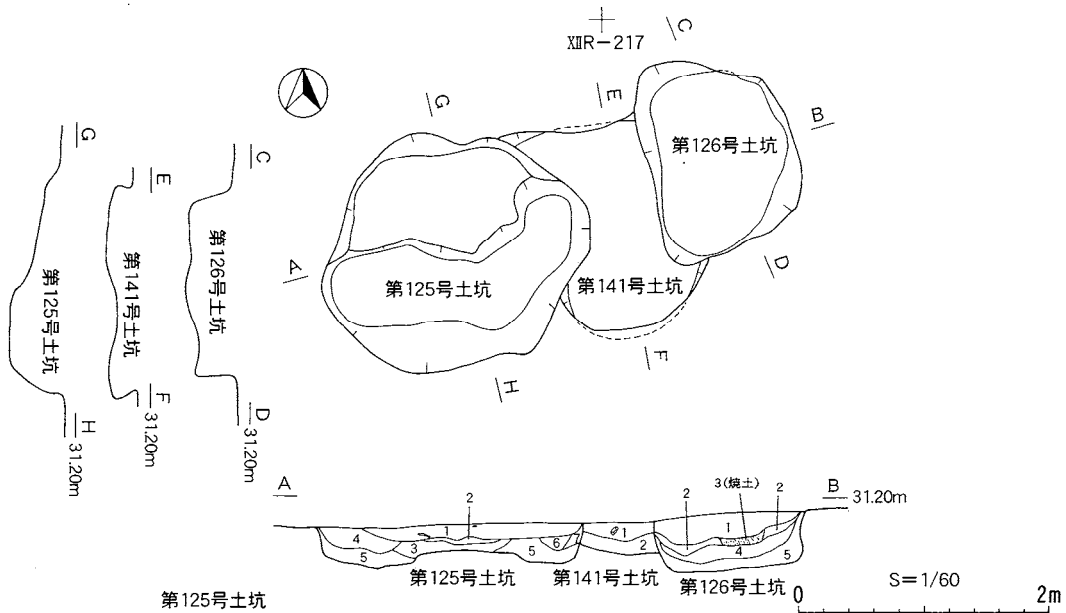
[出土遺物] 出土土器の総量は3.245kg、掲載遺物が0.374kgである。大半の遺物が、1層など上層からの出土であり、縄文時代後期後葉の遺物のみ見られる。またこの土坑から注口部が4点出土しているが、遺物整理作業中の不手際で、第125号・第126号・第141号土坑出土の注口部の帰属が不明となってしまった。19の異形土器の注口部は、確実に第125号土坑出土であることが判明している。資料的価値の低下を招いたことは誠に遺憾ではあるが、これらの遺物はここにおいて触れたい。口唇部を外側につまみ出したような形態の深鉢が見られる。15はLRのみ0段多条の異原体羽状縄文が施される。8は無文の深鉢であり、外面にタール状の炭化物の付着が見られる。12はRL



第123号土坑出土遺物



第124号土坑出土遺物



第125号土坑

- 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒極微量 しまりあり シルト
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒多量 しまりあり シルト
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 φ3mm以下の炭化物極微量 しまりあり シルト
- 第4層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒中量 しまりあり シルト
- 第5層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒多量 φ1mmの炭化物極微量 しまりあり シルト
- 第6層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 しまりあり シルト
- 第7層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 しまりあり シルト
- 第8層 黒色土 10YR2/1 ローム粒微量 φ2mmの炭化物極微量 しまりあり シルト

第126号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 φ3mm以下の炭化物極微量 焼土粒極微量 しまりあり シルト
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒中量 φ3mm以下の炭化物極微量 φ5~10mmの炭化物微量 しまりあり シルト
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 焼土を多量に含む層 ローム極微量 シルト
- 第4層 黒色土 10YR2/1 ローム粒極微量 φ10mm以下の炭化物少量 焼土粒極微量 しまりあり シルト
- 第5層 黒色土 10YR2/1 ローム粒極微量 しまりあり シルト

第141号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒微量 φ3mm以下の炭化物極微量 しまりあり シルト
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒少量 φ3mm以下の炭化物極微量 しまりあり シルト

図26 第123・124・125・126・141号土坑

単節斜縄文が施される深鉢であるが、口唇部に瘤状突起が付される。7は三本一組の沈線で弧状のモチーフを描く、壺・注口である。外面調整は丁寧なミガキである。19は縄文時代後期後葉に特徴的な異形土器の注口部と考えられる。上面側は上下幅1mm程の微細な節のLR（0段多条）とRLの縄文が施される。下面側には左右対称に木葉状またはその他の縄文帯が施されている。注口部下面根元側と左右の側面に瘤が貼付される。無文部は丁寧なミガキが施される。接合帯は7～12mm程である。16～18は無文の注口部である。すべて根元側下面に瘤が付され、18は中位付近上下にも瘤が付される。

石器はフレイク、チップが多く出土しており、使用痕ある剥片4点、二次加工ある剥片1点、フレイク28点、チップ55点である。他に石核1点が出土している。

[小結] 当土坑は、隣接する第126号土坑と共に、フレイク・チップ等の石器の出土数が非常に多いことが、特徴である。土器は縄文時代後期後葉の遺物が見られ、中でも19の異形土器の注口部は類例も少ないものである。当遺跡では、平成9年度の調査においても、管状構造をとる異形の注口土器が出土している（中村・杉野森 1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』）。

#### 第126号土坑（図26～29）

[位置・確認XⅡ] XⅡQ-217グリッドに、位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の楕円形プランとして確認した。

[重複] 第141号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。

[平面形・規模] 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m60cm×短軸1m16cm、底部長軸1m42cm×短軸1m4cm、深さ46cmである。

[断面・底面] 壁は底面から直立気味またはやや開くように立ち上がる。底面はほぼ水平で平坦である。

[堆積土] 黒褐色の土を主体とし、5層に分層した。遺物は下層から上層まで出土している。覆土中位付近に焼土を多量に含む3層が見られる。遺物は焼土層を挟む上下層から多く出土している。

[出土遺物] 出土土器の総量は3.908kgで、掲載遺物は0.958kgである。当土坑は、少数の縄文時代中期・後期前葉の遺物を含むが、主体を占めるのは縄文時代後期後葉の遺物である。石器も多数出土しているおり、ほとんどが縄文時代後期後葉に帰属するものと考えられる。

1層では無文の深鉢・鉢の出土が目立つ（2～6）。2・4・5層において、同一個体の深鉢片が多数出土している（9～15）。これらは、口唇部が急傾斜でやや丸みを帯びて内傾し、口唇部外面がややつまみ出された形態である。16は上面刻目瘤が付された壺・注口の頸部片である。出土層位不明の土器にも無文の深鉢・鉢の破片が目立つ（17～24）。それらのものも口唇部内傾（内削ぎ）の形態のものが多い。20はやや口唇部が肥厚する小型の深鉢である。28は煮沸用の有文深鉢片であり、縄文帯の中に異原体羽状縄文の接点に、スリット状の沈線が施されている。31は大型無文壺の肩部片である。外面には丁寧なミガキ調整が施される。32・33共に、縄文帯で文様が構成される壺である。32は壺の肩部で、木葉状縄文帯の一端にφ6mm程の瘤が付される。縄文は異原体の羽状縄文である。33も縄文帯が施されるが、文様構成は不明である。35は焼成粘土塊である。

石器は非常に多く出土しており、石核2点、石匙1点、フレイク55点、チップ76点が出土した。S1は石核または偽石器である。各側面に規則的ではない剥離が見られ、バルブも発達せず、ねじ切れ

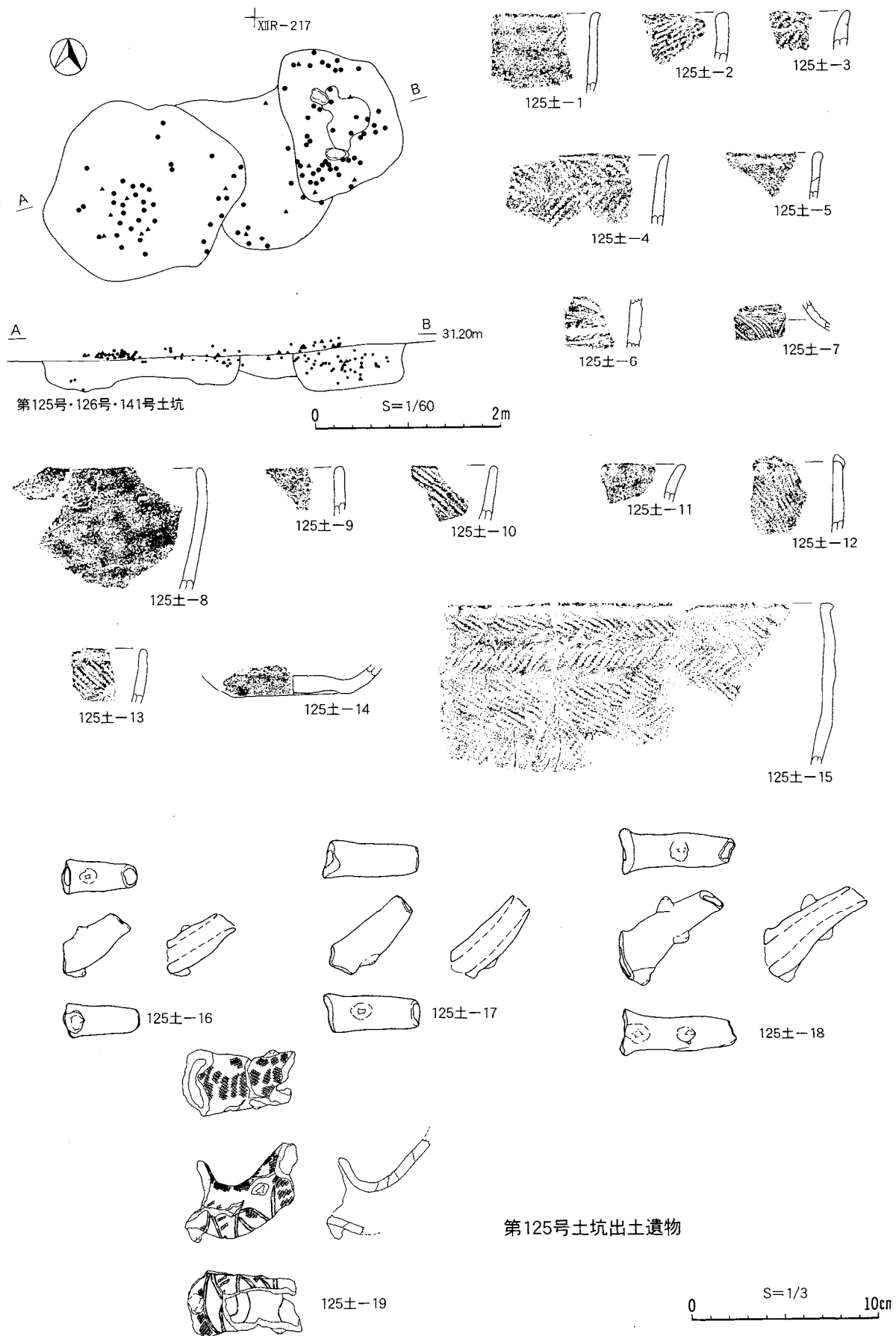


图27 第125・126・141号土坑 出土遺物

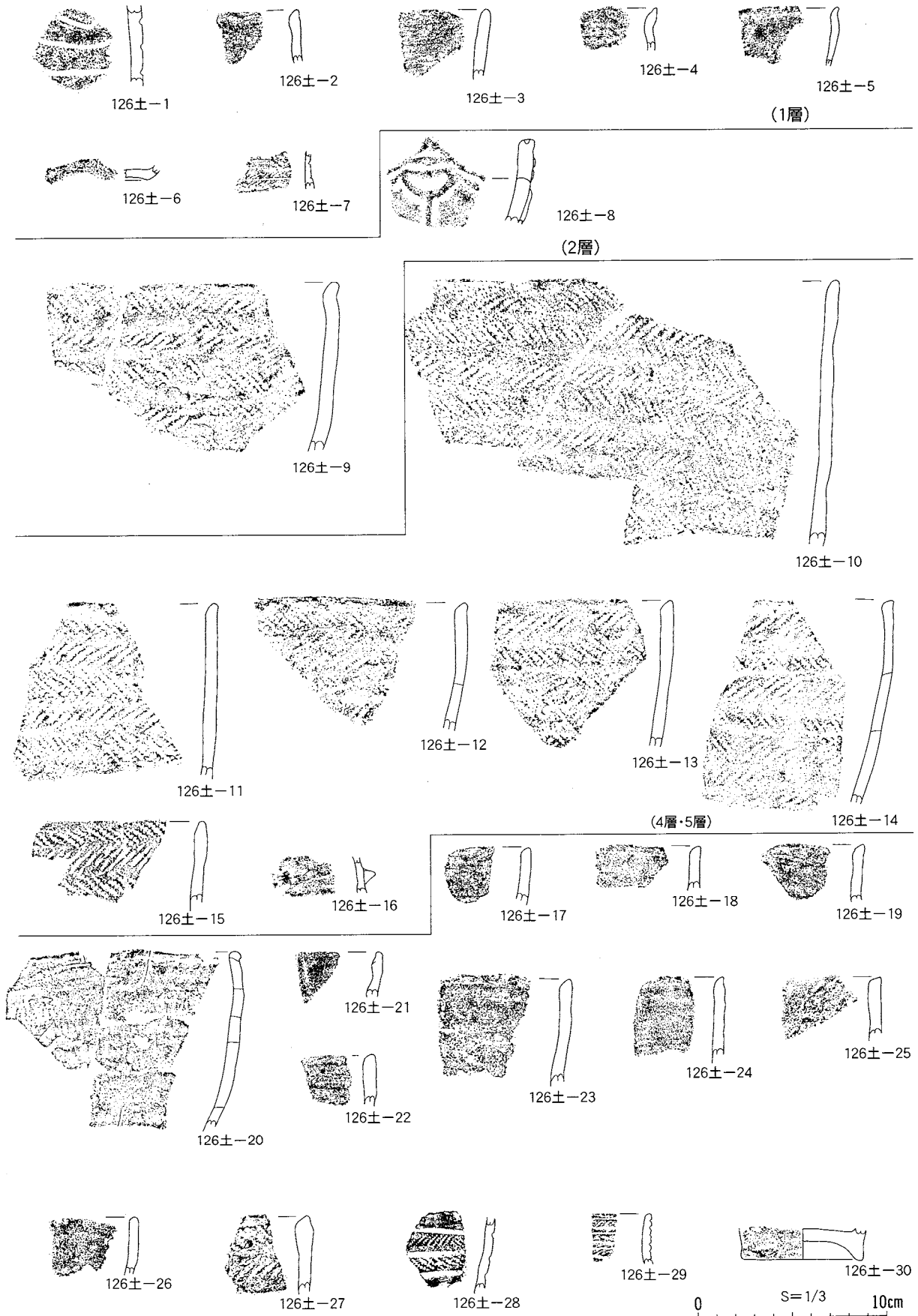


図28 第126号土坑 出土遺物(1)



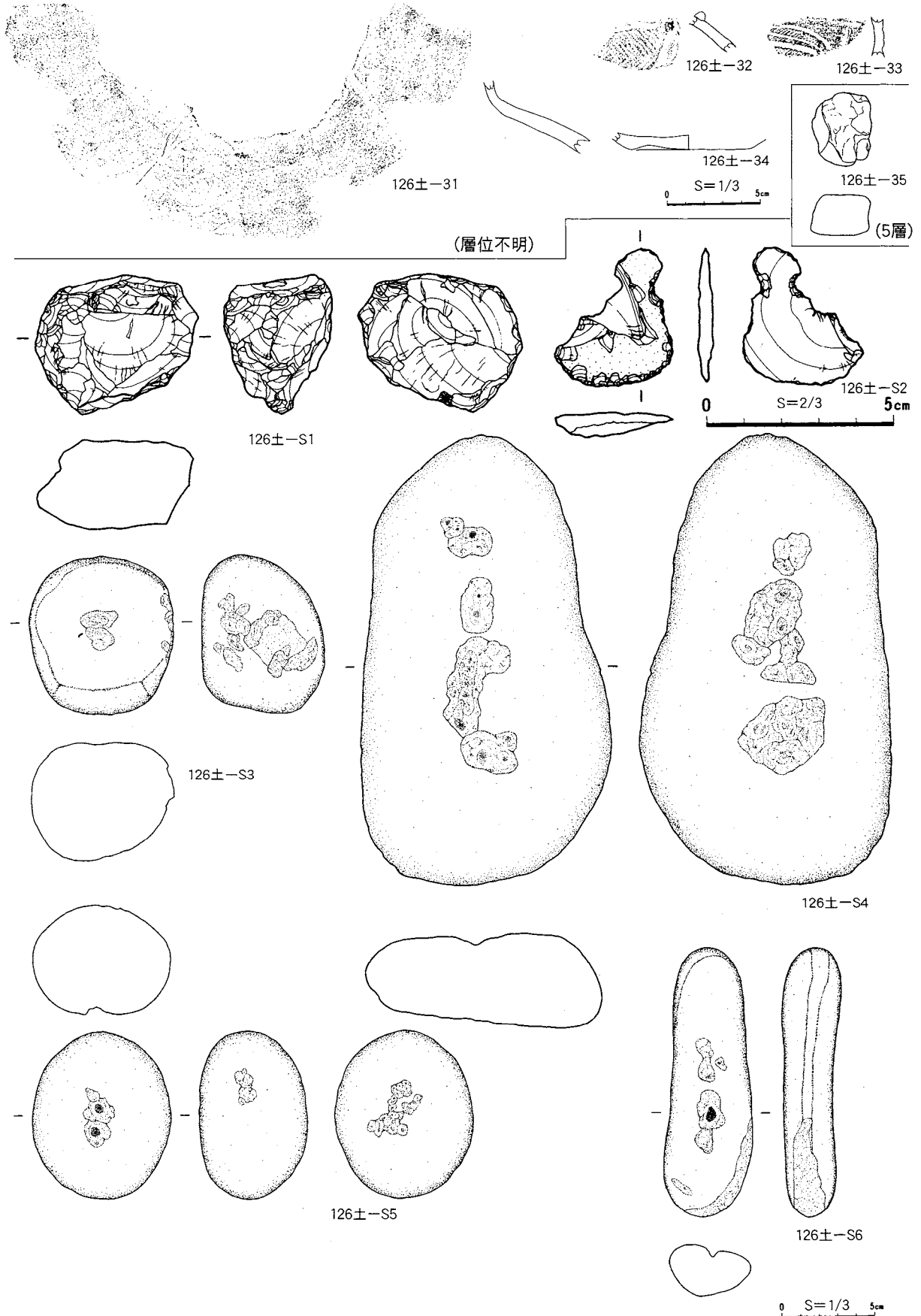


図29 第126号土坑 出土遺物(2)

たような剥離に思われ、偽石器の可能性が高い。S2は折れた剥片を用いた石匙である。つまみ部には両面から連続微細剥離が加えられ凹部が形成されている。刃部は片面に調整が施されている。表面には自然面、裏面には主要剥離面が多く残り、折れた剥片に、つまみ部と刃部を作出した、比較的簡単に製作された小型の石匙と言える。また剥片素材の用い方も特徴的であり、つまみ部に打面側や剥片の厚い部分を用いるのではなく、意図的に刃部側の一端に最も剥片の厚い部分がくるようにしている。このように薄いつまみ部では、着柄時の強度に不安が残るが、宮城県山王団遺跡出土例のようにつまみに紐を結び、携帯するのには問題ないと考えられる。

S3は片面と一方の側面に、浅い凹みと浅い凹み+叩き痕が見られる。S4は扁平な石英安山岩を用いた凹み石である。両面に3～4箇所の浅い凹みが残されている。S5は片面に深い凹みが2箇所、もう片面に浅い凹みが2箇所、一側面に叩き痕が見られる。S6は片面に浅い凹みと深い凹みが見られる。側面的一部分が磨りに用いられている可能性がある。

〔小結〕縄文時代後期後葉の遺物を多く出土しており、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第141号土坑（図26・30）

〔位置・確認XⅡ〕XⅡQ-216・217グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕第125号・126号土坑と重複し、本土坑が最も古い。

〔平面形・規模〕第125号・第126号土坑と重複する為、全体形は明らかではないが、円形または楕円形と考えられる。南北方向は、開口部1m60cm、底部径1m74cmである。

〔断面・底面〕断面はフラスコ形を呈し、底面は一部で盛りあがる。

〔堆積土〕黒褐色の土層2層で構成される。

〔出土遺物〕出土土器の総量は0.236kgで、掲載遺物は0.037kgである。1は縄文時代後期前葉の深鉢である。2は異原体羽状縄文が施される深鉢、3は無文の深鉢、4は壺・注口の底部である。

石器は、フレイク2点、チップ1点が出土している。

〔小結〕遺物は少数であるが、縄文時代後期後葉の遺物が出土している。

#### 第127号土坑（図30）

〔位置・確認XⅡ〕XⅡR-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕なし

〔平面形・規模〕長楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m4cm・短軸90cm、底部長軸68cm・短軸66cm、深さ24cmである。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開いたり、直立気味に立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕3層に分層し、黒褐色土を主体とする。

〔出土遺物〕出土土器の総量は、0.158kgである。1はLの撚糸文が施される、複合口縁の深鉢である。2は沿口沈線が施された波状口縁の深鉢である。3は口縁部に楕円文が施される有文深鉢である。

〔小結〕出土した土器は、縄文時代後期前葉の土器が多い。縄文時代後期前葉以前に廃絶された土坑

である可能性が高い。

### 第129号・第131号土坑

両土坑は、南北に並び重複していた為、ここで順番に説明する。

#### 第129号土坑（図30～35）

〔位置・確認〕 主にXⅡS-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で黒色の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 第131号土坑と重複する。平面プラン検出時には新旧関係は不明であったが、包含する遺物の帰属年代によって、第131号土坑よりも、本遺構の方が新しいと判断した。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形を呈し、開口部長軸2m8cm・開口部短軸推定1m50cm、底部長軸2m18cm・底部短軸推定1m84cmである。深さは32～50cmである。

〔断面・底面〕 断面はややフラスコ形を呈し、立ちあがる。底面両側に深い部分が見られ、中央部が相対的に高くなる。

〔堆積土〕 5層に分層したが、更に細分された。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は8.477kgで、掲載遺物は1.918kgである。1層から5層にかけて、縄文時代後期前葉と後葉の遺物を共に出土する。上層では縄文時代後期前葉の遺物が主体であるが、下層では後期後葉の遺物が主体となる。1は複合口縁となる縄文時代後期前葉の無文の深鉢である。2・3は同一個体と考えられ、Rの撚糸文が施される深鉢である。4は波状口縁に対応して、体部に重層するV字形のモチーフが描かれる深鉢である。5～8も後期前葉の深鉢であり、それぞれ沿口沈線や渦巻状文や楕円文が施される。9は後期前葉の壺と考えられるが、縦横逆の可能性はある。10～13は後期後葉と考えられる。10は頸部で屈曲するタイプの深鉢であろうか、口縁部外面に3個/cmの刻目帯を有するもので、十腰内Ⅳ群の古い段階のものであろうか。11は深鉢または鉢であり、波状口縁頂部に内面刻みの瘤状突起が付される。それに対応して口縁部外面にはφ10mmの縦刻みの入った瘤が付されている。12は異原体の羽状縄文が施された深鉢である。口唇部形態は内面側に急傾斜で内傾（内削ぎ）する。13は無文深鉢の体部下半である。

14～22は2層出土の縄文時代後期前葉の土器である。14・15は、撚糸文が施される深鉢である。16～20は楕円文が施される有文深鉢である。21・22は同一個体の壺と考えられ、22は隆帯の剥落部に、割付用の下描き沈線が見られる。

23～34は、2層出土の縄文時代後期後葉の遺物である。23は口唇部が内傾（内削ぎ）する無文の深鉢、26は横方向の条痕による調整が施された深鉢である。29・30・33は縄文帯で文様が構成される。29は縦9mmの縦長瘤が口縁部に付される深鉢である。31は肥厚する深鉢の口縁部に4個/cmの刻目隆帯が二条施される。34は底部中央が上底気味になる小型の壺・注口である。35は時期不明の壺の底部付近と考えられる。内面に鮮やかな赤色顔料の皮膜が形成されており、その容器であったことも考えられる。

36～40は、3層出土の縄文時代後期前葉の土器である。36・37は、同一個体で口縁部に横走沈線が施された深鉢である。38～40は楕円文や渦巻状文が施される小型の深鉢である。

41～59は、3層出土の縄文時代後期後葉の土器である。41・44は同一個体で、0段多条のRL縄

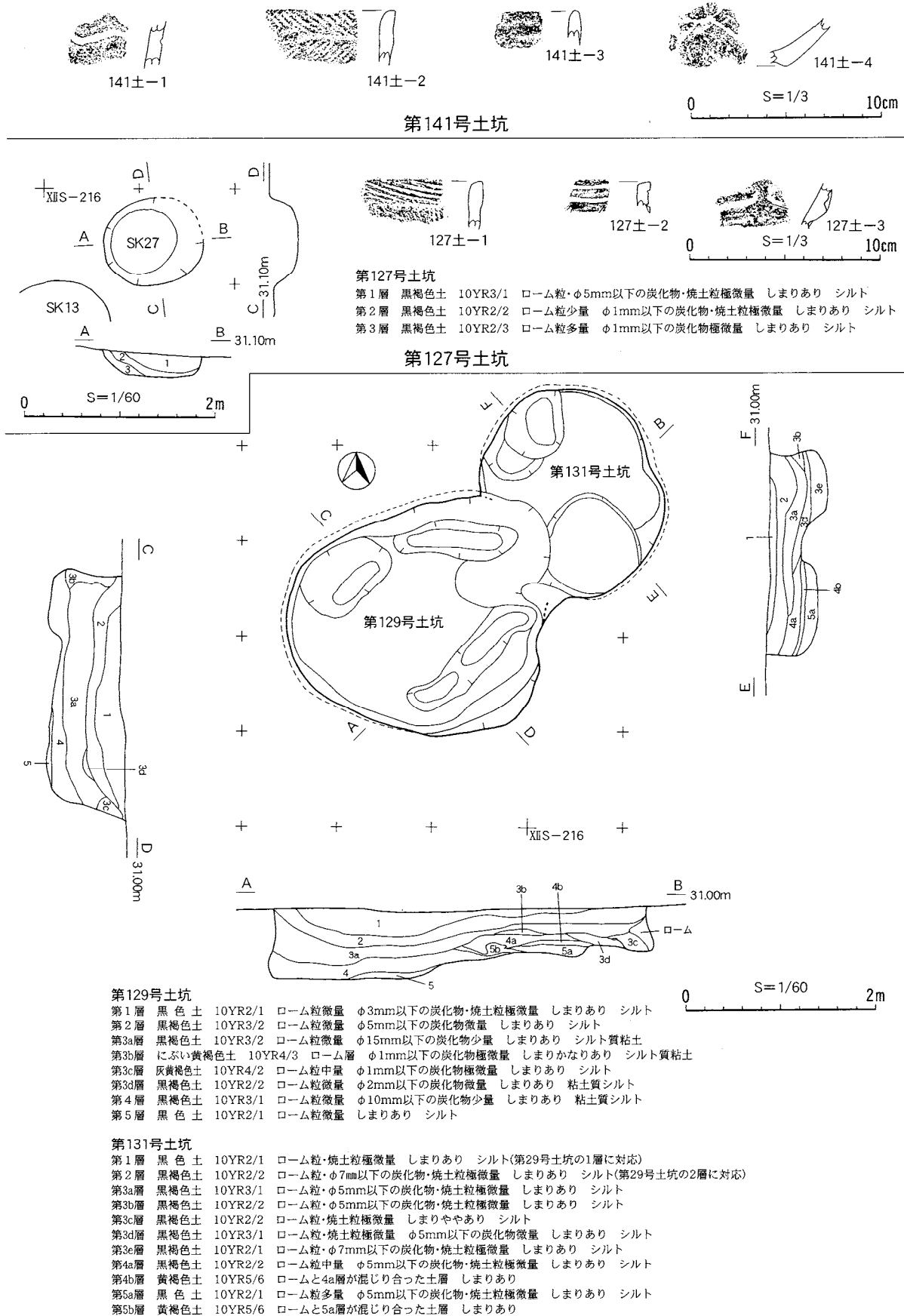
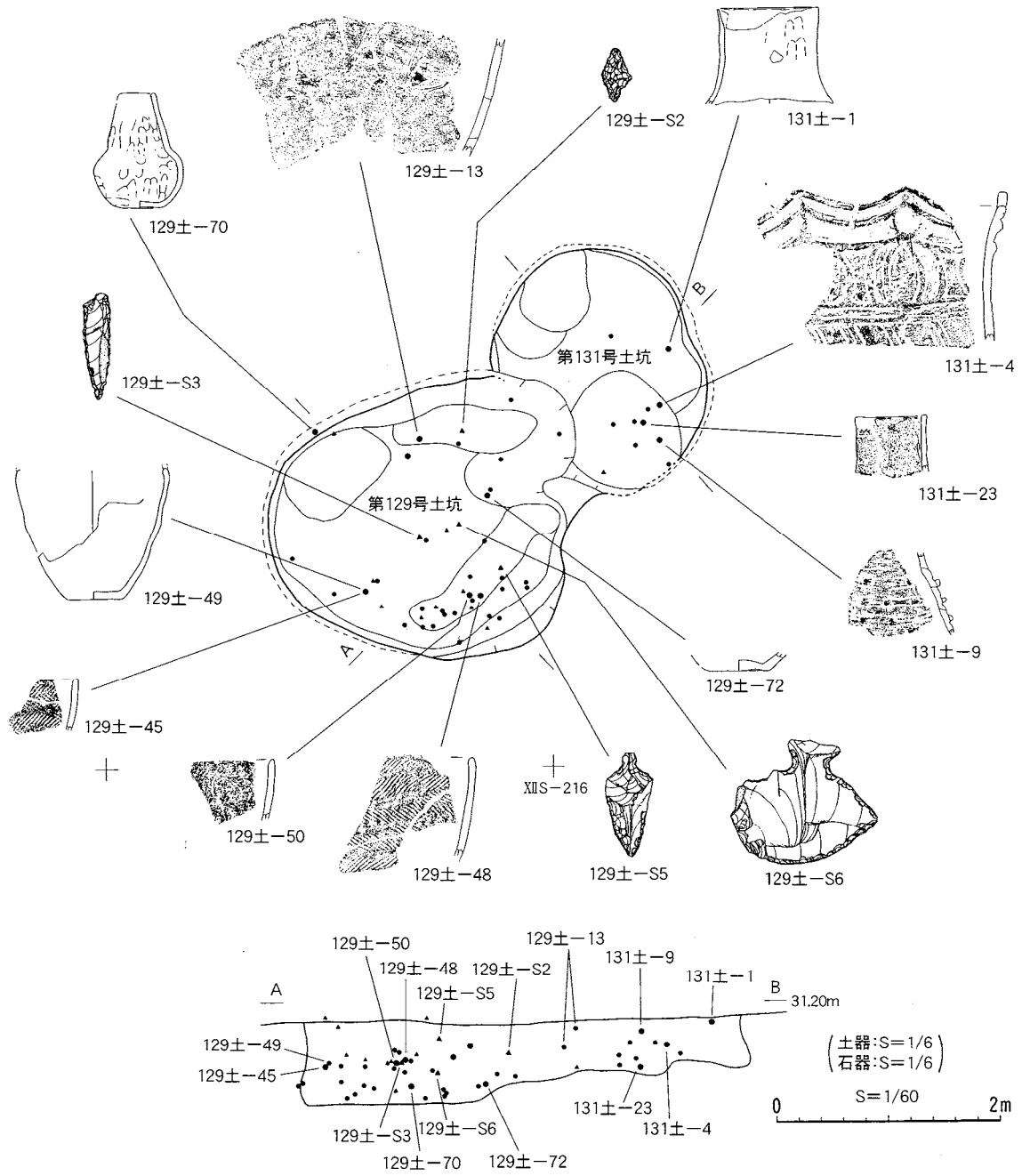


図30 第141・127・129・131号土坑



第129・131号土坑遺物 出土位置図

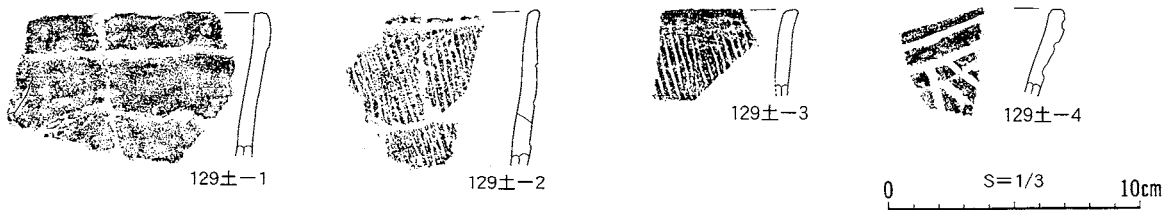


图31 第129・131号土坑

文が施される。口唇部の肥厚が特徴的で、他の土器よりもやや古手の特徴を示している。この土坑でも口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）するものが見られる（43・46・47・48・54）。

47・48は同一個体で、異原体羽状縄文が付される。口縁部に内面刻目の突起が付され、その正面にφ10mm程の瘤が突出する。49は無文の小型深鉢である。ミガキ調整がなされた器表面が摩滅し、砂粒の混和が多いことが分かる。口縁部は一部のみ残存しているが、波状口縁の可能性もある。52は無文の鉢の袖珍土器である。丸底に近い平底である。砂粒も多く器表面にみられ、丁寧なつくりとは言えない。53は瘤状突起を有する鉢である。55・57は深鉢の台部であろうか。57は小型壺の上底気味の底部である。

4層出土の60は、縄文帯の中にφ1.5mm程の刺突列が上下2段に施されている。62～73は4層出土の縄文時代後期後葉の土器である。65～67は同一個体で、LR縄文が施される深鉢である。口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）するが、内面側は稜を有さない。68はスリット状沈線を有する縄文帯で文様が構成される。69は細い横走縄文帯と瘤の組み合わせで、メガネ状沈線的なモチーフが構成される壺の口頸部である。胎土・焼成から見て、第131号土坑出土の131土-9と同一個体である可能性が高い。瘤の数の多さや縄文帯の細さから、十腰内V群以降に位置付けられよう。70はほぼ完形の小型無文壺で、西側の壁の底面近くから出土しており、その性格として副葬用も可能性にあげられよう。やや上底気味で、縦方向の指ナデの跡が明確に残る。砂粒の混和が多く見られる。

他に出土層位不明遺物として、無文の注口部が2点出土している（80・81）。80は根元下面にφ8mm程の瘤が付される。

石器も非常に多く出土している。石鏃2点、石錐2点、石匙2点、二次加工ある剥片1点、使用痕ある剥片10点、フレイク73点、チップ111点が出土している。

S1は有茎凸基の石鏃で、両側縁は直線的である。S2も有茎凸基の石鏃で、側面側を一部欠損する。S3は縦長剥片を用いた片面の縁辺のみ調整が施される石錐である。先端部のみ両面に剥離が見られるが、使用による剥離であるのか意図的な調整なのか不明である。

S4は両面調整の石錐である。先端部は使用による摩滅が認められる。S5は縦長剥片を用いた、縦長の石匙である。つまみ部分のみ両面から調整が加えられるが、刃部は片面の縁辺のみ調整が加えられる。S6は縦長剥片を用いた、横長の石匙である。主要剥離面の打面側をつまみ部に加工するのではなく、刃部の側片にくるように素材を用いている。これは明らかに意図的であり、最も厚い部分が刃部側にくることが、都合の良い使用方法であったと考えられる。つまみ部のみ両面からの調整であり、刃部は片面の縁辺のみ二次調整が施される。S7は不規則な剥片剥離が行われた石核か、偽石器であると考えられる。S8は、113土-S3と同一であり、第113号土坑において説明している。スクリーントーンをかけたところが第113号出土部分で、ほとんどの部分が当土坑出土である。表面が被熱しており、欠損している。

〔小結〕縄文時代後期前葉の遺物も多く出土しているが、底面付近に縄文時代後期後葉の遺物が多い為、後期後葉以前に廃絶された土坑と考える。後期前葉の遺物が多いのは、後期前葉の遺物を多く包含する、第131号土坑と重複していることも一因と考えられる。

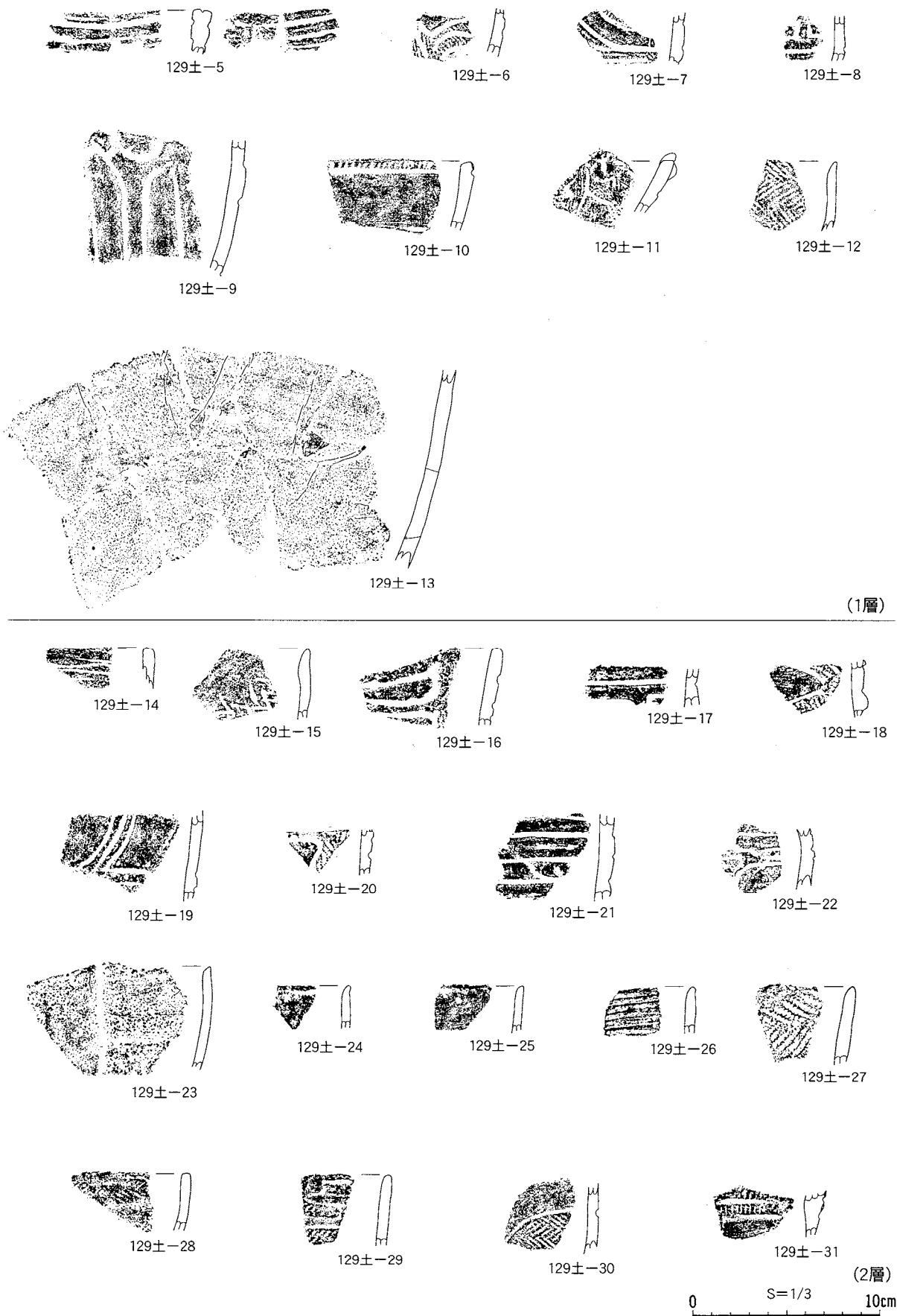


图32 第129号土坑 出土遺物 (2)



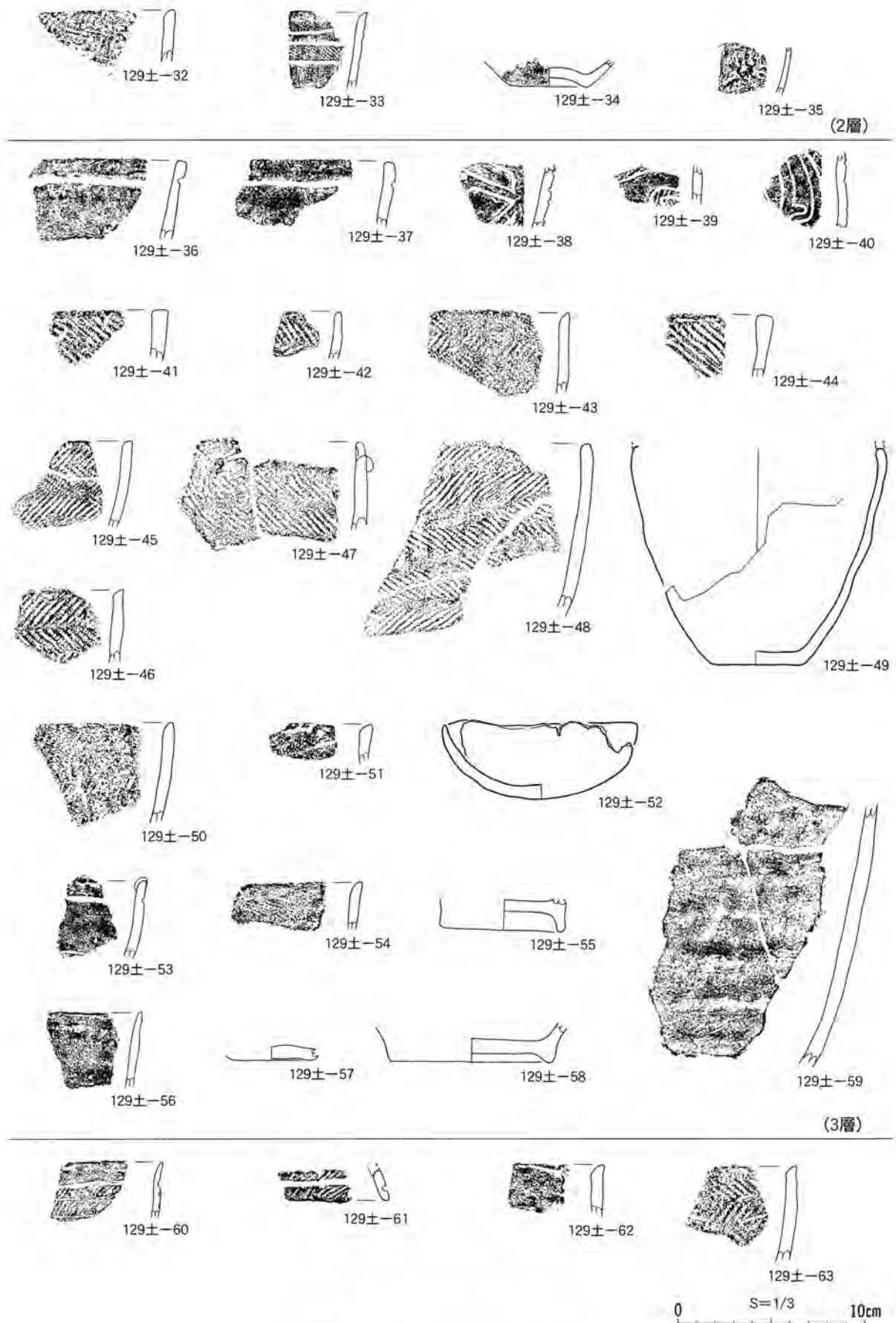
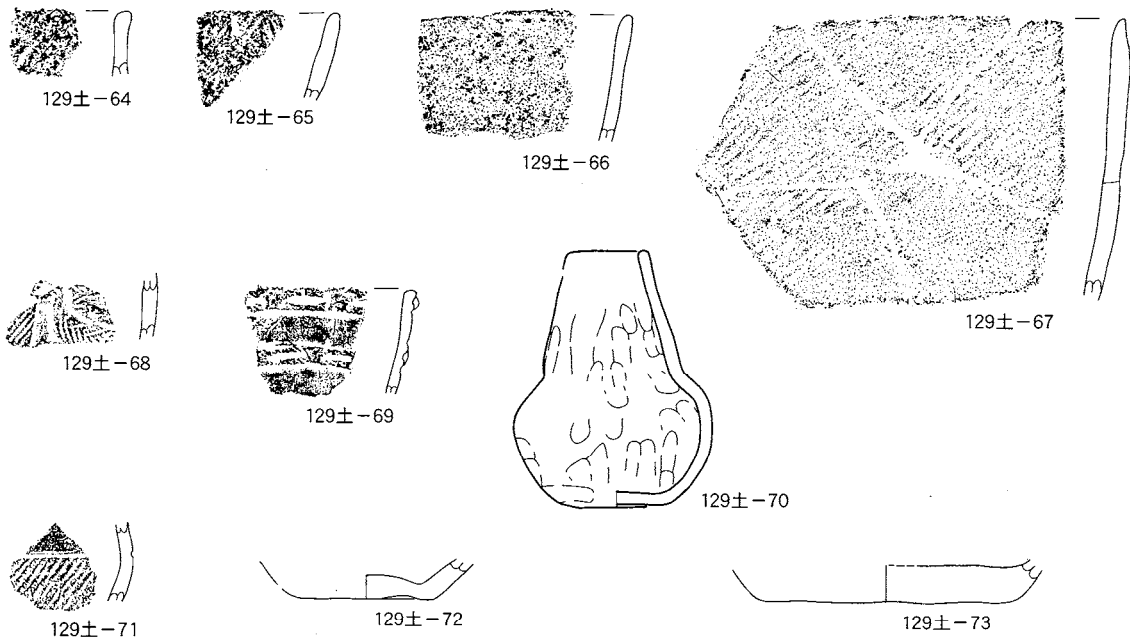
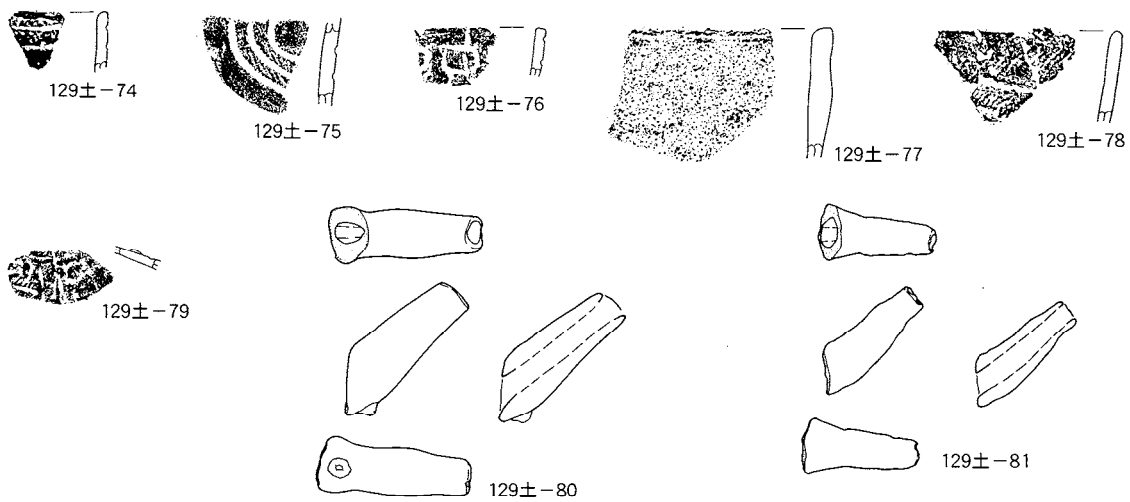


図33 第129号土坑 出土遺物(3)

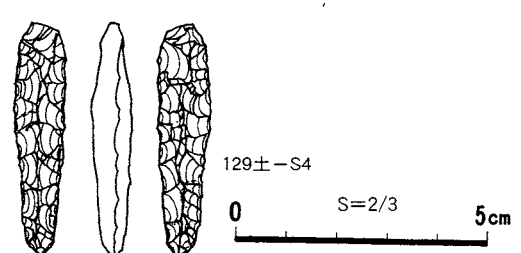
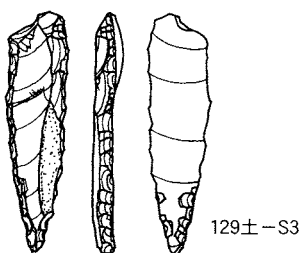
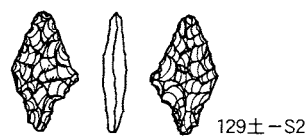
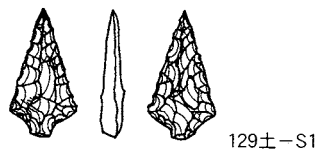


(4層)



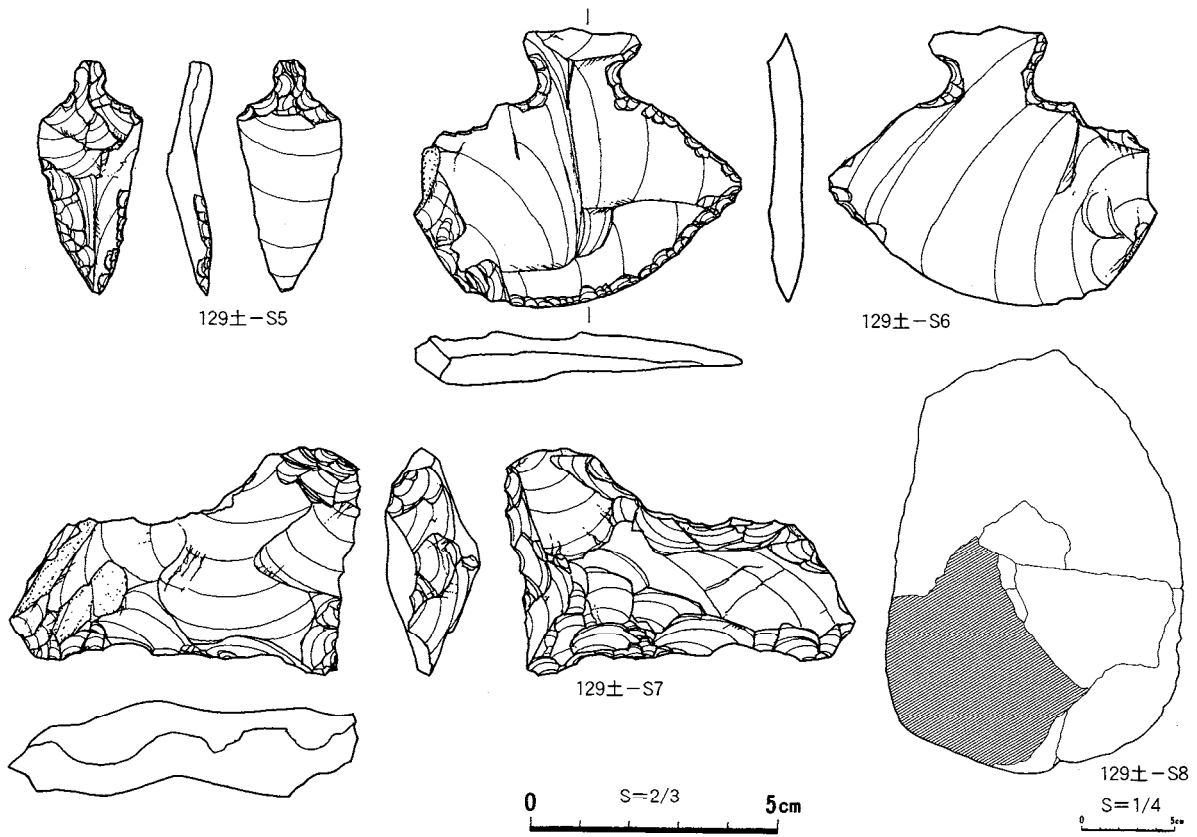
(5層・層位不明)

0 S=1/3 10cm

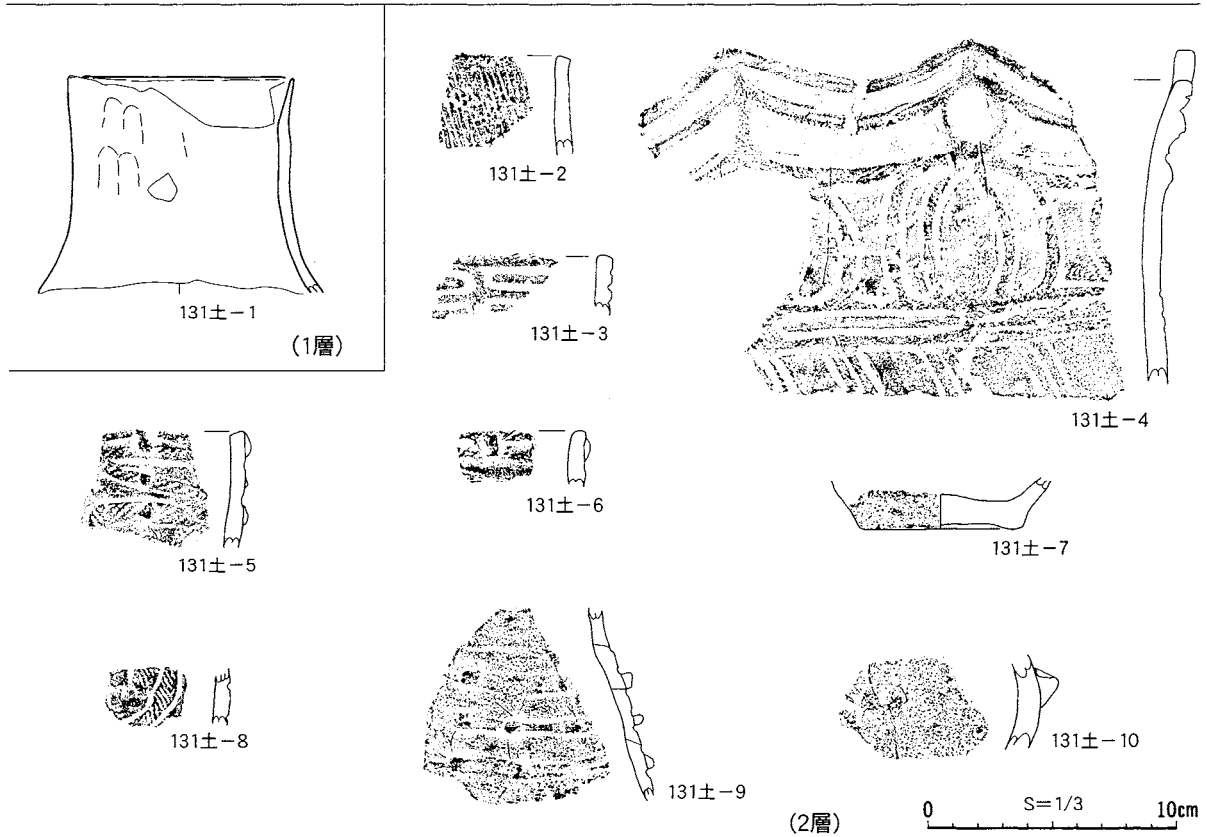


0 S=2/3 5cm

图34 第129号土坑 出土遺物(4)



第129号土坑出土遺物



第131号土坑出土遺物

図35 第129・131号土坑 出土遺物

### 第131号土坑（図30・31・35・36）

〔位置・確認〕 主にXⅡS-215グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で黒色の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 第129号土坑と重複する。平面プラン検出時には不明であったが、出土遺物の帰属時期から、第129号土坑よりも、本遺構の方が古いと判断した。

〔平面形・規模〕 第129号土坑同様ややフラスコ形の断面と考えられる。本土坑の開口部南東部分はやや掘り過ぎと考えられるために、規模は推定となる。開口部推定長軸2m72cm・開口部推定短軸2m36cm、底部推定長軸2m86cm・底部推定短軸2m52cm、深さは60～76cmである。

〔断面・底面〕 断面はややフラスコ形を呈し、立ちあがる。底面両側に深い部分が見られ、中央部が相対的に高くなる。

〔堆積土〕 5層に分層したが、更に細分された。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は3.541kgで、掲載遺物は0.85kgである。1は無文の壺の口頸部で、縄文時代後期後葉のものと考えられる。

2～4は、2層出土の縄文時代後期前葉の土器である。2・3は燃糸文・楕円文が施される平坦口縁の深鉢である。

5～10は2層出土の後期後葉の土器である。5・6は縄文帯による入組み文が施される深鉢で、口縁部に縦10mmの縦長瘤が付される。9は平行沈線間の隆帯部にφ7mm程の瘤が多数付される壺の頸肩部で、胎土・焼成から見て、第129号土坑出土の129土-69と同一個体の可能性が高い。10は上面刻み瘤が付される壺・注口である。4は楕円文が施される波状口縁の深鉢である。当遺跡の該期の遺物の中では、最も文様構成が明らかにできる例である。5層出土の25も同一個体と考えられる。

11・12は3層出土の後期前葉の土器である。11は、4層出土の20・21、5層出土の26・27と同一個体であり、楕円文や渦巻状文が施される、つくりの丁寧な鉢である。

12は格子目状の沈線が、縄文の上から施される。

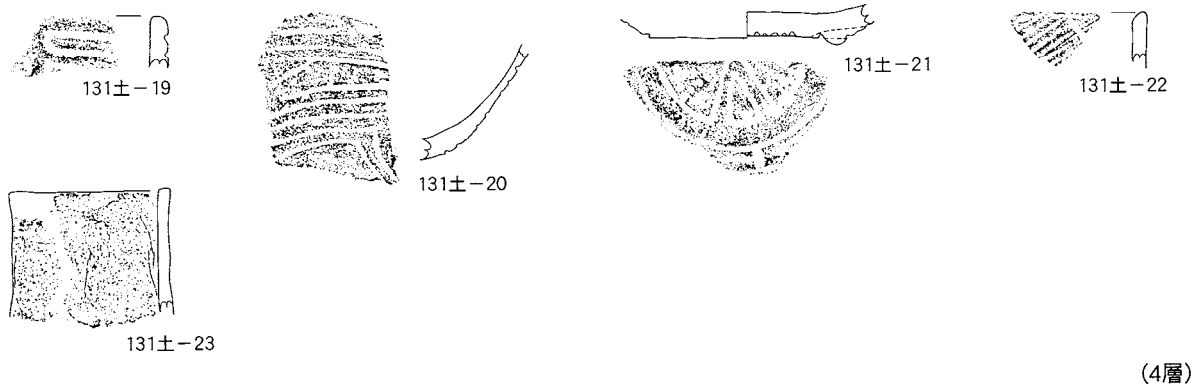
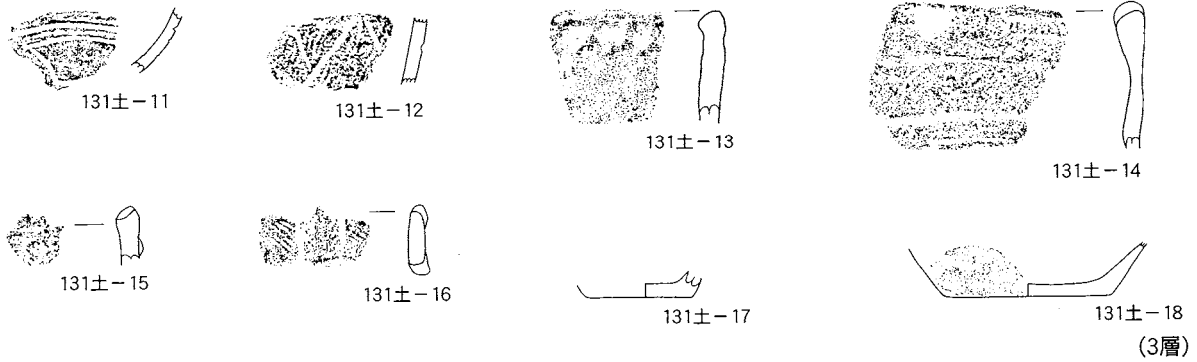
13～16は後期後葉の遺物で、13・14は口唇部が内傾し肥厚する深鉢である。16は透かしを有する香炉の一部であると考えられる。

19～21は4層出土の縄文時代後期前葉の土器である。19は3と同一個体である。20・21は3層出土の11、5層出土の26・27と同一個体の丁寧なつくりの鉢である。21は底部であり、V字形の沈線文の間にφ3mm程の刺突列が施され、底部の高台部分に穿孔が見られる。23は無文の細首の壺である。後期前葉の土器に胎土は似ている。

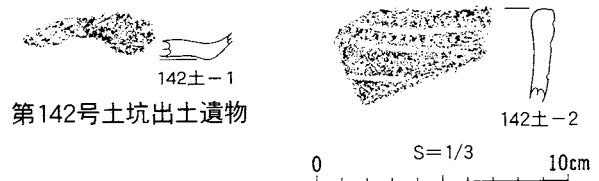
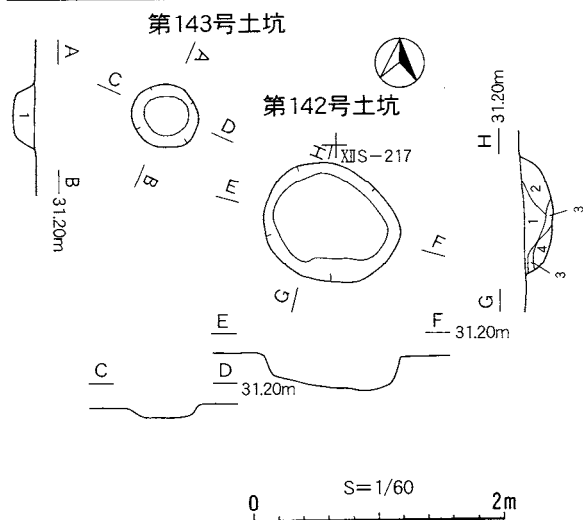
5層出土の24は頸部で屈曲する無文の深鉢である。口縁部外面の面取りが特徴的である。25は4と同一、26・27は20・21と同一個体である。

石器も多数出土しており、使用痕ある剥片5点、フレイク52点、チップ63点である。

〔小結〕 当土坑は、出土遺物からみて縄文時代後期前葉以前に廃絶されたものと考えられる。縄文時代後期後葉の遺物を多く包含する、第129号土坑と重複する為、後期後葉の遺物も見られる。

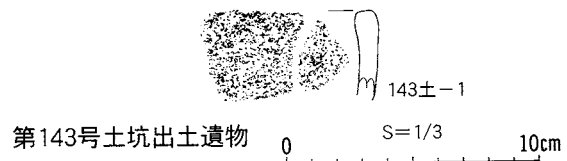


第131号土坑出土遺物



第142号土坑

第1層	黒褐色土	10YR2/3	□-M粒少量	しまりあり	シルト
第2層	黒褐色土	10YR2/3	□-M粒微量	しまりあり	シルト
第3層	黒褐色土	10YR2/3	□-M粒多量	しまりあり	シルト
第4層	黒褐色土	10YR2/3	□-M粒微量	しまりあり	シルト



第143号土坑

第1層	暗褐色土	10YR3/2	黒褐色ブロウを多量に含む	しまりあり	シルト
-----	------	---------	--------------	-------	-----

第143号・143号土坑

図36 第131・142・143号土坑

#### 第142号土坑（図36）

〔位置・確認〕 XⅡR-216・217グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。第143号土坑が北西側に近接する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m10cm×短軸90cm、底部長軸92cm×短軸72cm、深さ26cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は西側から東側へ向って斜めに緩く傾斜している。

〔堆積土〕 黒褐色の土を主体とし、混入する黄褐色ロームの量で、4層に分層した。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は0.246kgである。1は上底気味の底部片である。2は口縁部に2条の刻目隆帯が施される縄文時代後期後葉の深鉢である。

石器は、使用痕ある剥片2点、フレイク1点、チップ1点が出土した。

〔小結〕 遺物数は少ないが、2は縄文時代後期の十腰内Ⅳ群期と考えられる。土坑の帰属時期はそれ以前であろうか。

#### 第143号土坑（図36）

〔位置・確認〕 XⅡS-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、暗褐色土の楕円形プランとして確認した。第143号土坑が南東側に近接する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 直径54cmのほぼ円形を呈する。深さ16cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕 暗褐色の単一のシルト層である。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は0.036kgで、掲載遺物は0.018kgである。1は口唇部が肥厚する深鉢で、縄文時代後期後葉と考えられる。

石器は、チップが1点のみ出土した。

〔小結〕 出土した土器は、縄文時代後期後葉のものであるが、土坑の廃絶時期との関係は不明である。

（永嶋 豊）

### 第3節 ピット群・ピット

#### 第101号ピット群 (図37)

〔位置・確認〕 XⅢF-195、XⅢE・F・G-196、XⅢF-197グリッドに位置し、10基のピットが環状に連なって確認された。

〔平面形・規模〕 ピットの広がる範囲は北東5m10cm、南西4m90cmほどで、環状に配置されている。北側は6基のピットが東西に長い長方形状に配置されている。ピットの平面形は円形、楕円形、

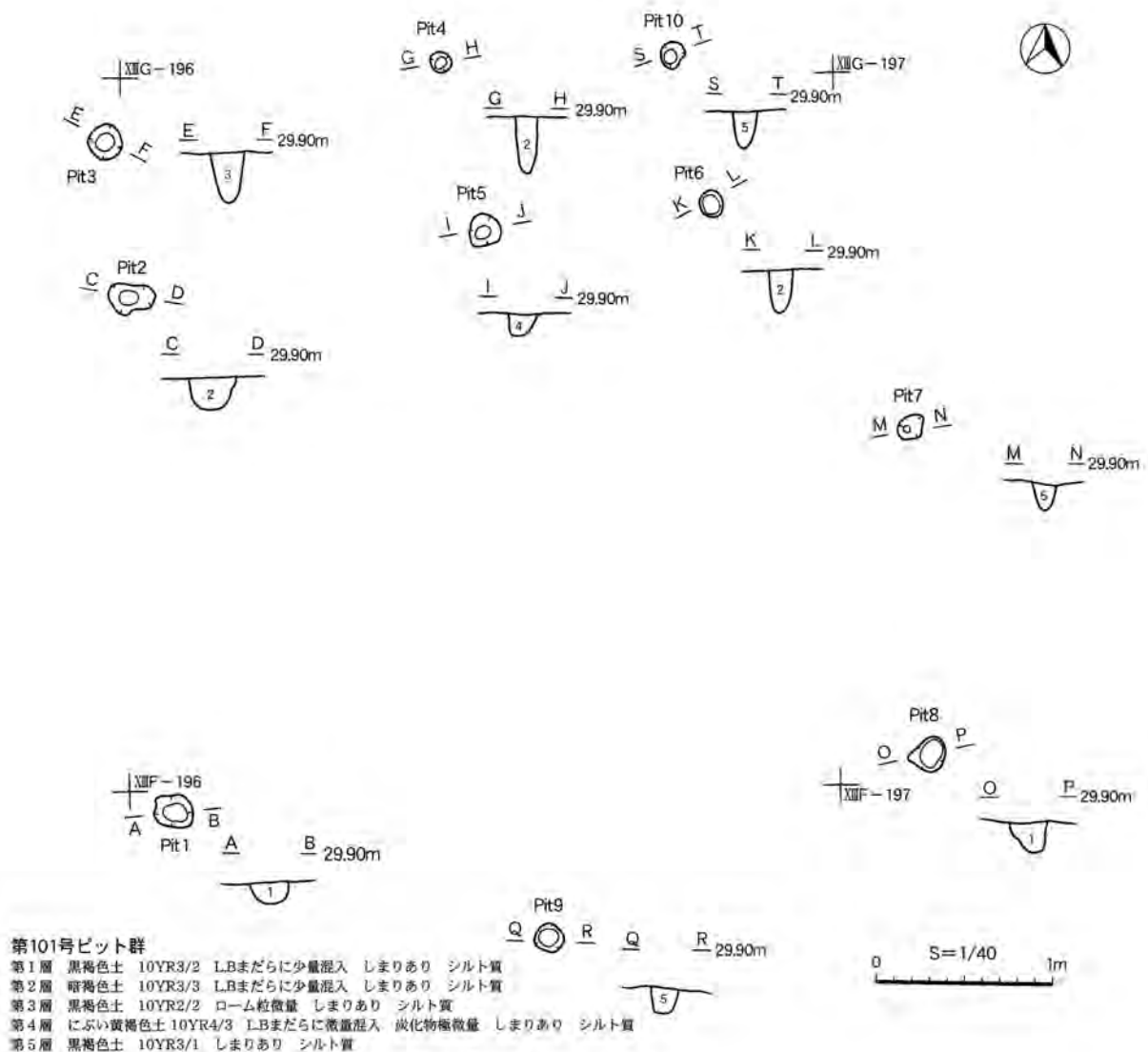


図37 第101号ピット群



不整楕円形などである。開口部は径12～27cmで、平均18cmほど、深さは12～32cmで、平均20cmほどである。柱痕は確認できなかった。

[堆積土] 単一層であり、黒褐色土を主体とした土が堆積している。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期・用途とも不明である。

#### 第101号ピット (図38)

[位置・確認] XⅡT-194グリッドに位置する。暗褐色土の不整楕円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はいびつな長楕円形で、開口部長軸47cm×短軸28cm、底部長軸26cm×短軸18cm、深さ42cmである。

[断面・底面] 断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層し、上位に暗褐色土、中位に褐色土、下位に黒褐色土主体の覆土が堆積している。

[出土遺物] 確認面及び1層から土器が少量出土したが、摩滅しているため時期は不明である。無文・縄文・羽状縄文の土器がみられる。

[時期] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

### 第4節 性格不明遺構

#### 第104号性格不明遺構 (図8)

[位置・確認] XⅡT・XⅢA-194グリッドに位置する。第101号土坑とともに黒褐色土の不整楕円形プランとして確認した。

[重複] 第101号土坑と重複し、本遺構が切られている。

[平面形・規模] 平面形はいびつな長楕円形で、開口部の推定長軸1m56cm×短軸49cm、底部の推定長軸1m27cm×短軸30cm、深さ19cmである。

[断面・底面] 断面は底面からやや開くように立ち上がり、底面は南側が一段低くなっている。

[堆積土] 4層に分層した。暗褐色土主体の覆土で、上位と北側壁際に黒褐色土が堆積している。

[出土遺物] 確認面及び4層から土器が少量出土した。

[時期] 第101号土坑に切られていることから、縄文時代中期末葉以前の遺構と思われるが、詳細な時期は不明である。

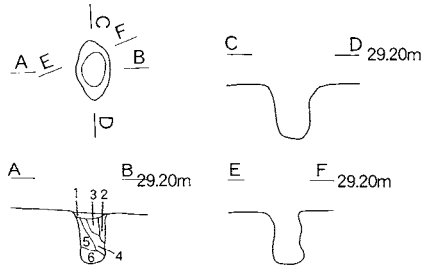
(工藤 由美子)

#### 第101号性格不明遺構 (図38)

[位置・確認] XⅢE-197グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に黒褐色土の長方形プランとして確認した。長軸方向がほぼ南北方向に一致する。

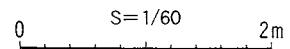
[重複] 東側の一部に、攪乱の跡が見られる。

第101号ピット XIII A-195

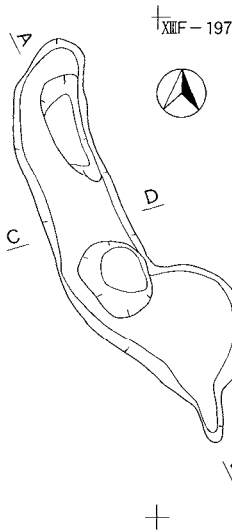


第101号ピット

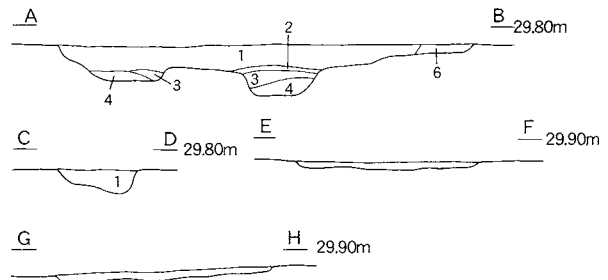
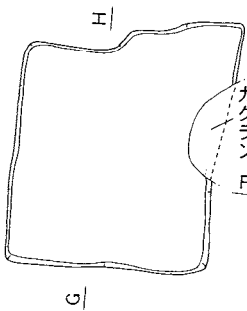
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒微量 炭化物極微量 しまりあり シルト質
- 第2層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒極微量 しまりあり 粘性ややあり 粘土質シルト
- 第3層 褐灰色土 10YR4/1 しまりややあり 粘性ややあり 粘土質シルト
- 第4層 灰黄褐色土 10YR4/2 炭化物極微量 しまりなし 砂質シルト
- 第5層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒少量 炭化物極微量 しまりあり シルト質
- 第6層 黒褐色土 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 粘土質シルト



第108号性格不明遺構 XIII F-197



第101号性格不明遺構



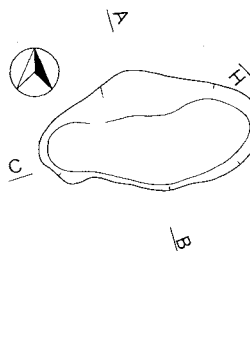
第101号性格不明遺構

- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 φローム粒極微量 しまりあり シルト

第108号性格不明遺構

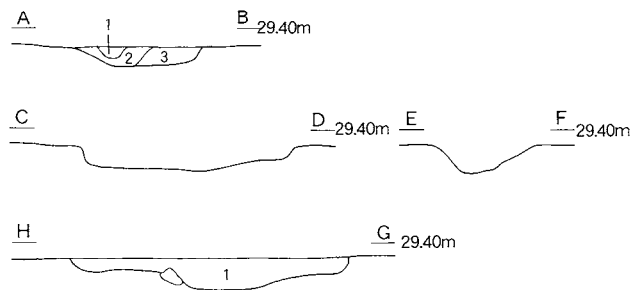
- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 φ5mm以下のローム粒・炭化物極微量 帯状に鉄・マンガン堆積 しまりあり シルト
- 第2層 褐色土 10YR4/4 φ1mm程度のローム粒中量 φ2mm程度の炭化物微量
- 第3層 黒褐色土 10YR3/1 φ2mm程度のローム粒微量 φ3mm程度の炭化物極微量 しまりあり シルト
- 第4層 にぶい黄褐色土 10YR4/3 φ1mm程度のローム粒少量 φ2mm程度の炭化物極微量 鉄分少量 しまりあり シルト
- 第5層 黒色土 10YR2/1 φ1mm程度のローム粒極微量 しまりややあり シルト
- 第6層 暗褐色土 10YR3/3 φ1mm程度のローム粒少量 φ1mm程度の炭化物極微量 φ2mm程度の鉄分極微量 しまりあり シルト

第107号性格不明遺構



第106号性格不明遺構

XIII D-196から南へ  
1mの杭



第106号性格不明遺構

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量 φ15mm以下の炭化物微量 しまりあり シルト

第107号性格不明遺構

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 φ1mm以下のローム粒多量 しまりかなりあり シルト
- 第2層 褐色土 7.5YR4/4 φ5mm以下のローム粒多量 しまりあり シルト
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 φ1mm以下のローム粒多量 しまりあり シルト

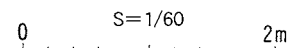


図38 第101号ピット、第101・106・107・108号性格不明遺構

[平面形・規模] 攪乱や掘り過ぎによって、北東部が広がっているが、本来は南北1 m76cm、東西1 m60cm程の長方形の竪穴状の遺構であったと考えられる。確認面から底面までは非常に浅く、壁は5～6 cmしか残っていない。

[断面・底面] 底面はやや凹凸があるが、概ね平坦である。

[堆積土] 黒褐色土の1層のみ確認した。

[出土遺物] なし。

[小結] 平面プランの明瞭さや黒味が強い覆土であることから、中近世以降の遺構と考えられる。

#### 第108号性格不明遺構 (図38)

[位置・確認] XⅢE-196・197グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に、南北方向に細長い黒褐色土の長方形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 細長い形を呈し、長軸3 m32cm、短軸64cm程、深さ16～40cmである。

[断面・底面] 長軸方向では浅い部分と深い部分が交互に見られる。短軸方向では東側にむかって傾斜する傾向がある。

[堆積土] 6層に分層し、黒褐色土を中心とした土層で構成されている。

[出土遺物] なし。

[小結] 当遺跡に近い山下遺跡で多く検出されたカマド状遺構と平面形態は類似するが、断面形態は底面に高低部分があり異なる。平面プランの明瞭さや黒味が強い覆土から考えて、中近世以降と考えたい。

#### 第106号・第107号性格不明遺構

##### 第106号性格不明遺構 (図38)

[位置・確認] XⅢC-195・196グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に暗褐色土の細長いプランとして確認した。

[重複] 西側に、第107号性格不明遺構が隣接する。

[平面形・規模] 北西側が広く、南東側が狭くなる細長い形態である。長軸2 m26cm、東西32～78cm程、深さ10～26cmである。

[断面・底面] 北西側が深く、南東側が浅くなる。

[堆積土] 暗褐色土の1層のみ確認した。

[出土遺物] なし。

[小結] 不明である。

##### 第107号性格不明遺構 (図38)

[位置・確認] XⅢC-195グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に暗褐色土の細長い楕円形プランとして確認した。主軸方向はほぼ東西方向と一致する。

[重複] 東側に、第106号性格不明遺構が隣接する。

[平面形・規模] 東西方向に細長い楕円形を呈する。開口部長軸1 m72cm・短軸80～1m程度、深さ20cmである。中心付近でやや広くなる。

[断面・底面] 底面からやや開くか、直立気味に立ちあがる。底面はほぼ平坦であるが、東側でやや傾斜を有する。

[堆積土] 3層に分層し、黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] なし。

[小結] 不明である。

(永嶋 豊)

## 第5節 旧河川跡の遺物

遺跡の調査区北西側に、埋没した縄文時代の旧河川跡を検出した（図39）。旧河川は遺跡内を北東側から南西側へ流れていたものと思われる。調査区においては、北東側と北側から南側に向かって流れ込んだ2つの河川が合流し、そこから大きく西側へと蛇行している。調査の結果、旧河川跡としてくくった範囲の中で、北東側は礫層になり、また南西側は無遺物層の黒色土が厚く堆積しているため、遺物包含層として残っている部分は今年度の調査部分のみであると考えられる。

旧河川跡の基本層序は、第1層から第18層までに区分された（但し第15～17層は欠番・図39）。注記は以下の通りである。

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒（径5mm以下）微量	炭化物（径3mm以下）微量	焼土粒（径3mm以下）極微量	しまりあり	シルト質
第2層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒（径1mm以下）微量	炭化物（径2～3mm以下）微量	焼土粒（径1mm以下）極微量	しまりあり	シルト質
第3層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒（径4mm以下）極微量			しまりややあり	シルト質
第4層	黒色土	10YR1.7/1	焼土粒（径1mm以下）極微量			しまりややあり	シルト質
第5層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒（径5mm以下）極微量	焼土粒（径1mm以下）極微量		しまりあり	シルト質
第6層	黒色土	10YR2/1				しまりあり	シルト質
第7層	黒色土	10YR2/1	ローム粒（径5mm以下）極微量	焼土粒（径1mm以下）極微量		しまりあり	シルト質
第8層	黒色土	10YR1.7/1				しまりあり	シルト質
第9層	黒色土	10YR2/1	ローム粒（径4mm以下）微量	炭化物（径1mm以下）極微量	焼土粒（径1mm以下）極微量	しまりあり	シルト質
第10層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒（径6mm以下）極微量			しまりややあり	粘土質シルト
第11層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒（径1mm以下）極微量			しまりややあり	粘土質シルト
第12層	黒褐色土	10YR3/2	火山灰層	上位に白頭山火山灰、下位に十和田A火山灰堆積		しまりあり	シルト質粘土
第13層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	砂層	礫（径10mm以下）少量		しまりなし	砂
第14層	黒褐色土	10YR3/1	混礫砂層	礫（径10mm以下）多量		しまりなし	砂
第18層	黒色土	10YR2/1	にぶい黄褐色土（10YR5/4）	まだらに中量混入			礫（径15mm以下）微量 しまりややあり 砂質シルト

旧河川跡から多量の遺物が出土した。平箱にして約140箱分で、総重量は約1,030kgである。特に遺物が集中していた地区は、XⅢC-201～203グリッド付近（第103号遺物集中区）、XⅢB-195グリッド付近（第101号遺物集中区）、XⅢB-202～205グリッド付近である。XⅢB-202～205グリッド付近は、北東から流れてきた旧河川が西側へと急にカーブする地点で、水の流れが緩やかに

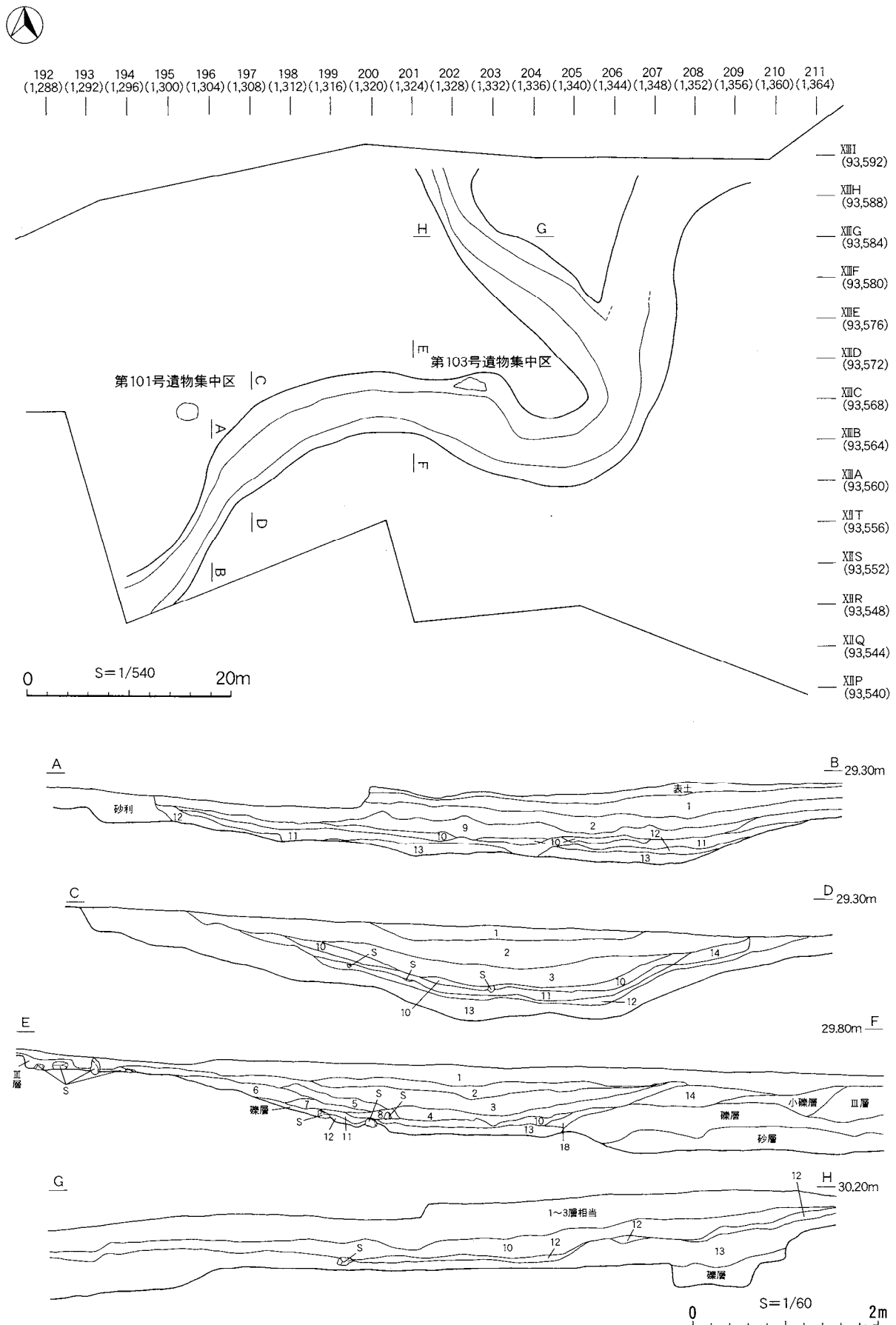


図39 旧河川跡及び基本層序

なり、遺物が堆積したものと思われる。

遺物は、縄文時代中期前葉から弥生時代前期のものまで出土しているが、主体は縄文時代後期後葉の遺物である。グリッド199ラインの東側から縄文時代中期～後期の土器、西側から縄文時代晩期から弥生時代の土器が出土している。第103号遺物集中区とXⅢB-202～205グリッド付近では縄文時代後期後葉の土器、第101号遺物集中区では晩期後葉の土器がまとめて出土している。また、XⅢA-203、XⅢE-203グリッド付近からは焼土が検出されたが、原位置のものではなく、投棄か廃棄されたものと思われる。

ここでは、1. 第103号遺物集中区の遺物、2. 縄文時代中期から後期にかけての遺物（旧河川跡東側の土器・石器）、3. 第101号遺物集中区の遺物、4. 縄文時代晩期の土器（旧河川跡西側の土器）の順に遺物について述べる。

今回報告する土器は、以下のとおり第Ⅰ群から第Ⅶ群土器に大別した。

- 第Ⅰ群土器 縄文時代中期前葉～後葉の土器
- 第Ⅱ群土器 縄文時代中期末葉の土器
- 第Ⅲ群土器 縄文時代後期初頭～前葉の土器
- 第Ⅳ群土器 縄文時代後期中葉の土器
- 第Ⅴ群土器 縄文時代後期後葉の土器
- 第Ⅵ群土器 縄文時代後期とみられるが型式不明の土器
- 第Ⅶ群土器 縄文時代晩期後葉の土器

## 1 第103号遺物集中区の遺物

旧河川跡の河川が、北側と北東側から流れ込んで合流し、西側へ向かって大きくカーブする場所の北岸に位置している。

### 土器

土器がXⅢC-201～203グリッドの4m×12mの範囲から集中して出土した。標高29.1～29.5mで何層にもわたって出土しているが、特に標高29.3～29.4mからの出土が多い。

土器は平箱で約16箱分出土した。土器の総重量は、約141.27kgである。土器は小片が多く、完形もしくは完形に近いものは1点もない。図示した土器は180点で、平箱にして約2箱分である。

出土した土器は、縄文時代中期の円筒上層式期から縄文時代後期後葉までのものである。縄文時代中期・後期前葉～中葉の土器は少数で、後期後葉の土器が全体の86%を占めている。後期後葉の次に多いのは後期前葉の土器であるが、全体の6%にも満たない。

器種としては、深鉢・鉢・壺・注口の4種類が出土している。そのうち、深鉢が全体の65%を占めている。

文様は、無文、羽状縄文・縄文・条痕文・条線文などの地文のみのも、沈線文+縄文・沈線文+縄文+貼瘤・縄文帯+貼瘤・沈線文+爪形刺突文・縄文+貼瘤・縄文帯・沈線文+羽状縄文・縄文+沈線文+爪形刺突文などの文様をもつものがみられる。無文・地文のみを施文しているものが主体で、全体の約80%を占めている。なかでも、無文が全体の約50%と抜きん出て多く、羽状縄文も全体の

約25%となっている。

炭化物・ススの付着は、無文・地文のみ施したものにみられ、全体の15%を占めている。

図示しなかった土器は平箱13箱分で、そのほとんどが小破片である。土器の口縁のみをピックアップすると479個、5.16kgとなる。口縁部文様の種類としては無文が圧倒的に多く、次いで羽状縄文、縄文のみとなっている。口縁部に炭化物またはススが付着しているものは13個のみである。

ここでは土器の出土状況を、①標高29.4m地点（図40）、②標高29.3m地点（図43.44）、③その他（図47）、に分けて図示し、それぞれから出土した土器をその後ろに続けて掲載した。③の土器のあとには、出土状況図には掲載していない遺物を載せた。①図40では、図の上半分が無文土器・下半分が有文土器の出土状況となっている。②は範囲が広いため、さらに2ヶ所に分けた。図43は左側が無文土器・右側が有文土器の分布状況、図44は上半分が無文土器・下半分が有文土器の分布状況である。③図47は遺物量がそれほど多くないため、無文・有文土器とも一括して掲載した。

①～③の出土状況を見ると、標高差による出土遺物の傾向には特に違いは見られないため、①～③の土器を一括して観察することとする。

#### 第Ⅰ群土器 縄文時代中期前葉～後葉の土器（図47、48-107）

1点のみの出土である。胴部から底部につながる部分で、胴部に多軸絡条体が施文されている。

#### 第Ⅱ群土器 縄文時代中期末葉の土器（図40、図41-1、43、45-55）

2点出土した。ともに深鉢の破片である。1・55とも地文RL縄文に沈線が施文されている。1には外面にススが付着している。

#### 第Ⅲ群土器 縄文時代後期初頭～前葉の土器（図40、41-2、43・44、45-56～59、47、48-108・109、49-139～142）

数点出土した。2・56～59・108・109・141は深鉢で、139・140は鉢か壺、142は壺の破片である。すべてに沈線が施文され、なかには縄文（56・108）や隆帯（139・140）、櫛歯状文（109）があわせて施文・貼付されているものもみられる。

#### 第Ⅳ群土器 縄文時代後期中葉の土器（図40、41-3、43、45-60、47、48-110、49-143・144・146）

数点出土した。3・60・110は深鉢、143は鉢、144・146は広口壺か鉢の破片である。文様は沈線間に縦位の刻み目が入るもの（3・60・144・146）、棒状工具による縦位圧痕が口縁部に施文されるもの（110）、縄文帯を構成しているもの（143）がある。

#### 第Ⅴ群土器 縄文時代後期後葉の土器（図40・43・44・47、41-4～43-48、43-50～54、45-61～46-95、46-97～47-105、48-111～49-138・145・147～156、50-158～163・165～181）

第103号遺物集中区で最も多量に出土した土器群である。掲載した土器片数は156点である。ここでは、器種別にみていく。出土している器種は深鉢・鉢・壺・注口であるが、破片資料のため、深鉢



か壺か、または壺か注口か判別できないものもある。

A. 深鉢 (図40・43・44・47、41-4~43-45・50、45-61~46-100、47-105、48-111~49-134・137・145・147~156、50-158~173)

全体の約85%を占めている。文様は、無文・羽状縄文・条痕文・条線文・LR斜行縄文・RL斜行縄文・沈線文+縄文+貼瘤・沈線文+縄文・沈線文+爪形刺突文・縄文帯+貼瘤・縄文+貼瘤・縄文帯のみ等がみられる。第103号遺物集中区の主体となる土器のため、前述したように無文・羽状縄文が多く、地文のみを施した土器が多数を占める。なかでも無文は47%と全体の約半数を占める。羽状縄文は28%である。地文のみを施したものは87%にのぼる。炭化物・ススが付着した土器は18%である。

①無文・地文のみを施文したもの

- a. 無文・・・深鉢全体の47%と約半数を占める。炭化物・ススが付着した土器は15%ほどである。
- b. 羽状縄文・・・全体の28%である。炭化物・ススが付着したものは25%ほどである。
- c. 斜行縄文・・・全体の7%ほどで、それほど多くはない。LR・RL縄文が施文されている。
- d. 条痕文・・・5%程度である。44には補修孔がみられる。
- e. 条線文・・・1点のみの出土である (130)。

②文様を施文しているもの

沈線・縄文・貼瘤・縄文帯等が施文されている。43・100・134・173には沈線と沈線間に爪形刺突文が施文されている。134・173は同一個体と思われる。また、137は口縁に貼付された突起部分であるが、動物の頭部を表したものである。内面は丹念に磨かれ、動物の首と思われる部分には粘土紐が2本貼付されている。動物の首の外面には粘土を貼付しており、瘤の形状であるが、不明である。この動物は、おそらくクマを表現したものではないかと思われる。外面にはLR縄文が施されている。これと同一個体の突起部が旧河川跡から1点出土している (図63-452)。

B. 鉢 (図40・43・44・47、43-46・47・51、46-101、49-135、50-175・176)

図示したのは7点で、うち6点は無文である。101は口縁部に縄文を施文し、無文部には丁寧なミガキが施されている。

C. 壺 (図40・43・44・47、43-52・53、46-102、49-138、50-177・178)

図示したのは6点で、2点は無文である。52は沈線文とLR・RL縄文が施された後にナデ消しされているため、文様が明確でない。53は、口縁部に沿口沈線・沈線間にLR縄文が施文されている。102は、沿口沈線・平行沈線が施文され、口唇部と沿口沈線間・肩から胸部にかけての部分にLR縄文が施されている。138は有孔把手状突起部で、突起中央に横位貫通孔がある。平行沈線とLR・RL縄文が施されている。

D. 壺か深鉢 (図49-136、50-179)

図示したのは2点で、136は無文の口縁部破片である。179は波状口縁波状部で、波頂部に小突起・外面に瘤が貼付され、口縁に沿ってLR縄文が施文されている。

## E. 壺か注口 (図40・44、43-48・54、46-103・104、50-180)

図示したのは5点で、すべて小破片のため壺か注口か判別ができなかった。無文は1点(48)である。54は沈線とLR縄文が施され、無文部にはミガキが施されている。103には縄文帯(羽状縄文)が施文され、無文部には丁寧なミガキが施されている。104には沈線と羽状縄文・LR・RL縄文が施されている。180には沈線と羽状縄文が施文され、無文部は丁寧に磨かれている。

## F. 注口 (図50-181)

明らかに注口とわかるものは1点のみである。181は注口部分で、縄文帯(LR)と貼瘤が施文されている。

## 第VI群土器 縄文時代後期とみられるが型式不明の土器 (図40・44、43-49、46-96、49-157、50-164)

図示したのは4点で、49・157・164は底部である。49・157は無文、164はLR縄文が施されている。96は口縁部破片で、LR縄文が施されている。

(工藤 由美子)

## 石器

石器は、1層からフレイク3点、2層から石匙2点・フレイク18点・チップ17点、3層から石鏃1点・使用痕ある剥片1点・フレイク12点・チップ20点、10層からスクレイパー1点・使用痕ある剥片2点・フレイク18点・チップ12点、沢13層からフレイク1点が出土した。

S1は、玉髄質珪質頁岩を用いた、小型の有茎凸基の石鏃である。S2は、自然面が残る側に、二次調整が見られるスクレイパーであるが、つまみ部と刃部の一部を欠損した石匙である可能性もある。S3・S4は、縦型の石匙である。S3は縦長剥片の打面の反対側に、つまみ部を作出し、刃部は背面側の縁辺に二次調整が施される。S4は、横長剥片を用いた縦型石匙である。主要剥離面の打面が刃部側の一部に残る。主要剥離面の剥片剥離方向とつまみ部の軸のなす角度は、約90°である。背面側の両側縁と腹面側の一側縁に、二次調整が施される。S5は、縦長剥片の一端に、つまみ作出を意図したと思われる二次調整が見られるが、つまみ部はあまり明瞭ではない。背面側の一側縁に、二次調整が施されている。石匙の未製品の可能性もある。

(永嶋 豊)

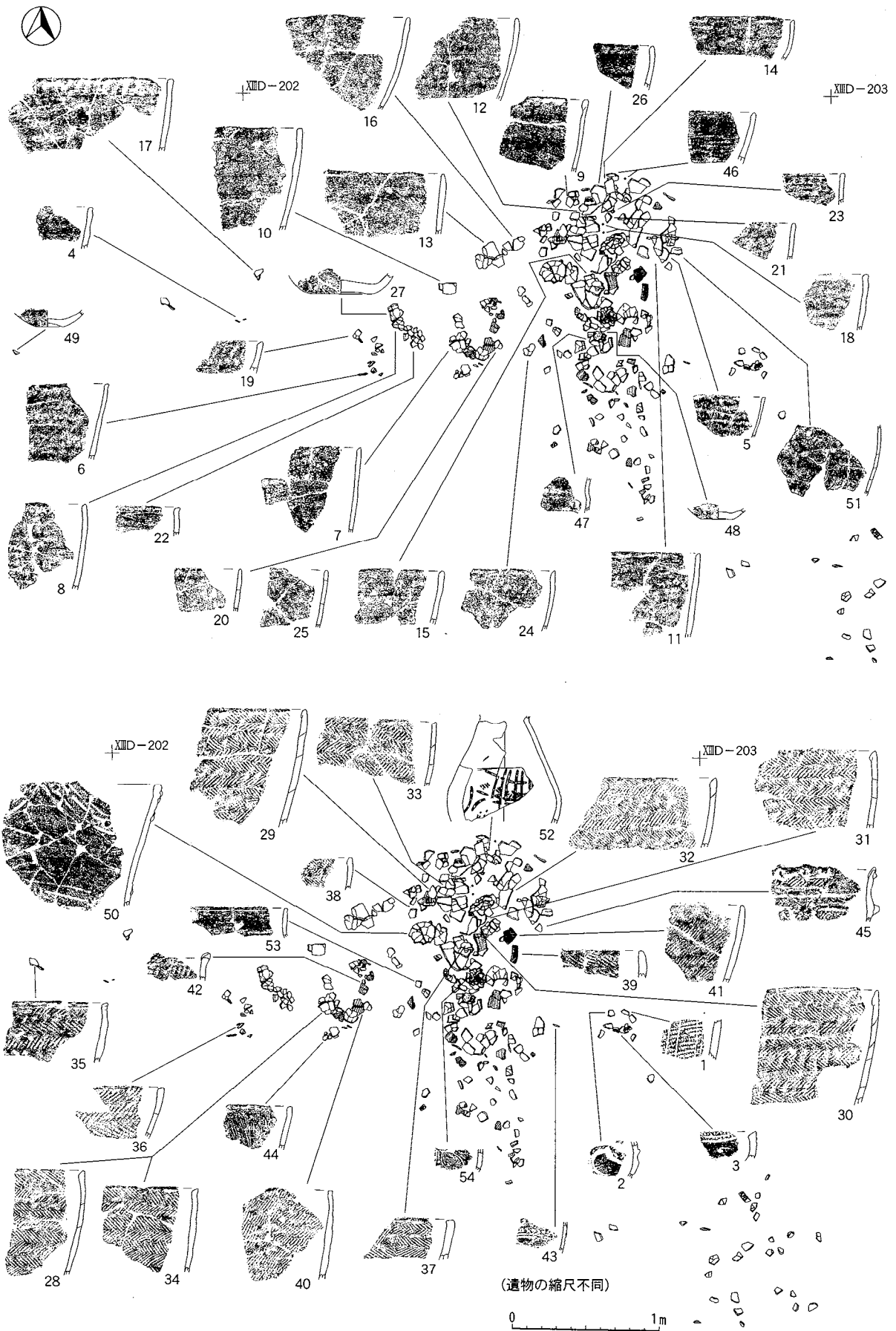


図40 第103号遺物集中区①

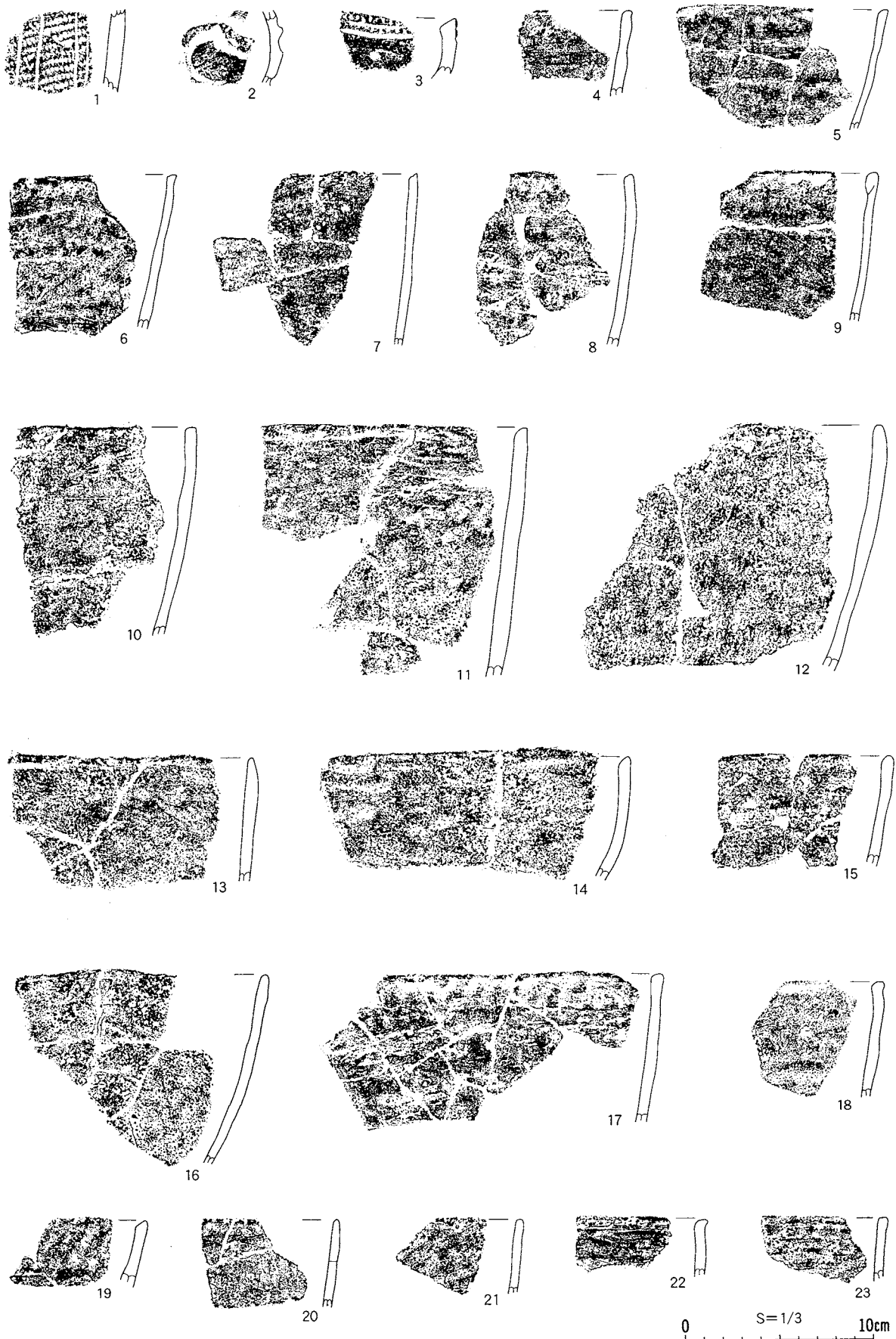


図41 第103号遺物集中区① 土器 (1)

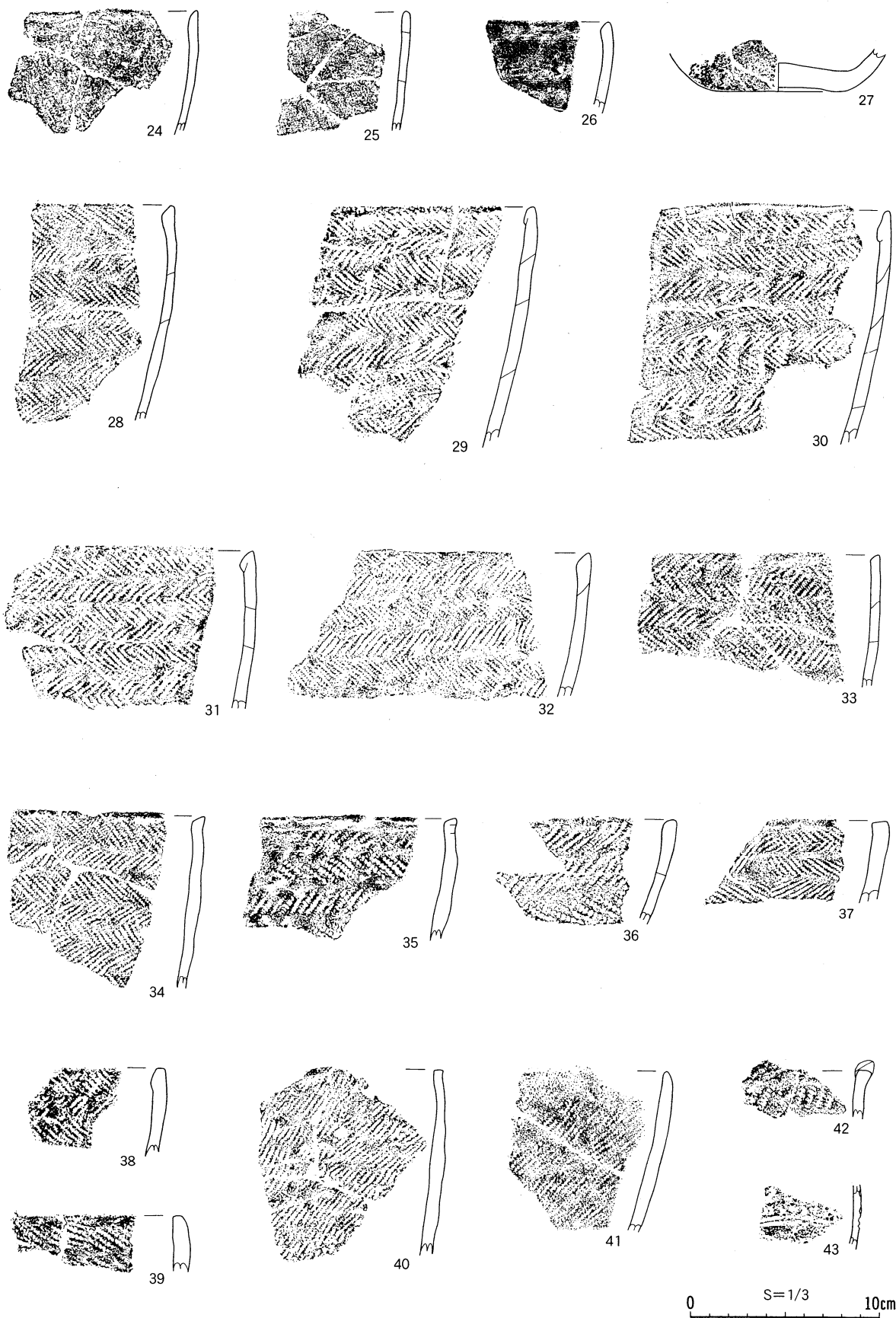
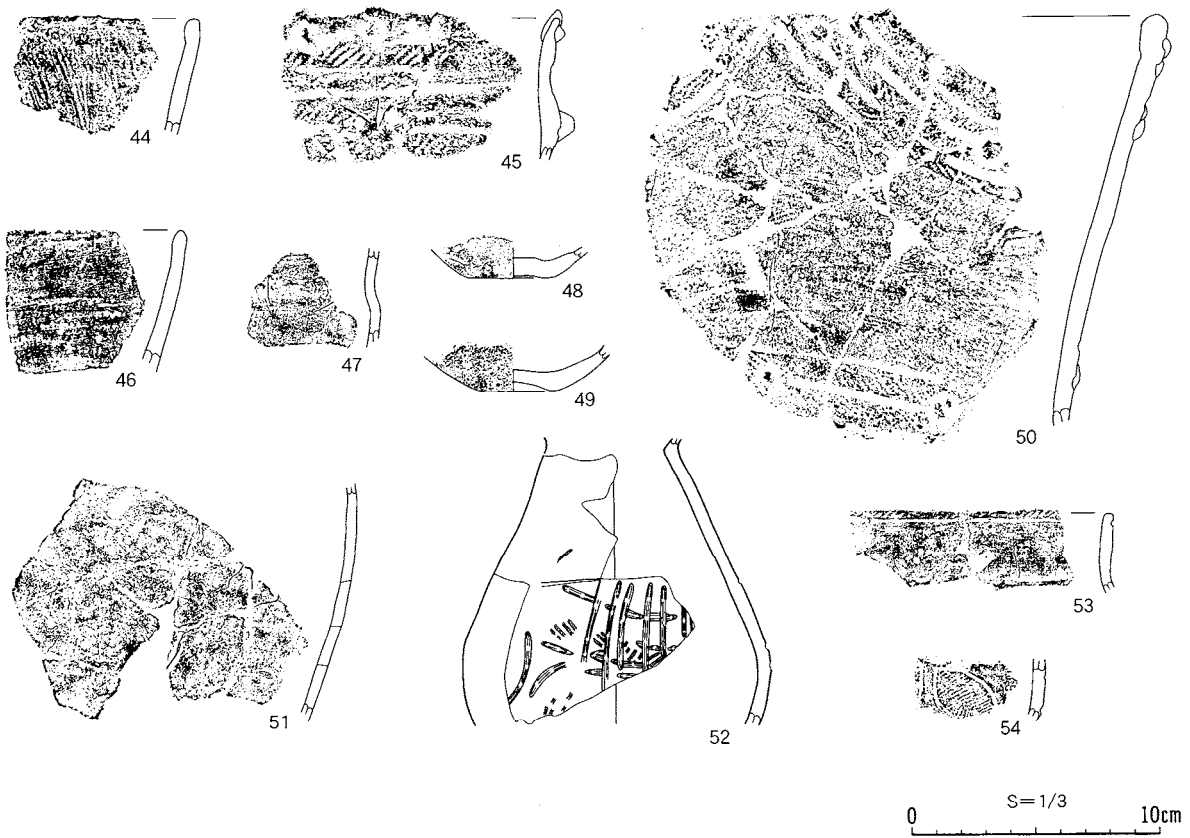


图42 第103号遺物集中区① 土器 (2)



第103号遺物集中区②

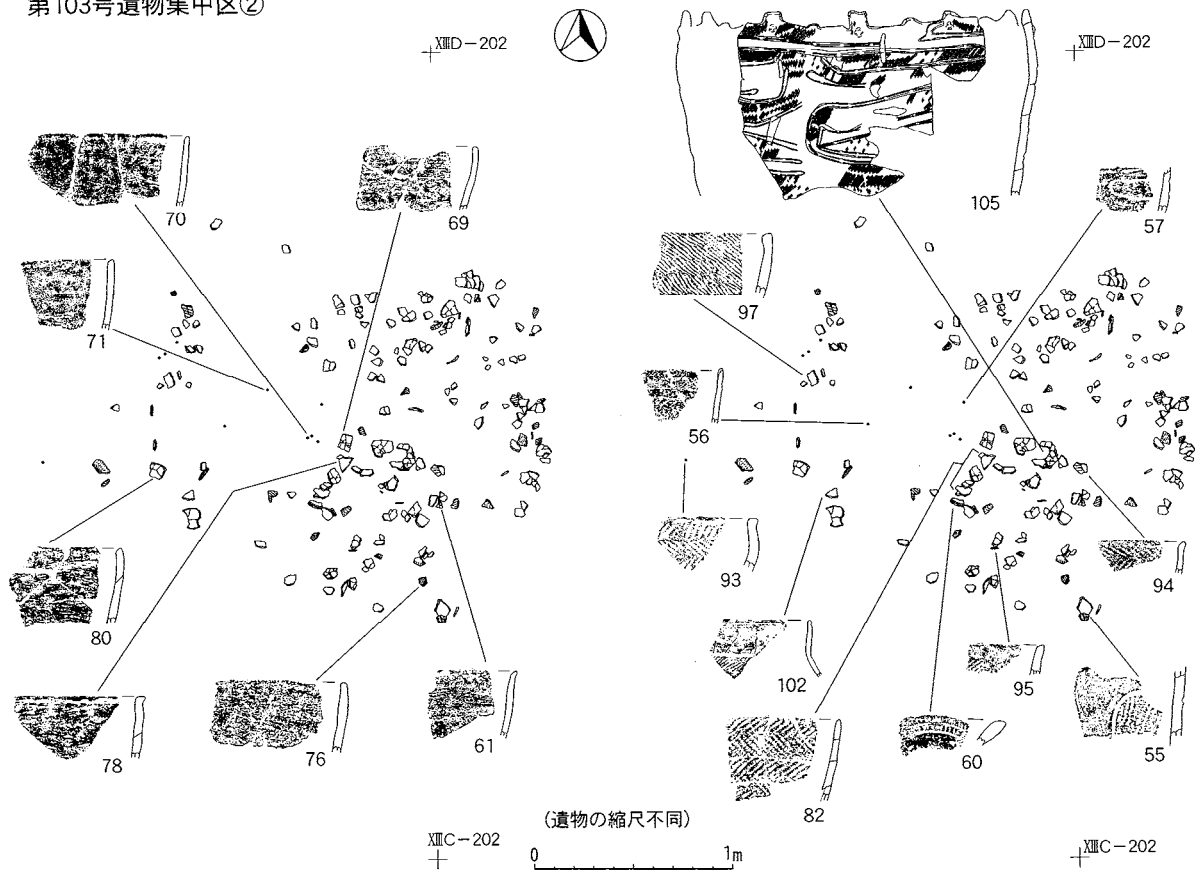


图43 第103号遺物集中区① 土器 (3)、遺物集中区②-1



図44 第103号遺物集中区②-2

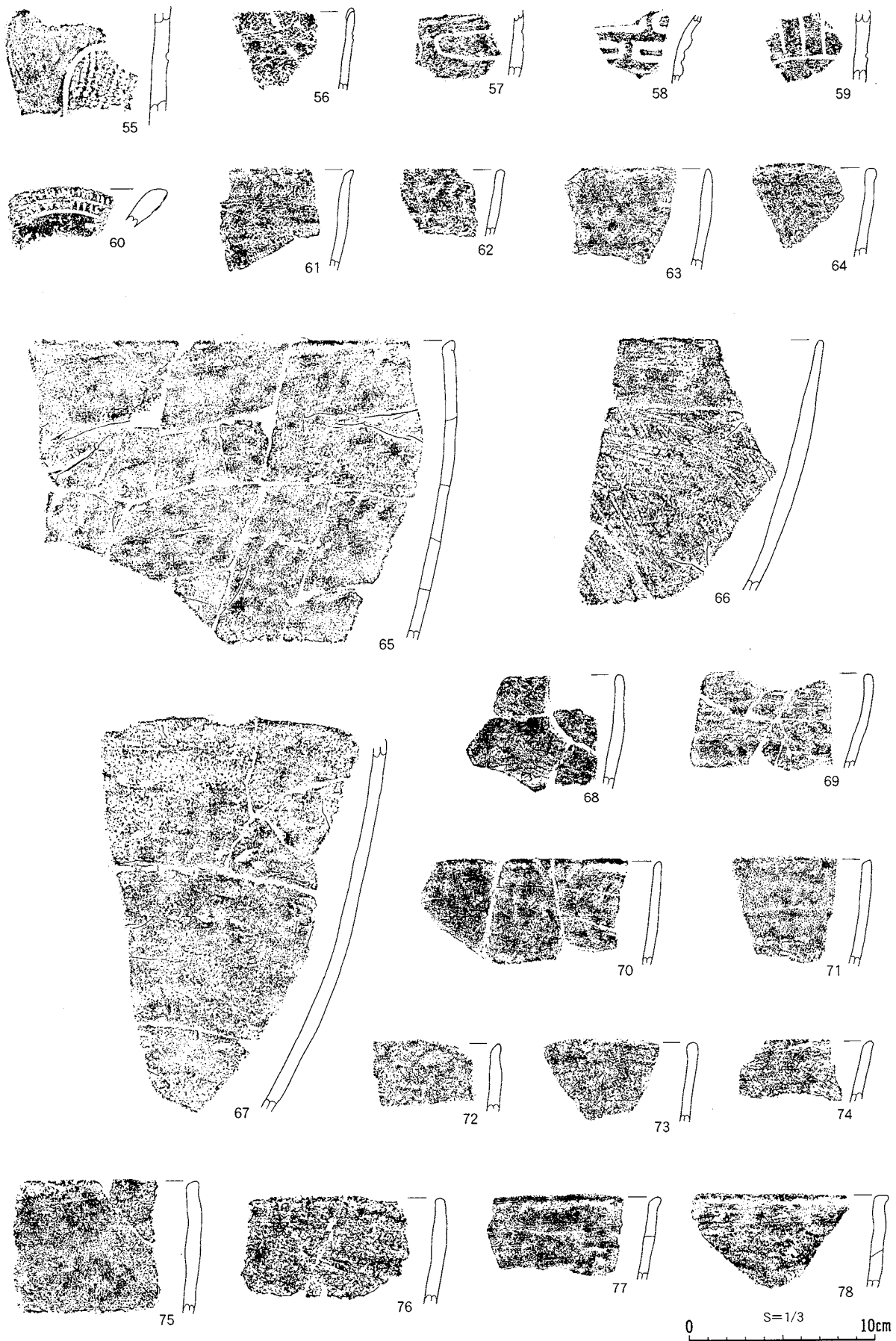


図45 第103号遺物集中区② 土器 (1)



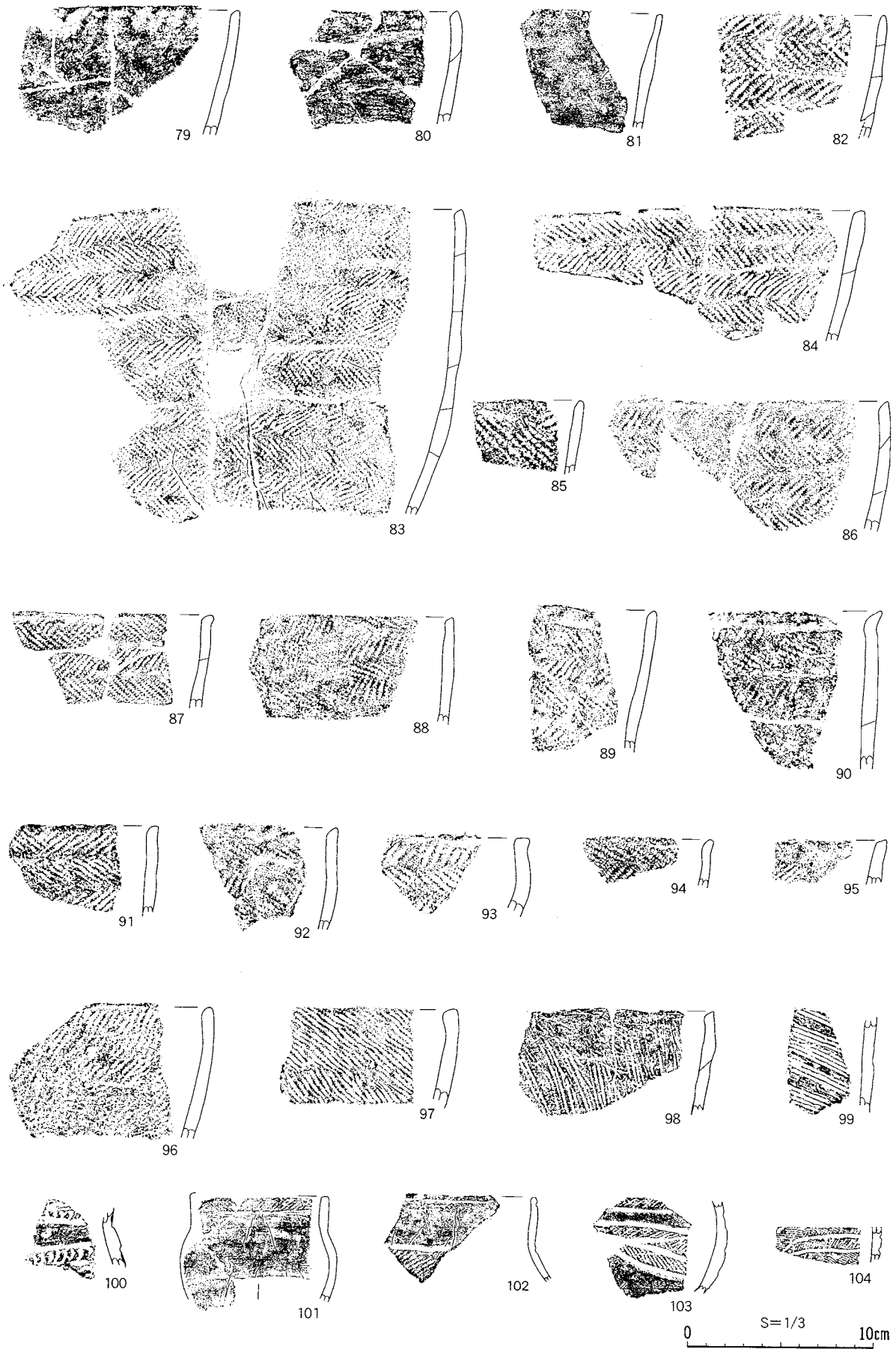
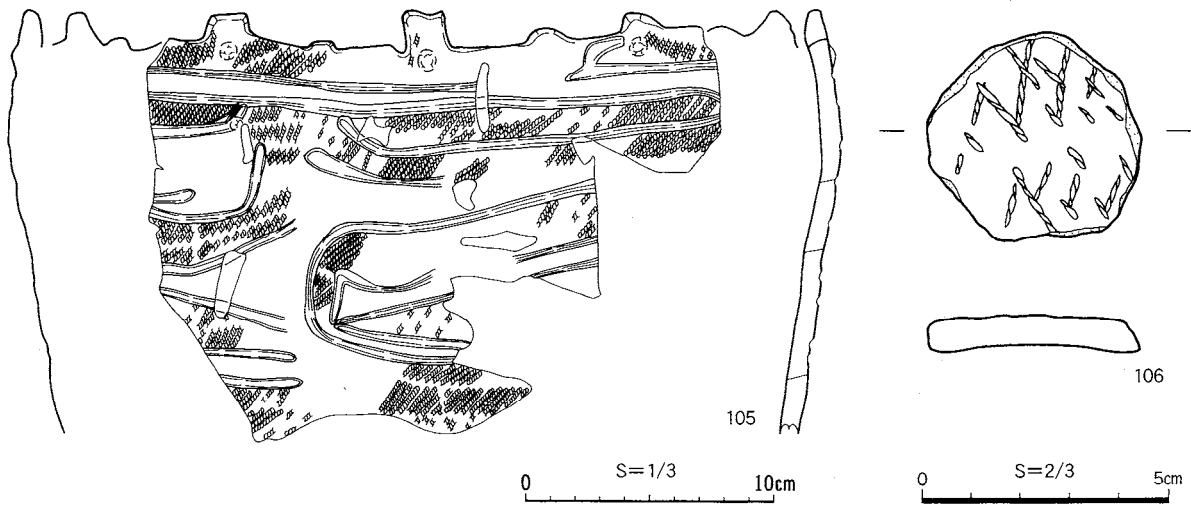


図46 第103号遺物集中区② 土器 (2)



第103号遺物集中区③

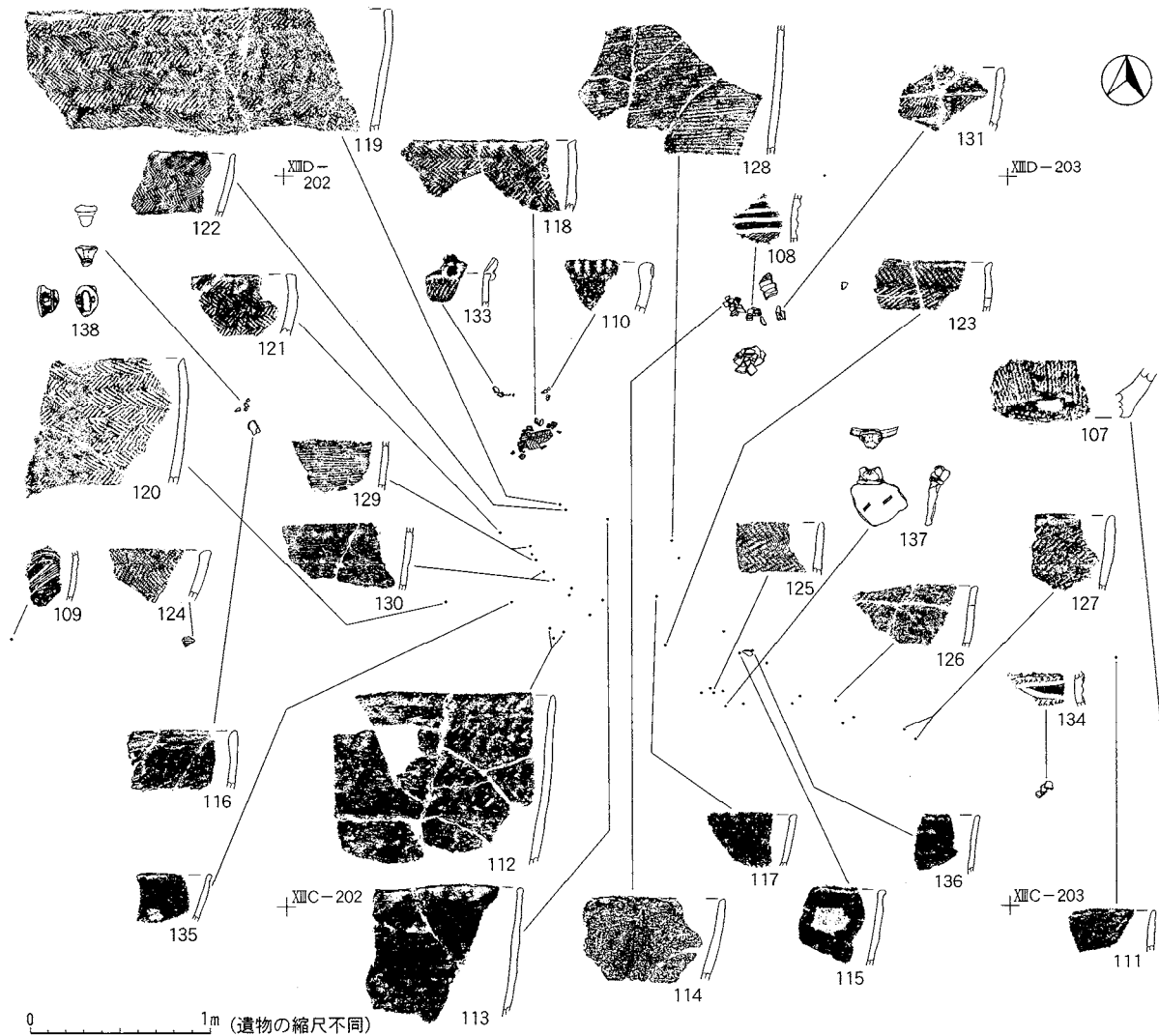


図47 第103号遺物集中区② 土器 (3)、遺物集中区③

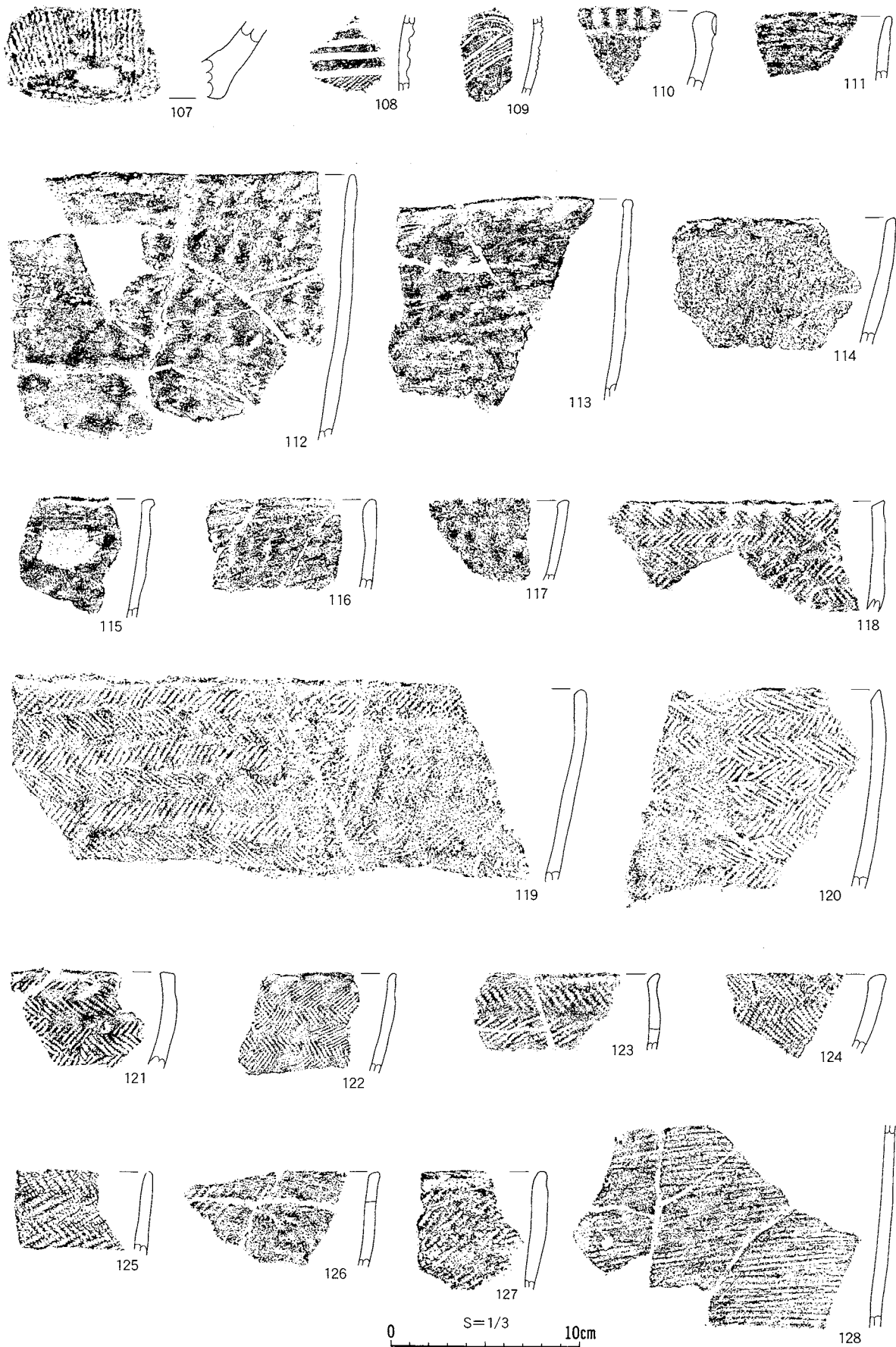
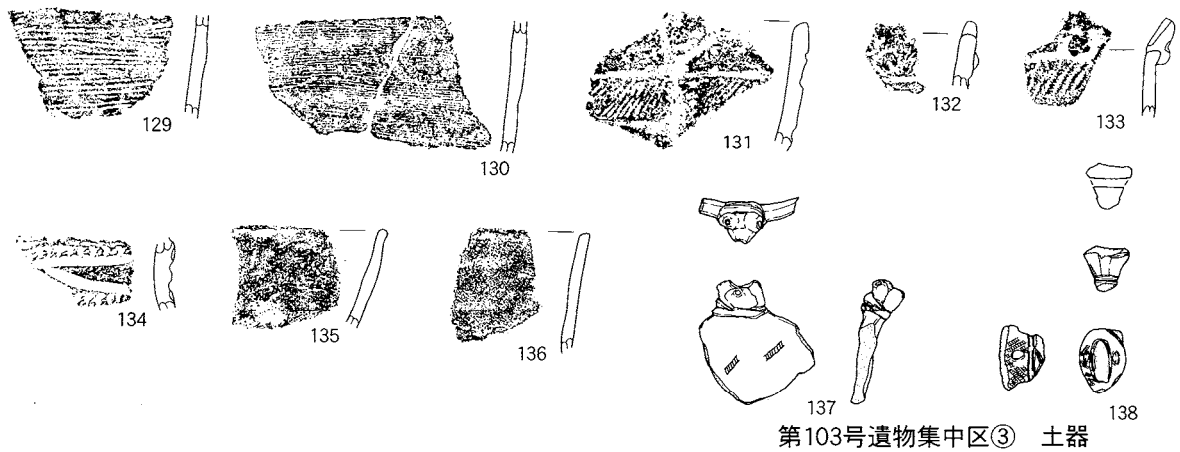


图48 第103号遺物集中区③ 土器 (1)



第103号遺物集中区③ 土器

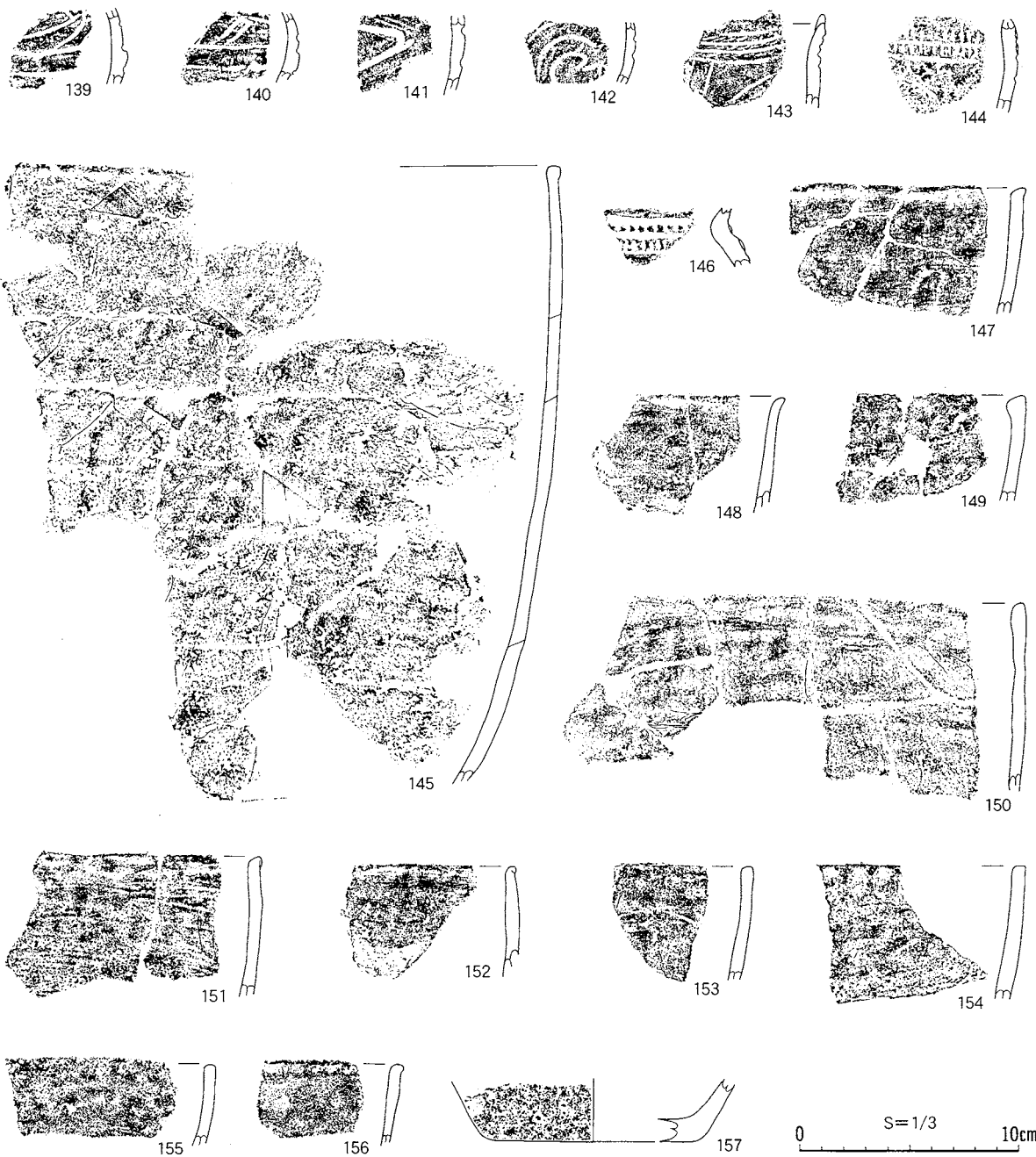


図49 第103号遺物集中区③ 土器（2）、その他土器（1）

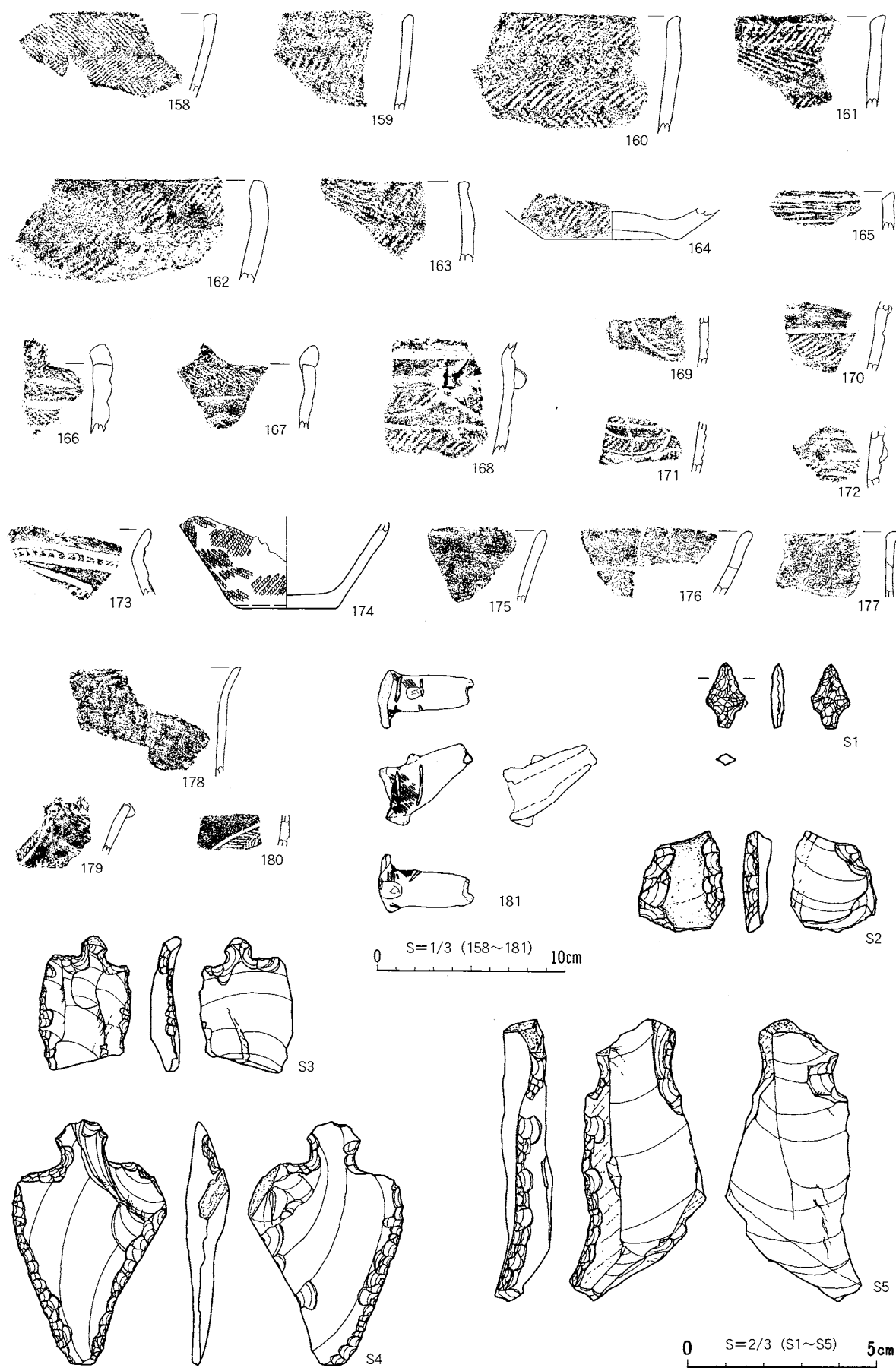


図50 第103号遺物集中区 その他土器(2)・石器

## 2 旧河川跡の縄文時代中期から後期にかけての遺物

### 土器

土器は平箱で127箱分出土した。総重量は約880kgになる。縄文時代中期前葉・中期末葉・後期初頭・後期前葉・後期中葉・後期後葉の土器である。最も多いのは縄文時代後期後葉の土器で、全体の約80%以上を占めている。次いで後期初頭から前葉、中期末葉、後期中葉の順となっている。

出土地点は、32グリッドにわたる。Y軸=1,316を境にして西側からはこの時期の土器は出土していない。時期別にみると、特にいずれかのグリッドに集中しているわけではなく、どの時期の遺物も東側全域から出土している。後期後葉の土器は2ヶ所に集中区があり、旧河川跡中央部と北側である。グリッドでは、中央部はXⅢA-203~205・XⅢB-202~205・XⅢC-202グリッド、北側はXⅢG-205~207・XⅢH-204~206グリッドである。特にXⅢB-203・205グリッドからの出土が多い。

旧河川跡の遺物の取り上げは、基本的に基本層序に則り層ごとに行った。遺物は、1・2・3・10・13層から出土している。特に黒色土の1層・3層・10層と砂層でにぶい黄褐色土の13層から多量に土器が出土した。

器種は、深鉢・鉢・壺・注口がみられるが、深鉢が圧倒的に多く、全体の77%に及ぶ。袖珍土器も数点出土している。

炭化物・ススの付着率は、全体の約40%とかなり高くなっている。そのうち炭化物・ススが付着している地文のみの土器は85%を占めている。

以下、層ごとに述べていきたい。

#### I. 1層

平箱数12箱、総重量約90kgの土器が出土した。そのほとんどが第Ⅴ群土器の深鉢である。

##### 第Ⅲ群土器 (図51-182~189)

###### A. 深鉢

図示したのは1点である(182)。無文口縁部で、折り返し口縁となっている。

###### B. 壺

図示したのは7点である(183~189)。183には沈線文が、185・187~189には楕円文が施されている。186は無文で頸部に隆線文が施された土器である。

##### 第Ⅳ群土器 (図51-190・191)

###### A. 深鉢

図示したのは1点である(190)。縄文帯+沈線文が施文され、沈線間に刻み目が施されている。また外面には炭化物が付着している。

###### B. 鉢

図示したのは1点(191)で、縄文帯(羽状縄文)・平行沈線と沈線間に刻み目が施されている。

##### 第Ⅴ群土器 (図51-192~図52-214)

###### A. 深鉢 (192~208)

1層出土土器の約半数を占める。無文・地文のみが施文されたものがほとんどである。

①無文・地文のみを施したもの

- a. 無文・・・図示したのは7点（192～198）で、そのうち4点（192～195）にはススが付着している。
- b. 羽状縄文・・・図示したのは2点（201・202）である。
- c. 縄文・・・図示したのは1点（200）で、LR縄文が施文されている。
- d. 条痕文・・・図示したのは3点（203～205）で、すべて同一個体である。
- e. 条線文・・・図示したのは3点（206～208）で、すべて同一個体である。

②文様を施文しているもの

199のみである。口縁に小突起が貼付され、突起頂部から内面には棒状圧痕が施されている。外面には平行沈線文とRL縄文・貼瘤がみられる。また外面にススが付着している。

B. 鉢（211～214）

図示したのは4点で、すべてに文様が施文されている。211・212・214は沈線文で、211には口縁部に小突起が、214には瘤が貼付されている。213は口縁部に小突起があり、外面には地文にLR縄文を施文し、小突起部に貼瘤を施している。

C. 深鉢か鉢（209・210）

いずれも小破片であるため、深鉢か鉢か判別できないものである。209は無文で、210には条痕文が施文されている。

II. 2層

平箱数5箱、総重量約40kgの土器が出土した。深鉢が主体である。

第Ⅲ群土器（図52-218）

図示したのは1点である。深鉢の折り返し口縁部破片で、外面にRL縄文が施文されている。

第Ⅴ群土器（図52-215～217・219）

図示したのは4点で、いずれも深鉢の破片である。219は無文、215・216は条痕文である。217は胴部破片で斜行縄文が施文されている。

III. 3層

平箱で40箱分、総重量約290kgの土器が出土した。旧河川跡出土土器の33%を占め、最も多量に土器が出土した層である。なかでも第Ⅴ群の深鉢が主体である。

第Ⅱ群土器（図52-220～223）

図示したのは3点で、すべてに縄文・沈線文が施文されている。220・221にはLR縄文、222にはRL縄文と縦位沈線が施文されている。

第Ⅲ群土器（図52-223～226、53-228）

図示したのは5点である。器種は223・224・226は深鉢の破片、228は深鉢の胴部から底部、225は不明である。223は、地文RL縄文に隆線文（上にRL縄文）と沈線文が貼付・施文されている。後期初頭のものと思われる。224・228は沈線文が施されている。225は波状口縁部で、隆帯文が貼付されている。226は沈線文で、沈線間には条痕文が充填されている。

第Ⅳ群土器（図52-227、53-229）

図示したのは2点である。227は深鉢の口縁部片で、羽状縄文が施文されている。229は深鉢か鉢の胴部片で、平行沈線と沈線間に刻目が施されている。

#### 第V群土器（図52-230～56-305）

図示したのは100点で、無文・地文のみの土器が3層V群土器全体の80%以上を占める。炭化物・ススが付着したものは約半数で、他の層に比べて付着率が高い。

器種は深鉢・鉢・壺・注口が出土しているが、深鉢が約80%を占めている。

文様は、無文・羽状縄文・斜行縄文・条痕文・沈線文+縄文+貼瘤・縄文帯・沈線文・縄文帯+貼瘤などがみられる。

#### A. 深鉢（図53-230～56-305）

##### ①無文・地文のみを施文したもの

- a. 無文・・・深鉢全体の40%程度を占める。図示したのは28点（図53-230～54-259）である。
- b. 羽状縄文・・・深鉢全体の35%程度を占める。図示したのは27点（図54-260～55-281・283～56-287）である。
- c. 縄文・・・深鉢全体の15%ほどを占める。図示したのは12点で、282・288・290・291・294・295にはLR縄文、289・292・293・296～298にはRL縄文が施文されている。
- d. 条痕文・・・図示したのは5点である（図56-299～303）。

##### ②文様を施文しているもの

図示したのは2点（304・305）である。304は大波状口縁波状部で、波頂部外面に縦位短沈線を施文し、沿口沈線と沈線文間にLR・RL縄文、貼瘤を施している。305は平口縁に小突起を貼付し、外面にRL縄文と沈線文を施文している。

#### B. 鉢（図57-311～315・317・319）

7点図示した。無文（312～314）・LR縄文（311）・縄文帯（315・317・319）のものがみられる。317と319は同一個体である。

#### C. 深鉢か鉢（図56-306～57-310）

5点図示した。306は無文で、小突起が付されている。307はRL縄文、308～310は羽状縄文が施文されている。

#### D. 壺（図57-320）

図示したのは1点である。弧状沈線文が施文されている。

#### E. 注口（図57-329）

注口とわかるのは1点である。底部は欠損しているが、器形のわかる数少ない土器のひとつである。口縁は平口縁で、小突起が貼付されている。突起の内面には棒状圧痕が施されている。口縁から頸部には平行沈線と沈線間にRL縄文が施文されている。胴部には、胴部を4分割して文様を施文している。縄文帯（RL・LR縄文）・貼瘤・平行沈線（沈線間は羽状縄文）が施文されている。4分割したうちの3ヶ所には貼瘤、残りの1ヶ所には注口がくる。貼瘤は口縁小突起の突起間のちょうど中央部にくるように配置されている。



F. 壺か注口 (図57-316・318・321~328)

壺か注口か判別できなかったものは10点である。316は外面に平行沈線とRL縄文、327は外面に平行沈線と羽状縄文が施文される。どちらも平口縁であるが、316は平口縁に小突起が付されている。318・326・328には縄文帯が施文されている。323は縄文帯に瘤が貼付されている。324には縄文帯・沈線文・貼瘤がみられる。322には平行沈線・沈線文・RL縄文・瘤が施文・貼付されている。321は弧状沈線文に瘤が貼付された痕跡が残る。325は沈線文のみである。

第Ⅵ群土器 (図58-330)

1点のみ掲載した。かなり摩滅しているが、胴部に斜行縄文が施文され、底部には網代痕がみられる。

IV. 10層

平箱で31箱分、総重量240kgの土器が出土した。旧河川跡の土器では3層に次いで多量の土器が出土した。3層同様に第Ⅴ群土器の深鉢が主体である。

第Ⅱ群土器 (図58-331・332)

図示したのは2点である。331・332とも地文LR・RL縄文に沈線文が施文されている。

第Ⅲ群土器 (図58-333~338)

図示したのは6点で、334~338は後期前葉十腰内Ⅰ式期の土器に相当する。333は後期初頭のものと思われ、地文RL縄文に平行沈線が施文されている。334・335・336には楕円文が施文されるが、335は沈線で区画された文様の中に条痕文を充填している。337・338は沈線文のみを施文したものである。333~337は深鉢、338は深鉢か鉢である。

第Ⅳ群土器 (図58-339)

1点のみ出土した。鉢の口縁部破片で、口縁部に平行沈線と沈線間に刻目が、胴部に縄文帯(羽状縄文)が施文される。内面にはススが付着している。

第Ⅴ群土器 (図58-340~61-411)

旧河川跡10層出土土器の90%近くを占めている。炭化物・ススが付着しているものは40%であり、うち図示したのは72点である。

器種は深鉢・鉢・壺で、その他に袖珍土器が2点出土している。全体の約85%は深鉢である。

文様は無文・羽状縄文・縄文・条痕文・縄文帯・縄文帯+貼瘤・縄文帯+沈線+貼瘤などがみられる。

A. 深鉢 (図58-340~61-401)

①無文・地文のみを施文しているもの

- a. 無文・・・・・・ 図示したのは35点であるが、10層Ⅴ群土器の半数は無文の深鉢である。
- b. 羽状縄文・・・・ 図示したのは18点(375~392)で、10層Ⅴ群土器の20%を占める。
- c. 縄文・・・・・・ LR・RL縄文を施文している(394~397)。
- d. 条痕文・・・・・・ 2点図示した(398・399)。

②文様を施文しているもの

3点出土している(393・400・401)。393は地文LR縄文に内外面に貼瘤を施している。

401は、口唇部に小突起、外面にRL縄文・沈線文・貼瘤を施文している。400は縄文帯を施文している。

B. 鉢 (図61-404)

図示したのは1点で、無文の口縁部破片である。

C. 深鉢か鉢 (図61-403)

図示したのは1点で、胴部下半から底部にかけてが残存している。文様は沈線文とRL縄文が施されている。

D. 壺 (図61-405・408)

図示したのは2点で、405・408のどちらにも縄文帯が施文されている。408には貼瘤もみられる。

E. 鉢か壺 (図61-402)

1点出土した。縄文帯が施文され、外面にススが付着している。

F. 壺か注口 (図61-406・407・409)

図示したのは3点で、3点とも縄文帯が施文されている。406には貼瘤もみられる。

G. 袖珍土器 (図61-410・411)

2点出土した。410は無文の小型浅鉢、411はLR縄文が施された小型鉢である。

## V. 13層

平箱18箱分、総重量にして140kgの土器が出土した。第V群土器の深鉢が主体であるが、他の層と比較して第Ⅲ群土器の割合が高く、約30%近くを占めている。

### 第Ⅲ群土器 (図61-412~420)

412から419は深鉢、420は深鉢か鉢である。

412・413・415~417・419・420には楕円文が施文されている。413・416・417は波状口縁で、416は波頂部と波頂部から外面に粘土を貼付し、沿口沈線を施文している。417も波頂部に粘土紐を貼付しており、沿口沈線を施文している。414も波状口縁で、沿口沈線に菱形沈線文を施文している。418は渦巻状の沈線文を施文している。

### 第Ⅳ群土器 (図62-421)

深鉢の波状口縁波状部で、外面に逆S字状隆帯が貼付されている。

### 第Ⅴ群土器 (図62-422~436・438~440)

13層出土土器の半数以上を占める。器種は深鉢・鉢・注口と袖珍土器である。文様は、無文・羽状縄文・斜行縄文・縄文帯などで、無文が10層第Ⅴ群土器の45%ほどを占めている。

A. 深鉢 (図62-422~436)

無文・地文のみを施文しているもののみで、文様を施文しているものはない。

- a. 無文・・・図示したのは9点で(422~430)、422~425・428には外面に炭化物・ススが付着している。
- b. 羽状縄文・・・図示したのは4点(431~434)であり、432・433は口唇部がやや肥厚している。
- c. 縄文・・・図示したのは2点(435・436)で、いずれもRL縄文が施文されている。

B. 鉢 (図63-439)

図示したのは1点で、縄文帯を施文した口縁部破片である。

C. 深鉢か鉢 (図63-438)

図示したのは1点で、羽状縄文が施文され、外面にススが付着している。

D. 注口 (図63-440)

図示したのは1点で、縄文帯が施文されている。注口部は欠損している。

E. 袖珍土器 (図63-441・442)

2点出土した。441は無文の小型深鉢である。442は無文で、口縁部に小突起がみられる。胴部の口縁部小突起直下には貼瘤がみられ、土器を4分割したもう一ヶ所にも貼瘤がみられる。また、4分割した別の箇所には注口部らしき痕跡がみられる。おそらく3方が貼瘤、1方が注口の小型注口土器と思われる。

第Ⅵ群土器 (図63-437)

1点出土している。深鉢の口縁部で、口縁下の土器が外反する部分に隆帯を横位に貼付している。

Ⅵ. その他の土器

旧河川跡で一括して取り上げた遺物を最後に掲載した。

第Ⅰ群土器 (図63-443)

1点のみ出土した。円筒上層式期の土器で、口頸部に鋸歯縄文・口頸部から胴部にかけて隆帯貼付・胴部に羽状縄文が施文されている。

第Ⅱ群土器 (図63-444~447)

図示したのは4点である。444・446はLR縄文に沈線文が施文されている。447はRL縄文のみが施文された口縁部破片で、445はヒレ状突起である。

第Ⅳ群土器 (図63-449)

図示したのは1点で、大波状口縁の波状部である。突起側面には沈線が施文されている。

第Ⅴ群土器 (図63-448・450~456)

A. 深鉢

448は無文、450は羽状縄文、451は条痕文の口縁部破片である。452は、前述した第103号遺物集中区から出土した口縁部破片 (図49-137) と同一の動物形突起である。453は小突起のある口縁部破片で、沈線文と貼瘤が施されている。

B. 壺

455は胴上部破片で、縄文帯と上割瘤が施文されている。456は口唇部にわずかに粘土を貼付している。内外面に瘤を貼付し、外面には沿口沈線が施文されている。

C. 壺か注口

454は有孔把手状突起の突起部で、縦位の貫通孔と沈線文がみられる。

(工藤 由美子)

石器 (図64~68)

S6~S14は、石鏃である。有茎平基 (S6・9)、有茎凸基 (S7・8・10・11)、無茎円基 (S13)、

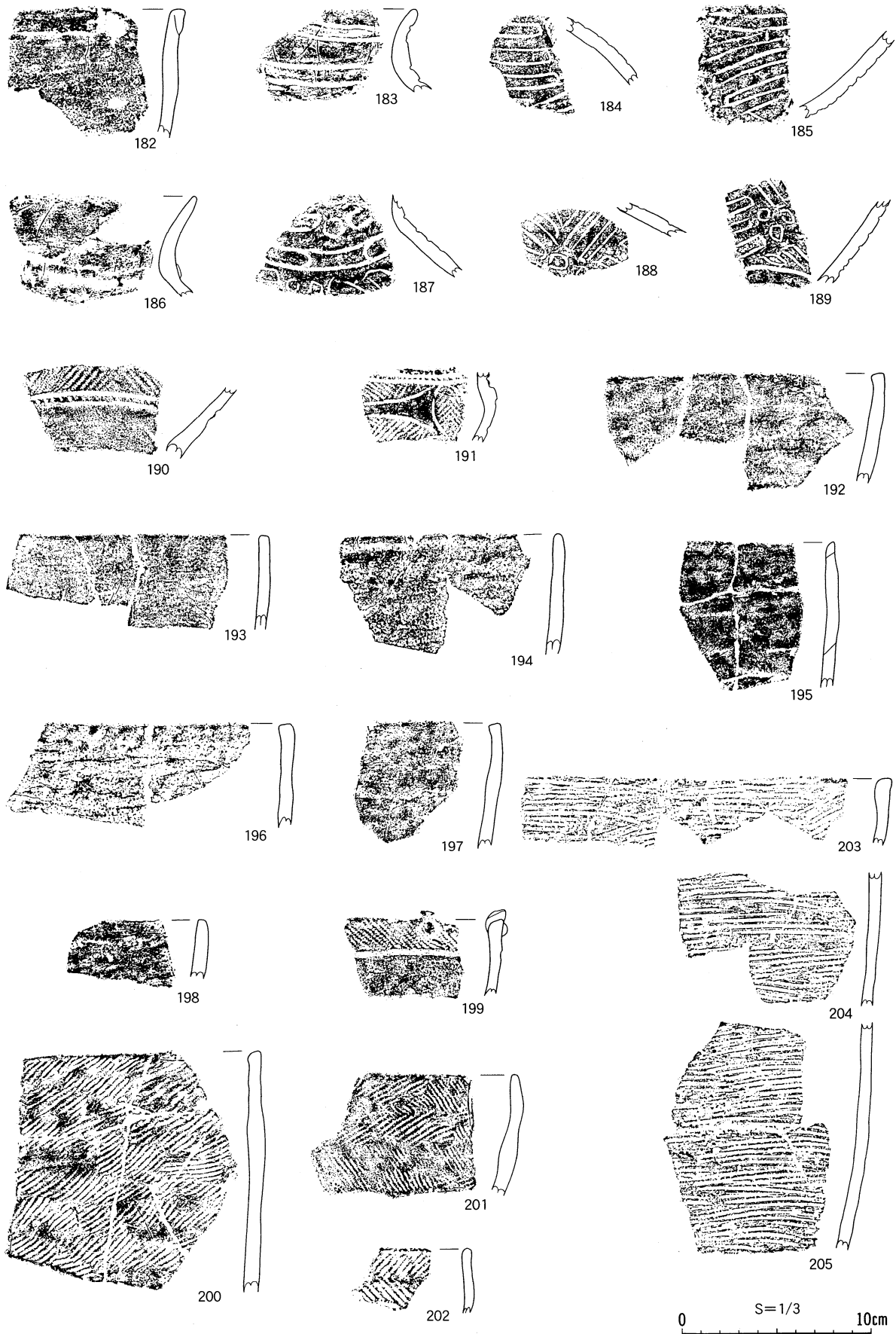


図51 旧河川跡出土土器（1） 1層

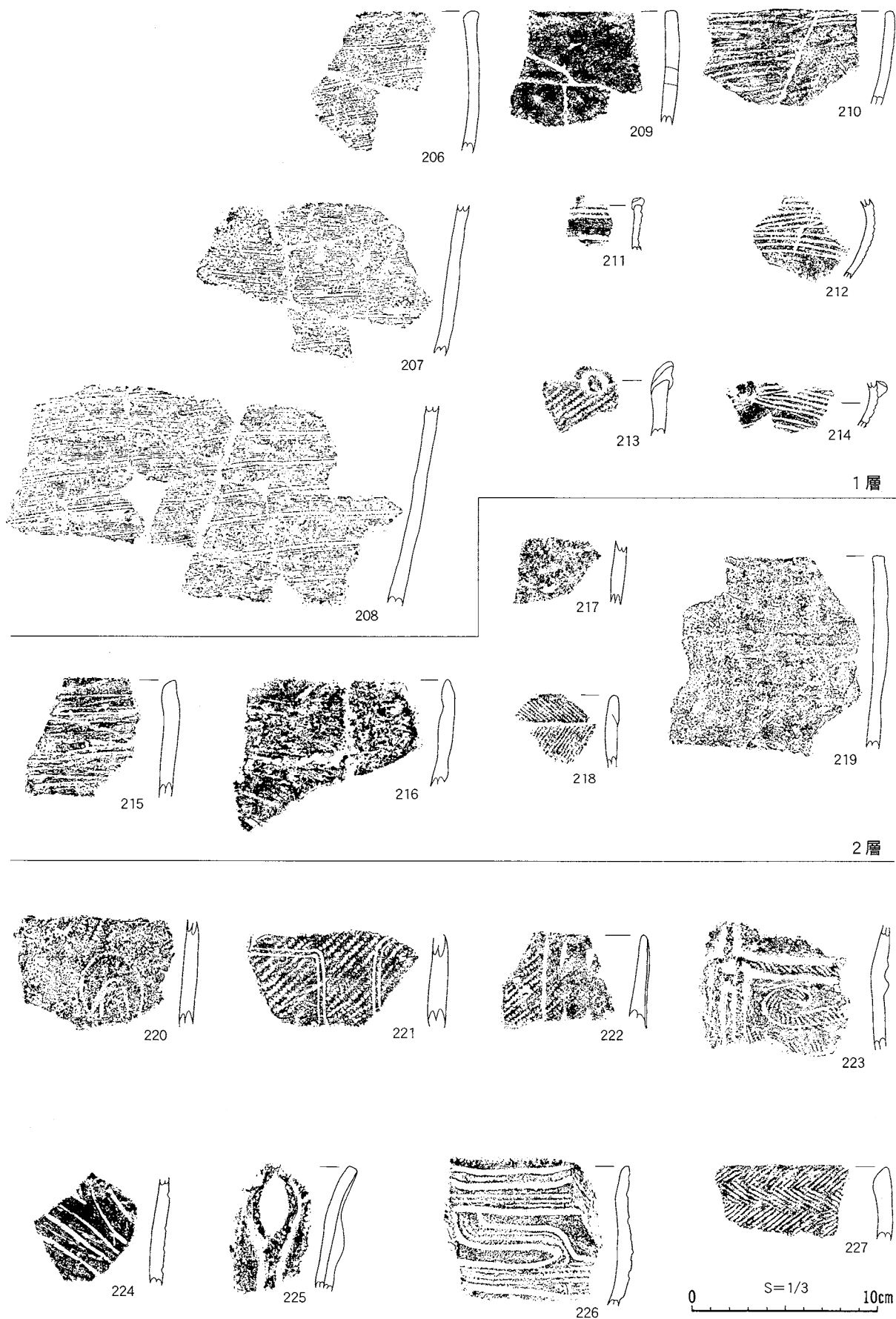


図52 旧河川跡出土土器(2) 1・2・3層

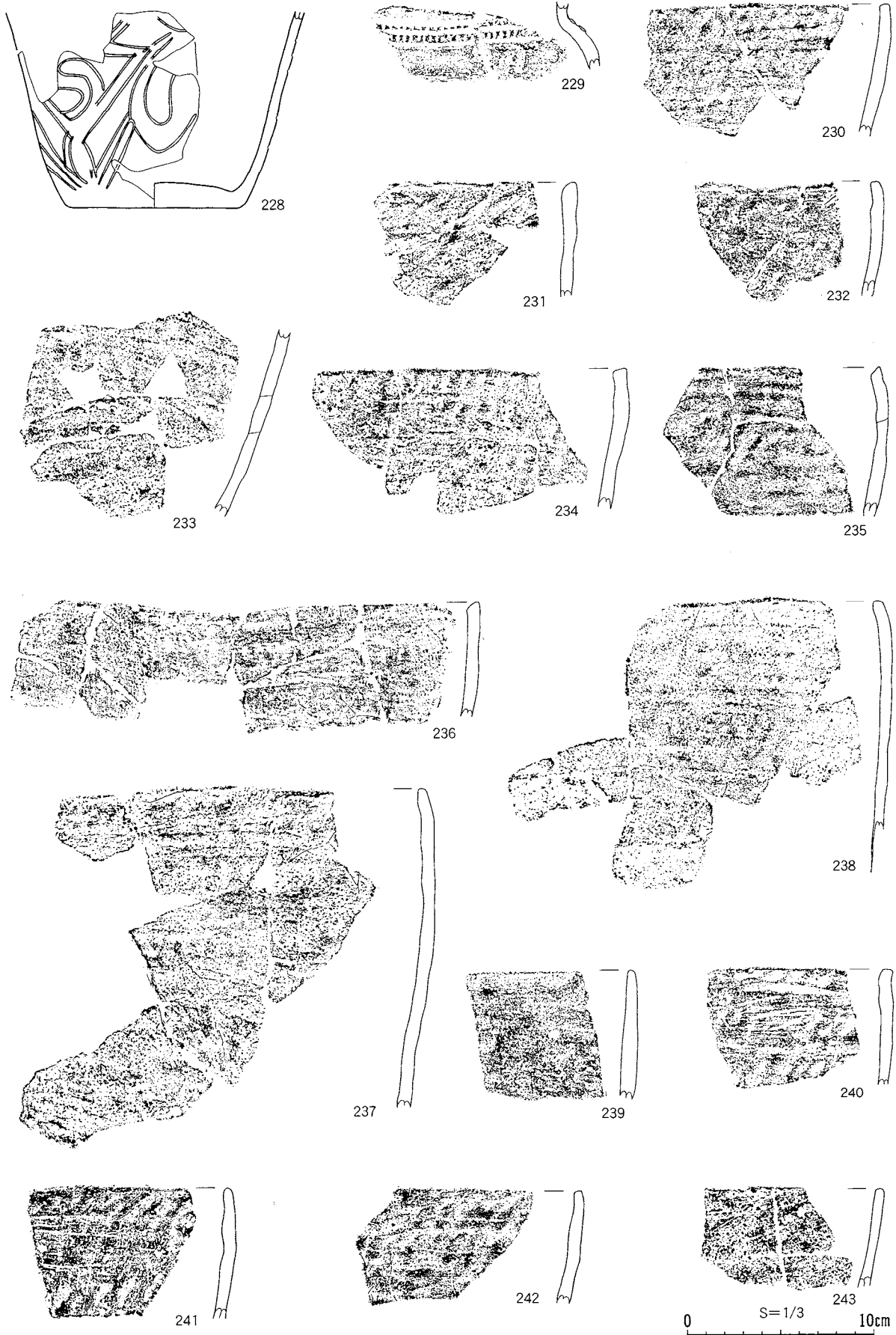


図53 旧河川跡出土土器(3) 3層-2

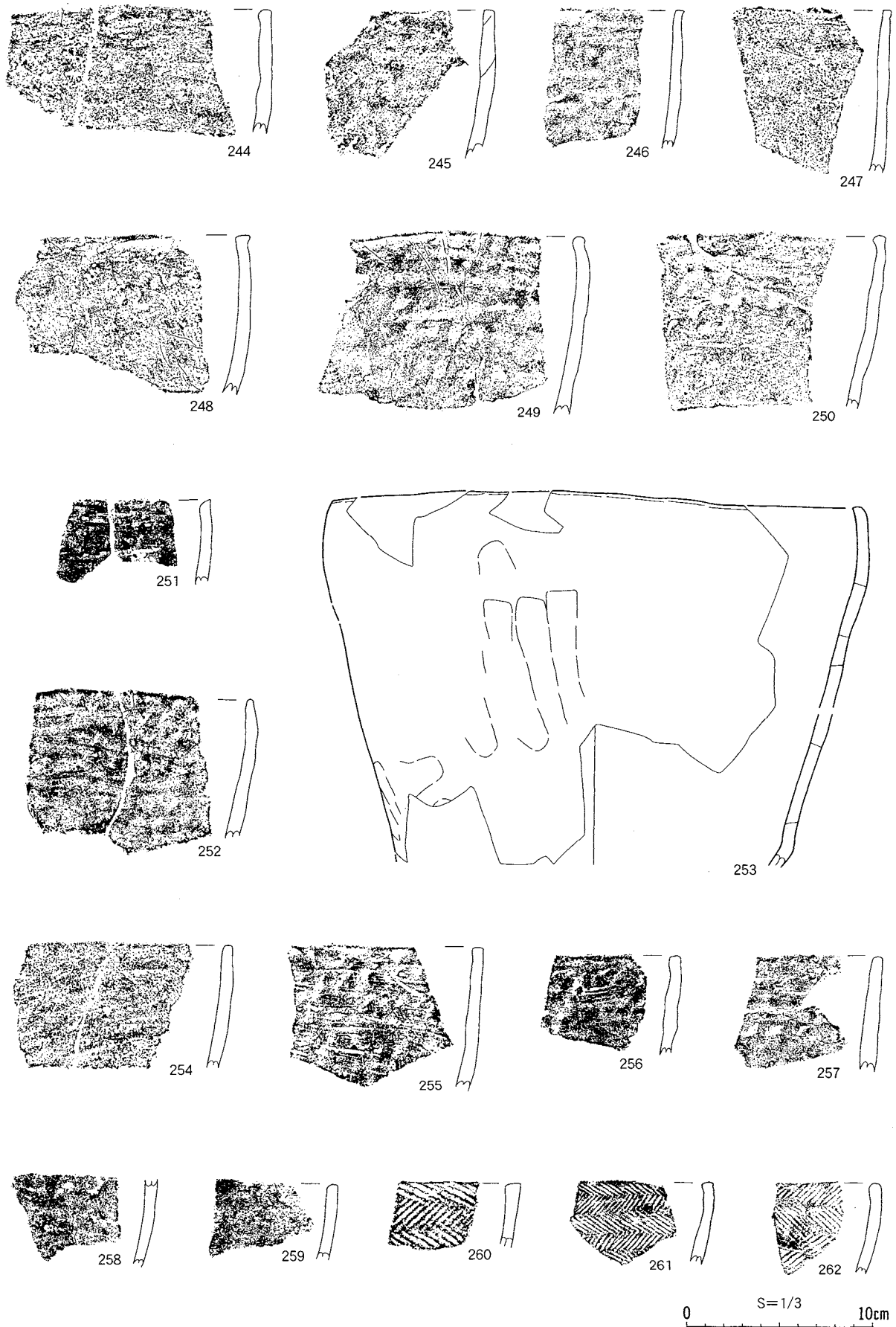


图54 旧河川跡出土土器(4) 3層-3

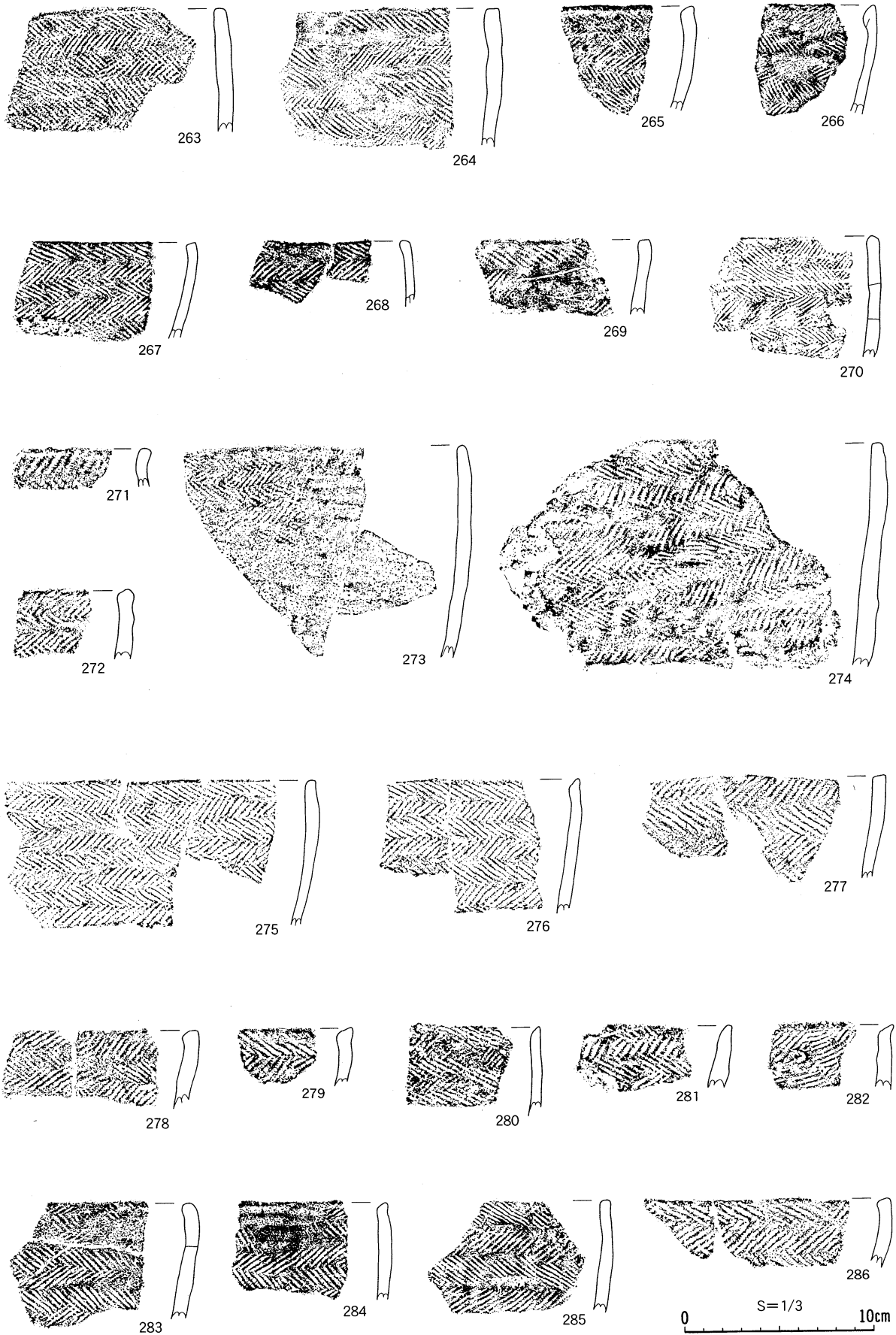


图55 旧河川跡出土土器(5) 3層-4



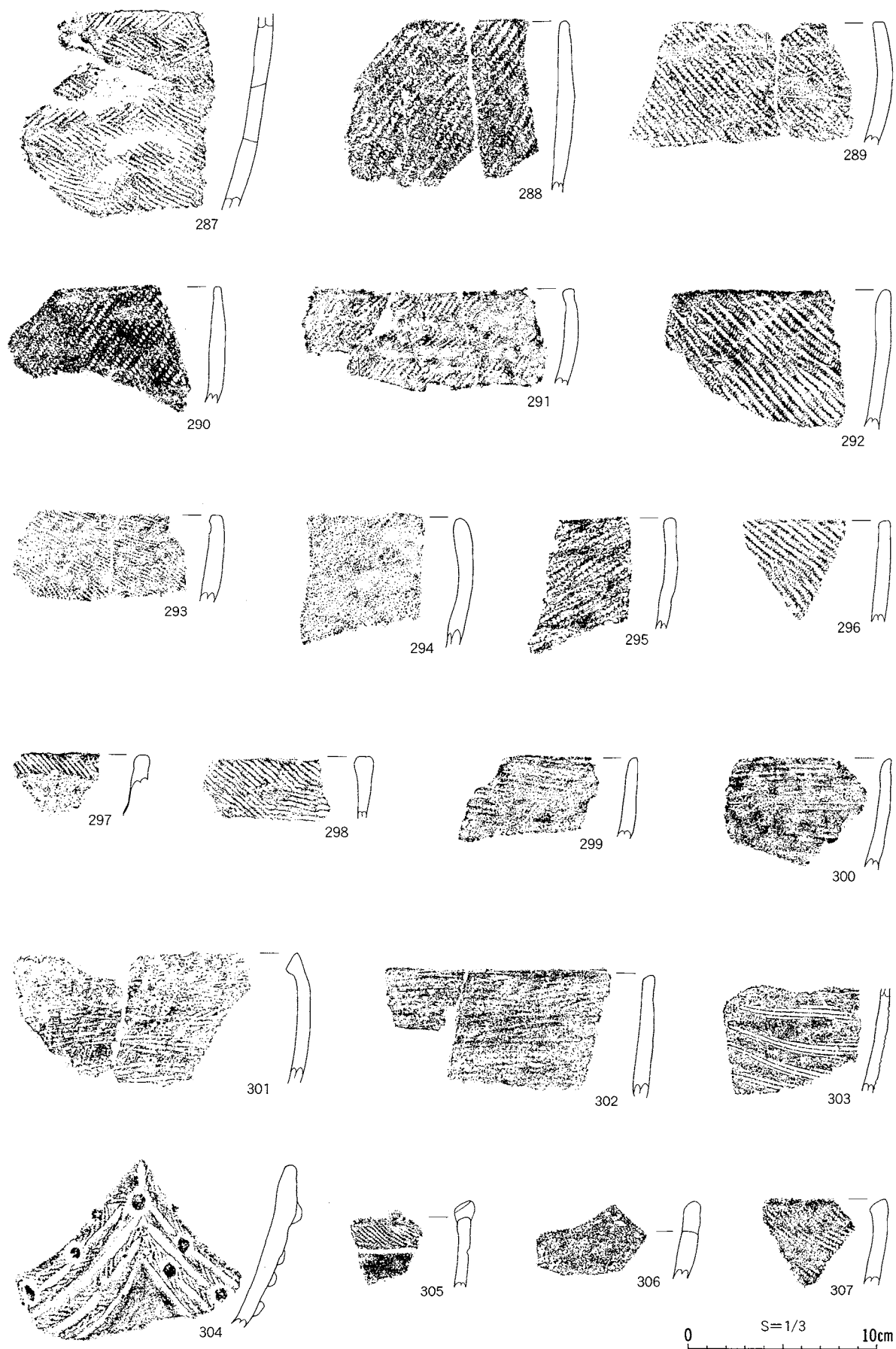


図56 旧河川跡出土土器(6) 3層-5

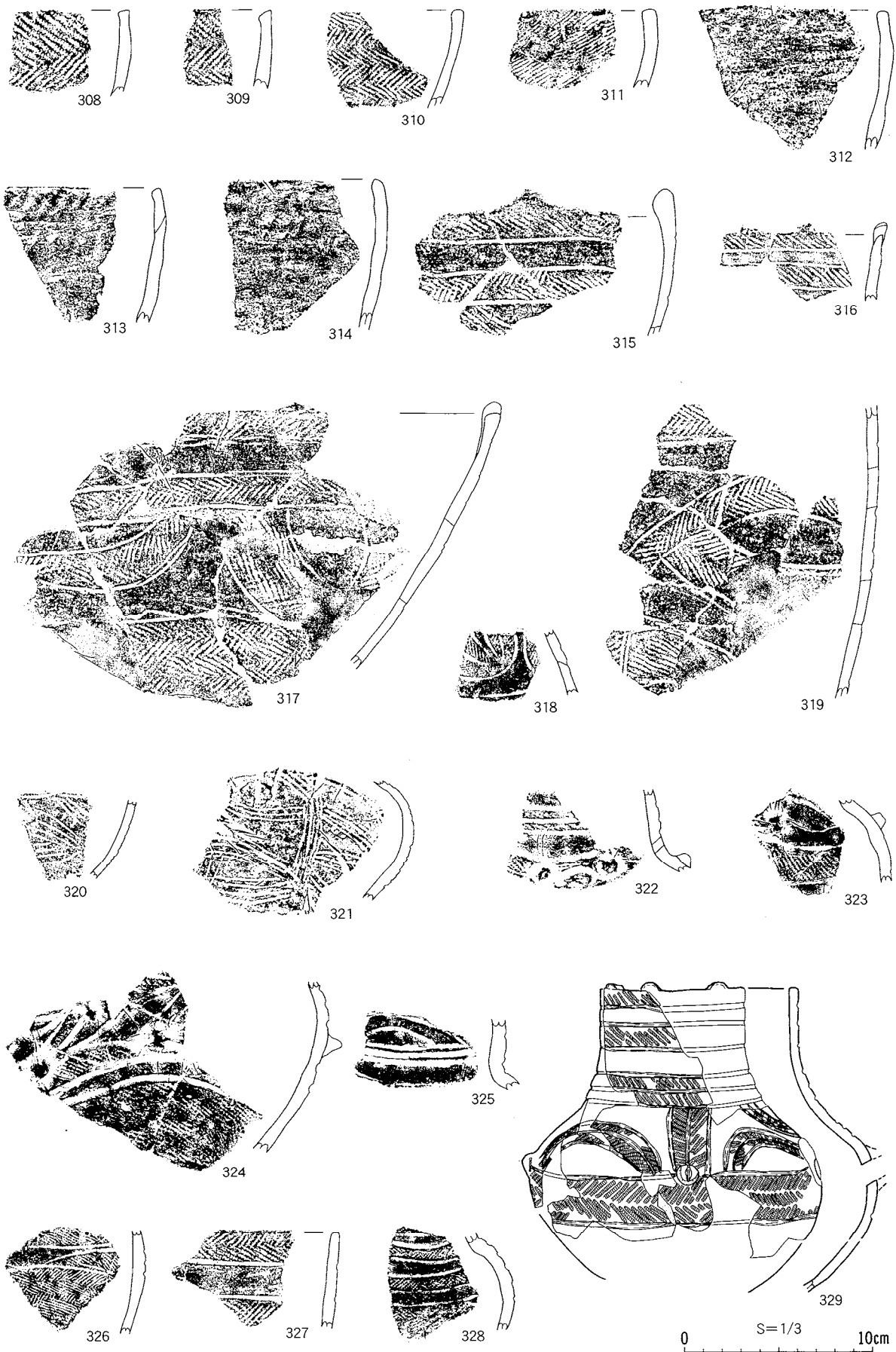


図57 旧河川跡出土土器(7) 3層-6

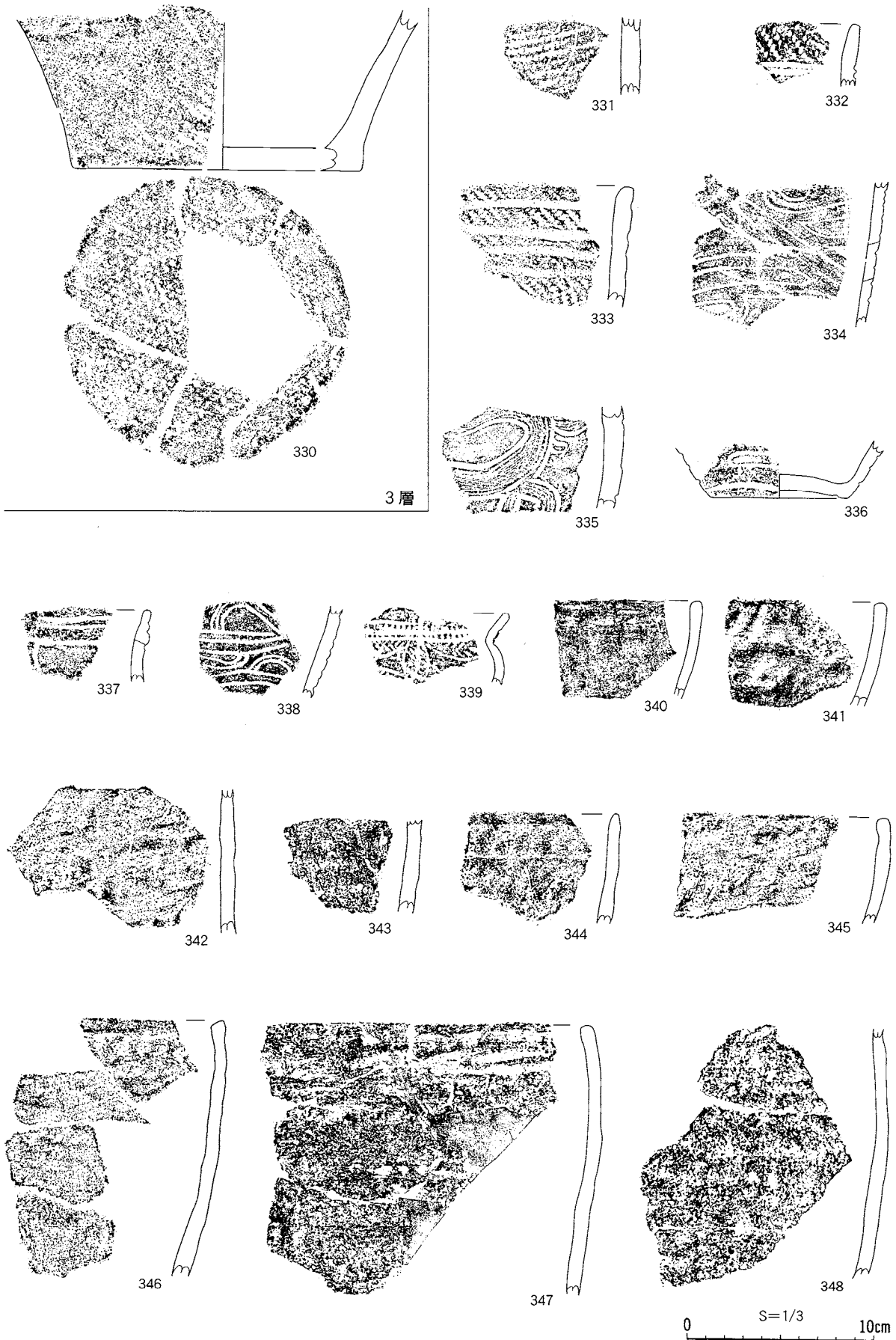


图58 旧河川跡出土土器(8) 3層-7、10層

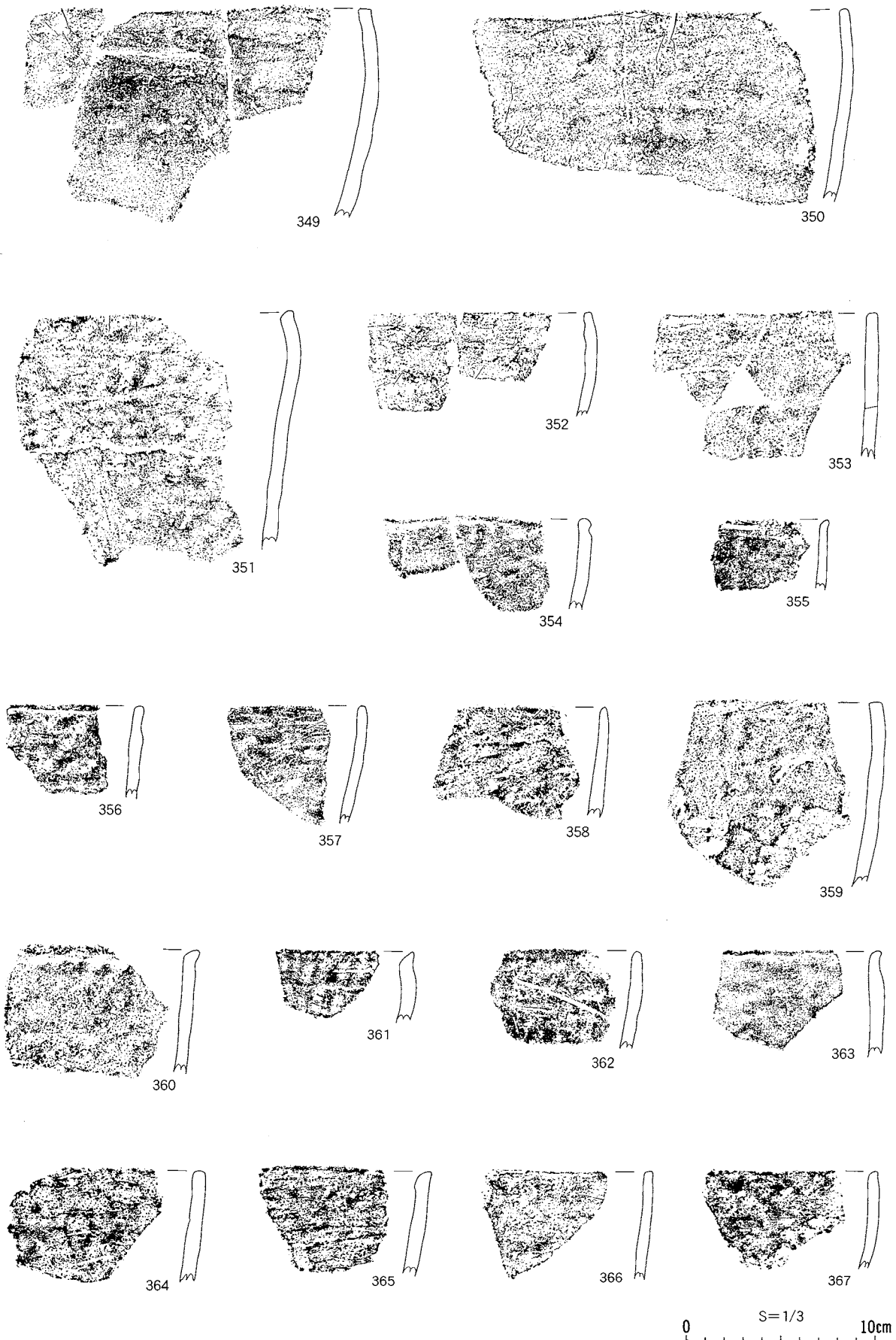


図59 旧河川跡出土土器(9) 10層-2

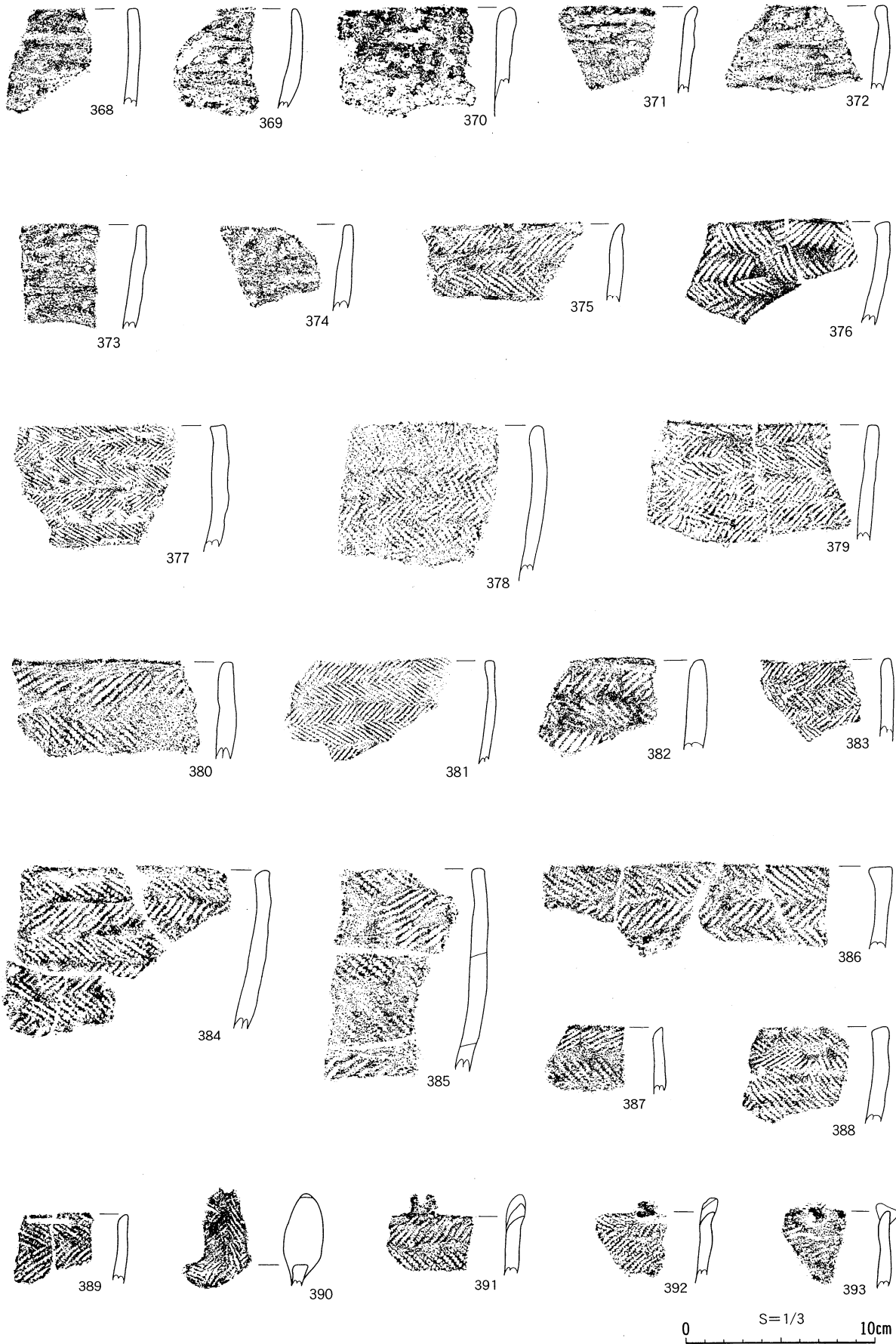


图60 旧河川跡出土土器(10) 10層-3

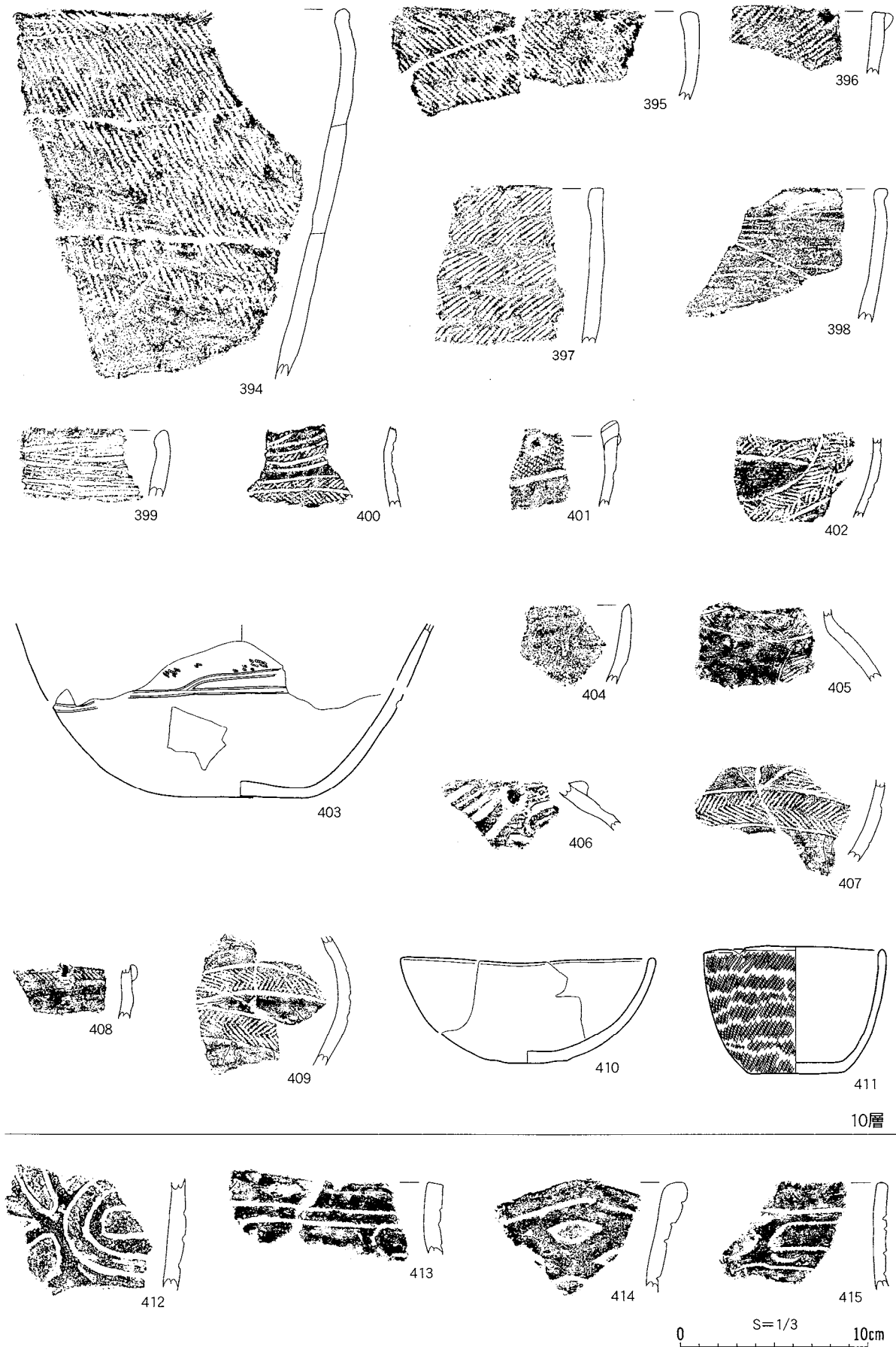


図61 旧河川跡出土土器 (11) 10層-4、13層

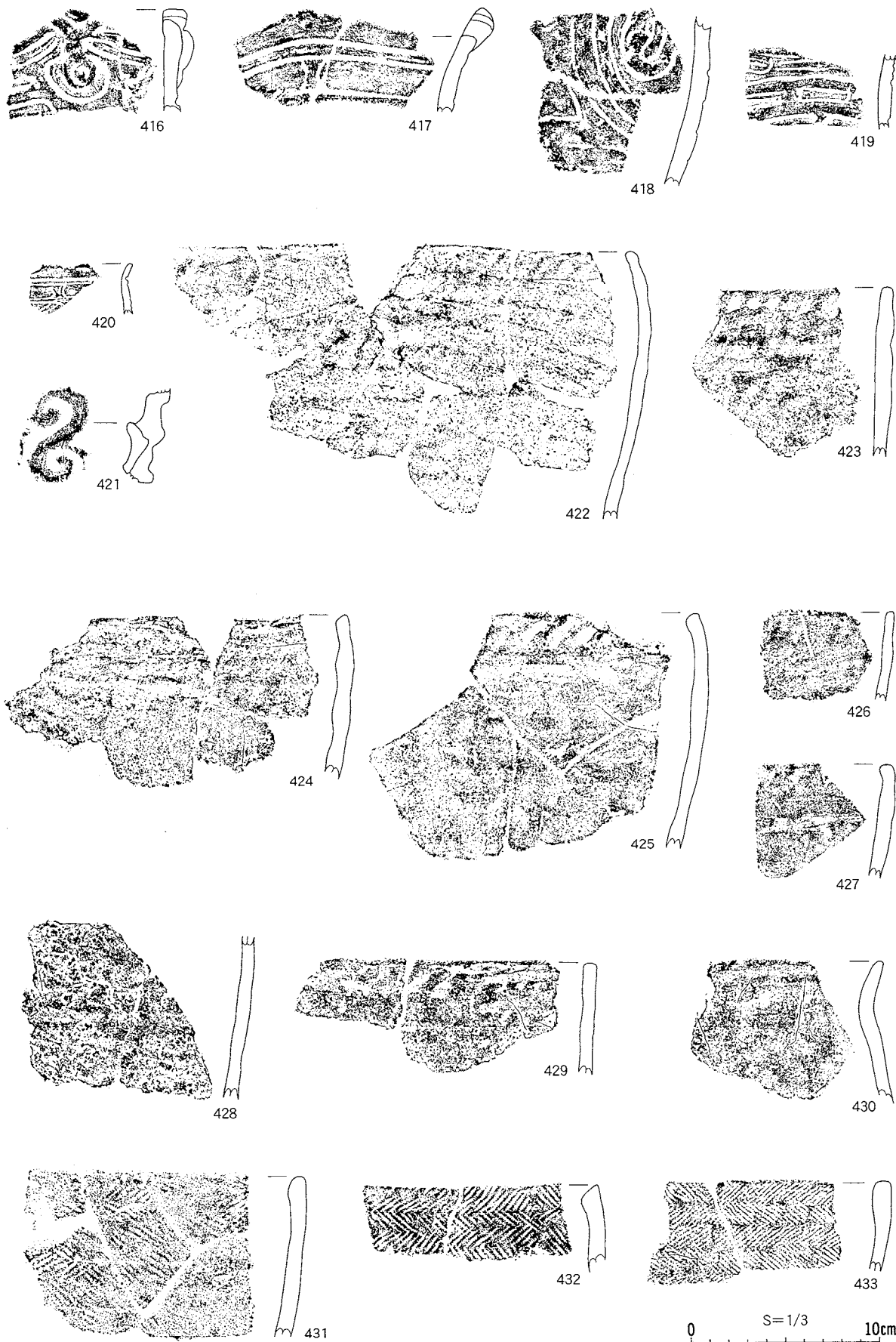


図62 旧河川跡出土土器 (12) 13層-2

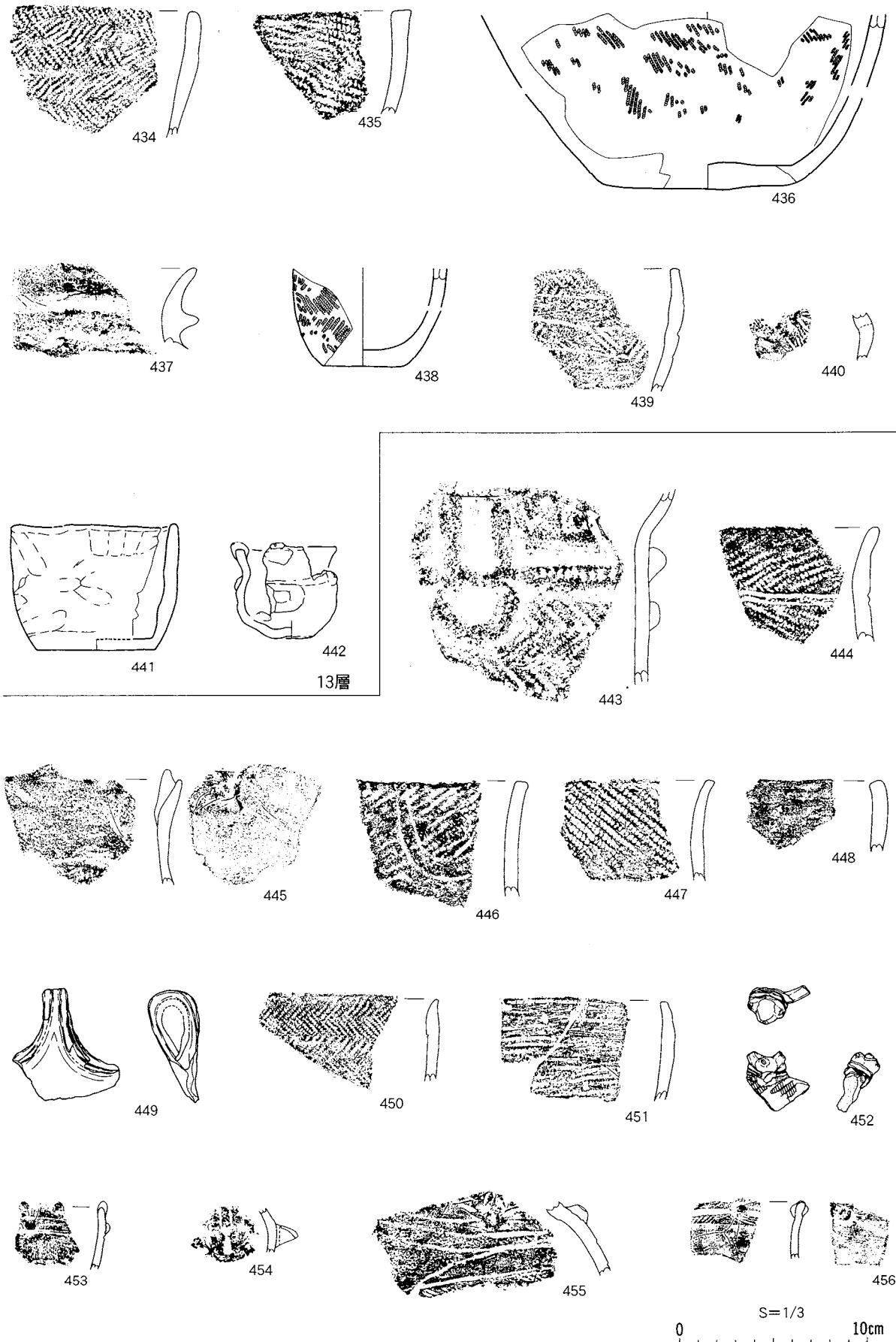


図63 旧河川跡出土土器(13) 13層-3、旧河川跡一括



無茎尖基 (S14) のものがある。S12は、石鏃の未製品である。

S15・16は、石錐である。S15は、両面加工のもので先端部に磨耗痕が明瞭に見られる。S16は素材剥片の片面のみを加工し、機能部を作出している。

S17～24は、石匙である。S17・19は、両極剥片を素材にした縦型の石匙である。S17はつまみ部の作出以外に、規則的な二次調整が見られない。S19は、刃部側を欠損するが、残存部の観察から両面の縁辺部の加工が認められる。S18は、縦長剥片を素材にし、打面側につまみ部を作出する。刃部は片面のみ加工されている。S20は、剥片を素材に、つまみを作出し、刃部は片面の一側縁のみに二次調整が施される。S21は、横長剥片を素材にし、つまみを打面側に作出し、刃部側は片面の縁辺に二次調整が加えられる。S22は、縦長剥片を素材にした横型石匙である。刃部側は片面の縁辺にのみ二次加工が施される。S23は横長剥片を素材にし、刃部は背面側の縁辺にのみ二次加工が施される。S24は、縦長剥片を素材にした横型石匙である。背面側はほぼ全面、腹面側は縁辺のみに二次調整が施される。

S25は、両面調整が施されるもので、その形態から筥状石器とした。S27・28は背面の縁辺にのみ、二次調整が施されるスクレイパーである。S29は使用痕のある縦長の剥片。S32は、三角形の突出部を5ヵ所作出していたと考えられる異形石器で、残存している突出部は2ヵ所のみである。両面の縁辺部に二次調整が加えられる。S33・34は、礫器と考えられ、S33は縁辺の三辺は片面からの加工、一辺は両面からの加工で、鋸歯状の刃部状を呈する。

S35～S47は、凹石・叩石・磨石である。複数の用途に用いられるものも多く、その場合、「叩凹石」「磨叩石」などと分類した。S35は、両面に浅い凹みが、一側面に叩き痕が残される叩凹石である。S36は、両面に浅い凹みが1ヵ所ずつ残される凹石である。S37は両面に浅い凹みと深い凹みが残され、上下の両端部に叩き痕があり、破損が見られる叩凹石である。S38は両面に浅い凹みと磨痕が残る磨凹石である。S39・40・42～45は叩凹石である。S42～45のように、石英安山岩や流紋岩の細長い石材も利用される。S41は片面に深い凹みと破損跡、もう片面には磨痕が多く残る磨凹石である。S46・47は、磨叩石である。S48は、凝灰岩製の石皿である。使用面の縁辺にはやや高くなった縁が作り出されている。S49は、叩き痕も残るが、砥石にも用いられたものと考えられる。幅2～4mm、深さ2mm程度の断面V字形の溝が4本、一面の端部に近いほうに残される。

S50は、上下を欠損する石棒の一部と考えられる。全面に成形時の敲打痕と擦痕がよく残る。

S51は、上半部を欠損する石刀である。石材を荒打ちし、その後、磨いて整形した痕跡がよく残る。刃部側と考えられる柄が突出する。柄より上位は平坦に整形され、刃部に近づくにつれて、平坦部が狭くなる。

(永嶋 豊)

### 3 第101号遺物集中区・(図69～72)

XⅢB-195グリッドを中心とした区域とそれに隣接する旧河川跡西側の堆積土内から、縄文時代晩期後葉と考えられる土器群が出土した。両地点で、同一個体の破片を含むため、ここにまとめて報告する。一部、弥生時代前期の砂沢式期の遺物を含むが、概ね「大洞A' 式古段階」に相当するものが

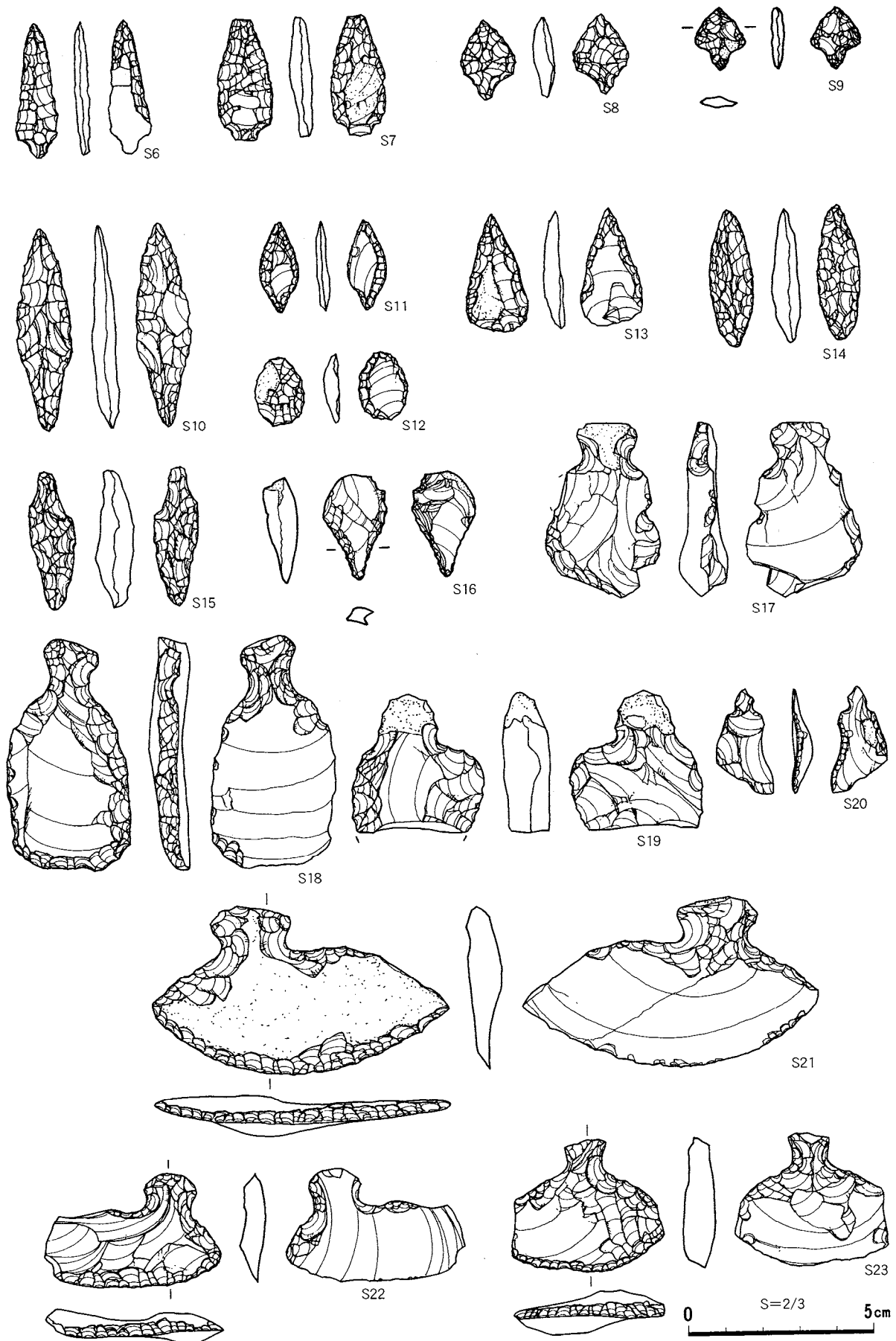


图64 旧河川跡出土石器(1)

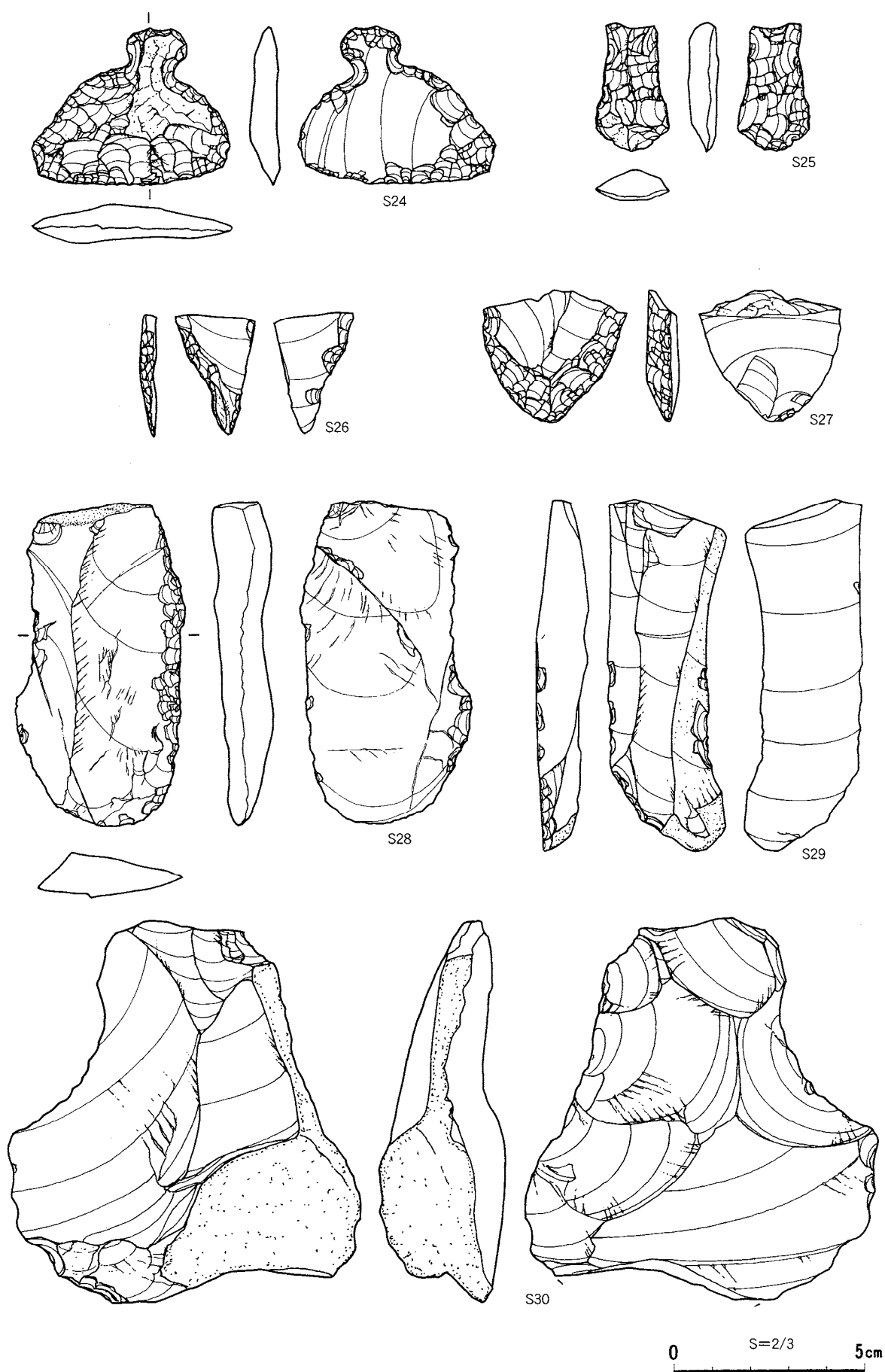


図65 旧河川跡出土石器（2）

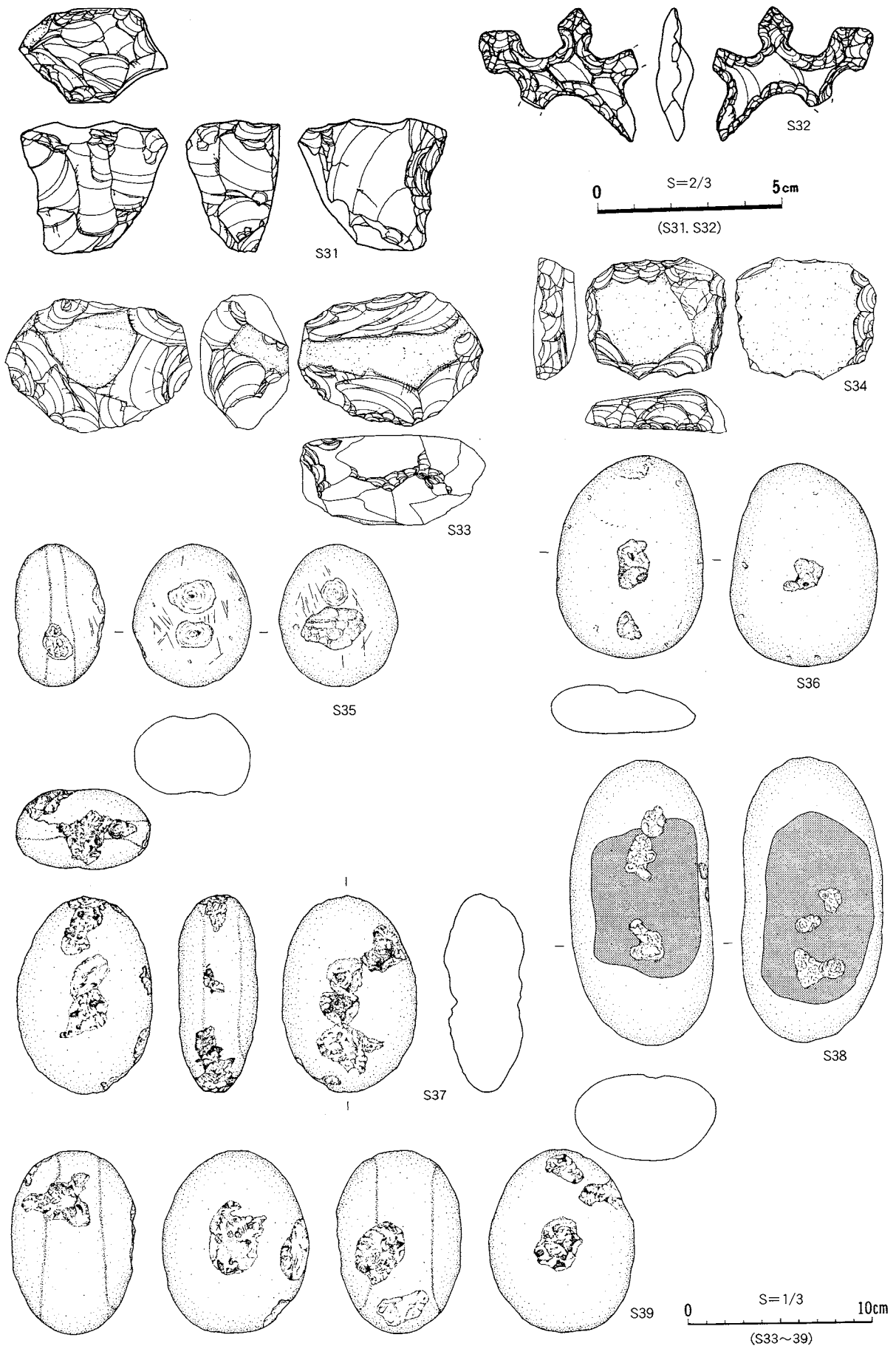


図66 旧河川跡出土石器（3）

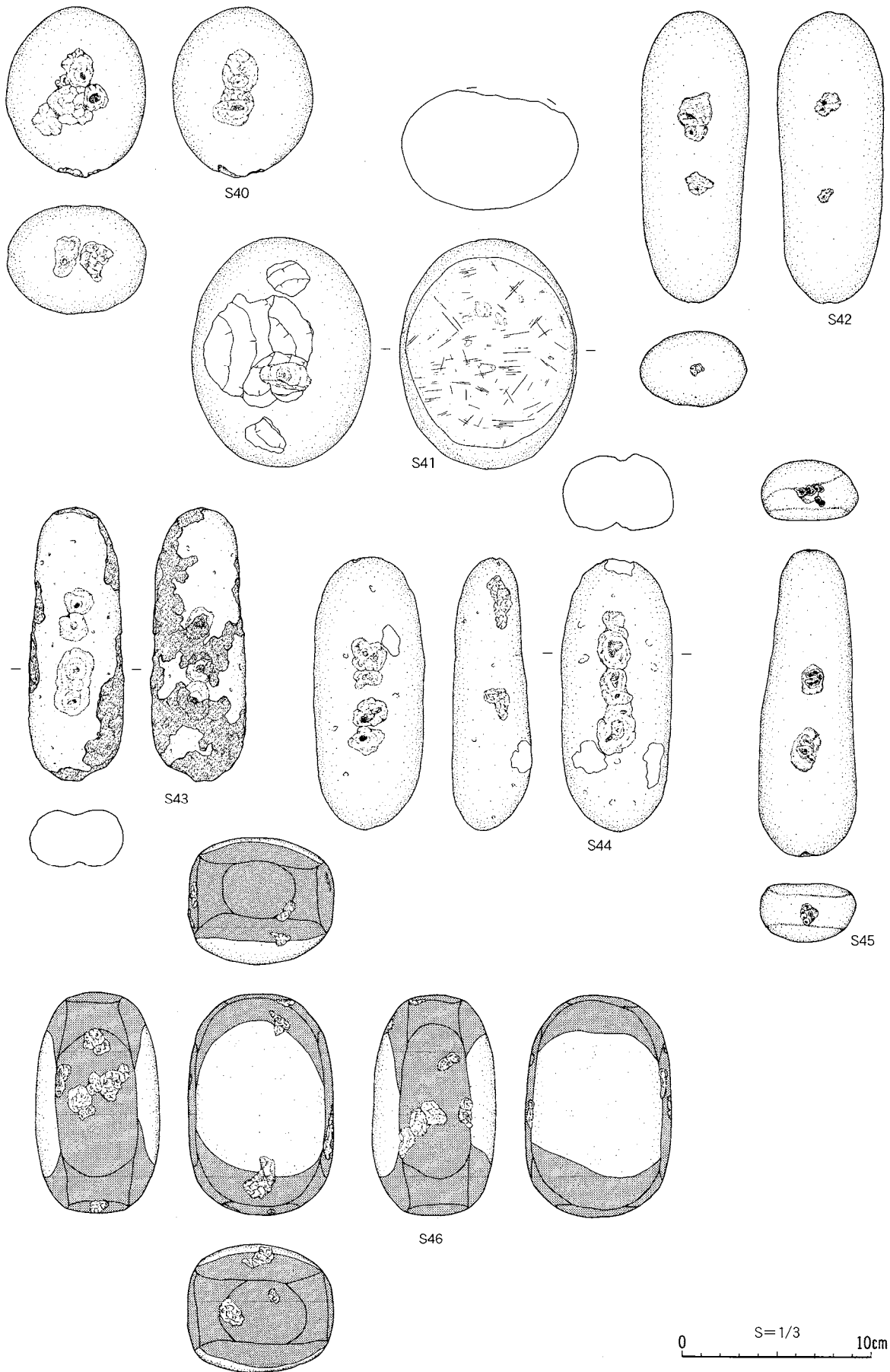


図67 旧河川跡出土石器（4）

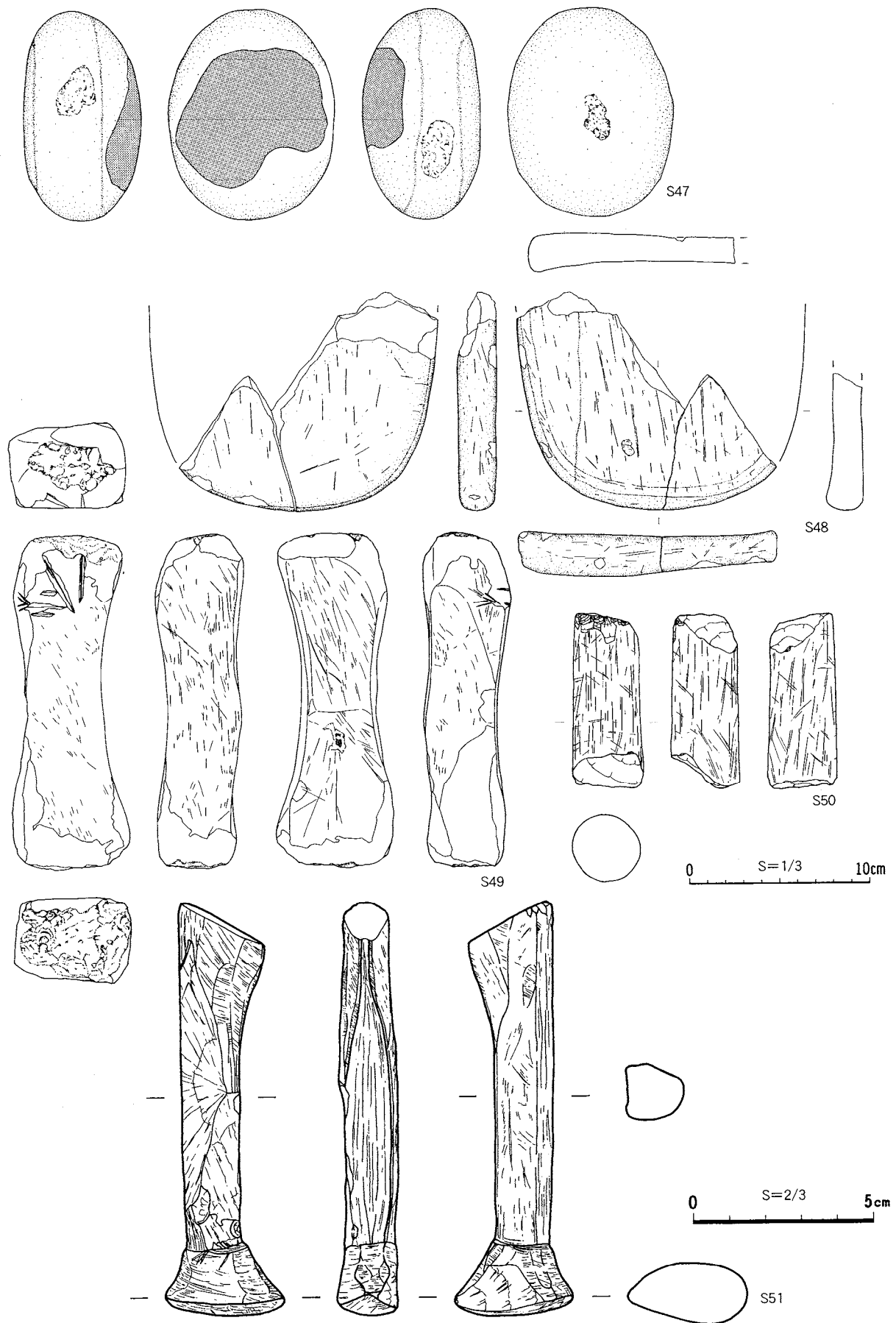


図68 旧河川跡出土石器 (5)

主体を占めている。

【遺物集中出土区1 出土土器】(図69～72)

出土土器群の中で、主体を占めるのは、縦方向の条線文・条痕文を施文した後に、口頸部に3～5本の平行沈線を施す煮沸用の深鉢である。このタイプの煮沸用の深鉢は、縄文時代晩期中葉～後葉に、青森県津軽地方で盛んに用いられるもので、当遺跡においては縄文施文の煮沸用深鉢よりも目立つ。条線の施文工具幅は10～20mm程度である。

口頸部の平行沈線と組み合わせられる体部文様として、無文や縄文もある。

I層出土土器で、図示したものは6点のみである。圧倒的にII層出土のものが多く、I層出土のものも、本来は2層に包含されていたものと考えられる。457・458は、縦方向の条線文施文の後に、5本の平行沈線が施文される。

460は、全面にRL縦走縄文を施した後に、口頸部に瘤貼付などで、平行工字文を構成する煮沸用の深鉢と考えられる。沈線幅は4mm程と太いが、沈線断面形態は三角形状であり、砂沢式の特徴からは外れる。461は、全面にRL斜行縄文が施され、口頸部の4本の平行沈線の2本目と3本目を縦の幅広の短沈線で結び、平行工字文化している。短沈線によって切られた向かい合う隆線端部には、僅かな盛り上がり確認できる。工字文直上の口唇部には、二又の突起が付される。外面に炭化物が付着しており、煮沸用の深鉢である。462は口縁部のみ若干薄く、無文となる煮沸用の鉢と考えられる。

463～511はすべてII層出土である。464は口唇部が押圧による波状口縁となる無文の深鉢である。465・466は、縦方向の条線のみが施される深鉢で、465は押圧による波状口縁となる。480は平行沈線と無文体部の組み合わせである。472は幅2mm弱の細い沈線が施され、太い沈線が多い他の土器と比べて異質である。470～480は、条線文と口縁部に3～5本の平行沈線が組み合わせられる。470は、口頸部付近のみに横方向の条線が施され、その後には施された縦方向の条線が目立たなくなっている。

476と477は同一個体であり、押しつぶされたような状態で出土した。476～480まではすべて、条線文と4本組平行沈線の組み合わせである。481～485までは、地文不明の土器である。486は無文の体部と4本組平行沈線の組み合わせで、口唇部に斜めの刻みを施す。

487～492は、頸部で微妙に屈曲するものである。487は幅1.5mmほどの細い沈線で平行沈線が施され、口縁部が押圧による波状口縁を呈するものである。488は口縁内面がやや肥厚する。489は、右下がりの浅い条線文施文後に、7本の細い平行沈線が施されるもので、頸部で屈曲し、頂部二又の突起が付される。頸部を意図的に凹状に整形している。

490は、押しつぶされたような状態で出土した。口縁内面が肥厚する。491は上から2本目が、連続短沈線となる装飾的なもので、これも口縁内面が肥厚する。492は内面沈線が施される。

493は、断面半円形の太い沈線と大きめの瘤が平行工字文に貼付される、煮沸用の有文深鉢である。口縁内面にも上下幅6mmの幅広の沈線が施され、口縁外面にも縄文が施されており、494と共に弥生時代前期の砂沢式の特徴を有する。494は頸部に無文帯を有する煮沸用の有文深鉢で、砂沢式期に特徴的な形態である。495も同様の形態であるが、沈線はやや細めで、内面沈線が施される。496は、頸部に瘤貼付の平行工字文が施される深鉢である。

500・501は口頸部平行沈線と体部縄文が組み合わせられるものである。503は矢羽根状沈線文また

は波状工字文が施される鉢と考えられる。

504は体部全面に、変形工字文が重層する鉢である。内外の沈線内には赤色顔料が明瞭に残る。変形工字文を構成する三角形の頂点には、左右にφ2mm程度の小さな貼瘤が付される。変形工字文の上部には向かい合う二又の突起が見られるが、砂沢式期のものほどは発達しない。

505は完結型の変形工字文が口頸部に施される浅鉢である。沈線が細く、文様帯が狭く、大洞A'式古段階の特徴を示している。506は、π字文が施される浅鉢・高坏である。507はシャープな沈線で、変形工字文が施文されるもので、口唇部にも沈線が施される。

509は、無文の壺の頸肩部、510・511は煮沸用の台付深鉢・鉢の台部である。

#### 4 旧河川跡出土・縄文時代晩期後葉の遺物 (図73~77)

沢1層出土の土器は、512~526である。512は口唇部に指頭状の間隔で押圧が加えられ、RL斜行縄文が施される深鉢。513は口頸部の平行沈線を、短い弧線で結び平行工字文を作り出している。515は521と同一個体であり、また集中出土区1の461とも同一である。4本の沈線中、2本目と3本目を縦の短沈線で結び、平行工字文を作り出している。

516は、口唇部に指頭状の押圧を加え、波状口縁としている。頸部に、ミガキの施される無文帯を有し、口縁部と体部にはRLの縦走縄文が施される。

517~519は同一個体で、頸部に無文帯を有する煮沸用深鉢である。口唇部に押圧が加えられ波状をなし、通常は頸部文様帯に平行工字文が施文されるものが多い。縄文はLRの縦走である。

522・523は、器面の磨耗が著しいが、頸肩部に8条の沈線が施され、平行沈線文と考えられるが、一部沈線が斜行するものも認められ、あるいは変形工字文の可能性もある。

524は口縁部に二又の突起、頸部に短沈線列が施され、その下におそらく波状工字文またはその祖形文様が施される台付深鉢と考えられる。

525・526は変形工字文が施されるもので、526は円板状突起が変形工字文の上位に位置する。変形工字文の頂部には抉りと粘土のよせが確認できる。貼付される粘土粒は比較的大きく、φ4mm程度である。

527~532は、沢2層出土土器である。529は、変形工字文が施される鉢である。無文帯を挟んだ後に体部に、もう一段変形工字文が配置されることも予想される。文様要素の三角形の頂部・中点内に刻みが加えられる。532は、煮沸用の台付深鉢の台部である。

533~545は、沢3層出土土器である。縄文のみの深鉢が、1点のみ見られる(533)。534~537は縄文と平行沈線文が組み合わされるもの、538~541は条線文と平行沈線文が組み合わされるものである。537は口唇部に斜めの刻目が施される。543は、微小な瘤で構成された平行工字文が施される鉢。544は、貼瘤の大きさ、沈線の太さや半円形の沈線断面形から、砂沢式期のものと考えられる。

546~560は、沢6層出土土器である。546・547はそれぞれ、縄文・条線のみが施された深鉢。548は、平行沈線が施される深鉢に、二又の突起が付されるものである。549~551は縄文と平行沈線が組み合わされる深鉢。553は、遺物集中出土区1の489と同一個体であることから、両区の遺物



は同時期のものを含む事がわかる。

557は、頂部二又の突起が付され、平行沈線の下に斜沈線または波状工字文が施される（台付）深鉢・鉢で、外面に炭化物が明瞭に残る。559は、完結型の変形工字文が施される浅鉢である。変形工字文の頂点間中点や底角部に抉りこみが認められる。

560は、頂部二又の突起が付され、平行工字文または流水工字文が施される浅鉢である。口頸部と体部の屈曲部に、2個/cmの刻目が施される。

561～566は、沢13層上面出土である。561は7本の平行沈線とLR縦走縄文が施される深鉢・鉢であり、大洞A式～大洞A'式古段階に見られる平行工字文が施されることが多い煮沸形態である。

563は、上面が「逆Sの字形」になる突起が付され、無文帯+平行工字文が施される煮沸用の有文深鉢である。566は器面の磨耗が著しく、文様が確認しづらいが全面に雑な平行沈線文が施されているようである。

567～579は沢13層出土土器である。568・569は、口唇部が薄く処理され、体部に縦走縄文が施される。570は、指頭状の押圧で波状口縁となる、LR縄文が施される深鉢である。571～574は縄文と平行工字文が組み合わされる深鉢である。

577・578は、波状工字文が施される壺である。頸部には、推定で12単位となる瘤を用いた平行工字文が、その下には波状モチーフが途切れずに一周巡る波状工字文が施される。

580は沢14層出土であり、内面刻み突起が付され、口頸部に平行沈線と連続短沈線が巡る（台付）鉢である。

581～587は、層位不明の沢出土の土器である。582・584は平行工字文と縦走縄文が施される煮沸用の深鉢である。585は、波状工字文が施される煮沸用の台付鉢である。文様施文前に、器面全体にLR縦走縄文が施される。口縁部には厚さの薄いものと厚いものの2種の二又の突起が付され、頸部には刺突列が巡る。586もおそらく波状工字文が施される、煮沸用の台付鉢であり、突起外面や文様間に平面形三角形の刺突が充填される。587は楕円文を利した工字文風の文様が施される台部である。

#### 【遺物集中出土区1・旧河川西側 出土石器】(図76・77)

縄文時代晩期後葉の土器のみが排他的に出土した、遺物集中出土区1と旧河川西側で出土した石器も同時期である可能性が高いので、ここにまとめて掲載した。

S52～S56は、集中出土区1から出土したものである。S52は有茎石鏃で、側縁部から茎部に斜めに移行する形態である。S53はつまみを有する石錐で、刃部側は両面加工であるが、つまみ側は片面の側縁のみ二次調整が施される。つまみ側が打面となる縦長の剥片が素材に用いられているが、打面側の折り取りが行われた可能性がある。

S54は縦長剥片を用いた石匙で、素材剥片の軸に対して斜めのつまみを有する。つまみ部の作出には、剥片の打面の反対側に残った自然面部分が選択されている。打面側の厚い部分は、剥離によって薄く加工され、その後、刃部背面側の縁辺にのみ二次調整が施されている。S55は、スクレイパーに分類したが、刃部と考えた部分の剥離が不規則で、人為的な二次調整ではなく、偽石器の可能性もある。

S57～S63は、旧河川西側の出土である。S57は有茎平基の石鏃で、当遺跡では珍しい黒曜石が用いられている。S58は、刃部の片面側にだけ二次加工が施される石匙で、つまみには打面となった自然面が残る。S59は、ほぼ原石の大きさを残す石匙と考えられ、小さな丸石状の原石を両極剥離によって素材剥片を得ている。刃部は自然面を残す側にのみ二次調整が施される。

S60は剥片の周縁部を加工した、スクレイパーである。S61は横長剥片を素材としたもので、形状から筥状石器に分類したが二次調整は多くなく、偶然このような形に剥離した剥片である可能性もある。S62は剥片の鋭利な縁辺を利用した、使用痕ある剥片である。S63は細粒凝灰岩の扁平な石器である。片面は平坦に加工されているが、用途は不明であり、同様の形状のものは第105号土坑でも検出されており、軟質の石材である為、利器とは考えず、石製品に分類した。

(永嶋 豊)

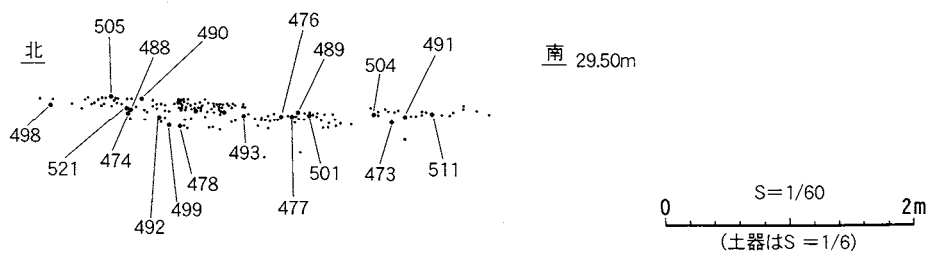
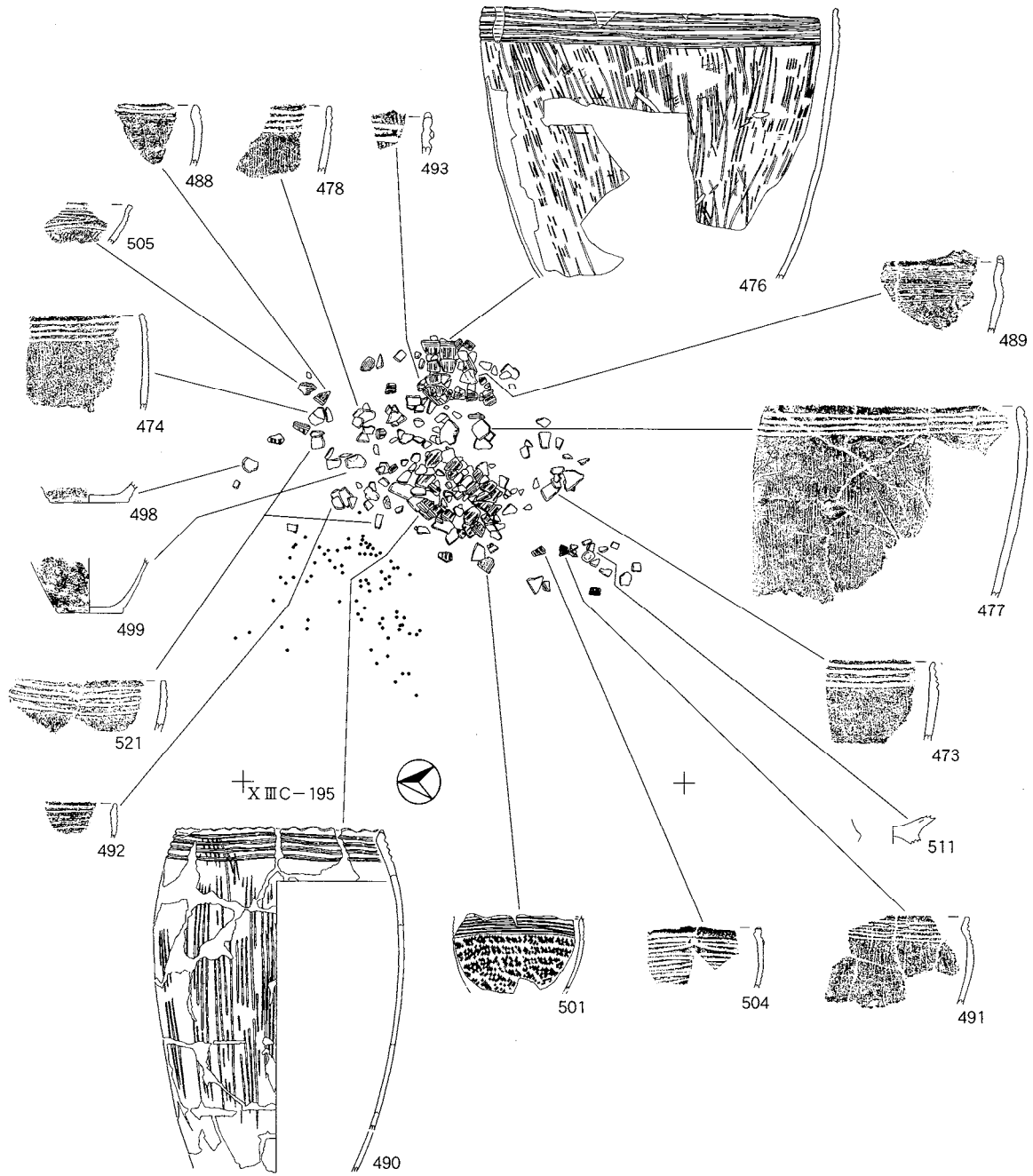


図69 第101号遺物集中区 遺物出土位置図

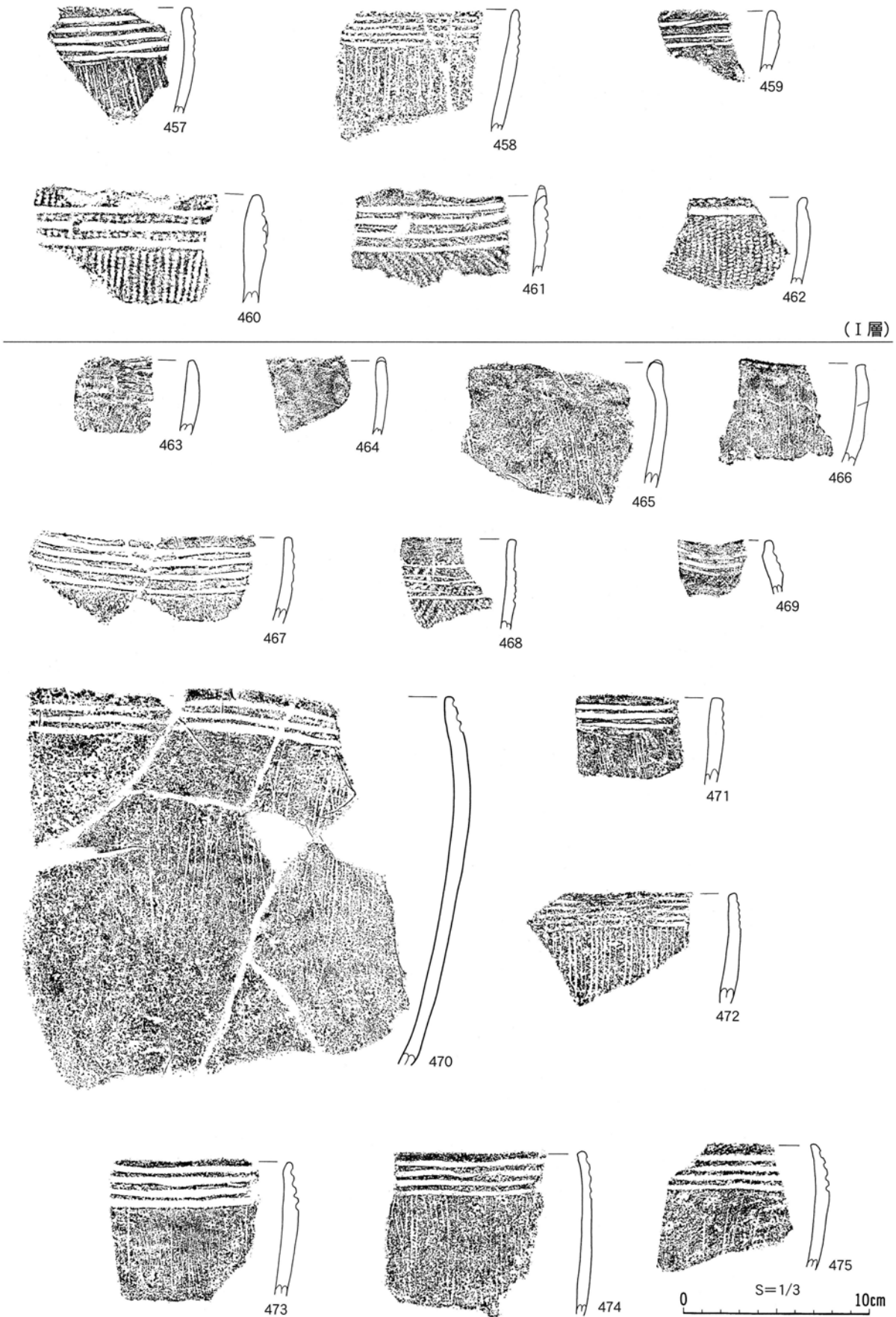


图70 第101号遺物集中区 出土遺物 (1)

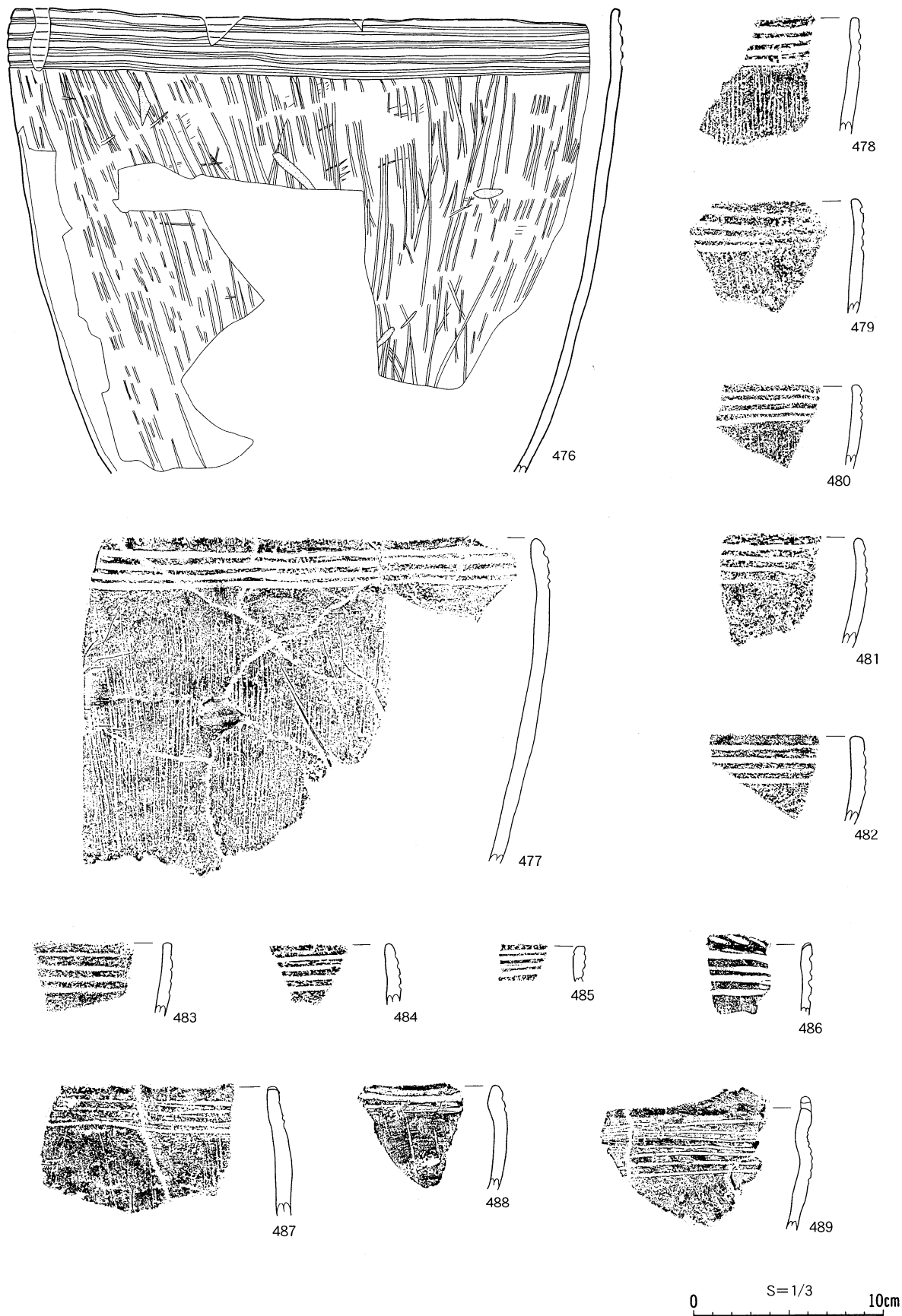


图71 第101号遺物集中区 出土遺物（2）

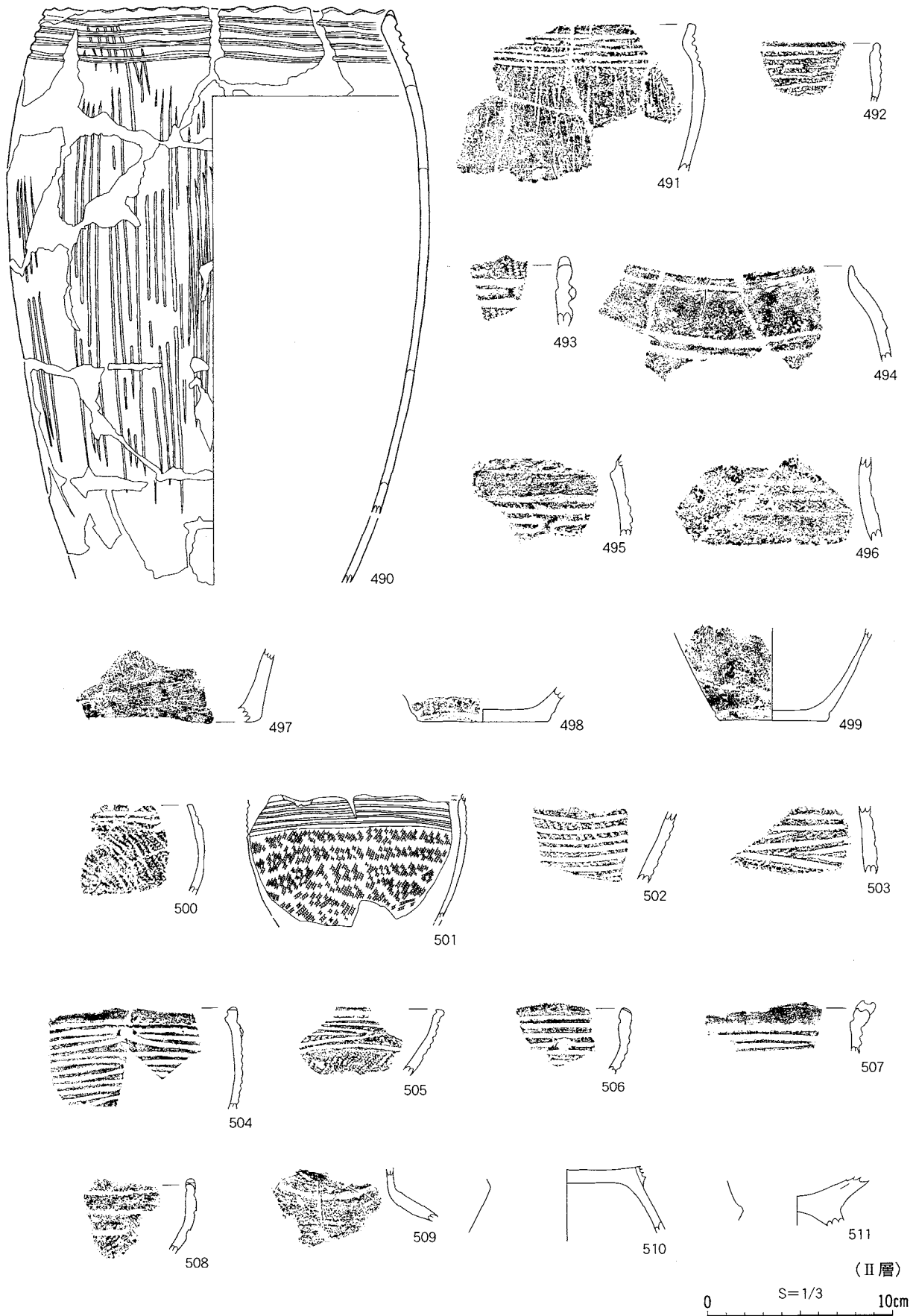


图72 第101号遺物集中区 出土遺物 (3)

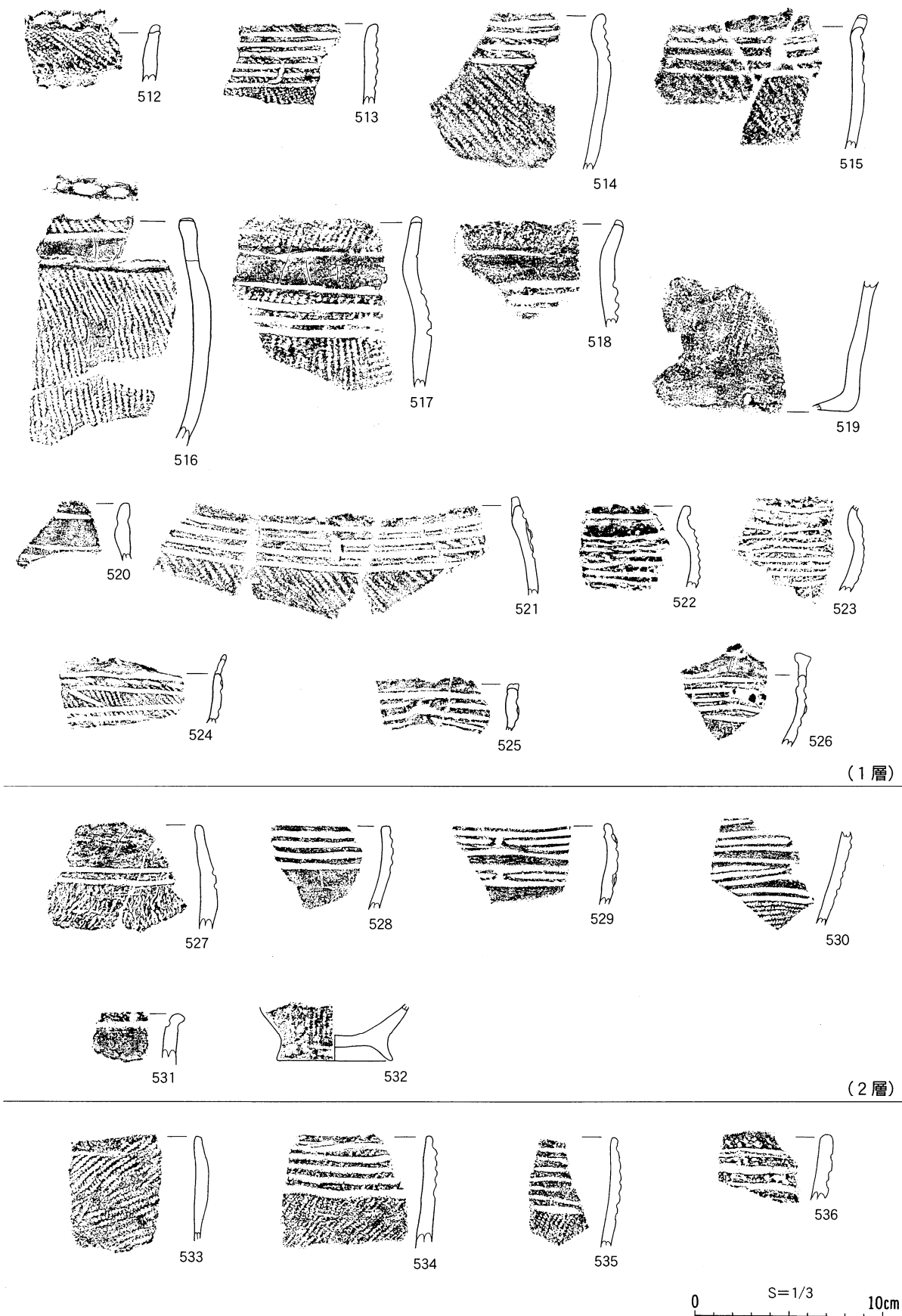


图73 旧河川跡出土 縄文時代晚期後葉遺物 (1)

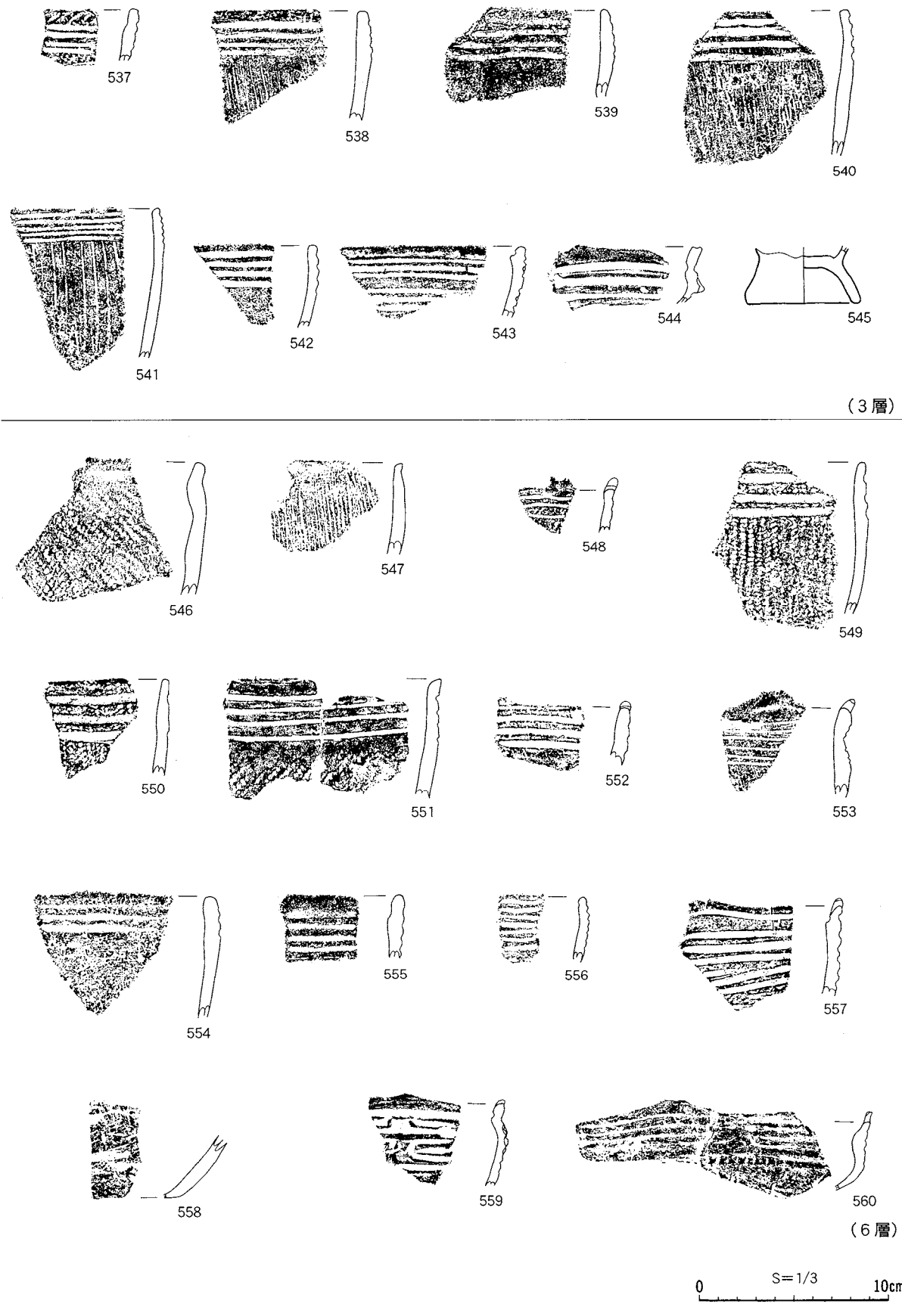


図74 旧河川跡出土 縄文時代晚期後葉遺物(2)



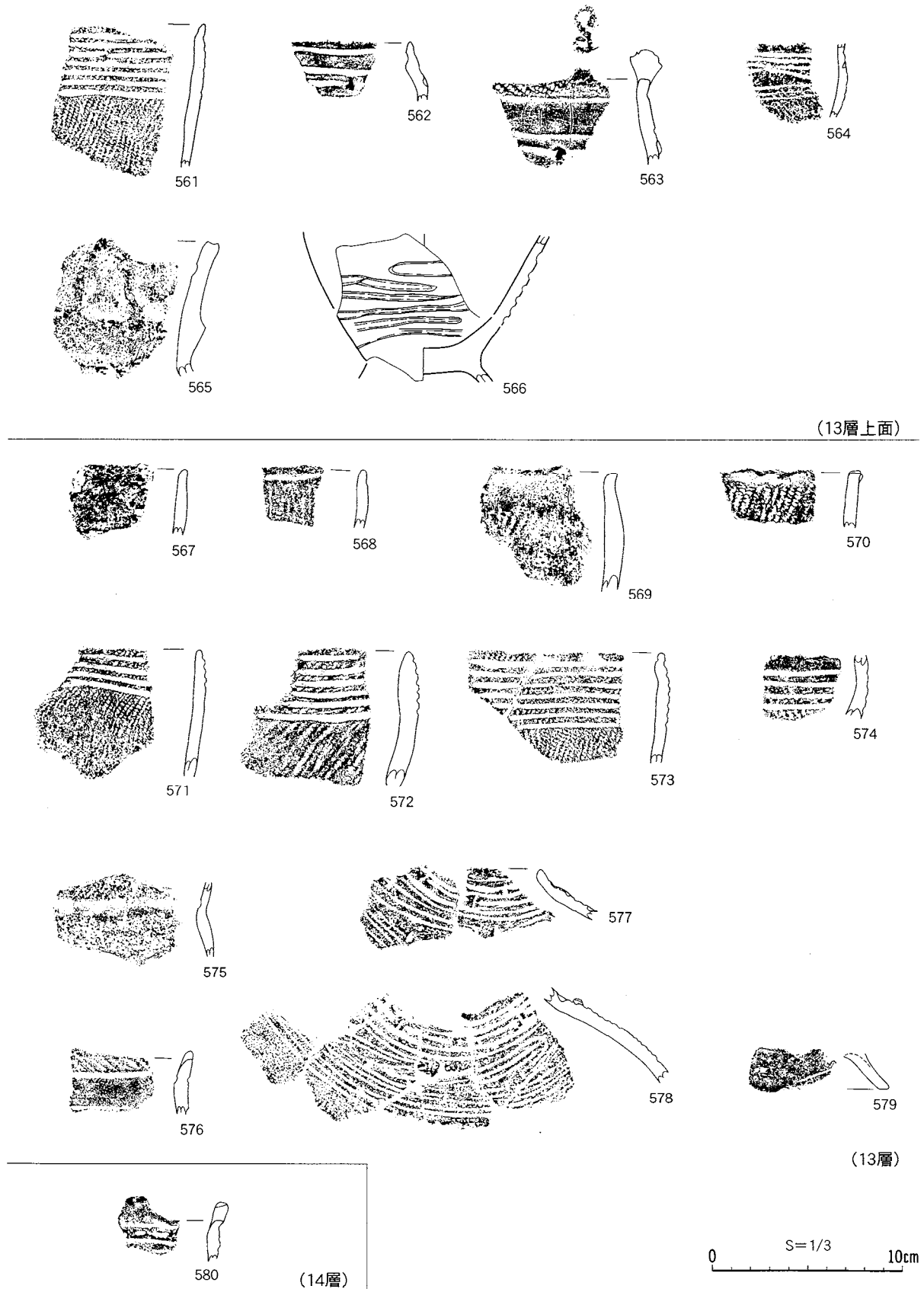
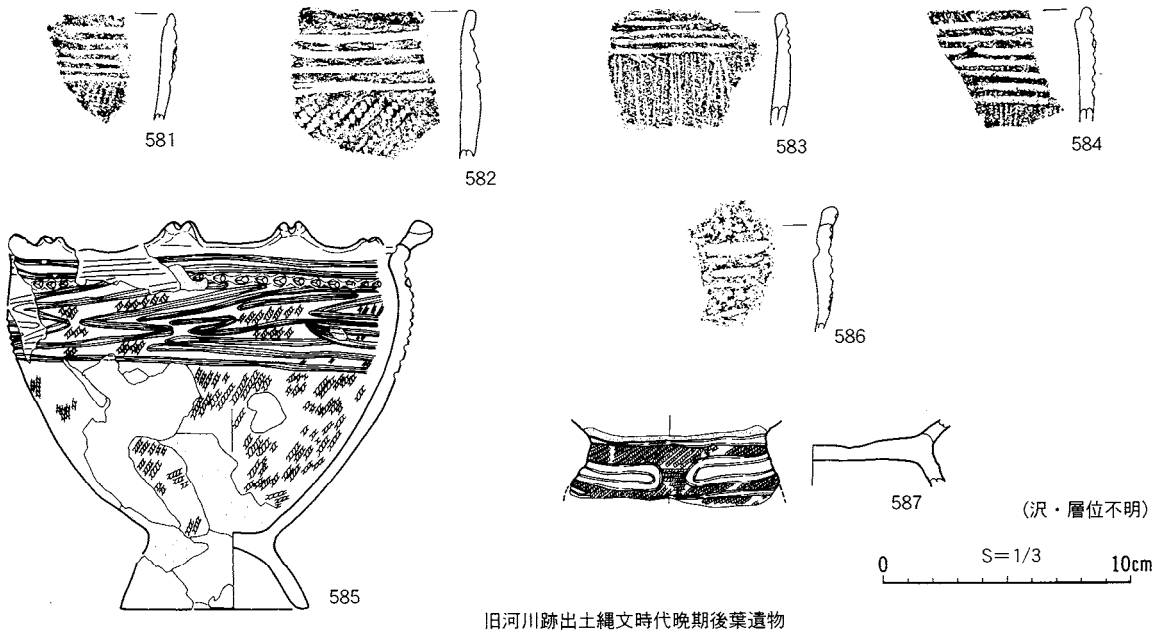
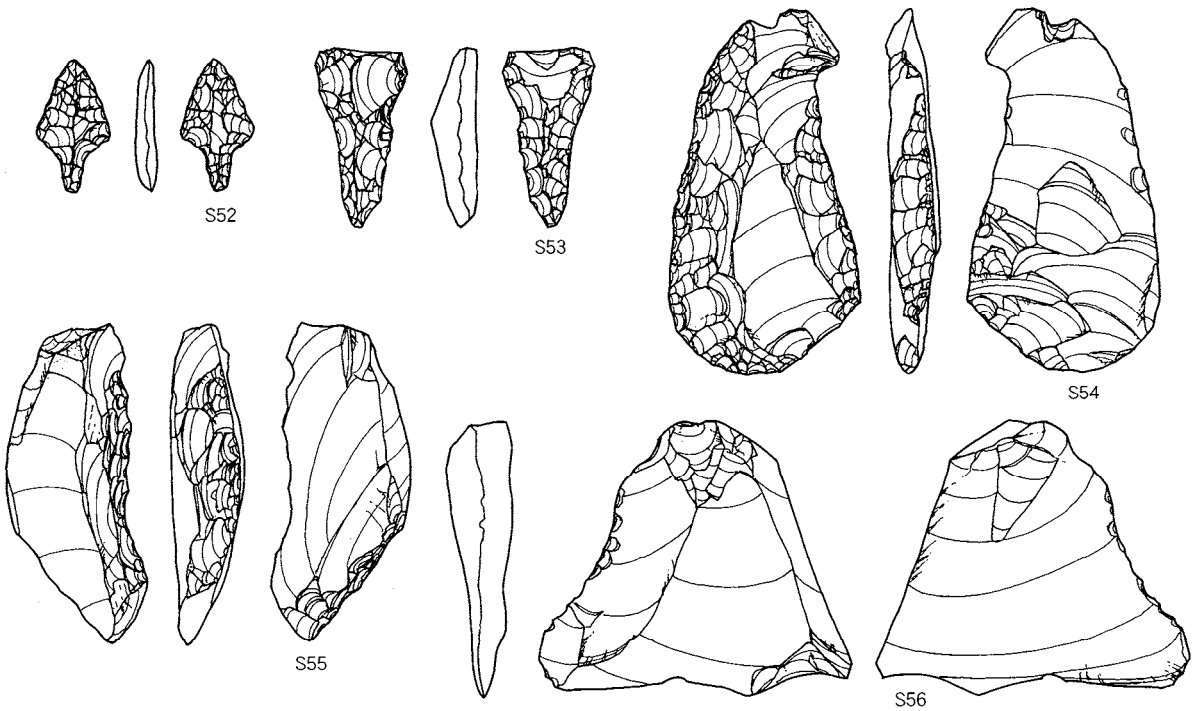


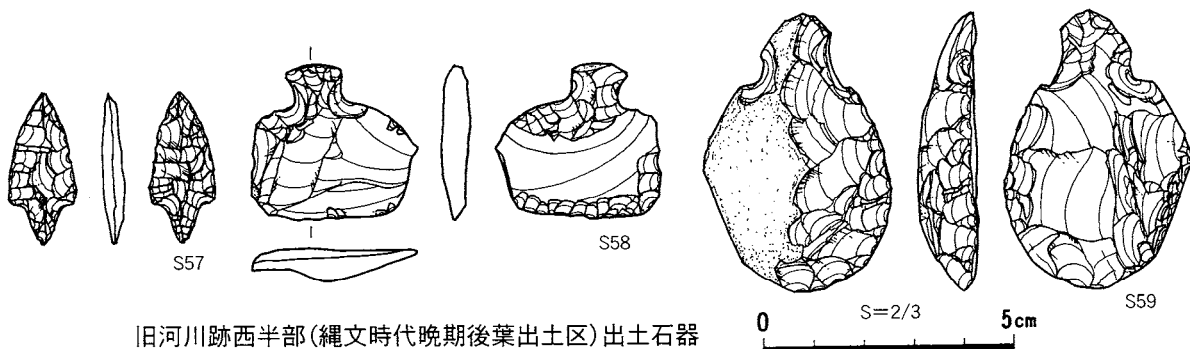
図75 旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (3)



旧河川跡出土縄文時代晩期後葉遺物

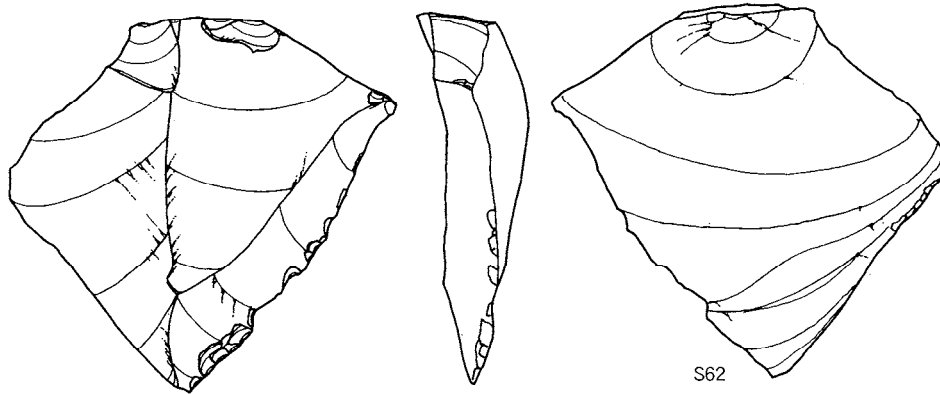
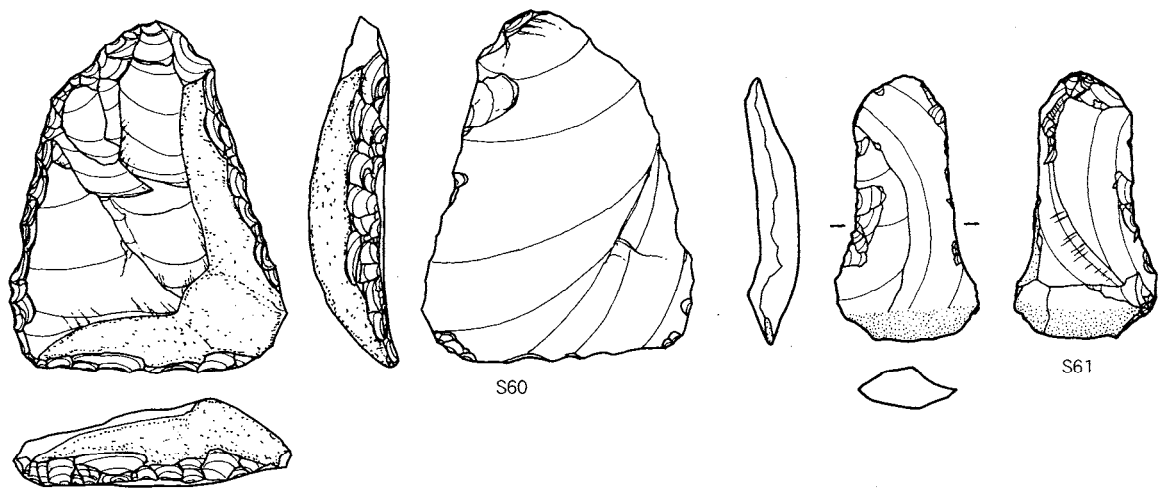


第101号遺物集中区出土石器



旧河川跡西半部(縄文時代晩期後葉出土区)出土石器

图76 第101号遺物集中区・旧河川跡西半部出土石器



0 S=2/3 5cm



0 S=1/3 10cm

图77 旧河川跡西半部（縄文時代晚期後葉出土区）出土石器

## 第6節 遺構外の遺物 (図78~87)

### 土器 (図78~82)

588・589は、緩やかに外反する深鉢の口頸部で、共に縦方向にLR縄文が施されるもので、縄文時代中期末の大木10式期と考えられる。

590~610は、縄文時代後期前葉の土器と考えられる。590~592は、網目状撚糸文が施される深鉢である。593は平坦口縁の深鉢で、楕円文が施されている。594~606は、大波状口縁の有文深鉢で、楕円文が施されるものが多い。細めの沈線を、先端が扁平な篋状の施文工具を立てた状態で、深めに施文するものが目立ち、沈線内の調整や重ね描きはあまり見られない為、沈線の切り合いが明瞭に残る。597・599は、口縁波頂部に楕円の沈線文が施され、口唇部にも沈線が見られる。600は、細く、やや粗雑な沈線で文様が構成されるもので、他のものに比べて新出の様相を示す。601~603は、波頂部から垂下する、粘土紐貼付の隆帯で装飾がなされる。607は渦巻状文に充填縄文が組み合わされるものである。609は壺の口縁部、610は壺の頸肩部に付される橋状把手である。

611~670は、縄文時代後期中葉~後葉の土器である。611~616は、無文の深鉢である。成形時の指による押さえ痕が目立ち、横方向の粗雑なナデ調整が多用される。617・618は、頸部で緩やかに外反する深鉢で、外面は丁寧なミガキ調整が施される。620は緩やかに外反する深鉢で、口頸部には横方向の条痕または粗雑なナデ調整が施され、体部にはRL斜行縄文が施されるようである。

621~632は、縄文のみが施文される深鉢である。621~630は異原体羽状縄文である。二種とも0段多条、LRのみ0段多条、両方とも0段多条ではないものがみられ、RLのみ0段多条のものは見当たらない。621~625はすべて口唇部が内傾（内削ぎ）するものである。626~629は口唇部が肥厚する。630は、上面が6mm×5mmの瘤が口唇部に非常に多く付される。縄文は異原体羽状縄文である。632は内面刻目突起とセットで、口縁部にφ9mmの円形の瘤が付されるものである。

633~639は、貼瘤が付される有文深鉢、壺・注口である。634・635は、スリット状沈線が入った入組み帯状文が施される、壺・注口である。上面刻み突起が付される。

636は、頸部で屈曲する有文の深鉢で、φ6mmとφ9mmの瘤が多数、縄文帯の中に付される。沈線が浅く、摩滅によって文様構成は確認は難しいが、櫛状入組み文または鍵状入組み文のいずれかのバリエーションと考えられよう。口唇部は急角度で内傾（内削ぎ）する。637~639は有文深鉢の同一個体である。内面刻目突起とセットで丸形の瘤が付される。瘤は、スリット状沈線の入った縄文帯にも付され、φ8~13mmの丸形の瘤の他、9mm×6mmの縦長の瘤も付される。

641~643は、縄文時代後期中葉の大型の突起である。644~646は、無文の鉢である。647は、鉢または広口短頸壺と呼べそうな器形である。刻目帯が口頸部に3条施される。648は661と同一個体である。刻目帯が2条見られ、縄文帯で文様が構成される。649は袖珍土器の台付浅鉢であり、φ5mm程の竹管状の施文工具で、底上面に17個の刺突が重複して加えられる。650~652は、無文の壺の口頸部である。652のみ口縁部に山形突起が付される。653は、3本一組の平行沈線と貼瘤が組み合わせとなる壺の頸部である。

655は、瘤が多数付される無文の壺・注口である。最も高い瘤は器面から14mmも突出する。

656・657は壺・注口の同一個体で、細めの縄文帯で入組み文を施文し、その中に正面からφ3mm

の刺突を施す瘤が貼付される。その左右の縄文帯上にも、同様の小型の瘤が付される。

658・659も、壺・注口の同一個体で、上面刻目瘤と上下穿孔瘤が縄文帯に付される。660は、ほぼ完形の注口土器である。内湾気味に立ち上がる頸部には、横位の木葉状縄文帯が上面三角形の瘤を境に4単位施される。体部には、注口の付け根部分と同じ高さに上面刻目瘤が90°ごとに3点配置され、それを目安に入組み帯状文が4単位配される。入組み帯状文の屈曲部の内側にのみ貼瘤が付される。底部は低い高台が付く。注口部は中位の上下に瘤が付される。

664・665は、間隔の狭い2本一組の沈線が施されることによって、その内側に残る部分が微隆起線文のように見える効果を有する。台部最大径付近に、二条の刻目隆帯があり、その間を微細な斜沈線で矢羽根状のモチーフで充填する。刻目隆帯レベルには、器面から1.4mmも突出する親指形の突起が付され、また上下の刻目隆帯をC字形の隆線で結ぶ。微隆起線上には径2mm程の微細な瘤が約1cm間隔で付される。刻目隆帯の上位には、微隆起線によって、櫛状入組み文が施される。沈線内や665のアーチ部内外面には、赤色顔料が多く残る。664はアーチ状の上位部分であり、突起や刻目帯などが見られ、これにも赤色顔料が鮮やかに残っている。

666～669は台部である。斜行縄文が施されるもの(666)、無文のもの(667・669)、横走縄文帯に異原体羽状縄文が施されるものが見られる。

## 石器 (図83～87)

S64～72は石鎌である。有茎平基(S64・72)・有茎凸基(S65～70)・未製品または無茎(S71)が見られる。S71は有茎の未製品の可能性も考えられ、僅かであるが抉りが認められる。

S73～84は石匙である。S73～82は縦型の石匙である。S73～76・80・81・82は打面側につまみを作出する。S79は、打面の反対側につまみを作出する。

S73・74・80・81は、刃部の背面側の縁辺にのみ二次調整が施される。S75・76は、背面側・腹面側で、それぞれ一側縁のみに二次調整が施される。S77・78は、刃部の両面の側縁に二次加工が施される。

S84は、横長剥片を素材にした横型の石匙である。刃部は背面側にのみ、二次調整が施される。

S85は、剥片の末端部に急角度の刃部が形成され、石筥に分類した。

S86～91は、剥片の縁辺に連続的に二次調整が加えられ、スクレイパーに分類した。

S93は、剥片にノッチ状の加工を両面から施し、突出部を作出しており、異形石器とした。

S92・94は、礫器である。素材となる礫の縁辺に両面から剥離を施し、刃部を形成している。

S95・96は、共に安山岩を素材とする磨製石斧で、同一グリッドからの出土である。両方とも、荒打ちの痕跡が残る。S95は、基部側を欠損する。S97は、緑色細粒凝灰岩を素材とする小型の磨製石斧であり、側面には自然面が残るが、刃部から両面の中央部は、擦痕が明瞭に残る。

S98～104は、凹石、叩石、磨石などである。S98は叩石であり、両面に浅い凹みが残されるもので、被熱痕が認められ、出土時には、4片に割れていた。S99も両面に深い凹みが残される凹石である。

S102は両面に浅い凹みが、端部の一端には叩き痕が、二側面には明瞭な磨痕が見られ、磨叩凹石とした。S103は形態はS102と似ているが、二側面が磨りに使用されたと考えられ、磨石とした。

S104は、両端部、一側面に叩き痕が残る叩石である。

S105は、扁平な円形の凝灰岩の両面の周縁または一部に剥離を加え整形するもので、片面の中央部には、擦痕らしきものが見られるが明瞭ではなく、用途不明である。台石の類であろうか。

#### 文化遺物（図87）

鐸形土製品1は、つまみの部分である。つまみの両面には亀甲形のモチーフが、側面には楕円らしきモチーフが施される。また側面にはφ2mm程の穴が穿孔されている。

S106～108は、凝灰岩製の三角形岩版である。3点とも無文のものであり、片面を平坦に、片面を蒲鉾状に整形している。

（永嶋 豊）

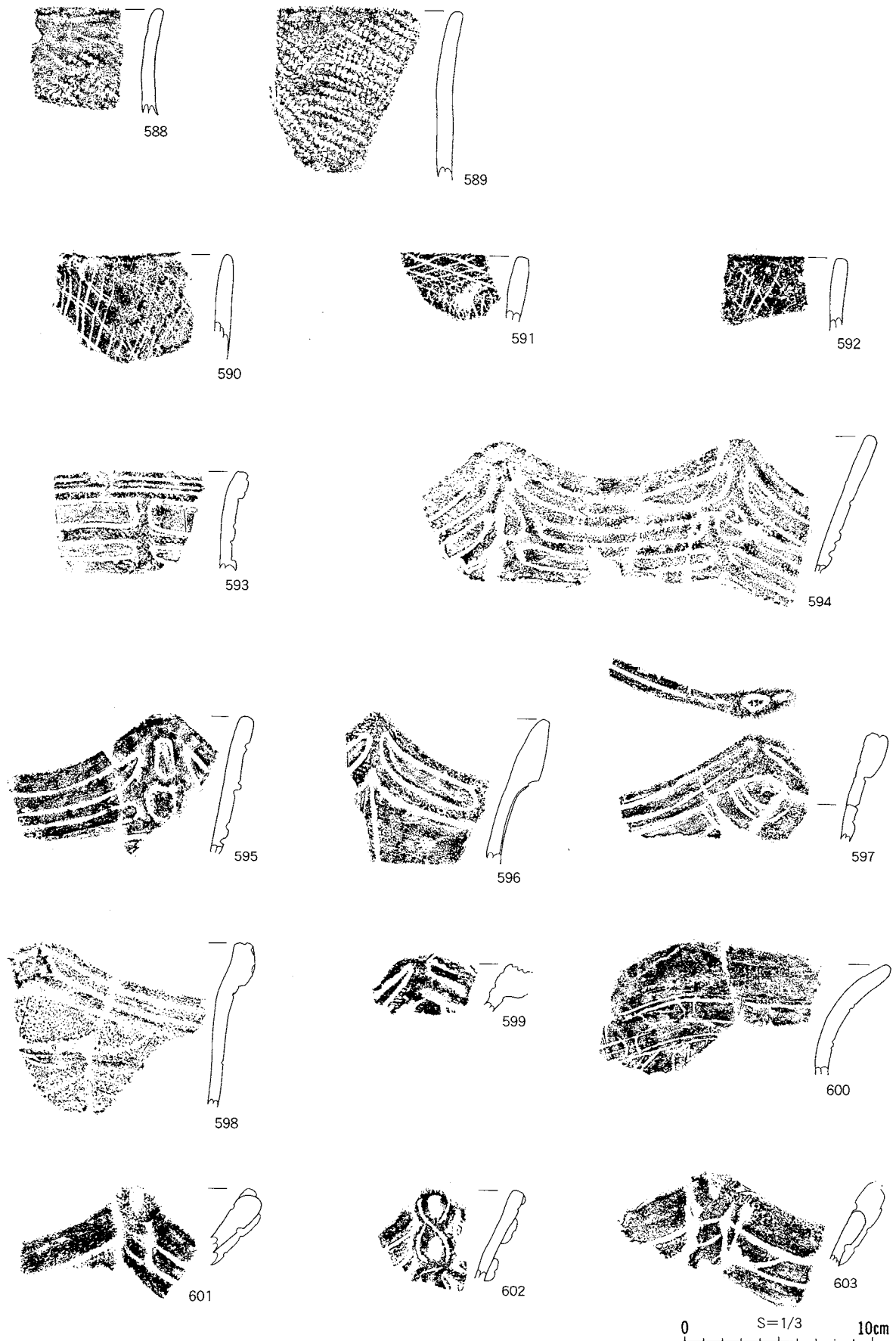


图78 遺構外出土土器(1)

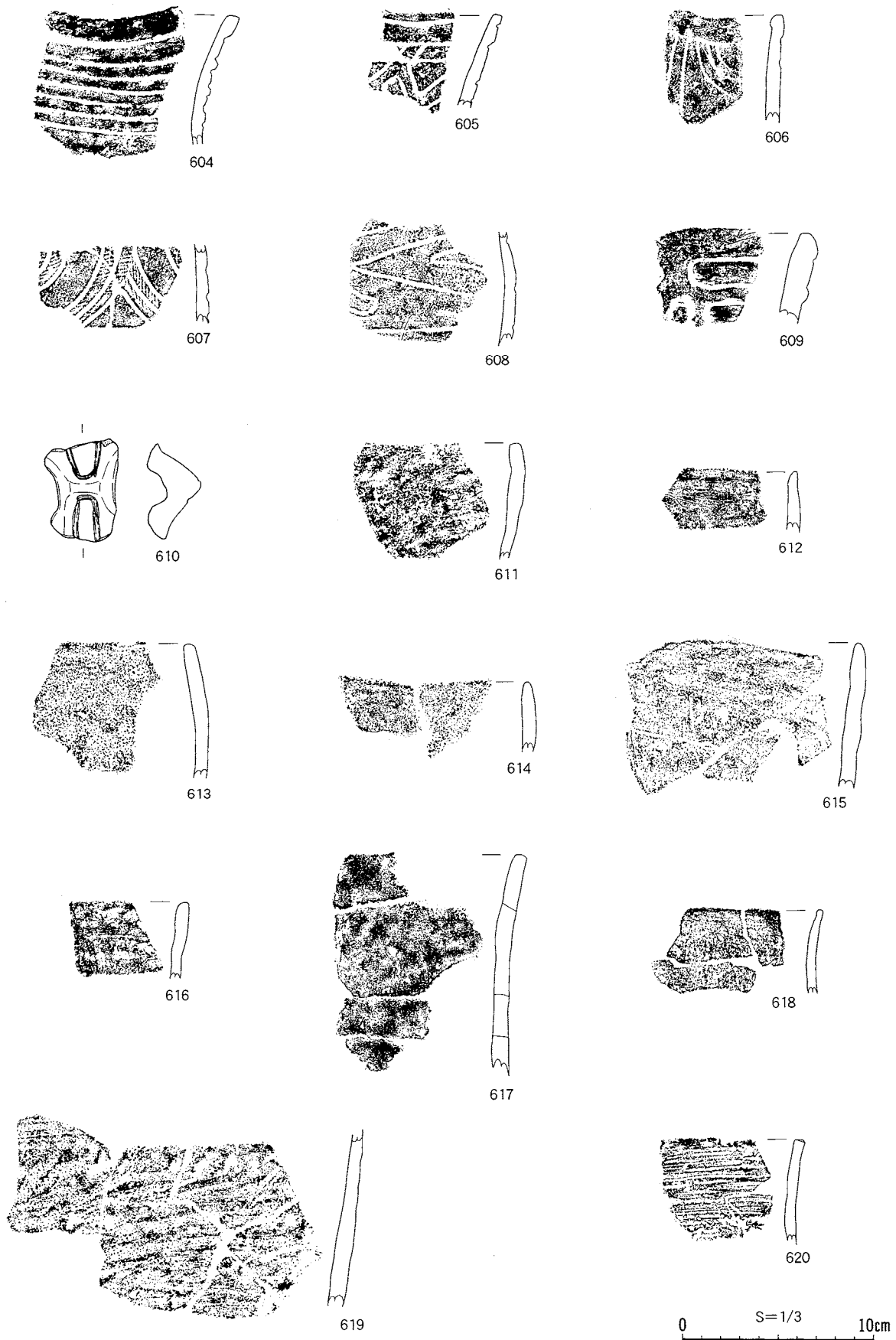


図79 遺構外出土土器(2)



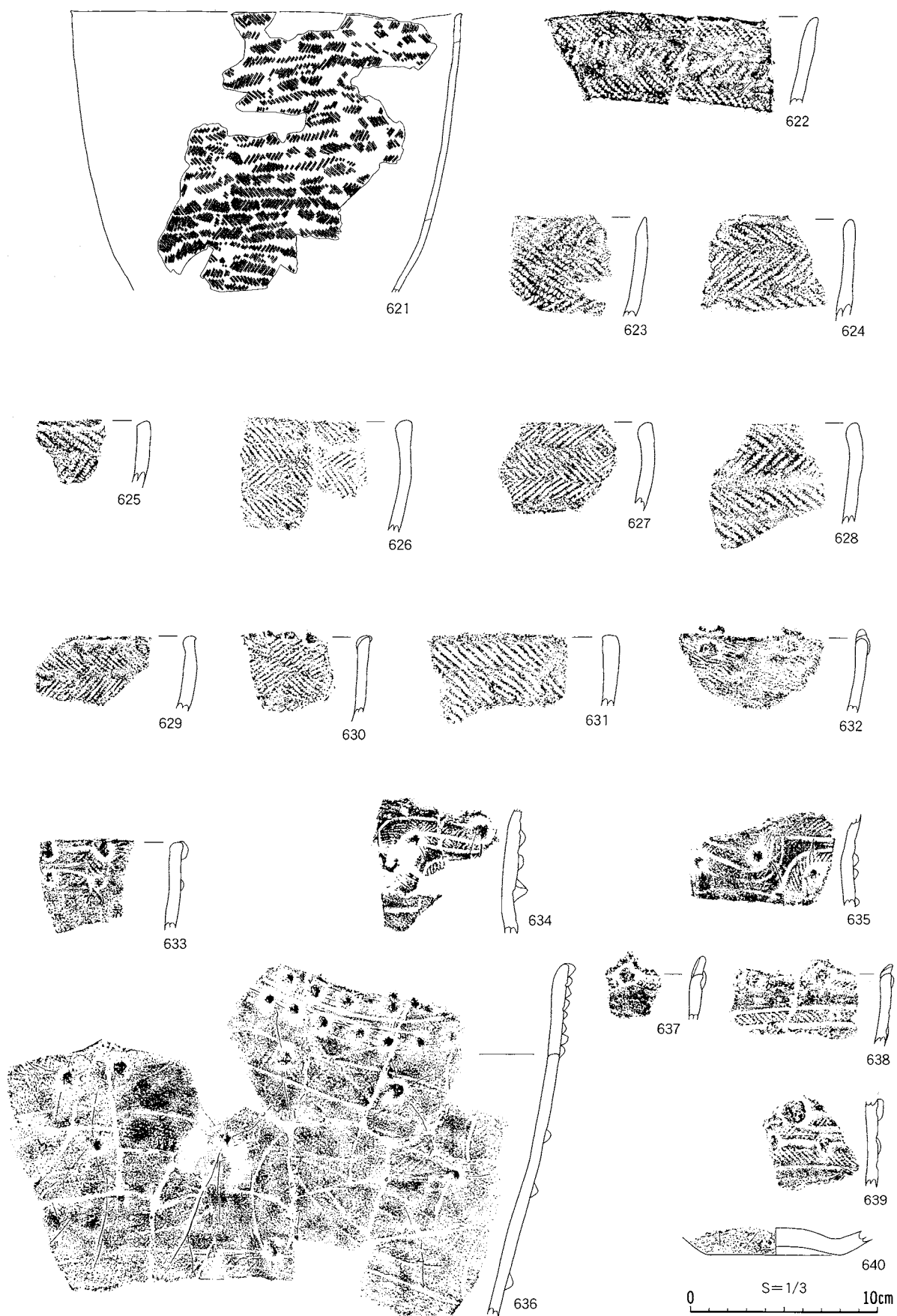


図80 遺構外出土土器(3)

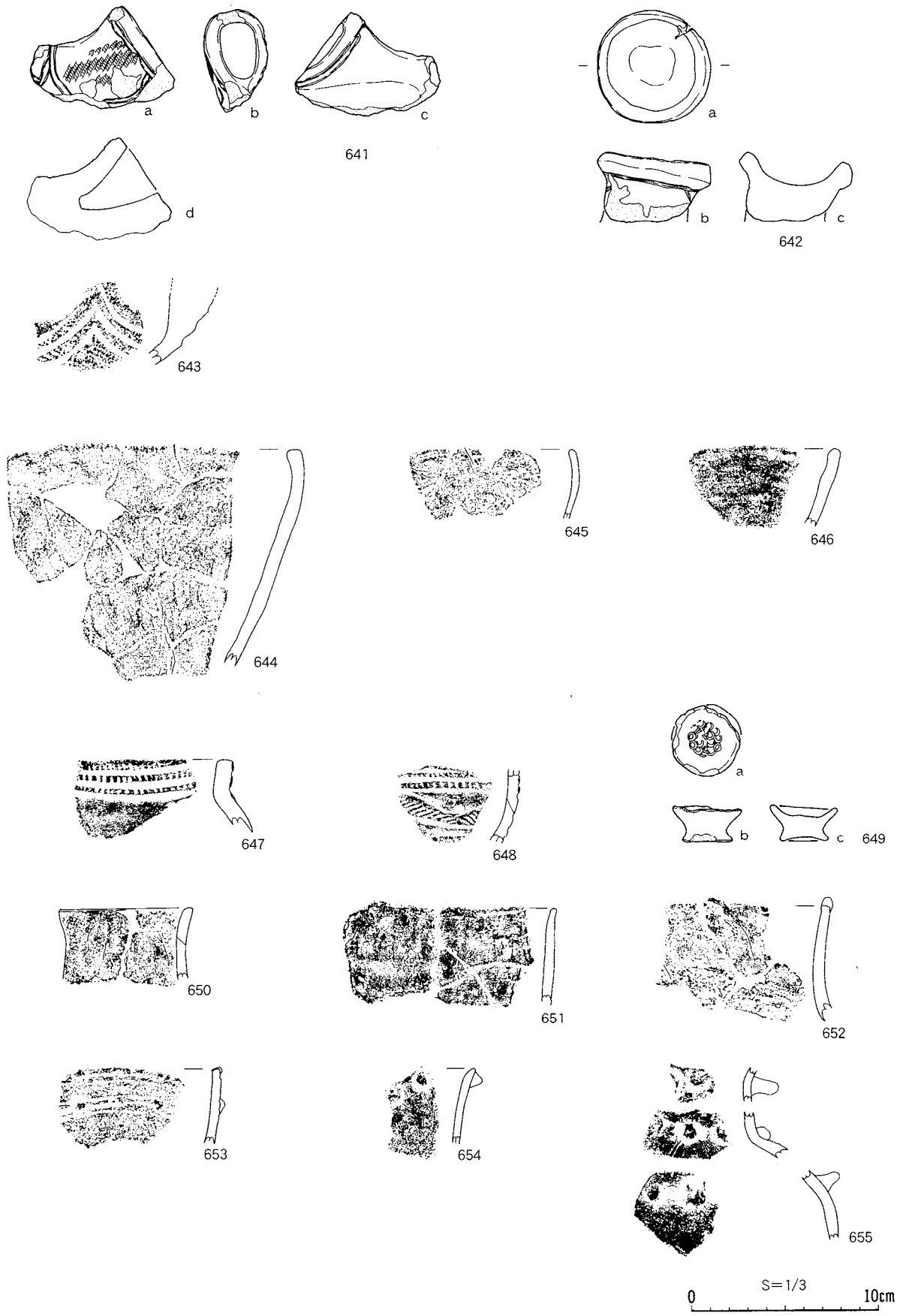


図81 遺構外出土土器(4)

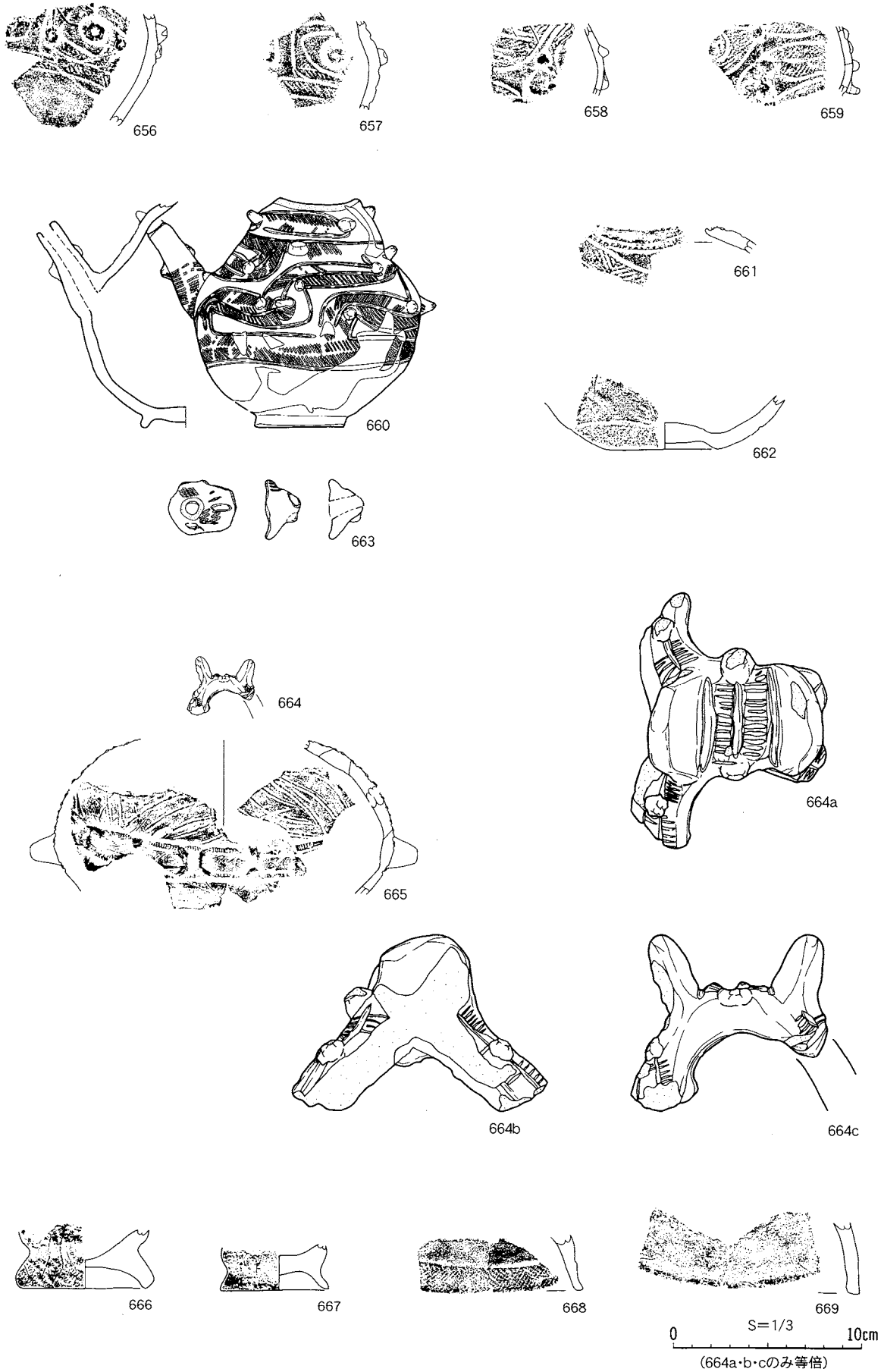


図82 遺構外出土土器（5）

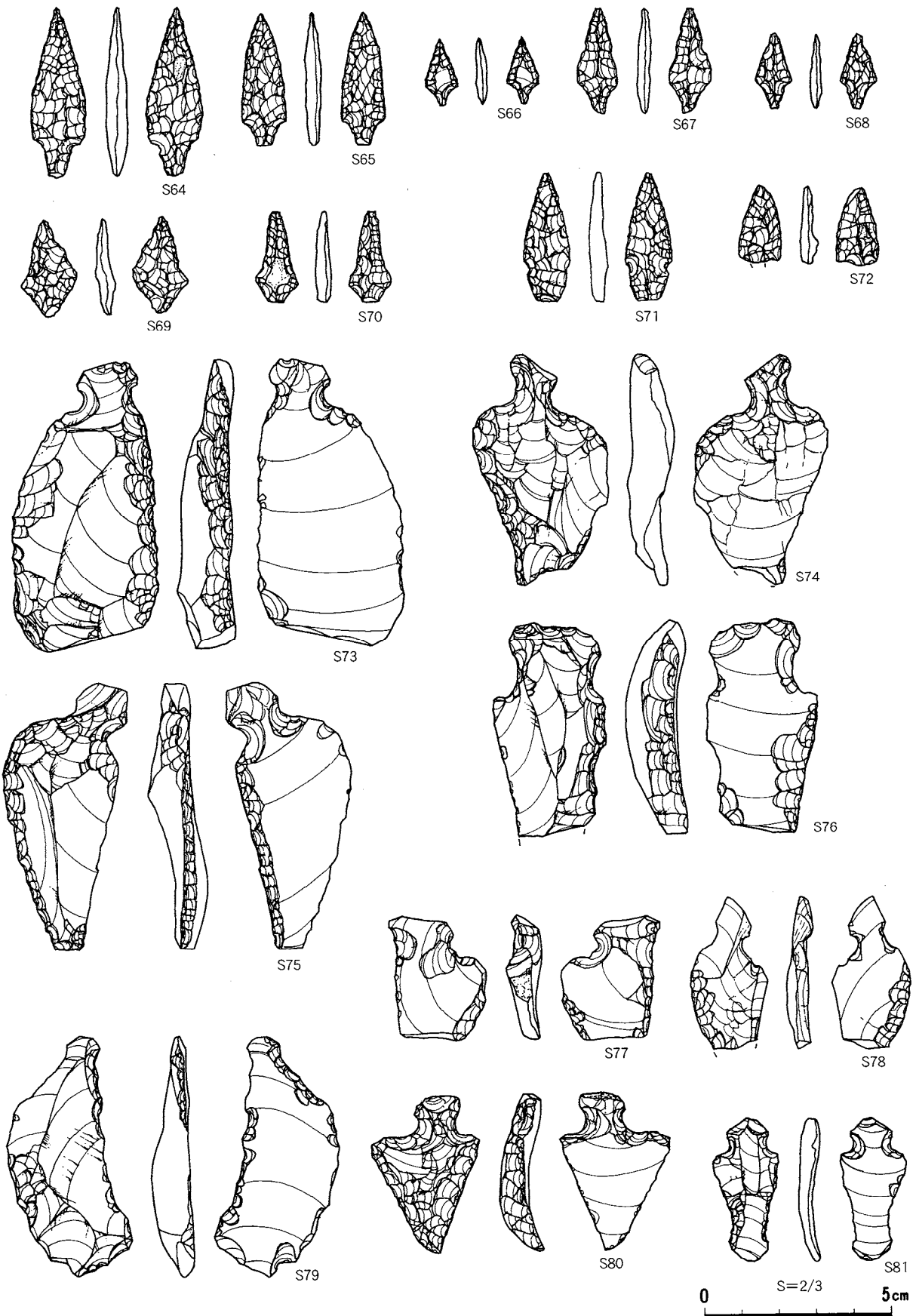


図83 遺構外出土石器 (1)

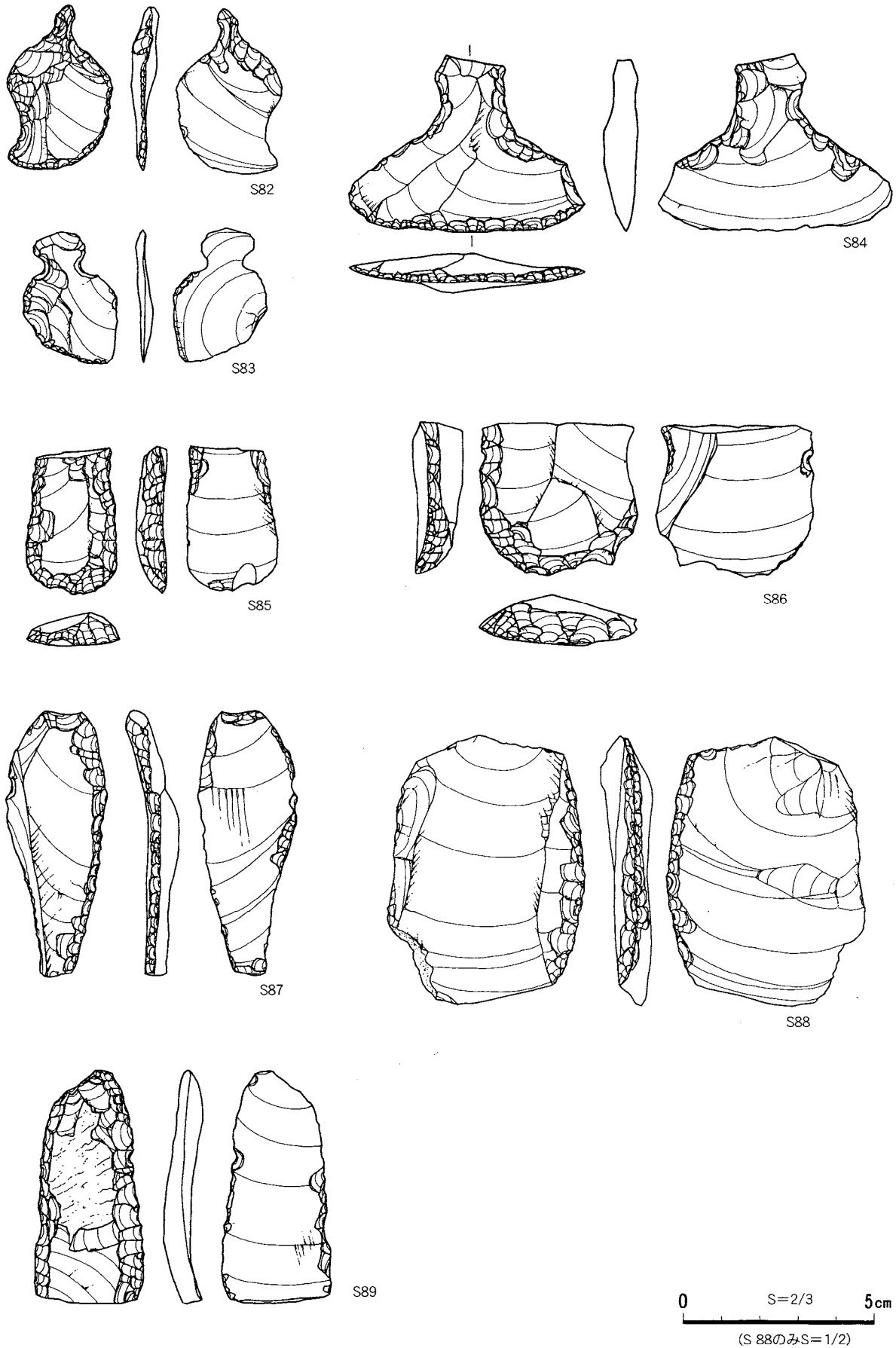


図84 遺構外出土石器（2）

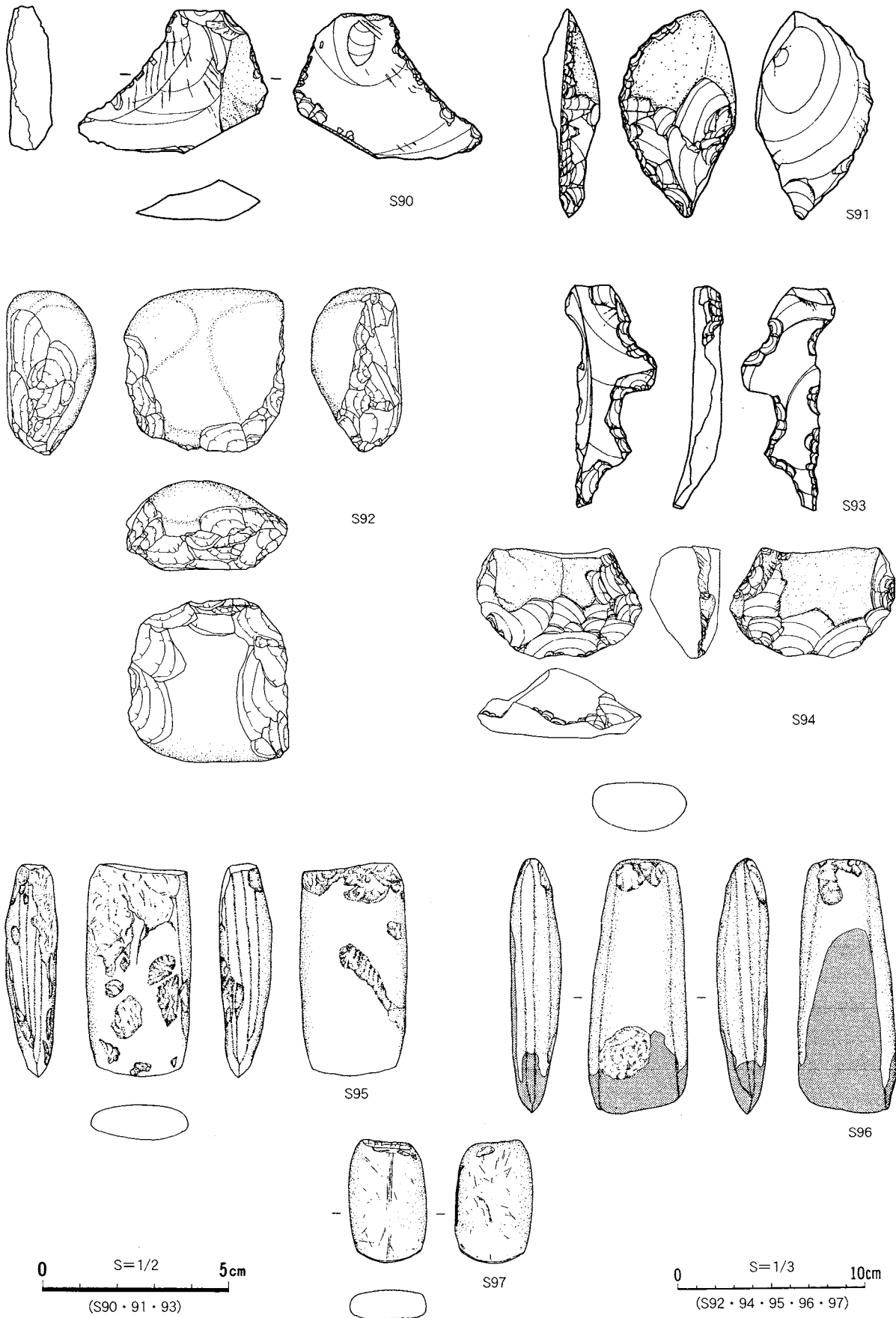


図85 遺構外出土石器(3)

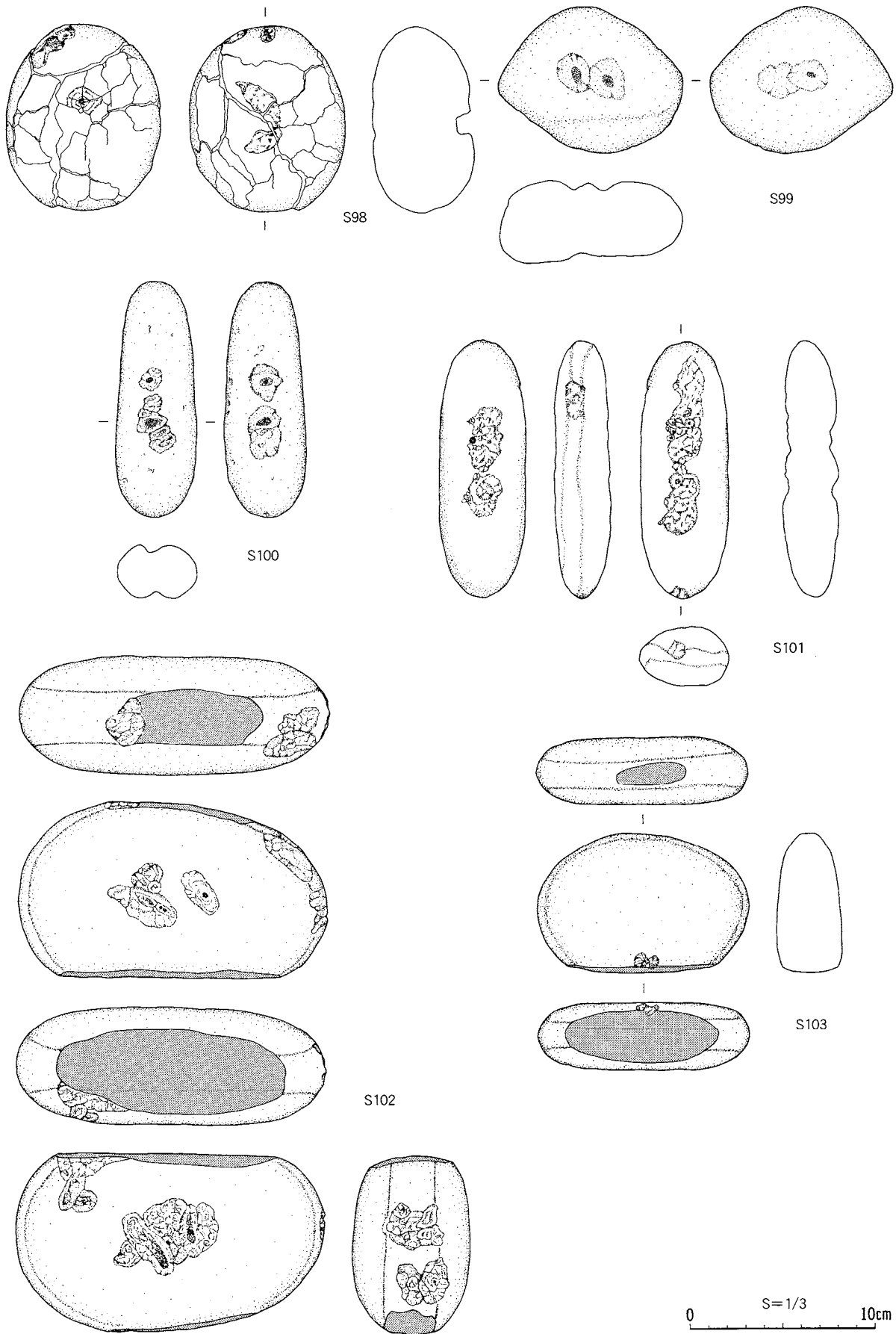


图86 遺構外出土石器(4)

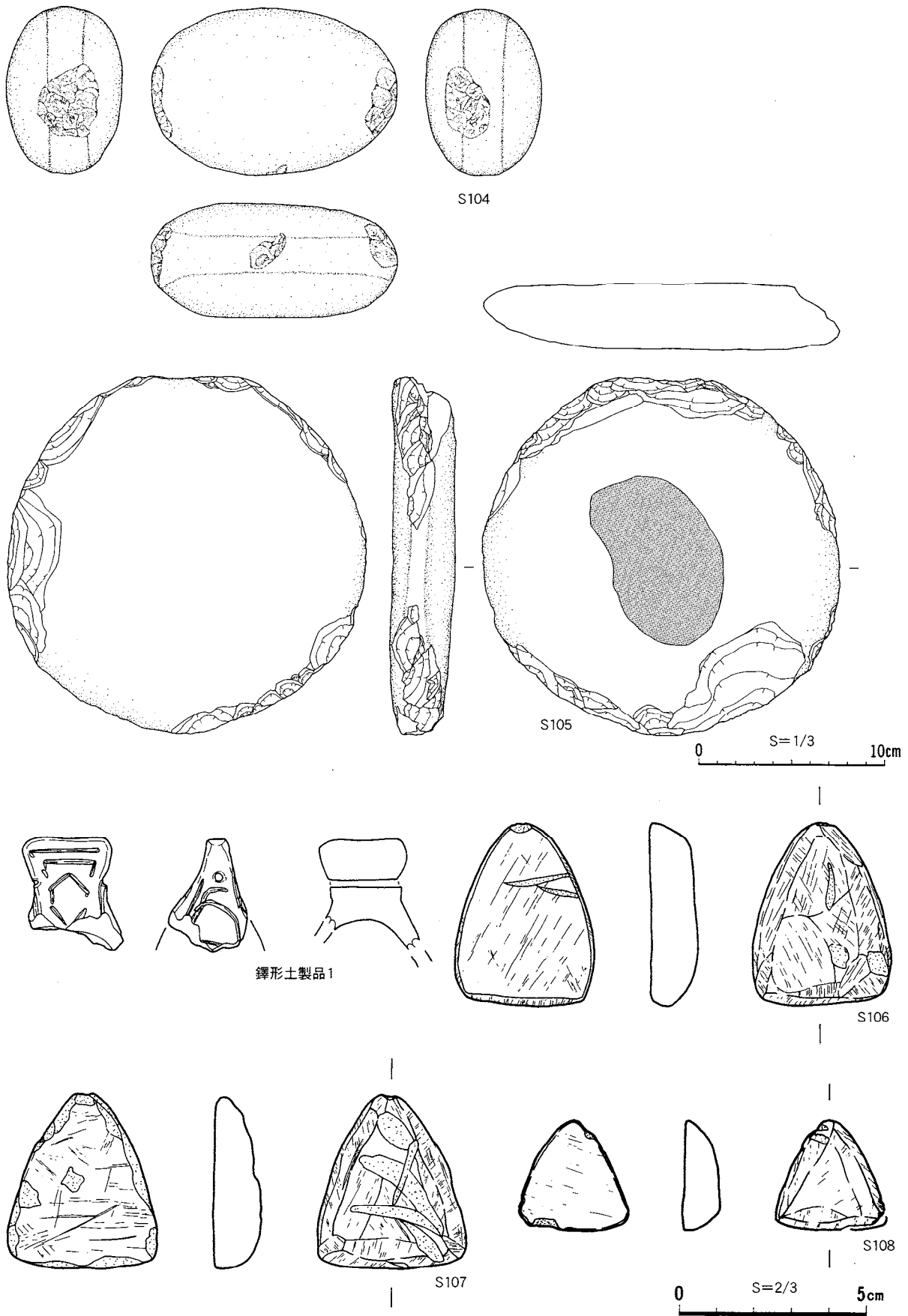


図87 遺構外出土石器（5）



## 第3章 C区検出遺構と出土遺物

C区からは竪穴住居跡1軒、土坑4基を検出した。

### 第1節 竪穴住居跡

#### 第101号竪穴住居跡（図88）

〔位置・確認〕 IX A・B-199・200、IX B-198グリッドに位置する。木の根の周りに黒色土の半円形プランとして確認した。

〔重複〕 重複はないが、遺構の西側は市道にかかっている。また、遺構の中央に木の根があり、土は攪乱されていた。

〔平面形・規模〕 かなりの削平を受けているため、遺構の北側は立ち上がりが確認できなかった。また西側は市道にかかっているため、調査することができなかった。そのため全体形は不明であるが、おそらく円形に近い形になると思われる。開口部推定長軸は5 m60cm、残存短軸は3 m18cm、深さは60cmである。残存床面積は13.12㎡である。

〔壁・床面〕 東側・南側で壁の立ち上がりを確認した。壁高は東側は10cm、南側は50cmほどである。床面はほぼ平坦で、堅緻である。

〔炉〕 遺構西側の床面壁際に炉の一部を検出した。確認した焼土範囲の規模は60cm×30cmで、地床炉と思われる。

〔壁溝〕 確認できなかった。

〔ピット〕 ピットを16基検出した。その内壁柱穴と思われるものは10基である。ピットの直径は5～45cm、深さは6～36cmである。

〔その他の施設〕 溝を2基と不整形の落ち込みを確認した。溝は南東側と南側で検出した。南東側の溝は長軸1 m85cm×短軸16cm、深さ3～6 cmほどの大きさで、ピット10につながっている。南側の溝は、75cm×16cm、深さ5cmほどで、ピット12につながっている。不整形の落ち込みは北側で検出された。長軸1m26cm、短軸95cm、深さ10～33cmほどである。

〔堆積土〕 黒褐色土主体の覆土構成で、下位を中心とところどころにわずかに褐色土・黄褐色土が堆積している。炉が検出された場所の上位の層には焼土塊・焼土粒が混入している。

〔出土遺物〕 削平により遺物はあまり検出されなかったが、炉の近くの床面直上から十腰内Ⅳ式の土器が出土した（101住-1）。

〔小結〕 出土遺物により、縄文時代後期中葉から後葉にかけての遺構と思われる。

（工藤 由美子）

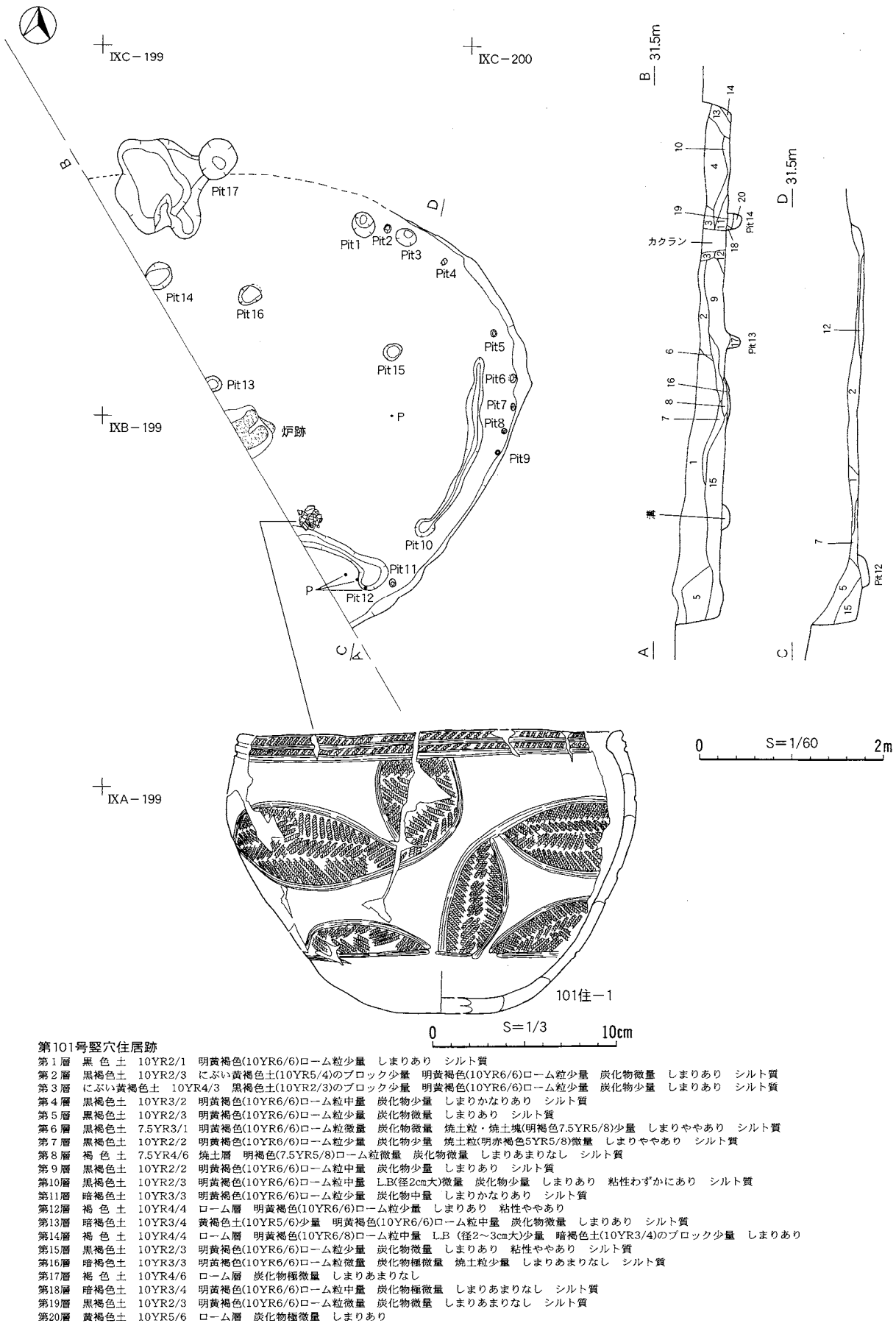


図88 第101号竪穴住居跡、出土遺物

## 第2節 土坑

### 第128号土坑 (図89)

[位置・確認] VIII Q・R-200・201グリッドに位置する。黒色土の方形プランとして確認した。

[重複] 重複はないが、遺構の西側が市道により消失している。

[平面形・規模] 平面形は遺構西側が消失しているため不明であるが、おそらく隅丸方形か隅丸長方形になると思われる。開口部は1 m62cm×残存1 m45cm、底部は1 m56cm×残存1 m40cm、深さは92cmである。

[断面・底面] 断面形は四角形で、底面は平坦である。また、底面西側・東側にはピットがある。西側のピットは道路に切られている。規模は西側が37cm×残存23cm、東側が26cm×17cmである。

[堆積土] 16層に分層した。褐色土主体の覆土構成で、上位に黒褐色土、下位に明褐色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第138号土坑 (図89)

[位置・確認] IX E・F-202グリッドに位置する。第139号土坑とともに黒色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、開口部長軸1 m16cm×短軸1 m9cm、底部長軸1 m13cm×短軸1 m9cm、深さは42cmである。

[断面・底面] 断面形は四角形であるが、底面がやや外側に開いている。底面は平坦である。

[堆積土] 3層に分層した。上位に黒色土、下位に黒褐色土が堆積している。

[出土遺物] 土器破片が数点出土した。138土-1は縄文時代前期の円筒下層d式に相当すると思われる。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第139号土坑 (図89)

[位置・確認] IX F-203グリッドに位置する。第138号土坑とともに黒色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形で、開口部長軸1 m15cm×短軸1 m9cm、底部長軸1 m16cm×短軸1 m14cm、深さは38cmである。

[断面・底面] 断面形は四角形であるが、東側・南側は底面にむかってフラスコ状にやや外側に広がる。底面は平坦である。

[堆積土] 6層に分層した。黒褐色土主体の覆土構成で、上位・中位に黒色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第145号土坑 (図89)

[位置・確認] VIII Q-201グリッドに位置する。調査区域境界際に暗褐色土の半円形プランとして確認した。

[重複] 重複はないが、調査区域境界際に検出したため、遺構の一部のみを調査した。

[平面形・規模] 平面形はおそらく円形か楕円形になると思われる。残存開口部長軸1 m72cm×短軸59cm、残存底部長軸1 m67cm×短軸54cm、深さは40cmである。

[断面・底面] 断面形は四角形で、底面は平坦である。

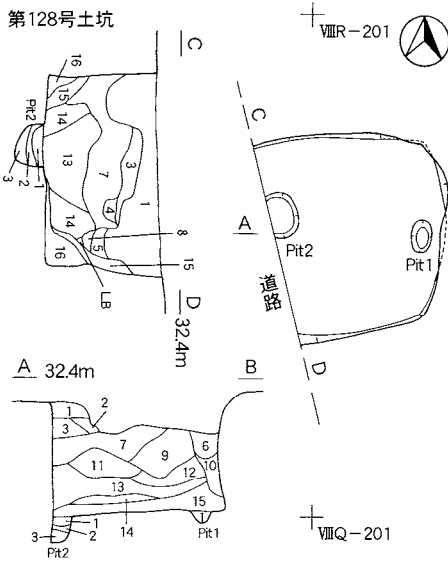
[堆積土] 13層に分層した。明黄褐色ローム粒が混入する暗褐色土が主体で、上位に黒褐色土、中位から下位にかけて褐色土・黄褐色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

第128号土坑



第128号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 しまりあり シルト質
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量 しまりあり シルト質
- 第3層 褐色土 10YR4/4 ローム粒中量 LB(径3cm大)中量 しまりあり シルト質
- 第4層 褐色土 10YR4/6 黒色土(10YR2/1)中央に層状に中量混入 焼土粒極微量 しまりややあり シルト質
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 焼土粒極微量 しまりなし シルト質
- 第6層 黒色土 10YR2/1 ローム粒少量 しまりややあり シルト質
- 第7層 褐色土 10YR4/6 ローム粒中量 LB(径2cm大)少量 赤LB(明褐色土7.5YR5/6 径0.5~3cm大)微量 しまりあり シルト質
- 第8層 褐色土 10YR4/4 焼土粒極微量 しまりややあり シルト質
- 第9層 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒少量 赤LB(明褐色土7.5YR5/6 0.5~3cm大)少量 炭化物微量 しまりあり 粘土質シルト
- 第10層 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒少量 炭化物微量 しまりややあり シルト質
- 第11層 褐色土 10YR4/4 ローム粒中量 LB(径2cm大)少量 炭化物極微量 しまりかなりあり 粘土質シルト
- 第12層 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒少量 赤LB(径1~3cm大)中量 炭化物微量 しまりあり シルト質
- 第13層 褐色土 10YR4/4 ローム粒多量 (LB 径1~2cm大含む) 炭化物少量 しまりあり 粘性あり 粘土層
- 第14層 明褐色土 7.5YR5/6 赤ローム層
- 第15層 褐色土 7.5YR4/6 ローム粒少量 炭化物微量 しまりあり 粘性あり 粘土質シルト
- 第16層 褐色土 10YR4/6 ローム層 しまり非常にあり 粘性あり

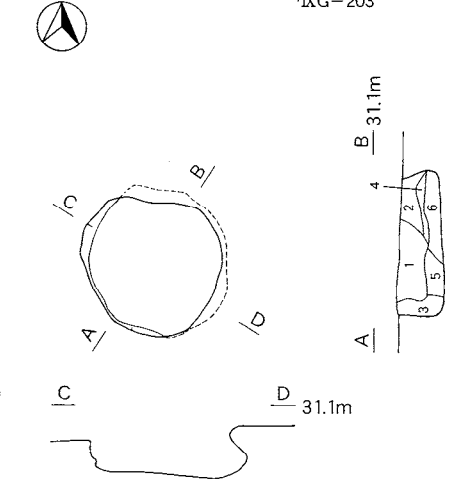
ピット1

- 第1層 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒少量 炭化物微量 しまりややあり 粘性あり シルト質粘土

ピット2

- 第1層 明褐色土 7.5YR5/6 褐色土(7.5YR4/4)をまだらに多量混入 しまりなし 粘性あり 粘土質シルト
- 第2層 灰黄褐色土 10YR4/2 砂粒微量 シルト質
- 第3層 明褐色土 7.5YR5/6 粘土層 褐色土(7.5YR4/4)をまだらに多量混入 しまりなし 粘性あり

第139号土坑

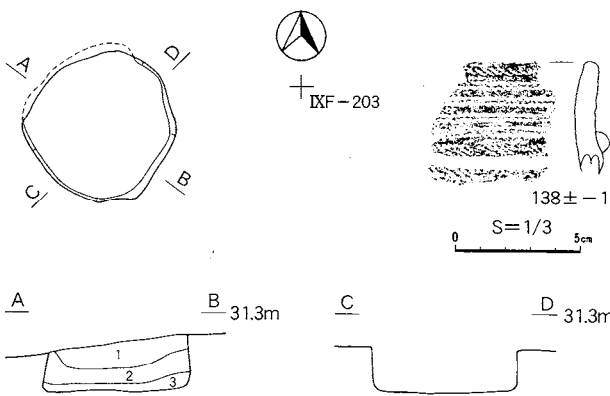


第139号土坑

第139号土坑

- 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒微量 しまりややあり シルト質
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 炭化物極微量 しまりあり シルト質
- 第3層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒少量 しまりややあり シルト質
- 第4層 黒色土 10YR2/1 ローム粒極微量 しまりややあり シルト質
- 第5層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒微量 しまりあり シルト質
- 第6層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒少量 しまりあり シルト質

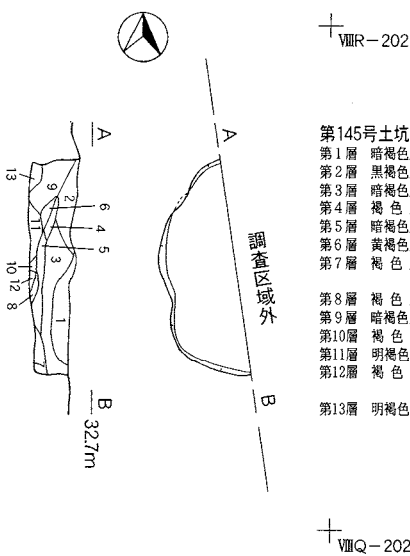
第138号土坑



第138号土坑

- 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒少量 炭化物微量 焼土粒極々微量 しまりあまりなし シルト質
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒中量 炭化物微量 しまりほとんどなし シルト質
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 しまりなし シルト質

第145号土坑



第145号土坑

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 赤褐色(5YR4/8)・明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 しまりややあり シルト質
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 赤褐色(5YR4/8)ローム粒微量 LB(褐色土 10YR4/4)少量 しまりあり シルト質
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 明黄褐色(10YR6/6)ローム少量 赤褐色(5YR4/8)ローム粒微量 しまりあり シルト質
- 第4層 褐色土 10YR4/4 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 明褐色(7.5YR5/8)ローム粒微量 しまりあり シルト質
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 明褐色(7.5YR5/8)ローム粒微量 炭化物微量 しまりあり シルト質
- 第6層 黄褐色土 10YR5/6 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 しまりあり 千枚浮石層
- 第7層 褐色土 7.5YR4/6 LB(明赤褐色 5YR5/8)多量 LB(黄褐色 10YR5/6)少量 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 しまりあり シルト質
- 第8層 褐色土 10YR4/4 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒微量 しまりあまりなし シルト質
- 第9層 暗褐色土 10YR3/4 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 LB(明褐色 7.5YR5/8 径4cm大)1個 しまりあり シルト質
- 第10層 褐色土 10YR4/4 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 しまりあり シルト質
- 第11層 明褐色土 7.5YR5/6 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 炭化物極微量 しまりかなりあり 粘土質シルト
- 第12層 褐色土 7.5YR4/4 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒少量 赤褐色(5YR4/8)ローム粒少量 LB(にぶい黄褐色 10YR6/4 径2cm大)1個 しまりややあり シルト質
- 第13層 明褐色土 7.5YR5/6 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒微量 LB(明赤褐色 5YR5/8 径3cm大)1個 しまりあり 粘土質シルト

VIII Q-202

図89 第128・138・139・145号土坑、出土遺物

## 第4章 D区検出遺構

D区では、竪穴状遺構1基、土坑3基、溝状土坑2基、ピット群を検出した。ピット群はD区のほぼ全体に広がっている。

### 第1節 竪穴状遺構

#### 第101号竪穴状遺構 (図90)

[位置・確認] VIII S-177・178グリッドに位置する。黒褐色土の長方形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形で、開口部長軸2 m94cm×短軸1 m93cm、底部長軸2 m94cm×短軸1 m87cm、深さ32cmである。

[断面・底面] 断面形は四角形で、底面は平坦である。

[堆積土] 9層に分層した。黒褐色土を主体とした覆土構成である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

### 第2節 土坑

#### 第121号土坑 (図90)

[位置・確認] VIII R-177グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は円形で、開口部径97cm、底部径51cm、深さ86cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 5層に分層した。黒色土・黒褐色土が堆積し、全体にロームブロックが多量に混入している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第122号土坑 (図90)

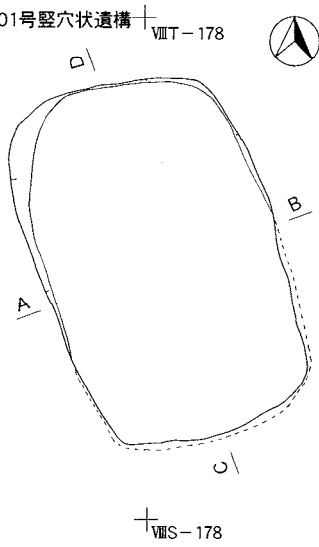
[位置・確認] VIII R-177グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

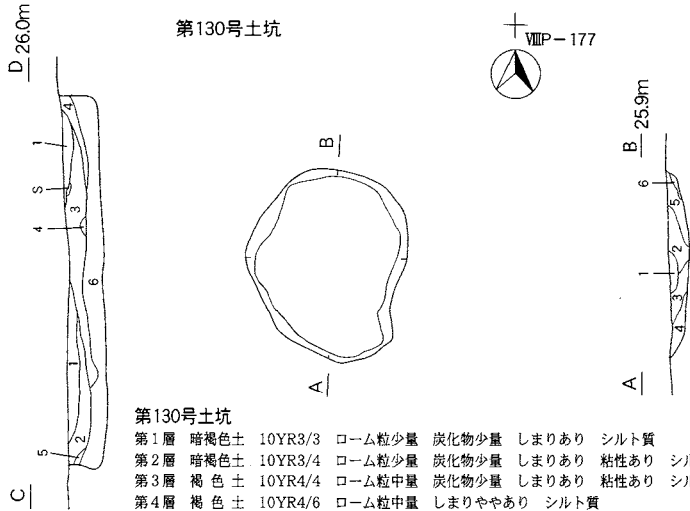
[平面形・規模] 平面形は楕円形で、開口部長軸84cm×短軸74cm、底部長軸53cm×短軸34cm、深さは1 m15cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面にはやや起伏がある。

第101号竖穴状遺構 VIII-T-178



第130号土坑 VIII-P-177



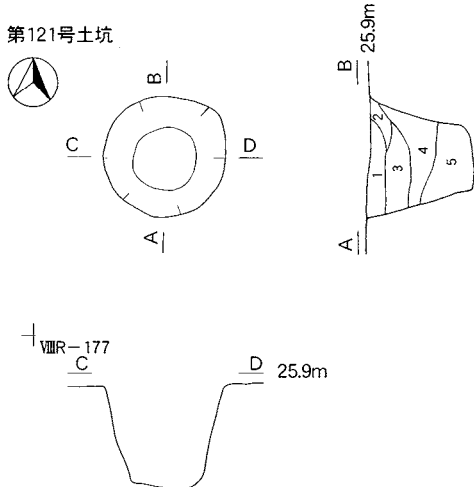
第130号土坑

- |     |      |         |        |          |       |          |
|-----|------|---------|--------|----------|-------|----------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒少量 | 炭化物少量    | しまりあり | シルト質     |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | ローム粒少量 | 炭化物少量    | しまりあり | 粘性ありシルト質 |
| 第3層 | 褐色土  | 10YR4/4 | ローム粒中量 | 炭化物少量    | しまりあり | 粘性ありシルト質 |
| 第4層 | 褐色土  | 10YR4/6 | ローム粒中量 | しまりややあり  | シルト質  |          |
| 第5層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒中量 | しまりあり    | 粘性あり  | シルト質     |
| 第6層 | 黄褐色土 | 10YR5/6 | ローム層   | しまり非常にあり |       |          |

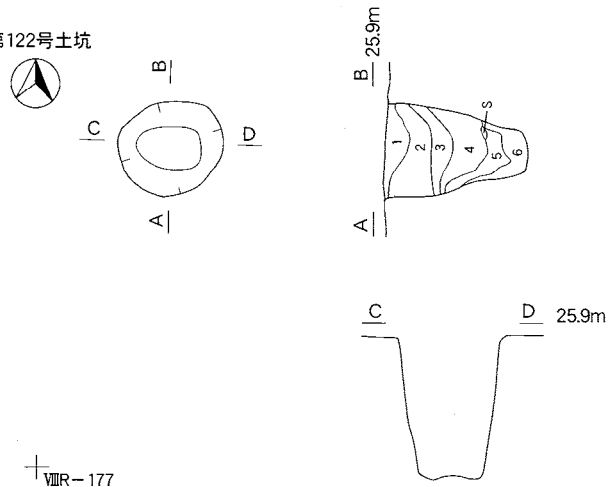
第101号竖穴状遺構

- |     |      |         |        |           |         |          |      |
|-----|------|---------|--------|-----------|---------|----------|------|
| 第1層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒微量 | 炭化物微量     | 焼土粒極々微量 | しまりあり    | シルト質 |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | ローム粒中量 | 炭化物微量     | 焼土粒微量   | しまりあり    |      |
| 第3層 | 褐色土  | 10YR4/6 | ローム粒多量 | しまりややあり   | シルト質    |          |      |
| 第4層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒微量 | しまりややあり   | 粘性あり    | シルト質     |      |
| 第5層 | 褐色土  | 10YR4/6 | ローム粒少量 | しまり非常にあり  | 粘性あり    | 粘土質シルト   |      |
| 第6層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒中量 | 炭化物少量     | 焼土粒微量   | しまりややあり  | シルト質 |
| 第7層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | ローム粒中量 | 炭化物微量     | 焼土粒極々微量 | しまりあまりなし | シルト質 |
| 第8層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒少量 | 焼土粒極々微量   | しまりややあり | シルト質     |      |
| 第9層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒微量 | しまりほとんどなし | シルト質    |          |      |

第121号土坑



第122号土坑



第121号土坑

- |     |      |         |           |         |        |
|-----|------|---------|-----------|---------|--------|
| 第1層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒・LB少量 | しまりあり   | シルト質   |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | ローム粒極微量   | しまりあり   | シルト質   |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | LB多量      | しまりややあり | 粘土質シルト |
| 第4層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒少量    | しまりややあり | 粘土質シルト |
| 第5層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | LB少量      | しまりややあり | 粘土質シルト |

第122号土坑

- |     |      |         |         |             |        |           |
|-----|------|---------|---------|-------------|--------|-----------|
| 第1層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒微量  | 炭化物極微量      | しまりあり  | シルト質      |
| 第2層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒少量  | LB(径5cm大)少量 | 炭化物極微量 | しまりありシルト質 |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | ローム粒微量  | しまりややあり     | 粘土質シルト |           |
| 第4層 | 黒色土  | 10YR2/1 | ローム粒極微量 | しまりややあり     | 粘土質シルト |           |
| 第5層 | 褐色土  | 10YR4/4 | ローム層    | しまりあり       |        |           |
| 第6層 | 黒色土  | 10YR2/1 | しまりなし   | 粘土質シルト      |        |           |

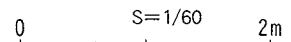


図90 第101号竖穴状遺構、第121・122・130号土坑

[堆積土] 6層に分層した。黒色土主体の覆土構成である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第130号土坑（図90）

[位置・確認] VIII O-176グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はいびつな楕円形で、開口部長軸1 m54cm×短軸1 m29cm、底部長軸1 m42cm×短軸1 m13cm、深さは19cmである。

[断面・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 6層に分層した。暗褐色土と褐色土主体の覆土構成である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

（工藤 由美子）

## 第3節 溝状土坑

### 第101号溝状土坑（図91）

[位置・確認] VIII K-172・173グリッドに位置する。黒色土の東西に細長いプランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部で最大長3 m90cm、最大幅70cm、深さ45cmの溝状を呈するが、西側の遺構の約1/3程度がかなり膨らんでいる。底面は最大長3 m95cm、最大幅61cmである。長軸方向は南西—北東である。

[断面・底面] 断面形は短軸は開口部が若干開く形で、長軸は袋状を呈している。底面は平坦であるが、東側に向かってやや低くなっている。

[堆積土] 4層に分層した。黒色土主体の覆土構成で、下位にロームブロックを含んだにぶい黄褐色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第102号溝状土坑（図91）

[位置・確認] VIII R-174・175グリッドに位置する。黒褐色土の東西に細長いプランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部で最大長2 m90cm、最大幅39cm、深さ32cmの溝状を呈する。底面は最大長2 m93cm、最大幅28cmである。長軸方向は南西—北東である。

[断面・底面] 断面形は短軸は四角形で、長軸は袋状を呈する。底面は平坦である。



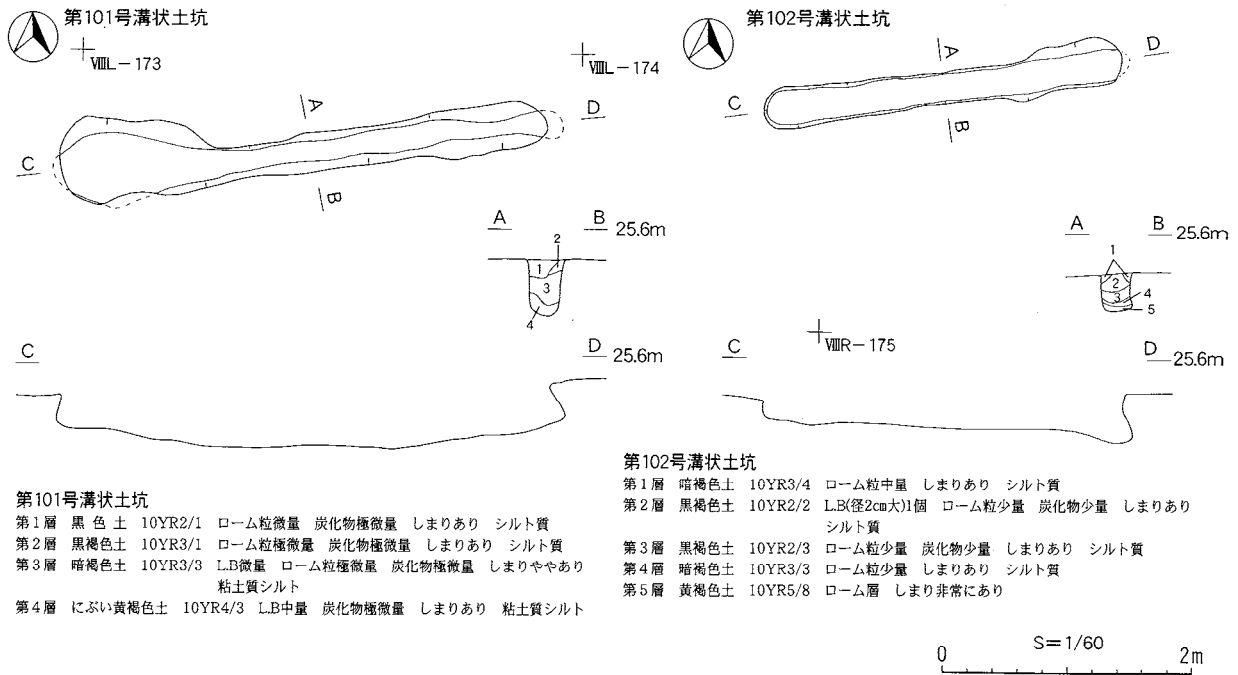


図91 第101・102号溝状土坑

〔堆積土〕 5層に分層した。黒褐色土主体の覆土構成で、下位はローム層になっている。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

## 第4節 ピット群

規則性のみられない用途・時期不明のピットを多数検出した。第102号ピット群としたものは、調査時には範囲が広いため、便宜上第2・3・4号ピット群として取り扱っていたが、ここではまとめて第102号ピット群として報告する。

### 第102号ピット群 (図92～94)

〔位置・確認〕 VIII H-175、VIII J～L-171、VIII J-172、VIII M・N-172、VIII I・J-173、VIII M～O-173、VIII Q・R-173、VIII I・J-174、VIII L～N-174、VIII H・I-175、VIII L～N-175、VIII Q・R-175、VIII T・IX A-175、VIII K～N-176、VIII Q～T-176、VIII O-177、VIII Q～T-177、VIII R～T-178グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕 ピットの広がる範囲は北東52m、南西が30mほどで、ピットは110基確認できた。配列に規則性はみられない。切り合いはいくつかみられた。ピットの平面形は円形・楕円形・不整楕円形で、開口部径10～44cmで、平均26.5cm、深さは5～41cmで、平均17.7cmである。柱痕は確認できなかった。

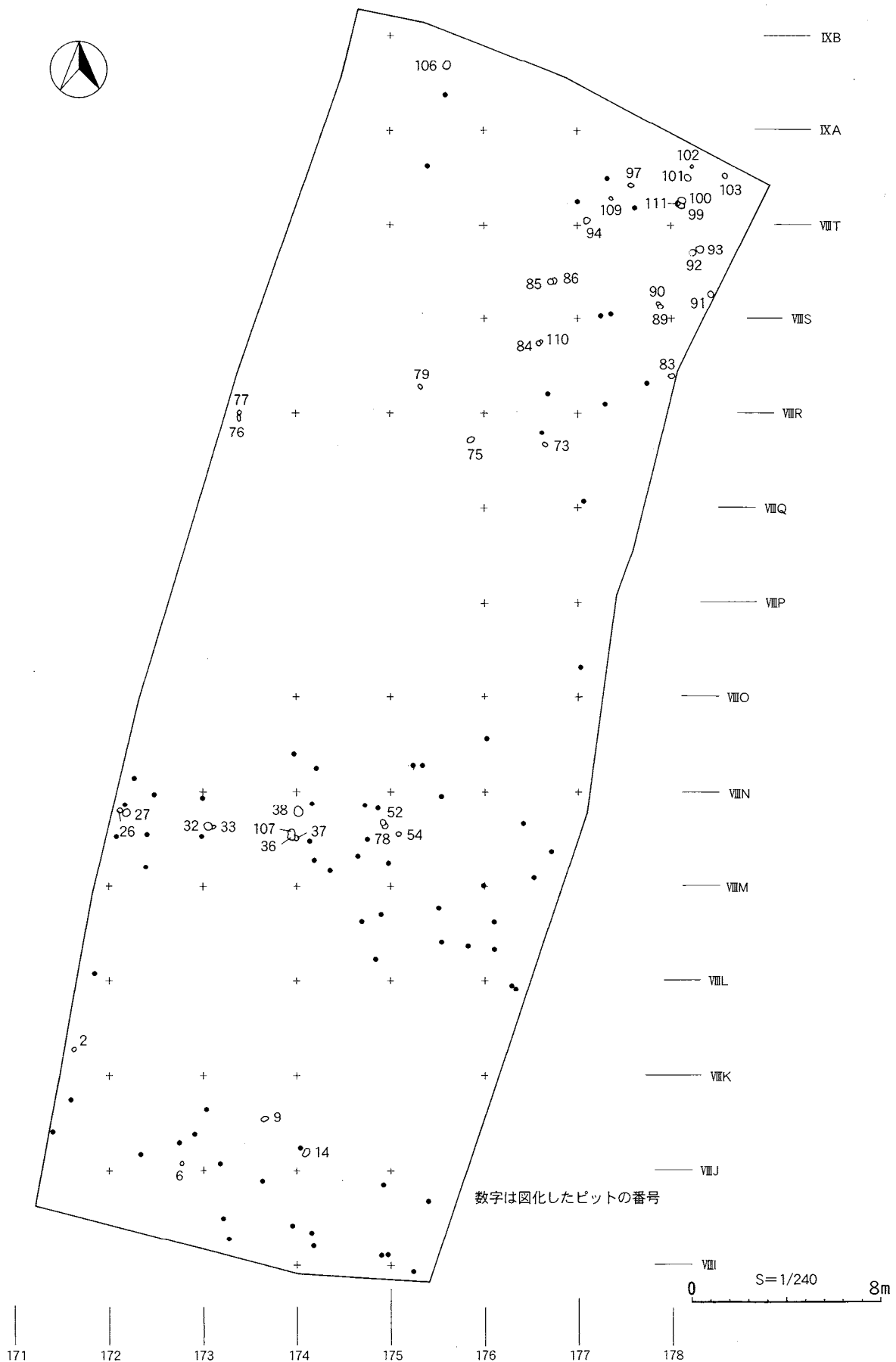


図92 第102号ピット群 (1)

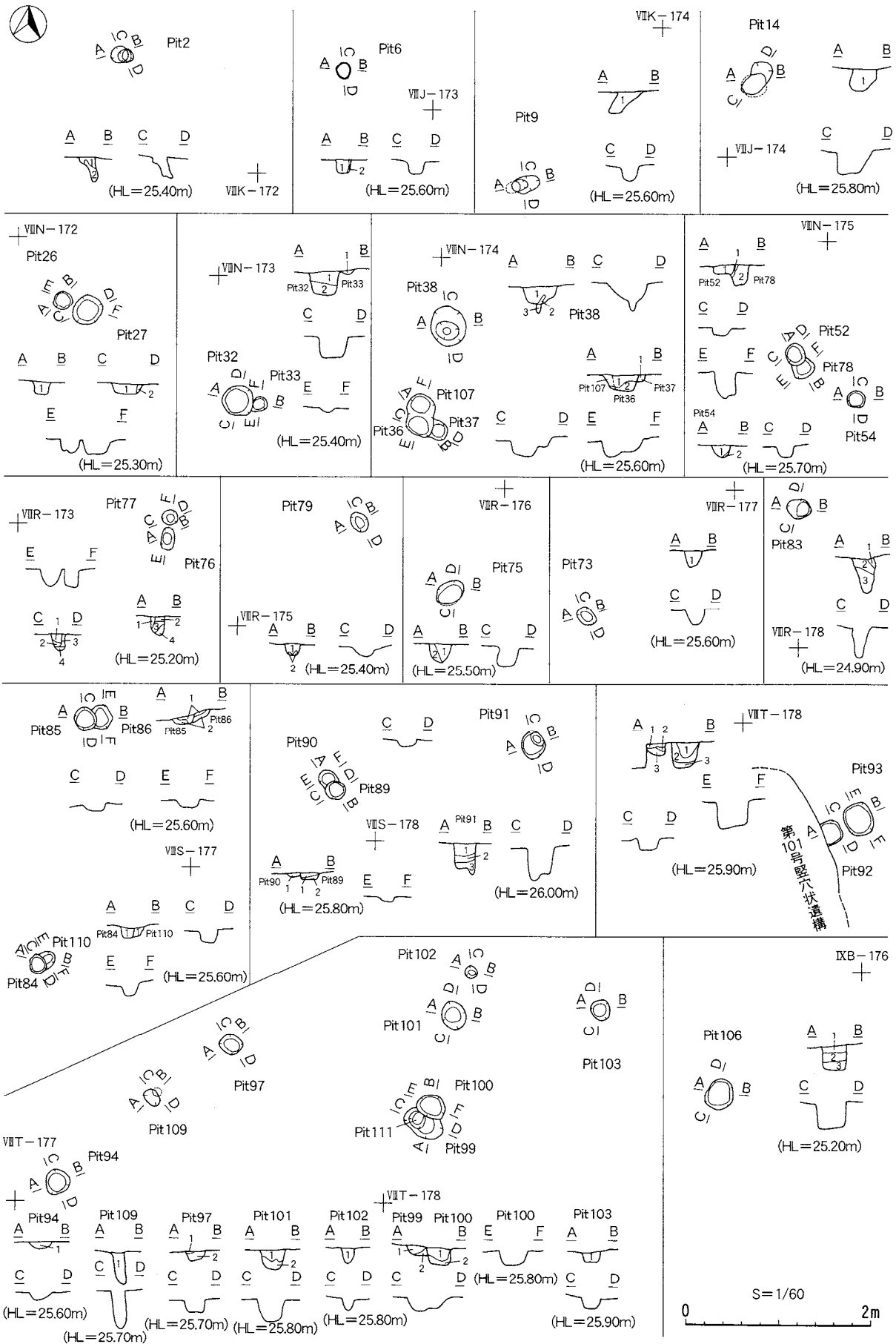


図93 第102号ピット群(2)

第102号ピット群

PIT2					
第1層	褐色土	10YR4/4	ローム粒中量	炭化物微量	しまり非常にあり
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム層		しまり非常にあり
PIT6					
第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量		しまりややあり 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまりややあり 粘性あり
PIT9					
第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒中量		しまりややあり 粘性あり
PIT14					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒中量	LB(径2~5cm大)3個	しまりあり 粘性あり
PIT26					
第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒中量		しまりあり
PIT27					
第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒中量		しまりあり 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまりあり
PIT32					
第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量		しまりあまりなし
第2層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒中量		しまりややあり 粘性あり
PIT33					
第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量		しまりあり
PIT36・107					
第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量		しまり非常にあり
第2層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量	LB(径1cm大)少量	しまり非常にあり
PIT37					
第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量		しまり非常にあり
PIT38					
第1層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量		しまりあり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまり非常にあり
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒少量		しまりあり
PIT52					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量		しまりあり 粘性あり
PIT78					
第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒微量	LB(径2cm大)2個	しまりあり 粘性あり
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量		しまりあり 粘性あり
PIT54					
第1層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量	炭化物少量	しまりあり 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		粘性あり しまりあり
PIT73					
第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量		しまりややあり
PIT75					
第1層	褐色土	10YR2/1	ローム粒微量	炭化物微量	しまりあり
第2層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層		しまり非常にあり
PIT76					
第1層	褐色土	10YR4/4	ローム粒少量		しまりあり 粘土質シルト
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒極微量		しまりややあり
第3層	黒褐色土	10YR3/1	ローム粒中量		しまりあまりなし 粘土質シルト
第4層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまりあり 粘性あり
PIT77					
第1層	褐色土	10YR2/1	ローム粒少量		しまりあまりなし
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒中量		しまりややあり
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量		しまりあり 粘性あり
第4層	黄褐色土	10YR5/6	ローム層		しまり非常にあり
PIT79					
第1層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒微量		しまりあり
第2層	黄褐色土	10YR5/6	ローム層		しまりあり

PIT83					
第1層	褐色土	10YR4/4	ローム粒多量		しまりややあり
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒中量		しまりややあり
第3層	黒褐色土	10YR2/3	ローム粒中量		しまりややあり 粘性あり
PIT84					
第1層	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒多量		しまりややあり 粘性あり
PIT110					
第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量		しまりなし
PIT85					
第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒極微量		しまりあり 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまりあり 粘性あり
PIT86					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒極微量		しまりあり 粘性非常にあり
第2層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層		しまりあり 粘性あり
PIT89					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量		しまりややあり 粘性あり
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒多量		しまり非常にあり 粘性あり
PIT90					
第1層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層		しまりあり 粘性あり
PIT91					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量		しまりややあり 粘性あり
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量		しまりあり 粘性あり
第3層	暗褐色土	10YR3/3	LB(径2cm大)3個	ローム粒中量	しまりあり 粘性あり
PIT92					
第1層	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒中量		しまりあり 粘性あり
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒少量		しまりややあり 粘性あり
第3層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまりややあり
PIT93					
第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒中量		しまり非常にあり
第2層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒少量		しまり非常にあり 粘性あり
第3層	黒褐色土	10YR2/3	LB多量	ローム粒多量	しまり非常にあり
PIT94					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量		しまりあり 粘性あり
PIT97					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量		しまりあまりなし 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		
PIT99					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒少量		しまりあり 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/4	ローム層		しまり非常にあり 粘性あり
PIT100					
第1層	黒色土	10YR2/1	褐色土塊混入		しまりあり 粘性あり
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム層		しまり非常にあり 粘性あり
PIT101					
第1層	黒褐色土	10YR2/2	ローム粒微量		しまりややあり 粘性あり
第2層	黄褐色土	10YR5/8	ローム層		しまり非常にあり 粘性あり
PIT102					
第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量		しまりややあり 粘性あり
PIT103					
第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒多量		しまりややあり
PIT106					
第1層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量		しまりあまりなし
第2層	黒色土	10YR2/1	ローム粒微量		しまりややあり
第3層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量		しまりややあり 粘性あり
PIT109					
第1層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒微量		しまりあり 粘性あり

図94 第102号ピット群（3）

【堆積土】 1～4層に分層した。黒褐色土・黒色土を主体とする覆土構成で、下位に褐色土が堆積しているものもみられる。

【出土遺物】 出土しなかった。

【小結】 規則性はなく、また遺物も出土しなかったため、用途・時期は不明である。

(工藤 由美子)

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 出土炭化材の放射性炭素年代測定

(株)地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

#### 報告内容の説明

**14C age (y BP)** : 14C 年代測定値  
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。  
半減期として5568年を用いた。

**補正14C age (y BP)** : 補正14C 年代値  
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り  
14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

**δ 13C (permil)** : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。  
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)  
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)[\text{試料}] - (13C/12C)[\text{標準}]}{(13C/12C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C[標準] = 0.0112372である。

**暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000年までの換算が可能となった。\*

\*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

#### 測定方法などに関するデータ

**測定方法** AMS : 加速器質量分析

**Radiometric** : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

**処理・調製・その他** : 試料の前処理、調製などの情報

**前処理** acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄  
acid washes : 酸洗浄  
acid etch : 酸によるエッチング  
none : 未処理

**調製、その他**

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理  
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出  
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

**分析機関** : BETA ANALYTIC INC.  
4985 SW 74 Court, Miami, FL33155, U.S.A

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 137335	3110 ± 40	-28.0	3070 ± 40
試料名 ( 12910) KAMINOJI-1 (5±)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material acid-alkali-acid			
Beta- 137336	3150 ± 40	-26.6	3130 ± 40
試料名 ( 12911) KAMINOJI-2 (5±)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material acid-alkali-acid			
Beta- 137337	3100 ± 40	-25.0	3100 ± 40
試料名 ( 12912) KAMINOJI-3 (29±)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material acid-alkali-acid			

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

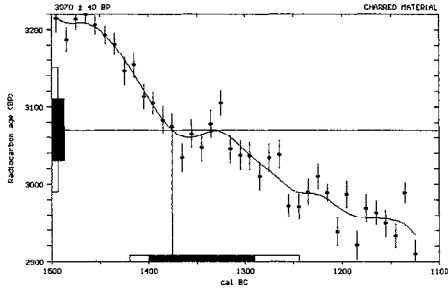
(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区植田本町1-608 TEL052-802-0703

2000年2月3日

1 / 1

**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables: C13/C12=-28 lab mult=1)  
 Laboratory Number: Beta-137335  
 Conventional radiocarbon age: 3070 ± 40 BP  
 Calibrated results: cal BC 1420 to 1245 (Cal BP 3370 to 3195)  
 (2 sigma, 95% probability)  
 Intercept data:  
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: cal BC 1375 (Cal BP 3325)  
 1 sigma calibrated results: cal BC 1400 to 1290 (Cal BP 3350 to 3240)  
 (68% probability)

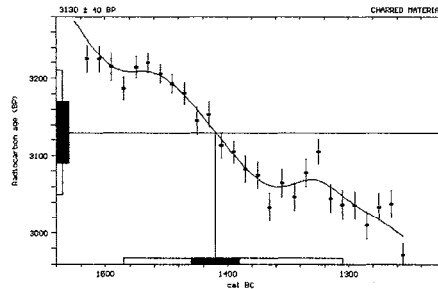


References:  
 Calibration Database  
 Editorial Comment  
 Stuiver, M., van der Plighe, H., 1998, Radiocarbon 40(3), p.61-67  
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration  
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p.1041-1083  
 Mathematics  
 Talamo, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p.317-322

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**  
 4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables: C13/C12=-26.6 lab mult=1)  
 Laboratory Number: Beta-137336  
 Conventional radiocarbon age: 3130 ± 40 BP  
 Calibrated results: cal BC 1485 to 1305 (Cal BP 3435 to 3255)  
 (2 sigma, 95% probability)  
 Intercept data:  
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: cal BC 1410 (Cal BP 3360)  
 1 sigma calibrated results: cal BC 1430 to 1390 (Cal BP 3380 to 3340)  
 (68% probability)

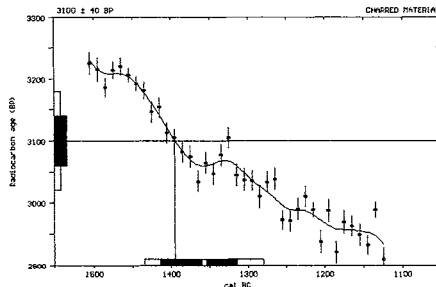


References:  
 Calibration Database  
 Editorial Comment  
 Stuiver, M., van der Plighe, H., 1998, Radiocarbon 40(3), p.61-67  
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration  
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p.1041-1083  
 Mathematics  
 Talamo, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p.317-322

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**  
 4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables: C13/C12=-25 lab mult=1)  
 Laboratory Number: Beta-137337  
 Conventional radiocarbon age: 3100 ± 40 BP  
 Calibrated results: cal BC 1435 to 1280 (Cal BP 3385 to 3230)  
 (2 sigma, 95% probability)  
 Intercept data:  
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: cal BC 1395 (Cal BP 3345)  
 1 sigma calibrated results: cal BC 1415 to 1360 (Cal BP 3365 to 3310) and  
 cal BC 1355 to 1315 (Cal BP 3305 to 3265)  
 (68% probability)



References:  
 Calibration Database  
 Editorial Comment  
 Stuiver, M., van der Plighe, H., 1998, Radiocarbon 40(3), p.61-67  
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration  
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p.1041-1083  
 Mathematics  
 Talamo, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p.317-322

**Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory**  
 4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

## 第2節 リン・カルシウム分析及び樹種同定

### 上野尻遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は、東岳から連なる丘陵裾部およびその丘陵下の低地に位置する。発掘調査の結果、丘陵部で縄文時代の竪穴住居跡・土坑が、低地で縄文時代の土坑・土器捨て場・掘立柱建物跡、時期不明のピット群が検出されており、縄文時代後期を主体とする遺跡であることが明らかにされている。

今回は、炭化材を伴う土坑が墓坑として利用されていたか検討するためにリン・カルシウム分析を、また当時の燃料材について検討することを目的として炭化材の樹種同定と灰像分析をそれぞれ実施する。

#### 1. 試料

リン・カルシウム分析試料は、第105号土坑の底部から平面的に3点（サンプルE・F・G）、第105号土坑付近から1点、第113号土坑の4a層・6層および土器内土壌の3点、第113号土坑付近から1点、合計8点である（図1）。樹種同定試料は、第105号土坑の3・8・9層から出土した炭化材4点（サンプルG・B・A・D）である。いずれも、タッパー中に複数片の炭化材が認められる。灰像分析試料は、同じく第105号土坑の8層から採取された試料（サンプルB）である。なお、試料の詳細は、各分析結果とともに表示する。

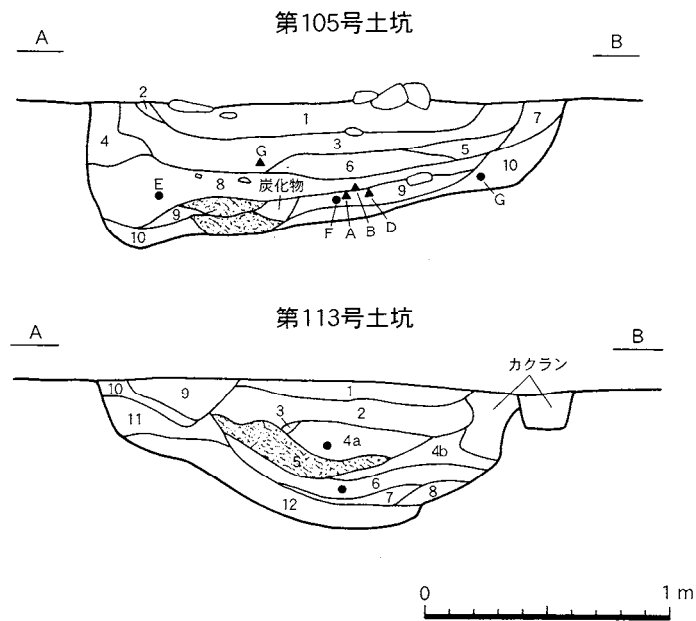


図1 第105号土坑・第113号土坑の土層断面および土壌採取位置  
●は土壌採取位置、▲は炭化物採取位置、網かけ部は焼土を示す。

#### 2. 分析方法

##### (1) リン・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行った（土壤養分測定法委員会，1981）。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、



加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ $P_2O_5$ ）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（ $P_2O_5$ mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

### （2）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### （3）灰像分析

珪化細胞列など組織構造を呈する植物珪酸体の大半は、植物体が土壤中に取り込まれた後に土壌化や攪乱などの影響によって分離して単体となる。しかし、植物体が燃えた後の灰には、組織構造が珪化組織片などとして残存する場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

試料は有機物が含まれていたため、植物珪酸体分析の手法を用いた。試料の一部を採取し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、珪化組織片や植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する珪化組織片を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にしながら同定・計数する。

## 3. 結果

### （1）リン・カルシウム分析

結果は、表1に示す。第105号土坑およびその付近では、リン酸含量0.80～1.67 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量4.08～4.38CaOmg/gである。第113号土坑およびその付近ではリン酸含量1.66～2.84 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量2.13～5.15CaOmg/gである。

表1 リン・カルシウム分析結果

採取地点	試料名・層位等	土性	土色		$P_2O_5$ (mg/g)	CaO(mg/g)
第105号土坑	サンプルE 8層	Lic~HC	10YR2/2	黒褐	1.09	4.08
	サンプルF 9層	Lic~HC	10YR3/2	黒褐	1.66	4.12
	サンプルG 10層	Lic~HC	10YR3/1	黒褐	1.67	4.38
第105号土坑付近		HC	10YR4/3	にぶい黄褐	0.80	3.92
第113号土坑	4a層	Lic~HC	10YR2/1	黒	2.45	5.15
	6層	HC	10YR3/1	黒褐	1.66	5.03
	P-103&104の内側	Lic~HC	10YR3/2	黒褐	2.51	3.54
第113号土坑		Lic~HC	10YR3/4	暗褐	2.84	2.13

注1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

注2) 土性：土壤調査ハンドブック（ベドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

Lic：軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

HC：軽埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

(2) 樹種同定

結果は、表2に示す。試料番号Aには2種類が認められた。炭化材は、落葉広葉樹1種類(クリ)とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.)

ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1~4列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・イネ科タケ亜科

(Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められる。組織は全て軸方向組織で、放射組織は認められない。タケ亜科にはタケ・ササ類があるが、解剖学的特徴で区別できない。

(3) 灰像分析

結果を表3に示す。試料中からは、珪化組織片が全く認められなかった。単体の植物珪酸体では、クマザサ属を含むタケ亜科が多産する。この他に、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科などが検出される。

表2 樹種同定結果

遺構名	層位	番号	樹種
第105号土坑	9層	A	クリ イネ科タケ亜科
	8層	B	クリ
	9層	D	クリ
	3層	G	イネ科タケ亜科

表3 灰像分析結果

種類	試料番号	B
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科クマザサ属		31
タケ亜科		147
ヨシ属		1
ウシクサ族ススキ属		7
イチゴツナギ亜科		1
不明キビ型		16
不明ヒゲシバ型		18
不明ダンチク型		14
-----		
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科クマザサ属		31
タケ亜科		108
ヨシ属		1
ウシクサ族		3
不明		5
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体		235
イネ科葉身機動細胞珪酸体		148
総計		383

4. 考察

(1) 土坑の検討

土壤中ですべて含まれているリン酸量、すなわち天然賦存量の上限は、Bowen (1983)、Bolt & Bruggenwert (1980)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991) などの調査例を参考にすると、約3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g程度と推定される。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では、5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gという報告(川崎ほか, 1991)がある。また、当社における分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壌では、6.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1~50CaOmg/g(藤貫, 1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

第105号土坑では、リン酸含量・カルシウム含量ともに天然賦存量の範囲内にある。また、対照試料として遺構付近から採取された試料と比較しても、有意差が認められない。したがって、本遺構内に遺体が埋納されていたか不明である。第113号土坑では、対照試料と比較するとカルシウム含量に差が認められるが、上述の通りカルシウム含量の含量幅が大きいことから、有意差とはいえない。また、リン酸含量は対照試料とほぼ同様な値である。これより、第113号土坑でも、遺体が埋納されていたか不明である。

以上、両遺構ともにリン・カルシウム含量の値が低いことから、これらの成分を富化する内容物の痕跡は指摘できなかった。したがって、今回の分析結果からみるかぎり、両遺構ともに遺体が埋納されていたか不明である。

## (2) 燃料材の検討

第105号土坑の9層中では、珪化組織片が全く認められなかった。このため、燃料材として利用された草本類の種類は不明である。一方、第105号土坑から出土した炭化材は、燃料材の一部が残存したものと考えられている。これらの樹種はクリであり、他にタケ亜科が混じる。この結果から、燃料材はクリを中心とした種類構成であったと推定される。

青森県内では、これまでも多くの遺跡で縄文時代の住居構築材や燃料材などの樹種同定が行われている（嶋倉，1979，1982，1985）。これらの結果ではクリが多い結果が得られており、今回の結果とも一致する。このことから、クリが縄文時代の住居構築材や燃料材に広く利用されていたと推定される。

クリは果実が生食可能であり、縄文時代の植物食糧としても重要な種類であり、縄文時代に栽培されていた可能性が指摘されている（千野，1983；山中ほか，1999）。現在栽培されているクリは、9年生～10年生以後から20年前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する（志村，1984）。このことから、栽培によって果実の収量を安定させるとともに、収量の落ちた老木を用材として利用していたことが指摘されている（千野，1983）。本遺跡でも同様の利用が行われていた可能性がある。今後、周辺での古環境調査なども行いたい。

## 引用文献

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生 —南関東地方を中心に—。東京都埋蔵文化財センター研究論集，Ⅱ，p.25-42.
- 近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用。第四紀研究，25，p.31-64.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（1）。慶應義塾藤沢校地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」，p.347-370，慶應義塾。
- 嶋倉巳三郎（1979）青森市近野遺跡から出土した炭化材の樹種。青森県埋蔵文化財調査報告書第47集「近野遺跡 発掘調査報告書（Ⅳ） —青森県総合運動公園建設関係発掘調査—」，p.321-323，青森県教育委員会。
- 嶋倉巳三郎（1982）炭化材の樹種同定。青森県埋蔵文化財調査報告書第70集「馬場瀬遺跡 発掘調査報告書」，p.284-285，青森県教育委員会。
- 嶋倉巳三郎（1985）尻高(4)遺跡出土の炭化材について。青森県埋蔵文化財調査報告書第89集「尻高(2)・(3)・(4)遺跡 発掘調査報告書」，p.235，青森県教育委員会。
- 志村 勲（1984）クリの生育特性。「農業技術体系 果樹編5 クリ基礎編」，p.11-16，社団法人農山漁村文化協会。
- 山中慎介・岡田康博・中村郁郎・佐藤洋一郎（1999）植物遺体のDNA多型解析手法の確立による縄文時代前期三内丸山遺跡のクリ栽培の可能性。考古学と自然科学，38，p.13-28.

遺構内土器観察表 1

図版	番号	遺構名	グリッド	層位	器種	部位	口頸部	胴部	地文	内面調整	分類(時期)	備考	同一	整理No.
図8	101±1	101±	XⅡT-194		深鉢	胴上		縄文	RL横走	ナデ	Ⅱ	P-79		2
図8	101±2	101±	XⅡT-194		深鉢	口	縄文、沈線文		RL斜行	ナデ	Ⅱ	P-136		3
図8	101±3	101±	XⅡT-194		深鉢	胴下~底		縄文 底部=網代痕	LR斜行	ナデ	Ⅱ	P-100		1
図8	102±1	102±	XⅢD-201	表土	鉢	口	口唇部肥厚、RL同原羽状(縦位)、沈線文		同原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅳ			4
図8	102±2	102±	XⅢD-201	1	深鉢	口	条痕文?			不明	Ⅵ			5
図10	105±1	105±	XⅢD-219	1・7	深鉢	胴上		沈線文、縄文	RL斜行	ナデ+ミガキ	Ⅲ			16
図10	105±2	105±		6	深鉢	胴下		楕円文、縄文	L斜行	ナデ+ミガキ	Ⅲ			27
図10	105±3	105±	XⅢD-219	1	深鉢	胴下		平行沈線文、楕円文		ナデ	Ⅲ			10
図10	105±4	105±		1	深鉢	胴下		平行沈線文、楕円文		ナデ	Ⅲ	P-1		11
図10	105±5	105±		9	深鉢	突起	山形突起、沿口沈線、楕円文			ナデ+ミガキ	Ⅲ	P-64		134
図10	105±6	105±	XⅢD-219	1	深鉢	胴下		平行沈線文、縄文	RL斜行	ナデ	Ⅲ			29
図10	105±7	105±		1	深鉢	口	無文			ナデ	Ⅴ		136	133
図10	105±8	105±		3	深鉢	口	無文			ナデ	Ⅴ			129
図10	105±9	105±		6	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	Ⅴ			143
図10	105±10	105±		8	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ	Ⅴ	P-18		122
図10	105±11	105±		8	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ	Ⅴ	P-27		125
図10	105±12	105±		8	深鉢	口	無文			ナデ	Ⅴ			135
図10	105±13	105±		9	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	Ⅴ			128
図10	105±14	105±		9	深鉢	口~胴上	口唇に粘土貼付(内側 棒状圧痕)	縄文帯、貼瘤、沈線間丁寧なミガキ	LR斜行	ナデ+ミガキ	Ⅴ			20
図10	105±15	105±		8	深鉢	胴下~底		無文、外面スス付着		ナデ	Ⅴ	P-50		682
図10	105±16	105±			深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ+ミガキ	Ⅴ			144
図10	105±17	105±		1	深鉢	胴上		隆帯(上に沈線)、縄文	RL斜行	ナデ	Ⅴ	P-3	25.32	7
図10	105±18	105±		1	深鉢	胴上		隆帯(上に沈線)、異原羽状	異原羽状	ナデ	Ⅴ		7.25	32
図10	105±19	105±	XⅢD-219	1	深鉢	胴上下		異原羽状、貼瘤	異原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅴ			19
図10	105±20	105±		3	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	Ⅴ			123
図10	105±21	105±		6	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-52		140
図10	105±22	105±		9	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	Ⅴ			131
図10	105±23	105±		1	深鉢	胴上下		沈線文、縄文、貼瘤	縄文	ナデ	Ⅴ	P-2		137
図10	105±24	105±		8	深鉢	胴下		無文、貼瘤		ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-50		28
図10	105±25	105±		8	深鉢	口	波状口縁被頂部、外反した口唇内面に粘土貼付、外面に貼瘤			ナデ+ミガキ	Ⅴ			127
図10	105±26	105±		9	深鉢	底				ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-61		120
図10	105±27	105±			深鉢	突起	表裏に沈線文			ナデ	Ⅴ			145
図10	105±28	105±	XⅢD-219	1	深鉢	胴上下		縄文	LR斜行	ナデ+ミガキ	Ⅵ			13
図10	105±29	105±		3	深鉢	口~胴上		平行沈線文、沈線間に貼瘤		ナデ	Ⅴ	P-11, 14	18.26, 141	24
図10	105±30	105±		9	深鉢か鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	Ⅴ		115.117~119	116
図10	105±31	105±		9	鉢	口	無文			ナデ	Ⅴ			130
図10	105±32	105±		9	壺	口頸	無文			ケズリ+ナデ	Ⅴ	P-62		681
図10	105±33	105±		9	壺	胴上下		無文、貼瘤		ナデ	Ⅴ			132
図10	105±34	105±		9	壺	胴下		無文		ミガキ	Ⅴ			15
図10	105±35	105±		9	深鉢か壺	胴上		無文、貼瘤		ナデ+ミガキ	Ⅴ			138
図10	105±36	105±		8	深鉢か壺	口	口唇部に粘土貼付(小突起)			ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-50		146
図10	105±37	105±		8	深鉢か壺	胴下~底		縄文	LR斜行	不明	Ⅴ			22
図10	105±38	105±			壺か注口	胴上下		無文、上割瘤		ナデ	Ⅴ			139
図10	105±39	105±		9	壺か注口	胴上下		無文、上割瘤		ナデ	Ⅴ			126
図10	105±40	105±	XⅢD-219	2	注口	胴上下		縄文帯、貼瘤、注口の剥落痕あり、無文部丁寧なミガキ	RL斜行	ナデ	Ⅴ			21
図10	105±41	105±		8	台部	台		無文		ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-50	14.124, 142	121
図11	105±42	105±			注口	注口		貼瘤		ケズリ+ナデ	Ⅴ			715
図11	105±43	105±			注口	注口		上割瘤		ケズリ+ナデ	Ⅴ			716
図11	105±44	105±			注口	注口		貼瘤		ケズリ+ナデ	Ⅴ			751
図11	105±45	105±		9	台部か鉢			無文		ナデ+ミガキ	Ⅴ	P5.ニチュ7		752
図12	106±1	106±	XⅢH-219	1	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-1	9.30	31
図12	106±2	106±	XⅢH-219	1	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-1	30.31	9
図12	106±3	106±	XⅢH-219	1	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-1	9.31	30
図12	106±4	106±	XⅢH-219	1	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ナデ	Ⅴ	P-2	8	12
図12	106±5	106±	XⅢH-219	1	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ナデ	Ⅴ	P-2	12	8
図12	110±1	110±			注口	注口		貼瘤		ケズリ+ナデ	Ⅴ			84
図12	110±2	110±	XⅢF-219	覆土	深鉢	口	口唇部やや肥厚、異原羽状		異原羽状	ナデ	Ⅴ			81
図12	110±3	110±			壺か注口	口	貼瘤			ナデ	Ⅴ	P-36		82
図12	110±4	110±	XⅢF-219	11	深鉢	口	口唇肥厚、平行沈線、沈線文、羽状		羽状縄文	ナデ	Ⅳ	P-101		83
図13	118±1	118±	XⅢC-217	2	壺	胴上下		楕円文、平行沈線文		ナデ	Ⅲ			86
図13	118±2	118±	XⅢC-217	覆土	深鉢	胴上		楕円文		ミガキ	Ⅲ			89
図13	118±3	118±	XⅢC-217	2	鉢	胴下		平行沈線文		ナデ	Ⅲ		87	88
図13	118±4	118±	XⅢC-217	1	鉢	胴下		平行沈線文		ナデ	Ⅲ		88	87
図88	101住-1	101住	IXA-199	覆土	鉢	略完形	口唇=平行沈線文、沈線間に縄文(LR)	連弧文、異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	Ⅴ	P-1		763
図89	138±1	138±	IXE-202	1	深鉢	口~胴上	口唇部=RL回転、口頸部=LRL横位押圧	区画帯=隆帯(上にLR回転)、胴部=RL回転	RL斜行	ミガキ	縄文前期	P-1		335

遺構内土器観察表 2

図版	番号	遺構名	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類 (時期)	備 考	同一	整理 No
図15	113土-1	113土	1	深鉢	突起	隆線文			ナデ	I			64
図15	113土-2	113土	1	深鉢	口	沿口沈線・口唇にLR施文			ナデ	III			66
図15	113土-3	113土	1	深鉢・壺	胴下		精円文		ミガキ	III			75
図15	113土-4	113土	1	不明	胴上		三角状文	RL斜行	ミガキ	III			73
図15	113土-5	113土	1	鉢	口頸	無文			ミガキ	V	内傾接合		78
図15	113土-6	113土	1	深鉢	口	無文			ナデ	V	内傾接合		50
図15	113土-7	113土	1	深鉢	口頸	無文				V			46
図15	113土-8	113土	1	深鉢	口	無文				VI			148
図15	113土-9	113土	1	深鉢	口	縄文		羽状縄文 (無節)	ナデ	V			57
図15	113土-10	113土	1	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V	羽状の重なり部、ナデ消し		42
図15	113土-11	113土	1	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	口唇部肥厚		158
図15	113土-12	113土	1	不明	口~胴上	二又突起・縄文		異原羽状	ミガキ	V	一部縄文縦回転		59
図15	113土-13	113土	1	深鉢	口頸	二又突起・縄文		異原羽状	ミガキ	V	内面炭化物付着		58
図15	113土-14	113土	1	深鉢	口頸	縄文		RL斜行	ミガキ	V			33
図15	113土-15	113土	1	深鉢	口	縄文		異原羽状	ミガキ	V			150
図15	113土-16	113土	1	深鉢	口	縄文		羽状縄文	ナデ	V			47
図15	113土-17	113土	1	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V			54
図15	113土-18-19	113土	1	深鉢	突起	突起内面キザミ・瘤			ナデ	V			56/37
図15	113土-20	113土	1	深鉢	頸胴上	縄文・上割瘤		RL斜行	ナデ	V	炭化物付着		38
図15	113土-21	113土	1	深鉢	頸胴上	縄文		RL斜行	ナデ	V		38	39
図15	113土-22	113土	1	鉢	口頸	無文	無文		ナデ	V	口縁内面折り返し		68
図15	113土-23	113土	1	鉢	口~胴上	無文			ミガキ	V			74
図15	113土-24	113土	1	鉢	口頸	無文			ナデ	V			44
図15	113土-25	113土	1	鉢	口~胴上	無文			ナデ	V			65
図15	113土-26	113土	1	壺	胴上		無文		ナデ	V			153
図15	113土-27	113土	1	壺	胴下		無文		ミガキ	V			79
図15	113土-28	113土	1	台部	台		無文		ナデ	V	台部外面ミガキ		686
図15	113土-29	113土	2	深鉢	口	瘤状突起			ナデ	V			60
図15	113土-30	113土	2	深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ	V			154
図15	113土-31	113土	2	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V			149
図15	113土-32	113土	2	深鉢	口	縄文		L(無節)	ナデ・ミガキ	V	突起剥離痕有		52
図15	113土-33	113土	2	深鉢	口頸	縄文		RL斜行	ナデ	V			77
図15	113土-34	113土	2	深鉢	口	縄文			ナデ?	V			49
図15	113土-35	113土	2	深鉢	口胴上	二又突起・縄文		異原羽状 (無節)	ミガキ	V			61
図15	113土-36	113土	2	深鉢	口	二又突起・縄文		羽状縄文	ミガキ	V			48
図15	113土-37	113土	2,4,5	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V			155
図15	113土-38	113土	2,4,5	深鉢	完形	縄文	縄文	異原羽状	ミガキ	V			684
図15	113土-39	113土	2,4,5	深鉢	口~胴上	縄文		異原羽状		V	口唇内傾		35
図15	113土-40	113土	2,4,5	深鉢	口	二又突起・瘤		RL斜行	ナデ	V			41
図15	113土-41	113土	2,4,5	鉢・浅鉢	胴上		縄文帯構成文	異原羽状	ナデ	V			76
図16	113土-42	113土	4	不明	不明		縄文帯構成文	RL斜行	ミガキ	V		73	63
図16	113土-43	113土	4	深鉢	口胴上	縄文		異原羽状	ナデ	V			45
図16	113土-44	113土	4	深鉢	口	縄文		羽状縄文	ミガキ	V			53
図16	113土-45	113土	4	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V			156
図16	113土-46	113土	4	深鉢	口頸	縄文帯構成文・口縁部に縦長瘤		LR斜行	ミガキ	V	内面炭化物付着		357
図16	113土-47	113土	5	台部	台		無文		ナデ	V			685
図16	113土-48	113土		深鉢	口	無文			ナデ	V			151
図16	113土-49	113土		深鉢	口	縄文		同原羽状 (LR)	ミガキ	V	粘土紐幅8mm		55
図16	113土-50	113土		深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V	内傾接合		51
図16	113土-51	113土		深鉢	口	瘤状突起・無文			ナデ	V			147
図16	113土-52	113土		深鉢	突起	突起内側キザミ・瘤			ナデ	V		56	71
図16	113土-53	113土		不明	不明		沈線・縄文	RL斜行	ミガキ	III		73	69
図16	113土-54	113土		香炉	無文				ナデ	V	土製品の可能性有		43
図16	113土-55	113土		壺	胴上		沈線・瘤		ナデ	V	瘤頂部刻み有		70
図16	113土-56	113土		壺・注口	頸	無文・瘤(4単位?)			ナデ	V			72
図16	113土-57	113土		壺	胴下		無文・横方向のナデ痕明瞭		ナデ	V			157
図16	113土-58	113土		注口	注口	根元下側にキザミのある瘤			不明	V	注口土器		80
図16	113土-59	113土		台部	台		横走沈線・縄文帯	RL斜行	ミガキ	V			62
図19	114土-1	114土	3	深鉢	胴上~底		縄文	LR斜行	ミガキ	V	外面煤付着		690
図19	114土-2	114土	4	深鉢	口~胴上	縄文	縄文	RL斜行	ミガキ	V	内外面炭化物付着		693
図19	114土-3	114土	4	鉢	口~胴下	内面キザミ突起・3個1セット? 無文	無文		ミガキ	V	内面煮沸痕明瞭		692
図19	114土-4	114土	4	深鉢	胴上~底		縄文	RL斜行	ミガキ	VI	内面炭化物明瞭		691
図19	114土-5	114土		注口	注口	下側根元付近に平行沈線と瘤				V			717
図19	114土-6	114土		注口	注口	3本と2本一組の沈線が注口を一周。根元の方に瘤貼付	下側根元の瘤、大きめで、刻みあり。						708
図19	114土-7	114土		注口	注口	木葉状弧線文・上下中位に瘤				V			709
図19	114土-8	114土		注口	注口	木葉状弧線文3単位・根元下側に瘤	上下中位付近にも瘤	RL斜行		V	外面ミガキ		710

遺構内土器観察表 3

図版	番号	遺構名	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類 (時期)	備 考	同一	整理 No.
図20	114土-9	114土		注口	注口	上側中位付近に瘤・下側にも瘤			不明	V			755
図20	114土-10	114土		注口	注口	上下中位付近に瘤			不明	V	外面ミガキ		753
図20	114土-11	114土		注口	注口	上側中位に瘤・下側根元にも瘤				V			711
図20	114土-12	114土		香炉?		どちらの端部も割れ口である				V			754
図20	115土-1	115土	2	深鉢・壺	口頸	横走沈線			ミガキ	Ⅲ			113
図20	115土-2・ 3-4	115土	3	深鉢	口頸	無文・肥厚	縦位又は、斜位の沈線		ミガキ	Ⅲ	沿口沈線施工後に縦沈線施工		98
図20	115土-5	115土	3	深鉢・鉢	口~胴上	楕円文・縄文		RL斜行	ミガキ	Ⅲ		114	110
図20	115土-6	115土	3	鉢	胴下		楕円文・縄文	RL斜行	ミガキ	Ⅲ		110	114
図20	115土-7・8-9 10-11-12	115土	5	深鉢	口~胴下	楕円文	楕円文・入組文		ミガキ	Ⅲ	小型深鉢・砂粒多	105	100
図20	115土-13	115土	3	鉢	胴上		楕円文		ミガキ	Ⅲ	砂粒多	100	105
図20	115土-14	115土	3	鉢	胴下		楕円文・縄文	LR斜行	ナデ	Ⅲ	外面無文部へラミガキ		99
図20	115土-15	115土	4	深鉢	胴上下		縄文	RL斜行	ミガキ	Ⅲ	外傾接合、接合帯幅1.7cm程		694
図20	115土-16 17・18	115土	5	深鉢	口~胴下	無文・肥厚	4本/13mmの櫛歯状工具で縦位の条線文		丁寧なミガキ	Ⅲ	接合帯12mm幅		94
図20	115土-19-20	115土	5	鉢	口頸	方形文?			ミガキ	Ⅲ			101
図20	115土-21	115土	5	鉢	完形	口縁と底部付近に横走沈線。その間に楕円文2単位。			ナデ	Ⅲ	袖珍土器		712
図20	115土-22	115土		壺	横状把手	楕円文			ナデ	Ⅲ			112
図21	148土-1	148土	2	深鉢	口~胴上	縄文	縄文	LR斜行	ナデ	V	縄文施工後、外面一部調整		360
図21	148土-2	148土	3	深鉢	口	沿口沈線・斜沈線(V字状文)			不明	Ⅲ	口縁外面肥厚		432
図21	148土-3	148土	3	深鉢	胴上		楕円文		不明	Ⅲ			435
図21	148土-4	148土	3	深鉢	胴下		渦巻状文	RL斜行	ミガキ	Ⅲ	接合		431
図21	148土-5	148土	3	壺	胴上		方形文	LR斜行	ナデ	Ⅲ	海綿動物骨針多量に含む		430
図21	148土-6	148土	3	深鉢	口~胴下	縄文	縄文	異原羽状	ナデ	V			393
図21	148土-7	148土	3	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V	口縁内側肥厚		370
図21	148土-8	148土	3	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V	口唇平坦・肥厚		386
図21	148土-9	148土	3	深鉢	口頸	無文	縄文	LR斜行	ミガキ	V	縄文施工後にも一部調整		389
図21	148土-10	148土	3	深鉢	口頸	無文			ナデ	V			408
図21	148土-11	148土	3	鉢	口	無文			ミガキ	V			346
図21	148土-12	148土	3	鉢	口頸	無文			ナデ	V	口唇部肥厚、調整粗雑		347
図21	148土-13	148土	3	壺	口頸	無文			ナデ	V	内傾接合、外面ミガキ		358
図21	148土-14	148土	3	壺	頸	無文・縦長の瘤・ヘラミガキ			ナデ	V	調整工具痕2~3mm		345
図21	148土-15	148土	3	壺	胴上		無文・上割瘤・ヘラミガキ		ナデ	V	調整工具痕2mm		348
図21	148土-16	148土	3	壺・注口	頸胴上	無文	無文・瘤		ナデ	V	接合帯8mm程		355
図21	148土-17	148土	3	深鉢・壺	口頸	瘤・2条沈線	瘤・2条沈線		ミガキ	V	文様6単位		706
図21	148土-18	148土	4	深鉢	胴下		沈線文		ミガキ	Ⅲ	沈線粗雑		433
図21	148土-19	148土	4	深鉢	口頸	沿口沈線・沈線文			ナデ	Ⅲ	内面沿口沈線有		422
図21	148土-20-21	148土	4	壺	胴下		渦巻状文		ミガキ	Ⅲ			423
図21	148土-22	148土	4	深鉢	口頸	無文			ミガキ	V	口唇内傾肥厚	419	417
図21	148土-23	148土	4	深鉢	口頸	無文			ミガキ	V		417	419
図21	148土-24	148土	4	鉢	口頸	無文			ナデ	V	沈線状の調整痕(?)有		404
図21	148土-25	148土	4	深鉢・壺	口頸	無文			ミガキ	V			400
図21	148土-26	148土	4	深鉢	口~胴上	無文	無文		ミガキ	V	口唇内傾		407
図21	148土-27	148土	4	鉢	口~胴上	無文			ナデ	V			381
図21	148土-28	148土	4	深鉢	口~胴上	無文	無文		粗雑なミガキ	V	外面に煤付着		705
図22	148土-29	148土	4	深鉢	口頸	無文	縄文	LR斜行	ナデ	V			366
図22	148土-30	148土	4	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V			373
図22	148土-31	148土	4	深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ	V			352
図22	148土-32	148土	4	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V	焼成後穿孔有		392
図22	148土-33	148土	4	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	調整工具痕3mm		379
図22	148土-34	148土	4	深鉢	胴上~底	LR横走	LR縦走	←	ミガキ	V	体部上半と下半で条の方向異なる		704
図22	148土-35	148土	4	深鉢	胴下		縄文	LR斜行	ナデ	V			351
図22	148土-36 37-38-39	148土	4	深鉢	口~胴上	内面刻み瘤状突起・平行縄文帯・瘤	平行縄文帯・瘤		粗雑なミガキ	V	突起と瘤の位置対応		418
図22	148土-40	148土	4	深鉢	口	斜沈線			ミガキ	VI			378
図22	148土-41	148土	4	鉢	口~胴上	弧状縄文帯	木葉状縄文帯・瘤・穿孔	LR斜行	ナデ	V	穿孔は補修ではなく単孔土器的		434
図22	148土-42	148土	4	壺・注口	頸胴上	平行縄文帯・縦長瘤	横方向の弧線文・上割瘤	RL斜行	ナデ	V	内傾接合		356
図22	148土-43	148土	5	深鉢	口~胴下	縄文	縄文	異原羽状	ミガキ	V	内面炭化物付着、接合帯25mm間隔		689
図22	148土-44	148土	5	深鉢	胴下		縄文	LR斜行	ミガキ	V			353
図23	149土-1	114土	2	深鉢	口頸	無文			ミガキ	V			368
図23	149土-2	114土	2	深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ	V			383
図23	149土-3	114土	2	深鉢	口~胴上	縄文		異原羽状	ナデ	V			363
図23	149土-4	114土	2	深鉢	口~胴上	縄文	縄文	異原羽状	ナデ	V	接合、外面炭化物付着明瞭		395
図23	149土-5	114土	2	深鉢	胴下底		縄文	LR斜行	ナデ	V			707
図23	149土-6	114土	2	壺	口~胴下	無文・ミガキ	無文・ミガキ		ナデ	V	外面全体ミガキ		537
図23	149土-7	114土	2	深鉢・壺	口頸	無文			ナデ	V			398
図23	149土-8	114土	2	台付深鉢	完形	上下3段の瘤間をそれぞれ2~3条の沈線で結ぶ。口縁部には大型縦長瘤と瘤	胴部には十字に刻まれた大型瘤	LR斜行	ミガキ	V			
図24	149土-9-10	114土	3	深鉢	口~胴上	2条の沿口沈線・V字状文			ミガキ	Ⅲ	口縁外面肥厚		424
図24	149土-11	114土	3	深鉢	口頸	無文			ミガキ	V	口唇内傾		405

遺構内土器観察表 4

図版	番号	遺構名	層位	器種	部位	口頭部	胴部	地文	内面調整	分類(時期)	備考	同一	整理No
図24	149土-13	114土	3	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	不明			34
図24	149土-14	114土	3	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V	口唇内傾		365
図24	149土-15	114土	3	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V	口唇内側肥厚		375
図24	149土-16	114土	3	深鉢	口頸	平行縄文帯		LR斜行	ミガキ	V	口唇内傾・肥厚		376
図24	149土-17	114土	3	鉢	口頸	内面刻み・瘤状突起			ナデ	V			367
図24	149土-18	114土	2	鉢	口	内面刻み状突起・無文			ナデ	V			384
図24	149土-19 20・21・22	114土	3	深鉢	口頸	瘤状突起・瘤・やや複雑な入組状文	平行縄文帯・上割瘤・縄文	異原羽状	複雑なミガキ	V	瘤多数、入組帯状文をベースに、付属文充填		426
図24	149土-23 24・25	114土	3	壺	口頸	無文			ナデ	V	口唇内傾、内面指オサエ痕・内面調整粗雑	399-403 402	
図24	149土-26	114土	3	注口	完形	内面刻突起・平行縄文帯	木葉状縄文帯4単位・木葉状縄文帯間には縦区画縄文帯・瘤貼付		ナデ+ミガキ	V	上底		
図24	149土-27	114土	4	台部	台		縄文	異原羽状	ナデ	V			396
図24	149土-28	114土	4	深鉢	胴上	上割瘤・縄文		RL斜行	ミガキ	V			350
図25	SX111-1	SX111	3	深鉢	口頸	無文			ナデ	V			409
図25	SX111-2	SX111	3	壺	頸・胴下	無文	無文		ナデ	V	内外面に煤・炭化物付着		388
図25	SX111-3	SX111	4	深鉢・鉢	口頸	無文			ナデ	V	口唇内傾		401
図25	SX111-4	SX111		壺・注口	胴上		上下穿孔横長瘤		ナデ	V	φ3mmの棒状工具で穿孔		349
図26	123土-1	123土	1	壺	胴下		重弧文		ナデ	Ⅲ			165
図26	123土-2	123土	1	深鉢	口~胴上	縄文	胴部内面縦方向のヘラナデ	異原羽状	ナデ	V			161
図26	123土-3	123土	1	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V	口唇肥厚		164
図26	123土-4	123土	1	深鉢	口	横走縄文帯・縦長瘤		RL斜行	ナデ	V			163
図26	123土-5	123土	1	壺	口頸	無文			ナデ	V		160 162	159
図26	123土-6	123土	1	壺	頸	無文・上割瘤			ナデ	V		159 162	160
図26	123土-7	123土	1	壺	頸	無文・上割瘤			ナデ	V		159 160	162
図26	124土-1	124土	1	深鉢	口	無文			ミガキ	V	口唇内傾		166
図26	124土-2	124土	1	壺	頸	縄文帯入組文・縦長瘤		隠蔽状(LR)	ナデ	V	口唇外面やや突出		167
図27	125土-1	125土	1	深鉢	口	無文			ミガキ	V			168
図27	125土-2	125土	1	深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ	V			172
図27	125土-3	125土	1	深鉢	口	縄文		LR斜行	ミガキ	V			175
図27	125土-4	125土	1	深鉢	口	縄文		異原羽状	複雑なミガキ	V			178
図27	125土-5	125土	1	台部	台		無文		ナデ	V			169
図27	125土-6	125土	1	深鉢	胴上		沈線文・縄文	LR斜行	ナデ	V			174
図27	125土-7	125土	1	壺	胴上		弧線糸入組文		ナデ	V	沈線幅1mm程度		180
図27	125土-8	125土		深鉢	口頸	無文			ナデ	V	外面タール状物付着		179
図27	125土-9	125土	覆土	深鉢	口	無文			ナデ	V			183
図27	125土-10	125土		深鉢	口	縄文			ナデ・ミガキ	V			177
図27	125土-11	125土		台部	台		無文		ケズリ・ナデ	Ⅵ			173
図27	125土-12	125土	覆土	深鉢	口	B突起・縄文・瘤		RL斜行	ナデ	V			185
図27	125土-13	125土		深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V			171
図27	125土-14	125土		壺	底		無文		ナデ	V	上げ底気味		182
図27	125土-15	125土		深鉢	口~胴上	縄文		異原羽状	複雑なミガキ	V	口唇外側つまみ出し		668
図27	125土-16	125土		注口	注口	上側中位に瘤	下側根元にも瘤		不明	V			757
図27	125土-17	125土		注口	注口	下側根元に瘤			不明	V			758
図27	125土-18	125土		注口	注口	上側中位に瘤・下側にも瘤	下側根元にも瘤		不明	V	外面ヘラミガキ		756
図27	125土-19	125土	覆土 7	異形土器	注口	上面縄文のみ、左右に瘤	下面・縄文帯構成文様・下側に瘤	LR・RL斜行	ナデ	V	異形土器、接合帯7~12mm		184
図28	126土-1	126土	1	深鉢	胴上		楕円文		不明	Ⅲ			188
図28	126土-2	126土	1	深鉢	口	無文			ナデ	V			212
図28	126土-3	126土	1	深鉢	口	無文			ナデ	V	調整工具痕幅3mm程		210
図28	126土-4	126土	1	深鉢	口	無文			ナデ	V			196
図28	126土-5	126土	1	鉢	口	無文			ナデ	V			200
図28	126土-6	126土	1	不明	底		無文		ナデ	V			208
図28	126土-7	126土	1	不明	頸	沈線文・縄文		LR斜行	ナデ	Ⅵ			211
図28	126土-8	126土	2	深鉢	口頸	隆帯文			ミガキ?	縄文中期	内面煤付着顕著、上層e式		1362
図28	126土-9	126土	2	深鉢	口~胴上	縄文	縄文	異原羽状	ケズリ・ナデ	V	口唇内傾		680
図28	126土-10 ~14	126土	4-5	深鉢	口~胴上	縄文		異原羽状	ナデ	V	縄文の上下幅12mm程度	198-671 675-678 672	199
図28	126土-15	126土	5	深鉢	口	縄文		異原羽状	複雑なミガキ	V			199
図28	126土-16	126土	5	壺	頸	沈線文・上割瘤			ナデ	V	内傾接合		191
図28	126土-17	126土		深鉢	口	無文			ナデ	V	内面に煤付着		192
図28	126土-18	126土		深鉢	口	無文			ナデ	V	口唇内傾		204
図28	126土-19	126土		深鉢	口	無文			ナデ	V			202
図28	126土-20	126土		深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	接合		195
図28	126土-21	126土		深鉢	口	無文			ナデ	V			205
図28	126土-22	126土		深鉢	台	無文			ナデ	V			201
図28	126土-23	126土		深鉢	口	無文			ナデ	V			207
図28	126土-24	126土		鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	口縁内面肥厚気味		186
図28	126土-25	126土		深鉢	口	縄文		不明	ナデ	Ⅵ			197
図28	126土-26	126土		鉢	口	無文		LR斜行		V			190
図28	126土-27	126土		深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V	口唇内傾		187
図28	126土-28	126土		深鉢	胴上		縄文帯構成文	異原羽状	ミガキ	V	口唇内面肥厚		203
図28	126土-29	126土		深鉢	口頸	平行沈線・上割瘤		LR斜行	ナデ	V	沈線幅1mm程度で深めに施文		189



遺構内土器観察表 5

図版	番号	遺構名	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類 (時期)	備 考	同一	整理 No
図28	126土-30	126土		台部	台		無文		不明	V			194
図29	126土-31	126土		壺	胴上		無文		粗雑なミガキ	V	内面調整工具痕幅3~4mm		669
図29	126土-32	126土		壺	胴上		縄文帯構成文	異原羽状	ナデ	V	縄文帯の中に分割線(スリット)なし		206
図29	126土-33	126土		壺	胴上		縄文帯構成文	LR斜行	ナデ	V			209
図29	126土-34	126土		不明	底		無文		ミガキ	V			193
図29	126土-35	126土	5	焼成 粘土						不明	上下幅20mm、上下平坦な為 土器底部の可能性有		759
図30	141土-1	141土		深鉢	胴上		沈線文		ミガキ	III			339
図30	141土-2	141土		深鉢	口頸	縄文		異原羽状	不明	V	口唇内傾		336
図30	141土-3	141土	1	深鉢	口	無文			ナデ	VI	外面煤付着		338
図30	141土-4	141土		壺・注口	底		無文		ナデ	V	底面φ15mm程の押圧有		337
図30	127土-1	127土	1	深鉢	口	単軸絡状体第1種	←	L	ナデ	III			213
図30	127土-2	127土	覆土	深鉢	口					III			215
図30	127土-3	127土	1	深鉢	口	楕円文			不明	III			214
図31	129土-1	129土	1	深鉢	口頸	無文・複合口縁			ナデ	III			234
図31	129土-2	129土	1	深鉢	口頸	単軸絡状体第1種	←	R	ミガキ	III			240
図31	129土-3	129土	1	深鉢	口頸	単軸絡状体第1種		R	ナデ	III			260
図31	129土-4	129土	1	深鉢	口~胴上	沿口沈線	斜沈線文		不明	III			255
図31	129土-5	129土	1	深鉢	口	沿口沈線			ミガキ	III			242
図32	129土-6	129土	1	深鉢	胴上		楕円文・縄文	RL斜行	ミガキ	III			231
図32	129土-7	129土	1	深鉢	胴上		楕円文	RL斜行	ナデ	III			229
図32	129土-8	129土	1	深鉢	胴上		楕円文		ミガキ	III			220
図32	129土-9	129土	1	壺	胴下		楕円文		ナデ・ミガキ	III			218
図32	129土-10	129土	1	深鉢	口頸	刻目帯・無文・横走沈線			ナデ	IV			258
図32	129土-11	129土	1	深鉢	口頸	内面刻目突起・刻み瘤・沈線文		LR斜行	ナデ	V			268
図32	129土-12	129土	1	深鉢	口	縄文		異原羽状	ミガキ	V	外面炭化物付着		299
図32	129土-13	129土	1	深鉢	胴下		無文		ナデ	VI			297
図32	129土-14	129土	2	深鉢	口	単軸絡状体第1種		L	ナデ	III			252
図32	129土-15	129土	2	深鉢	口	無文	網目状燃糸文	←	ナデ	III			251
図32	129土-16	129土	2	深鉢	口	楕円文			ナデ	III			264
図32	129土-17	129土	2	深鉢	胴上		楕円文		ナデ	III			219
図32	129土-18	129土	2	深鉢	胴上		楕円文	LR斜行	ミガキ	III			236
図32	129土-19	129土	2	深鉢	胴下		沈線文		ミガキ	III	沈線深く施文		228
図32	129土-20	129土	2	深鉢	胴上		楕円文・縄文	LR斜行	ナデ	III			237
図32	129土-21	129土	2	壺	胴下		楕円文		ナデ・ミガキ	III			217
図32	129土-22	129土	2	不明	胴上		楕円文		ミガキ	III	隆帯下に下描き沈線		300
図32	129土-23	129土	2	深鉢	口頸	無文			ミガキ	VI			301
図32	129土-24	129土	2	不明	口	無文			ナデ	VI			259
図32	129土-25	129土	2	不明	口	無文			ミガキ	VI			253
図32	129土-26	129土	2	深鉢	口頸	条痕		条痕文	ナデ	V			263
図32	129土-27	129土	2	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V			245
図32	129土-28	129土	2	深鉢	口頸	縄文		羽状縄文	ナデ	V	口唇肥厚気味		269
図32	129土-29	129土	2	深鉢	口頸	平行縄文帯・縄文・瘤		LR斜行	ミガキ	V	内面炭化物付着		267
図32	129土-30	129土	2	深鉢	胴上		縄文帯構成文	異原羽状	ミガキ	V			286
図32	129土-31	129土	2	深鉢	口	突起・刻目帯			不明	IV	後期中後葉		223
図33	129土-32	129土	2	深鉢	口	縄文		羽状縄文	ミガキ	V	口縁内面折り返し		304
図33	129土-33	129土	2	壺	口頸	平行縄文帯		RL斜行	ナデ	V			262
図33	129土-34	129土	2	壺	底		無文		ナデ	V	小型壺?		225
図33	129土-35	129土	2	壺	胴下		不明		不明	VI	内面に赤色の皮膜明瞭に残存		265
図33	129土-36	129土	3	深鉢	口頸	横走沈線			ミガキ	III		271	270
図33	129土-37	129土	3	深鉢	口頸	横走沈線			ミガキ	III	口縁部肥厚気味	270	271
図33	129土-38	129土	3	深鉢	胴上		楕円文		ミガキ	III			226
図33	129土-39	129土	3	深鉢	胴上		沿口沈線・楕円文	LR斜行	ナデ	III			221
図33	129土-40	129土	3	深鉢	胴下		楕円文		ミガキ	III			233
図33	129土-41	129土	3	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V	口唇部肥厚		254
図33	129土-42	129土	3	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V			278
図33	129土-43	129土	3	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	口唇内傾		283
図33	129土-44	129土	3	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V	口唇肥厚		247
図33	129土-45	129土	3	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V			261
図33	129土-46	129土	3	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	口唇内傾・砂粒多		285
図33	129土-47 ・48	129土	3	深鉢	口~胴下	内面刻目突起・瘤・縄文	縄文	異原羽状	ミガキ	V			291
図33	129土-49	129土	3	深鉢	完形	無文	無文		ミガキ	V	波状口縁?		696
図33	129土-50	129土	3	深鉢	口頸	縄文		LR斜行	ナデ	VI	細砂粒多		239
図33	129土-51	129土	3	深鉢	口	縄文		RL斜行	ミガキ	V	口唇内傾		276
図33	129土-52	129土	2.3	浅鉢	完形	無文	無文		ナデ	VI	袖珍土器		298
図33	129土-53	129土	3	鉢	口頸	瘤状突起・沈線			ナデ	V			232
図33	129土-54	129土	3	深鉢	口	不明			ナデ	VI	口唇内傾		249
図33	129土-55	129土	3	台部	台		無文		ナデ	V			227
図33	129土-56	129土	3	不明	口頸	無文			ナデ	V	口唇部外側に突出		256
図33	129土-57	129土	3	不明	底				ナデ	V	若干上底		282
図33	129土-58	129土	3	深鉢	底		不明		ナデ	VI	上底		216
図33	129土-59	129土	3	深鉢	胴下		無文		ミガキ	VI	外面炭化物付着		302



遺構内土器観察表 6

図版	番号	遺構名	層位	器種	部位	口頸部	胴部	地文	内面調整	分類(時期)	備考	同一	整理No
図33	129土-60	129土	4	深鉢	口頸	平行縄文帯・刺突列(φ1.5mm)		LR斜行	ナデ	Ⅲ	内面炭化物付着		266
図33	129土-61	129土	4	深鉢	口	沿口沈線		LR斜行	不明	Ⅲ			277
図33	129土-62	129土	4	深鉢	口	無文			ミガキ	V	口縁内面肥厚		272
図33	129土-63	129土	4	深鉢	口	縄文		異原羽状	ナデ	V	口唇内傾・砂粒多		289
図34	129土-64	129土	4	深鉢	口頸	縄文		LR斜行	ナデ	Ⅵ			274
図34	129土-65	129土	4	深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ	Ⅵ			279
図34	129土-66	129土	4	深鉢	口頸	縄文		LR斜行	ナデ	Ⅵ	細砂粒多		273
図34	129土-67	129土	4	深鉢	口頸	縄文		LR斜行	ナデ	Ⅵ			281
図34	129土-68	129土	4	深鉢	胴上		縄文帯構成文	異原羽状	ナデ	V			287
図34	129土-69	129土	4	壺・注口	口頸	平行縄文帯・瘤		RL斜行	ナデ・ミガキ	V	瘤多		241
図34	129土-70	129土	4	壺	頸～底	無文	無文		ナデ	V	縦方向の指ナデ痕が全面に明瞭に残る		695
図34	129土-71	129土	4	不明	胴上		無文・沈線・縄文	LR斜行	ナデ	V			284
図34	129土-72	129土	4	深鉢	底		無文		ナデ	Ⅵ			230
図34	129土-73	129土	4	深鉢	底		不明		不明	不明	底部器厚1.7cmと厚い		224
図34	129土-74	129土	5	不明	口	平行縄文帯		RL斜行	ミガキ	V	口唇外側に突出		246
図34	129土-75	129土		深鉢	胴下		渦巻状文		ミガキ	Ⅲ			222
図34	129土-76	129土		鉢	口	楕円文			ナデ・ミガキ	Ⅲ			250
図34	129土-77	129土		深鉢	口頸	不明			ナデ	Ⅵ	器面磨耗著しい		238
図34	129土-78	129土		深鉢	口	縄文		LR斜行	ミガキ	Ⅵ			243
図34	129土-79	129土		壺	胴上		縄文帯構成文・瘤	不明	不明	V			275
図34	129土-80	129土		注口	注口	無文・下側に瘤1点			不明	V			761
図34	129土-81	129土		注口	注口	無文			不明	V			760
図35	131土-1	131土	1	壺	口頸	無文			ナデ・ミガキ	V	外面調整ミガキ		697
図35	131土-2	131土	2	深鉢	口	単軸絡状体第1種		R	ナデ・ミガキ	Ⅲ	口唇部平坦		315
図35	131土-3	131土	2	深鉢	口	楕円文			ミガキ	Ⅲ	外傾接合		326
図35	131土-4	131土	2	深鉢	口～胴上	波状口縁・波状文・縄文	沈線文	LR斜行	ミガキ	Ⅲ			670
図35	131土-5	131土	2	深鉢	口頸	縄文帯入組文・瘤			ナデ	V	口縁部のみ、縦長コブ		329
図35	131土-6	131土	2	深鉢・壺	口	平行沈線・縦長瘤・縄文		LR斜行	ミガキ	V	口縁部コブ、指によるつまみ出し		320
図35	131土-7	131土	2	台部	台		無文		ナデ	V			321
図35	131土-8	131土	2	壺	胴上		縄文帯構成文・瘤剥落痕有			V			310
図35	131土-9	131土	2	壺	頸	平行沈線瘤多数			ナデ	V	接合帯幅20mm弱、外傾接合		312
図35	131土-10	131土	2	壺・注口	胴上		無文・上割瘤		ナデ	V	器表面磨耗		303
図36	131土-11	131土	3				楕円文		ミガキ	Ⅲ	沈線断面三角形	328-319 324	314
図36	131土-12	131土	3	深鉢	胴上		斜格子目文・縄文	RL縦走	ミガキ	V			67
図36	131土-13	131土	3	深鉢	口頸	無文・口縁直下に指オサエ跡			ナデ	V	指オサエ跡幅13mm程		311
図36	131土-14	131土	3	深鉢	口頸	瘤状突起・平行縄文帯			ナデ	V	口唇内傾肥厚		327
図36	131土-15	131土	3	深鉢	突起	二又突起・瘤			ミガキ	V			316
図36	131土-16	131土	3	香炉?	口	瘤(状突起)・沈線・縄文		LR斜行	ナデ	V			318
図36	131土-17	131土	3	不明	底				ナデ	V	砂粒多		40
図36	131土-18	131土	3	不明	底		無文		ミガキ	Ⅵ			313
図36	131土-19	131土	4	深鉢	口	楕円文			ミガキ	Ⅲ		314-319 324	308
図36	131土-20	131土	4	鉢	胴上		楕円文		ミガキ	Ⅲ	沈線断面三角形の部分有		328
図36	131土-21	131土	4	壺	底		V字形沈線文・刺突列・穿孔		ミガキ	Ⅵ	φ3mmの棒状工具で刺突		325
図36	131土-22	131土	4	深鉢	口	縄文		LR斜行	ナデ	V	口唇内傾		309
図36	131土-23	131土	4	壺	口頸	無文			ミガキ	V	砂粒多		322
図36	131土-24	131土	5	深鉢	口頸	無文			ナデ	Ⅲ	口唇外面肥厚		317
図36	131土-25	131土	5	壺	胴下		楕円文		ミガキ	Ⅲ	外傾接合		323
図36	131土-26	131土	4	鉢	胴上		楕円文		ミガキ	Ⅲ	沈線断面三角形の部分有	324	319
図36	131土-27	131土	4	鉢	胴上		楕円文		ミガキ	Ⅲ	沈線断面三角形の部分有	319	324
図36	142土-1	142土	1	不明	底		不明		ミガキ	V	上底		340
図36	142土-2	142土	1	深鉢	口	刻目帯2条・沈線文			ミガキ	V	刻目3.5個/cm		341
図36	143土-1	143土	1	深鉢	口頸	不明		不明	ナデ	V	器表面磨耗		342

遺構内石器観察表 1

図版	番号	器種	素材形態	石質	出土地	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	整理No
図11	105土-S1	石槍		玉髓質珪質頁岩	105土	1	58	24	8.1	13.8		64
図11	105土-S2	石製品?		細粒凝灰岩	105土	9	53	41	16	27.1	磨製石斧基部のような形態であるが軟質の石材である	190
図11	105土-S3	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	105土	1	92	64	14.6	66.1	主要剥離面打点横位置	33
図11	105土-S4	二次加工ある剥片	縦長剥片	珪質頁岩	105土	8	68	30.5	15	22.2	被熱・焼けハジケ有	104
図11	105土-S5	凹石		凝灰岩	105土	9	139	107	43	698.3		152
図16	113土-S1	石鏃		珪質頁岩	113土		28	13	3.5	0.8	有茎凸基・付着物有	1
図16	113土-S2	凹石		石英安山岩	113土	1	114	76	65	687.8		154
図16	113土-S3(129土-S8)	石皿			113土 129土	1	225	161	33	1015.2	129土-S8と接合	201
図23	148土-S1	凹石		凝灰岩	148土	3	105	68	44	374.3		155
図23	148土-S2	凹石			148土		116	52	29	189.3		202
図23	148土-S3	凹石		安山岩	148土	3	128	69	45	469.5		166
図23	148土-S4	叩石			148土		139	55	44	445.7		200

遺構内石器観察表 2

図版	番 号	器 種	素材形態	石 質	出土地	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備 考	整理 No.
図24	149土-S1	石鎌		玉髓質珪質頁岩	149土		34	19	5.6	3	有茎平基・横長剥片利用	7
図24	149土-S2	石鎌		珪質頁岩	149土	3	37	14	4.4	1.6	有茎凸基	6
図24	149土-S3	石鎌		珪質頁岩	149土	3	20	11	3.1	0.7	有茎凸基	5
図24	149土-S4	石鎌		玉髓質珪質頁岩	149土	攪乱	18	13	3	0.6	有茎平基	8
図25	149土-S5	石鎌(未製品)	剥片	形質頁岩	149土	2	26	15	6	1.7		115
図25	149土-S6	大石平型石筥	両極剥片	玉髓質珪質頁岩	149土	4	20	27	5.7	2.8	大石平型石筥	61
図25	149土-S7	スクレイパー	剥片	珪質頁岩	149土	3	55	38	14.7	31	上半部折れ	88
図25	149土-S8	叩凹石			149土	4	55	63	52	181.8		203
図25	SX111-S1	スクレイパー	縦長剥片	珪質頁岩	SX111	II	37	29	8	10		103
図25	SX111-S2	スクレイパー	剥片	珪質頁岩	SX111	3	28	18	5.1	3.1		70
図25	SX111-S3	石鎌		珪質頁岩	SX111	4	7	11	3.3	0.5	有茎凸基	4
図29	126土-S1	偽石器		珪質頁岩	126土	5	34	42.5	29.5	50		118
図29	126土-S2	石匙	剥片	玉髓質珪質頁岩	126土	5	37	32	4	4.6	薄い剥片利用	117
図29	126土-S3	叩石			126土		84	78	64	606.7		205
図29	126土-S4	凹石		石英安山岩	126土		243	135	52	2113.4		151
図29	126土-S5	凹石		石英安山岩	126土		90	74	59	503.4	凹部形成後の被熱痕有	153
図29	126土-S6	凹石			126土	4	144	47	28	247		206
図34	129土-S1	石鎌		玉髓質珪質頁岩	129土	3	26	14	4	0.9	有茎凸基	2
図34	129土-S2	石鎌		珪質頁岩	129土	3	24	13	4.1	0.9	有茎凸基	3
図34	129土-S3	石錐	縦長剥片	珪質頁岩	129土	3	48	13	4.5	3		29
図34	129土-S4	石錐		玉髓質珪質頁岩	129土	6	47	10	7.7	3.4		30
図35	129土-S5	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	129土	1	47	21	5.7	4.2		34
図35	129土-S6	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	129土	3	56	66	8	23.9	主要剥離面打点横位置・薄い剥片を利用	35
図35	129土-S7	偽石器		珪質頁岩	129土	5	46	71	18.1	45		77
図35	129土-S8 (113土-S3)	石皿			113土 129土	1	225	161	33	1015.2	113土-S3と接合 当土坑出土部分が主体	201

遺構外石器観察表 1

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類(時期)	備 考	同一	整理 No.
図41-1	X III C-203	沢03	深鉢	胴上下		縄文、縦位沈線、外面スス付着	RL斜行	ナデ	II	P-676		729
図41-2	X III C-202	沢02	深鉢	胴上下		沈線文		ナデ	III	P-317		737
図41-3	X III C-202	沢02	深鉢	口	大波状口縁、沿口沈線、沈線間に縦位刻目			ナデ+ミガキ	IV	P-315		509
図41-4	X III C-201	沢02	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-114		626
図41-5	X III C-202	沢02	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V	P-417		533
図41-6	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-157	615	559
図41-7	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-180		561
図41-8	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-162		632
図41-9	X III C-202	沢03	深鉢	口~胴上	無文、口唇部内面肥厚	無文		ナデ+ミガキ	V	P-764-751		568
図41-10	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴下	無文	無文		ナデ	V	P-264		633
図41-11	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文		ナデ	V	P-418, 716		641
図41-12	X III C-202	沢03	深鉢	口~胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-765		628
図41-13	X III C-202	沢03	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-590		634
図41-14	X III C-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-1151		629
図41-15	X III C-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ+ミガキ	V	P-1125		630
図41-16	X III C-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-992		639
図41-17	X III C-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-964, 986, 966, 967		569
図41-18	X III C-202	沢10	深鉢	口	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-1683		604
図41-19	X III C-202	沢03	深鉢	口	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-510		616
図41-20	X III C-202	沢10	深鉢	口	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-945		529
図41-21	X III C-202	沢03	深鉢	口	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-776		617
図41-22	X III C-202	沢03	深鉢	口	無文	無文		ナデ+ミガキ	V	P-532		624
図41-23	X III C-202	沢03	深鉢	口	無文	無文		ナデ	V	P-775		603
図42-24	X III C-202	沢03	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-554		528
図42-25	X III C-202	沢10	深鉢	口	無文	無文		ケズリ+ミガキ	V	P-945		529 II
図42-26	X III C-202	沢10	深鉢	口	無文	無文		ナデ+ミガキ	V	P-1411		619
図42-27	X III C-202	沢03	深鉢	胴下~底		無文		ナデ	V	P-579		504
図42-28	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-185		652
図42-29	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-403, 404, 735	648.650	657
図42-30	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-377, 378	648.657	650
図42-31	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-380	650.657	648
図42-32	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-420		655
図42-33	X III C-202	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状、外面スス付着	異原羽状、外面スス付着	異原羽状	ナデ	V	P-382		540
図42-34	X III C-202	沢03	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-536		519

遺構外土器観察表 2

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類(時期)	備 考	同一	整理No.
図42-35	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-225		517
図42-36	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-158		550
図42-37	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-723		543
図42-38	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V	P-1131		523
図42-39	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	縄文		RL斜行	ケズリ+ナデ	V	P-713		1055
図42-40	XⅢC-202	沢02	深鉢	口~胴上	縄文、外面スス付着	縄文	LR斜行	ケズリ+ナデ	V	P-196		521
図42-41	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	縄文、外面スス付着	縄文、外面スス付着	LR斜行	ナデ	V	P-1122		586
図42-42	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	小突起、突起内面に棒状圧痕、縄文		LR斜行	ナデ+ミガキ	V	P-183		508
図42-43	XⅢC-202	沢02	深鉢	胴上下		沈線文、爪形刺突文		ナデ	V	P-319		746
図43-44	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	条痕文、補修孔		条痕文	ナデ+ミガキ	V	P-192		636
図43-45	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	小突起、口唇直下外面に貼瘤、沈線文、縄文、外面スス付着	沈線文、縄文、貼瘤、外面スス付着	LR斜行	不明	V	P-1123, 1127		511
図43-46	XⅢC-202	沢10	鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V	P-1410		613
図43-47	XⅢC-202	沢03	鉢	頸~胴上	無文、ミガキ	無文、ミガキ		ケズリ+ナデ	V	P-701	530	535
図43-48	XⅢC-202	沢03	壺か注口	胴下~底		無文、ミガキ		ナデ+ミガキ	V	P-702		539
図43-49	XⅢC-201	沢02	壺か注口	胴下~底		無文		ナデ	VI	P-72		503
図43-50	XⅢC-202	沢02	深鉢	口~胴上	大波状口縁、内面口唇肥厚、沿口沈線、縄文、沈線上に貼瘤、外面スス付着	平行沈線文、縄文、貼瘤、外面スス付着	LR斜行	ナデ	V	P-383		659
図43-51	XⅢC-202	沢02	鉢	胴上下		無文		ナデ	V	P-415		534
図43-52	XⅢC-202	沢10	壺	胴上下		沈線文、縄文、ナデ消されている	LR・RL斜行	ケズリ+ナデ	V	P-783, 1152, 1149		703
図43-53	XⅢC-202	沢02	壺	口	平行沈線文、縄文		LR斜行	ナデ	V	P-346, 300		538
図43-54	XⅢC-202	沢01	壺か注口	胴上下		沈線文、縄文、無文部ミガキ	LR斜行	ナデ	V	P-55		743
図45-55	XⅢC-203	沢10	深鉢	胴上		沈線文、縄文	RL斜行	ナデ	II	P-1178		720
図45-56	XⅢC-201	沢10	深鉢	口	縄文、波状、平行沈線文、口唇内面に粘土貼付		RL斜行	ナデ	III	P-1205		728
図45-57	XⅢC-201	沢10	深鉢	胴上下		精円文		ナデ	III	P-1450		727
図45-58	XⅢC-202	沢10	深鉢	頸		精円文		ケズリ+ナデ	III	P-1407		725
図45-59	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴下		沈線文		ナデ	III	P-1866		748
図45-60	XⅢC-201	沢02	深鉢	口	大波状口縁、沿口沈線、沈線間に縦位刻目			ナデ+ミガキ	IV	P-93		506
図45-61	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V	P-99		605
図45-62	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-279		612
図45-63	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-160		620
図45-64	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V	P-1801		614
図45-65	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-1651, 1854	662	663
図45-66	XⅢC-202	沢03	深鉢	口~胴下	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-685		640
図45-67	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上下	無文	無文		ケズリ+ナデ	V	P-1657	663	662
図45-68	XⅢC-202	沢02	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-312		638
図45-69	XⅢC-201	沢03	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V	P-476		531
図45-70	XⅢC-201	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-1455, 1221		635
図45-71	XⅢC-201	沢10	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ナデ	V	P-1437		598
図45-72	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V			1452
図45-73	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	無文			ケズリ+ミガキ	V	P-543		596
図45-74	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-712		601
図45-75	XⅢC-202	沢03	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V	P-704		1042
図45-76	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V	P-1010		1054
図45-77	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-875	559	615
図45-78	XⅢC-201	沢03	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-474		560
図46-79	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ミガキ	V	P-1364		557
図46-80	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-1079		627
図46-81	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-1798		556
図46-82	XⅢC-201	沢02	深鉢	口~胴上	異原羽状、外面スス付着	異原羽状、外面スス付着	異原羽状	ナデ	V	P-102		551
図46-83	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状、内外面スス付着	異原羽状、内外面スス付着	異原羽状	ケズリ+ナデ	V	P-932, 1302		660
図46-84	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-1301, 1776		649
図46-85	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-638		570
図46-86	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状、外面スス付着	異原羽状、外面スス付着	異原羽状	ナデ	V	P-924, 913		541
図46-87	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-933		545
図46-88	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-691		1052
図46-89	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状、外面わずかにスス付着	異原羽状、外面わずかにスス付着	異原羽状	ナデ	V	P-1567, 1571		653
図46-90	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1807		1051
図46-91	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-627		520
図46-92	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-1659		546
図46-93	XⅢC-201	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-1430		548
図46-94	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-492		625
図46-95	XⅢC-201	沢02	深鉢	口	縄文		斜行縄文(LR?)	ナデ	V	P-91		608
図46-96	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	縄文	縄文	LR斜行	ナデ	VI	P-1567		654
図46-97	XⅢC-201	沢10	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ+ミガキ	V	P-833		549
図46-98	XⅢC-202	沢02	深鉢	口~胴上	条痕文	条痕文	条痕文	ケズリ+ナデ	V	P-191, 204		518
図46-99	XⅢC-202	沢03	深鉢	胴上下		条痕文	条痕文	ナデ	V	P-649		721
図46-100	XⅢC-203	沢02	深鉢	頸~胴上	沈線文、爪形刺突文		LR斜行	ナデ	V	P-439		744
図46-101	XⅢC-202	沢02	鉢	口~胴上	L・R斜行縄文、無文、ミガキ	無文、ミガキ		ケズリ+ナデ	V	P-348	535	530
図46-102	XⅢC-202	沢10	壺	口~胴上	平行沈線文、口唇と沈線間に縄文	縄文	LR斜行	ナデ	V	P-1061		542
図46-103	XⅢC-202	沢03	壺か注口	胴上下		縄文帯(異原羽状)、沈線間丁寧なミガキ	異原羽状	ナデ	V	P-636		516
図46-104	XⅢC-202	沢10	壺か注口	胴上下		沈線文、縄文	異原羽状、LR・RL斜行	ナデ	V	P-1262		741

遺構外土器観察表 3

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口頸部	胴部	地文	内面調整	分類(時期)	備考	同一	整理No.
図47-105	XⅢC-202	沢03	深鉢	口～胴上	小突起、突起下に瘤、縄文帯	縄文帯	LR斜行	ナデ	V	P-748		701
図47-106	XⅢC-203	沢10			土器片副利用、側面一部擦、単軸絡条体第5類			ナデ	Ⅲ	P-1187, 円盤状土製品		750
図48-107	XⅢC-203	沢10	深鉢	胴下～底		縄文	多軸絡条体	ナデ	I	P-1877		749
図48-108	XⅢC-202	沢02	深鉢	胴上		平行沈線文、縄文	LR斜行	ナデ	Ⅲ	P-412		731
図48-109	XⅢC-201	沢10	深鉢	胴下		沈線文、歯状文		ナデ	Ⅲ	P-1425		730
図48-110	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	大波状口縁、口唇部肥厚、棒状縦位圧痕、沈線文			ナデ	Ⅳ			610
図48-111	XⅢC-203	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ+ミガキ	V	P-1880		611
図48-112	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴上	無文	無文		ナデ	V	P-1762		642
図48-113	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ケズリ+ナデ	V	P-1800		564
図48-114	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ	V	P-398		558
図48-115	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ケズリ+ナデ	V	P-1836		623
図48-116	XⅢC-201	沢01	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V	P-5		563
図48-117	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V	P-1852		597
図48-118	XⅢC-202	沢01	深鉢	口～胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ケズリ+ナデ	V	P-23		522
図48-119	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴上	異原羽状、外面炭化物付着、内面スス付着	異原羽状、外面炭化物付着、内面スス付着	異原羽状	ナデ	V	P-1804, 1794		656
図48-120	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	P-1244		658
図48-121	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ミガキ	V	P-1792		1053
図48-122	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状、外面スス付着		異原羽状	ケズリ+ミガキ	V	P-1803		552
図48-123	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V	P-1619		547
図48-124	XⅢC-201	沢02	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-86		544
図48-125	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1829		554
図48-126	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	縄文		斜行縄文	ナデ	V	P-1592		572
図48-127	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	縄文	縄文	LR斜行	ナデ	V	P-1818		651
図48-128	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上下		条痕文	条痕文	ナデ	V	P-1858		722
図49-129	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上下		条痕文	条痕文	ケズリ+ナデ	V	P-1787		723
図49-130	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上		条線文、外面炭化物付着	条線文	ケズリ+ミガキ	V	P-1278, 1561		718
図49-131	XⅢC-202	沢02	深鉢	口	平行沈線、縄文、外面わずかにスス付着		LR斜行	ナデ	V	P-409		719
図49-132	XⅢC-202	沢	深鉢	口	小突起、波頂部に突起2つ、縄文、貼瘤、沈線文		LR斜行	ナデ	V			555
図49-133	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	小突起、突起外面に貼瘤、突起内面に棒状圧痕、縄文		LR斜行	ナデ+ミガキ	V	P-15		514
図49-134	XⅢC-203	沢10	深鉢	頸～胴上	沈線文、爪形刺突文		RL斜行	ナデ	V	P-1153	1352	735
図49-135	XⅢC-202	沢10	鉢	口	無文、内面炭化物付着			ナデ	V	P-1500		599
図49-136	XⅢC-202	沢10	壺か深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V	P-1035		622
図49-137	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	口縁部に動物形突起、粘土紐貼付、口唇部肥厚、縄文		LR斜行	ナデ+ミガキ	V	P-1610	1337	512
図49-138	XⅢC-202	沢02	壺	瘤		有孔把手状突起、平行沈線文、縄文	LR・RL斜行	ナデ	V	P-3		762
図49-139	XⅢC-202	沢01	鉢か壺	胴上		隆帯、沈線文		ナデ+ミガキ	Ⅲ		740	733
図49-140	XⅢC-201	沢10	壺か鉢	胴上		隆帯、沈線文		ナデ+ミガキ	Ⅲ		733	740
図49-141	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上下		沈線文		ナデ	Ⅲ			745
図49-142	XⅢC-202	沢10	壺	胴上下		沈線文		ナデ	Ⅲ			739
図49-143	XⅢC-202	沢10	鉢	口	小突起、平行沈線文、縄文帯		LR斜行	ナデ	Ⅳ			738
図49-144	XⅢC-202	沢10	広口壺か鉢	頸～胴上		平行沈線文、沈線間に縦位刻目、沈線文	縄文	不明	Ⅳ			726
図49-145	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴下	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V	P-1781, 1785, 1796		661
図49-146		沢10	広口壺か鉢	頸	沈線文、沈線間に縦位刻目			ナデ	Ⅳ			736
図49-147	XⅢC-202	沢02	深鉢	口～胴上	無文	無文		ナデ+ミガキ	V	P-360		637
図49-148	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V	P-731		621
図49-149	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ケズリ+ナデ	V	P-585		566
図49-150	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ナデ	V			1236
図49-151	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V			565
図49-152	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V			618
図49-153	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V			562
図49-154	XⅢC-202	沢10	深鉢	口～胴上	無文	無文		ナデ	V	P-1685		631
図49-155	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ミガキ	V			606
図49-156	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V			609
図49-157	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴下～底		無文		ナデ	Ⅵ			505
図50-158	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1132		553
図50-159	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			600
図50-160	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			524
図50-161	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			526
図50-162	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	縄文、外面スス付着		LR斜行	ナデ	V			1143
図50-163	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状、外面スス付着		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1050
図50-164	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴下～底		縄文	LR斜行	ナデ	Ⅵ			502
図50-165	XⅢC-203	沢10	深鉢	口	条痕文		条痕文	ナデ+ミガキ	V			525
図50-166	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	小突起、口唇肥厚、平行沈線文、縄文		RL斜行	ナデ	V			507
図50-167	XⅢC-202	沢03	深鉢	口	小突起、沈線文、縄文		RL斜行	ナデ	V			527
図50-168	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上		縄文帯、上割瘤	LR斜行	ナデ	V	P-1133		510
図50-169	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上下		縄文、沈線文、ミガキ	LR斜行	ナデ+ミガキ	V			724
図50-170	XⅢC-202	沢10	深鉢	胴上下		貼瘤、沈線文、縄文、無文部ミガキ	LR斜行	ナデ	V			732
図50-171	XⅢC-201	沢02	深鉢	胴上下		縄文帯、無文部ミガキ	LR斜行	ナデ	V			747
図50-172	XⅢC-201	沢10	深鉢	胴上		沈線文、縄文、貼瘤	LR斜行	ナデ	V			734
図50-173		沢	深鉢	口	波状口縁、縄文、沿口沈線、沈線文、沈線間に爪形刺突文		斜行縄文	ナデ	V		735	1352

遺構外土器観察表 4

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頭 部	胴 部	地 文	内面刺査	分類 (時期)	備 考	図一	整理 No.
図50-174	XⅢC-202	沢10	深鉢か鉢	胴下～底		異原羽状、外面スス付着	異原羽状	ナデ	V			702
図50-175	XⅢC-201	沢02	鉢	口	無文			ナデ	V			607
図50-176	XⅢC-202	沢10	鉢	口	無文			ナデ	V			532
図50-177	XⅢC-202	沢02	壺	口頸	無文、ミガキ			ケズリ+ナデ	V			536
図50-178	XⅢC-202	沢10	壺	口頸	無文、ミガキ			ナデ	V			567
図50-179	XⅢC-202	沢03	壺か深鉢	口	山形突起、突起頂部に小突起、外面に瘤、口縁に沿って外面に縄文		LR斜行	ナデ+ミガキ	V			515
図50-180	XⅢC-202	沢10	壺か注口	胴上下		沈線文、異原羽状、無文部ミガキ	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			742
図50-181			注口	注口		縄文帯、貼瘤	LR斜行	ケズリ+ナデ	V			713
図51-182	XⅢF-205	沢01	深鉢	口～胴上	折り返し口縁、無文	無文		ケズリ+ナデ	Ⅲ			1315
図51-183	XⅢG-205	沢01	壺	口頸	沈線文			ケズリ+ナデ	Ⅲ			1207
図51-184	XⅢG-205	沢01	壺	胴上		楕円文		ナデ	Ⅲ		1212	1211
図51-185	XⅢB-205	沢01	壺	胴下		楕円文		ナデ	Ⅲ		1211	1212
図51-186	XⅢB-206	沢01	壺	口頸	頸部に隆線			ナデ	Ⅲ			1218
図51-187	XⅢF-205	沢01	壺	胴上		楕円文		ケズリ+ナデ	Ⅲ		1221.1222	1219
図51-188	XⅢF-206	沢01	壺	胴上		楕円文		ケズリ+ナデ	Ⅲ		1219.1222	1221
図51-189	XⅢG-205	沢01	壺	胴下		楕円文、平行沈線文		ケズリ+ナデ	Ⅲ		1219.1221	1222
図51-190	XⅢB-203	沢01	深鉢	胴下		縄文帯+沈線文、沈線間に刻目、内外面炭化物付着	LR・RL斜行	ナデ	Ⅳ			1457
図51-191	XⅢB-203	沢01	鉢	頸～胴上	平行沈線文、沈線間に刻目、内面炭化物付着	縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ナデ	Ⅳ			1202
図51-192	XⅢF-205	沢01	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ケズリ+ナデ	V			1029
図51-193	XⅢH-206	沢01	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ナデ	V			1241
図51-194	XⅢH-204	沢01	深鉢	口～胴上	無文・外面炭化物付着	無文・外面炭化物付着		ナデ	V			1242
図51-195	XⅢG-205	沢01	深鉢	口～胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ナデ	V			1505
図51-196	XⅢH-206	沢01	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1321
図51-197	XⅢH-204	沢01	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V			1454
図51-198	XⅢH-206	沢01	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V			1494
図51-199	XⅢF-205	沢01	深鉢	口	小突起、突起頂部から内面に棒状圧痕、縄文、沈線文、貼瘤、外面スス付着		RL斜行	ナデ	V		1298	1297
図51-200	XⅢG-205	沢01	深鉢	口～胴上	縄文	縄文	LR斜行	ケズリ+ナデ	V			1129
図51-201	XⅢB-203	沢01	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1403
図51-202	XⅢH-206	沢01	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1481
図51-203	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	口唇部肥厚、条痕文			条痕文	V		1243~1245,1248	1246
図51-204	XⅢH-206	沢10	深鉢	胴上		条痕文	条痕文	ナデ+ミガキ	V		1244~1248	1243
図51-205	XⅢG-205	沢01	深鉢	胴上下		条痕文、外面スス付着	条痕文	ナデ+ミガキ	V		1243,1245~1248	1244
図52-206	XⅢH-204	沢01	深鉢	口～胴上	条線文、外面わずかにスス付着	条線文、外面わずかにスス付着	条線文	ナデ	V		1252~1254	1250
図52-207	XⅢH-206	沢01	深鉢	胴上		条線文、外面炭化物付着	条線文	ナデ	V		1250,1252,1254	1253
図52-208	XⅢH-206	沢01	深鉢	胴下		条線文、外面炭化物付着	条線文	ナデ	V		1250,1253,1254	1252
図52-209	XⅢG-205	沢01	深鉢か鉢	口	無文			ナデ	V			1501
図52-210	XⅢG-205	沢01	深鉢か鉢	口	条痕文		条痕文	ナデ	V			644
図52-211	XⅢH-204	沢01	鉢	口	口唇部に小突起貼付、突起内面に棒状圧痕、平行沈線文			ケズリ+ナデ	V		1191,1192,1194	1190
図52-212	XⅢH-204	沢01	鉢	胴上下		沈線文		ケズリ+ナデ	V		1190,1192,1194	1191
図52-213	XⅢG-205	沢01	鉢	口	小突起、突起頂部から内面に棒状圧痕、貼瘤、縄文		LR斜行	ケズリ+ナデ	V			1301
図52-214	XⅢH-204	沢01	鉢	胴上下		上割瘤、沈線		ケズリ+ナデ	V		1190,1191	1192
図52-215	XⅢG-209	沢02	深鉢	口	条痕文		条痕文	ケズリ+ナデ	V			1160
図52-216	XⅢB-205	沢02	深鉢	口～胴上	条痕文、外面炭化物付着	条痕文、外面炭化物付着	条痕文	ケズリ+ナデ	V			1483
図52-217	XⅢF-204	沢02	深鉢	胴上		縄文	斜行縄文	ナデ	V			1489
図52-218	XⅢE-208	沢02	深鉢	口	折り返し口縁		RL斜行	ケズリ+ナデ	Ⅲ			1151
図52-219	XⅢC-202	沢02	深鉢	口～胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ナデ	V	P-312		1044
図52-220	XⅢC-201	沢03	深鉢	胴上		縄文、沈線文	LR斜行	ナデ	Ⅱ			1171
図52-221	XⅢB-203	沢03	深鉢	胴上		縄文、沈線文	LR斜行	ナデ	Ⅱ			1178
図52-222	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	縄文、縦位沈線		RL斜行	ナデ	Ⅱ			1146
図52-223	XⅢB-200	沢03	深鉢	胴上		隆線文(上に縄文)、縄文、沈線文	RL斜行	ナデ	Ⅲ			1022
図52-224	XⅢB-205	沢03	深鉢	胴上		沈線文		ナデ	Ⅲ			1224
図52-225	XⅢB-200	沢03	?	口	波状部、隆帯文貼付			ナデ	Ⅳ			1333
図52-226	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	沈線文(沈線間は条痕文)	沈線文(沈線間は条痕文)		ナデ	Ⅲ			1363
図52-227	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	Ⅳ			1043
図53-228	XⅢB-203	沢03	深鉢	胴下～底		沈線文		ナデ	Ⅲ			1432
図53-229	XⅢB-205	沢03	深鉢か鉢	頸～胴上	平行沈線文、沈線間に刻目			ナデ	Ⅳ		1251	1249
図53-230	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V			1064
図53-231	XⅢA-205	沢03	深鉢	口	無文、外面スス付着			ケズリ+ナデ	V			1288
図53-232	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1238
図53-233	XⅢB-205	沢03	深鉢	胴下		無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1066
図53-234	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1065
図53-235	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1237
図53-236	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	無文			ナデ	V			1259
図53-237	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V		1271?	1270
図53-238	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面炭化物付着、内面にもわずかに炭化物付着	無文、外面炭化物付着、内面にもわずかに炭化物付着		ケズリ+ナデ	V		1270?	1271
図53-239	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	無文、外面炭化物付着			ケズリ+ナデ	V			1276



遺構外土器観察表5

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類(時期)	備 考	同一	整理 No.
図53-240	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	無文、内外面わずかにスス付着			ケズリ+ナデ	V			1284
図53-241	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1302
図53-242	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	無文			ナデ	V			1316
図53-243	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V			645
図54-244	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、内外面わずかにスス付着	無文、内面わずかにスス付着		ナデ	V			1303
図54-245	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ナデ	V			1314
図54-246	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ナデ	V			1313
図54-247	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ナデ	V			1312
図54-248	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1317
図54-249	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1447
図54-250	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1322
図54-251	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ+ミガキ	V			1385
図54-252	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	無文、外面炭化物付着、内面スス付着	無文、外面炭化物付着、内面スス付着		ナデ	V			1497
図54-253	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文、外面わずかにスス付着		ケズリ+ナデ	V			1429
図54-254	XⅢB-202	沢03	深鉢	口～胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1456
図54-255	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	無文、内外面わずかにスス付着	無文、内外面わずかにスス付着		ケズリ+ナデ	V			1319
図54-256	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	無文			ナデ	V			1392
図54-257	XⅢA-203	沢03	深鉢	口	無文			ナデ	V			1529
図54-258	XⅢB-204	沢03	深鉢	胴下		無文		ナデ	V			1448
図54-259	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	無文、外面炭化物付着			ナデ	V			1462
図54-260	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1109
図54-261	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1084
図54-262	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状、内外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1125
図55-263	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1045
図55-264	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状、外面スス付着	異原羽状、外面スス付着		ケズリ+ミガキ	V			1047
図55-265	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1107
図55-266	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1110
図55-267	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1112
図55-268	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面スス付着		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1113
図55-269	XⅢB-204	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1137
図55-270	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1504
図55-271	XⅢC-200	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1167
図55-272	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1461
図55-273	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1269
図55-274	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1381
図55-275	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1278
図55-276	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1279
図55-277	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1277
図55-278	XⅢB-204	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1419
図55-279	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	口唇部肥厚、異原羽状		異原羽状	ケズリ+ミガキ	V			1480
図55-280	XⅢA-203	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1485
図55-281	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1486
図55-282	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	縄文		LR斜行・横走	ケズリ+ナデ	V			1464
図55-283	XⅢB-204	沢03	深鉢	口～胴上	異原羽状、外面スス付着	異原羽状、外面スス付着	異原羽状	ナデ	V			1449
図55-284	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1466
図55-285	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1474
図55-286	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1280
図56-287	XⅢB-205	沢03	深鉢	胴上下		異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状	ナデ	V			1108
図56-288	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	縄文	縄文、外面わずかにスス付着	LR斜行	ケズリ+ナデ	V	1089		1090
図56-289	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	縄文、外面炭化物付着		RL斜行	ケズリ+ナデ	V			1523
図56-290	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	縄文		LR斜行	ケズリ+ナデ	V		1090	1089
図56-291	XⅢA-205	沢03	深鉢	口	縄文、外面炭化物付着		LR斜行	ナデ	V			1139
図56-292	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	縄文	縄文	RL斜行	ナデ	V			1088
図56-293	XⅢB-205	沢03	深鉢	口	縄文		RL斜行	ケズリ+ナデ	V			1399
図56-294	XⅢC-200	沢03	深鉢	口～胴上	縄文	縄文	LR斜行	ナデ+ミガキ	V			1168
図56-295	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	縄文	縄文	LR斜行	ナデ	V			1488
図56-296	XⅢB-203	沢03	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V			1426
図56-297	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V			1498
図56-298	XⅢB-204	沢03	深鉢	口	縄文、外面スス付着		RL斜行・横走	ナデ+ミガキ	V			1286
図56-299	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	条痕文		条痕文	ナデ	V			1397
図56-300	XⅢA-204	沢03	深鉢	口	条痕文		条痕文	ナデ+ミガキ	V			1396
図56-301	XⅢB-205	沢03	深鉢	口～胴上	条痕文、外面炭化物付着	条痕文、外面炭化物付着	条痕文	ケズリ+ナデ	V			1158
図56-302	XⅢB-203	沢03	深鉢	口～胴上	条痕文	条痕文	条痕文	ナデ+ミガキ	V			1163
図56-303	XⅢB-205	沢03	深鉢	胴下		条痕文・外面炭化物付着	条痕文	ケズリ+ナデ	V			1536
図56-304	XⅢB-203	沢03	深鉢	波状	大波状口縁波状部、波頂部外面に縦位短沈線、口唇部肥厚、縄文、沿口沈線、貼瘤		LR・RL斜行	ケズリ+ナデ	V		1367	1359
図56-305	XⅢB-204	沢03	深鉢	口	小突起、突起頂部に棒状圧痕、縄文、沈線文		RL斜行	ナデ	V			1282
図56-306	XⅢB-205	沢03	深鉢か鉢	口	小突起、無文			ナデ+ミガキ	V			1304
図56-307	XⅢA-203	沢03	深鉢か鉢	口	口唇部肥厚、縄文		RL斜行	ナデ+ミガキ	V			1455
図57-308	XⅢB-203	沢03	深鉢か鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1473
図57-309	XⅢB-203	沢03	深鉢か鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1477
図57-310	XⅢB-205	沢03	深鉢か鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1111

遺構外土器観察表 6

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類(時期)	備 考	同一	整理No.
図57-311	XⅢA-204	沢03	鉢	口	縄文		LR斜行	ケズリ+ナデ	V			1487
図57-312	XⅢB-205	沢03	鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V			1240
図57-313	XⅢB-205	沢03	鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1310
図57-314	XⅢB-205	沢03	鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1239
図57-315	XⅢB-205	沢03	鉢	口~胴上	口唇に小突起、縄文帯(異原羽状)、外面スス付着	縄文帯(異原羽状)、外面スス付着	異原羽状	ナデ+ミガキ	V		1117~1119	1120
図57-316	XⅢB-203	沢03	壺か注口	口	小突起、突起頂部に棒状圧痕、縄文、平行沈線文		RL斜行	ナデ+ミガキ	V			1293
図57-317	XⅢB-205	沢03	鉢	口~胴上	口唇に小突起、縄文帯(異原羽状)	縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ナデ+ミガキ	V		1118~1120	1117
図57-318	XⅢB-203	沢03	壺か注口	胴上		縄文帯(縄文・羽状)	RL斜行(羽状縄文)	ナデ	V			1208
図57-319	XⅢB-205	沢03	鉢	胴下		縄文帯(異原羽状)、内外面スス付着	異原羽状	ナデ+ミガキ	V		1117,1118,1120	1119
図57-320	XⅢB-205	沢03	壺	胴下		弧状沈線文		ケズリ+ナデ	V			1512
図57-321	XⅢB-205	沢03	壺か注口	胴上下		弧状文、貼瘤(剥離)、内面わずかにスス付着		ケズリ+ナデ	V			1324
図57-322	XⅢB-203	沢03	壺か注口	頸~胴上	平行沈線文、縄文	縄文、沈線文、貼瘤	RL斜行	ケズリ+ナデ	V		1195,1197	1198
図57-323	XⅢB-204	沢03	壺か注口	胴上		瘤、縄文帯	RL斜行	ケズリ+ナデ	V			1391
図57-324	XⅢB-203	沢03	壺か注口	胴上下		縄文帯、沈線文、貼瘤	RL斜行	ケズリ+ナデ	V		1195,1198	1197
図57-325	XⅢB-203	沢03	壺か注口	頸~胴上	弧状・平行沈線文			ケズリ+ナデ	V	赤色顔料塗布		1209
図57-326	XⅢB-205	沢03	壺か注口	胴上下		縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1204
図57-327	XⅢB-204	沢03	壺か注口	口	平行沈線文、縄文		異原羽状	ナデ	V			1275
図57-328	XⅢB-203	沢03	壺か注口	胴上		縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ナデ	V			1196
図57-329	XⅢB-203	沢03	注口	口~胴下	小突起(内面棒状圧痕)、平行沈線文、縄文(RL)	全体を4分割して文様を籠文、瘤3コ+注口(欠損)、弧線文・平行沈線文+縄文	LR・RL斜行、異原羽状	ミガキ	V			1430
図58-330	XⅢC-202	沢03	深鉢	胴下~底		縄文、底部に網代痕	斜行縄文	ナデ	VI			1441
図58-331	XⅢH-206	沢10	深鉢	胴上		縄文、沈線文	LR斜行	ナデ	II		1174	1173
図58-332	XⅢH-206	沢10	深鉢	口	縄文、平行沈線文		RL斜行	ナデ	II			1177
図58-333	XⅢB-203	沢10	深鉢	口	縄文、平行沈線文		RL斜行	ナデ	III			1365
図58-334	XⅢB-204	沢10	深鉢	胴下		楕円文		ナデ	III		1181	1180
図58-335	XⅢH-205	沢10	深鉢	胴上下		楕円文(沈線文、条痕文)		ケズリ+ナデ	III			1274
図58-336	XⅢB-204	沢10	深鉢	胴下~底		楕円文、底部=沈線文		ナデ	III		1180	1181
図58-337	XⅢE-206	沢10	深鉢	口	沈線文			ナデ+ミガキ	III			1527
図58-338	XⅢG-205	沢10	深鉢か鉢	胴下		沈線文		ナデ	III			1214
図58-339	XⅢB-203	沢10	鉢	口~胴上	平行沈線文、沈線間に刻目	縄文帯(異原羽状)、内面スス付着	異原羽状	ナデ	IV			1193
図58-340	XⅢH-206	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V			643
図58-341	XⅢB-202	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			647
図58-342	XⅢG-207	沢10	深鉢	胴上		無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1073
図58-343	XⅢB-205	沢10	深鉢	胴上		無文、内面炭化物付着		ナデ	V			1074
図58-344	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ	V			1305
図58-345	XⅢG-207	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ケズリ+ナデ	V			1306
図58-346	XⅢB-205	沢10	深鉢	口~胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ナデ	V			1075
図58-347	XⅢH-205	沢10	深鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ナデ	V			1098
図58-348	XⅢH-205	沢10	深鉢	胴上		無文、外面わずかに炭化物付着、内面わずかにスス付着		ナデ	V			1099
図59-349	XⅢB-205	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ+ミガキ	V			1182
図59-350	XⅢB-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ナデ	V			1267
図59-351	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文、外面わずかにスス付着	無文、外面わずかにスス付着		ケズリ+ナデ	V			1272
図59-352	XⅢB-205	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ナデ	V			1285
図59-353	XⅢG-206	沢10	深鉢	口~胴上	無文、外面わずかにスス付着	無文、外面わずかにスス付着		ナデ	V			1289
図59-354	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	無文、外面炭化物付着			ケズリ+ナデ	V			1291
図59-355	XⅢC-203	沢10	深鉢	口	無文、内面スス付着			ケズリ+ナデ	V			1121
図59-356	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ケズリ+ナデ	V			1308
図59-357	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1311
図59-358	XⅢB-202	沢10	深鉢	口	無文、外面炭化物付着			ナデ	V			1309
図59-359	XⅢG-207	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ	V			1318
図59-360	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1320
図59-361	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1389
図59-362	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1393
図59-363	XⅢB-203	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1450
図59-364	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1491
図59-365	XⅢE-205	沢10	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1453
図59-366	XⅢB-204	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ケズリ+ミガキ	V			1451
図59-367	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	無文、外面スス付着			ケズリ+ナデ	V			1492
図60-368	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	無文、外面炭化物付着			ナデ	V			1463
図60-369	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文、外面わずかにスス付着			ケズリ+ナデ	V			1476
図60-370	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V			1502
図60-371	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	無文			ナデ+ミガキ	V			1507
図60-372	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	無文、外面炭化物付着			ナデ	V			1510
図60-373	XⅢH-205	沢10	深鉢	口~胴上	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1511
図60-374	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	無文			ナデ	V			1521
図60-375	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1136
図60-376	XⅢB-205	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1091
図60-377	XⅢH-206	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V			1048
図60-378	XⅢB-202	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状	ナデ	V			1425
図60-379	XⅢH-206	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1145

遺構外土器観察表7

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口頸部	胴部	地文	内面調整	分類(時期)	備考	同一	整理No.
図60-380	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1414
図60-381	XⅢH-206	沢10	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ	V			1421
図60-382	XⅢC-203	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1444
図60-383	XⅢB-204	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1467
図60-384	XⅢC-206	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ	V			1496
図60-385	XⅢH-205	沢10	深鉢	口~胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1509
図60-386	XⅢB-203	沢10	深鉢	口	口唇部肥厚、異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1458
図60-387	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1471
図60-388	XⅢB-204	沢10	深鉢	口	異原羽状、外面炭化物付着		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1493
図60-389	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	異原羽状、外面スス付着		異原羽状	ナデ	V		1470	1469
図60-390	XⅢH-205	沢10	深鉢	口	波状部、波頂部に棒状圧痕(2条)、異原羽状(縦位)		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1339
図60-391	XⅢB-204	沢10	深鉢	口	小突起、突起部に棒状圧痕、異原羽状、内面炭化物付着		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1300
図60-392	XⅢC-203	沢10	深鉢	口	平口縁、小突起、突起内面に棒状圧痕、異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1373
図60-393	XⅢE-205	沢10	深鉢	口	縄文、口唇内外面に貼瘤		LR斜行	ナデ	V			1360
図61-394	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴下	縄文、外面炭化物付着	縄文、外面炭化物付着	RL斜行	ナデ	V			1382
図61-395	XⅢC-202	沢10	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ+ミガキ	V			1484
図61-396	XⅢC-203	沢10	深鉢	口	縄文、瘤、外面スス付着		LR斜行	ナデ+ミガキ	V			1413
図61-397	XⅢH-206	沢10	深鉢	口~胴上	縄文、外面わずかにスス付着	縄文、外面わずかにスス付着	LR斜行	ナデ	V			1423
図61-398	XⅢC-202	沢10	深鉢	口~胴上	条痕文、外面スス付着	条痕文、外面スス付着	条痕文	ケズリ+ナデ	V			1164
図61-399	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	条痕文		条痕文	ナデ	V			1161
図61-400	XⅢC-202	沢10	深鉢	頸~胴上		縄文帯	LR・RL斜行	ケズリ+ナデ	V			1183
図61-401	XⅢG-206	沢10	深鉢	口	小突起、突起頂部から内面に棒状圧痕、縄文、沈線文、貼瘤、外面スス付着		RL斜行	ナデ	V		1297	1298
図61-402	XⅢH-206	沢10	鉢か壺	胴下		縄文帯(異原羽状)、外面スス付着	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1395
図61-403	XⅢB-205	沢10	深鉢か鉢	胴下~底		沈線文、縄文	RL斜行	ナデ+ミガキ	V			1427
図61-404	XⅢC-202	沢10	鉢	口	無文			ナデ	V			1508
図61-405	XⅢB-203	沢10	壺	頸~胴上		縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ナデ	V			1217
図61-406	XⅢB-203	沢10	壺か注口	胴上		縄文帯、沈線文、貼瘤	RL斜行	ケズリ+ナデ	V	1197.1198		1195
図61-407	XⅢD-206	沢10	壺か注口	胴下		縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1035
図61-408	XⅢB-203	沢10	壺	胴上		縄文帯、貼瘤、外面スス付着	RL斜行	ナデ	V			1200
図61-409	XⅢD-206	沢10	壺か注口	胴上下		縄文帯(異原羽状)	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1036
図61-410	XⅢG-206	沢10	小型浅鉢	口~底	無文	無文		ナデ	V			1442
図61-411	XⅢC-202	沢10	小型鉢	口~底	縄文		LR斜行	ナデ	V			1433
図61-412	XⅢC-207	沢13	深鉢	胴下		楕円文		ナデ	Ⅲ			1032
図61-413	XⅢD-207	沢13	深鉢	口	波状口縁、平行沈線文、楕円文			ケズリ+ナデ	Ⅲ			1210
図61-414	XⅢA-204	沢13	深鉢	口	波状口縁、沿口沈線、菱形文			ナデ+ミガキ	Ⅲ			1220
図61-415	XⅢC-207	沢13	深鉢	口	楕円文			ナデ	Ⅲ			1223
図62-416	XⅢC-207	沢13	深鉢	口	波状口縁、波頂部に粘土貼付、波頂部から外面に粘土紐貼付、沿口沈線、沈線文			ナデ	Ⅲ			1325
図62-417	XⅢD-207	沢13	深鉢	口	波状口縁、波頂部に粘土紐貼付、沿口沈線、楕円文			ケズリ+ナデ	Ⅲ			1366
図62-418	XⅢC-207	沢13	深鉢	胴上下		沈線文、内面スス付着		ナデ+ミガキ	Ⅲ			1503
図62-419	XⅢD-207	沢13	深鉢	胴上		楕円文		ナデ	Ⅲ			1033
図62-420	XⅢD-207	沢13	鉢	口	平行沈線、楕円文			ナデ	Ⅲ			1506
図62-421	XⅢB-200	沢13	深鉢	口	波状部、逆S字状隆帯			ナデ	Ⅳ			1335
図62-422	XⅢB-205	沢13	深鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V		1072.1049	1077
図62-423	XⅢD-207	沢13	深鉢	口~胴上	無文、外面わずかにスス付着	無文、外面わずかにスス付着		ナデ	V			1290
図62-424	XⅢB-205	沢13	深鉢	口~胴上	無文、外面炭化物付着	無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V		1049.1077	1072
図62-425	XⅢB-202	沢13	深鉢	口~胴上	無文、外面スス付着	無文、外面スス付着		ケズリ+ナデ	V			1268
図62-426	XⅢA-204	沢13	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1468
図62-427	XⅢB-202	沢13	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1517
図62-428	XⅢB-205	沢13	深鉢	胴上		無文、外面炭化物付着		ケズリ+ナデ	V			1071
図62-429	XⅢD-207	沢13	深鉢	口	無文			ケズリ+ナデ	V			1283
図62-430	XⅢG-207	沢13	深鉢	口~胴上	無文	無文		ナデ+ミガキ	V			1307
図62-431	XⅢB-200	沢13	深鉢	口~胴上	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状、外面炭化物付着	異原羽状	ナデ	V			1418
図62-432	XⅢB-202	沢13	深鉢	口	口唇部肥厚、異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1046
図62-433	XⅢC-207	沢13	深鉢	口	口唇部肥厚、異原羽状		異原羽状	ナデ+ミガキ	V			1422
図63-434	XⅢB-202	沢13	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1424
図63-435	XⅢC-207	沢13	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	V			1086
図63-436	XⅢB-205	沢13	深鉢	胴下~底		縄文、内面炭化物付着	RL斜行	ナデ	V			1437
図63-437	XⅢD-207	沢13	深鉢か鉢	口	隆帯			ナデ	Ⅵ		1357	1358
図63-438	XⅢC-207	沢13	深鉢か鉢	胴下~底		異原羽状、外面スス付着	異原羽状	ケズリ+ナデ	V			1434
図63-439	XⅢA-204	沢13	鉢	口	縄文帯(異原羽状)		異原羽状	ナデ	V			1355
図63-440	XⅢF-204	沢13	注口	胴上下		注口部欠損、縄文帯	LR斜行	ケズリ+ナデ	V			1327
図63-441	XⅢB-202	沢13	小型深鉢	口~底	無文	無文		ケズリ+ナデ	V			1438
図63-442	XⅢB-205	沢13	小型注口	口~底	口縁部に小突起(上に棒状圧痕)	貼瘤		ナデ	V			1329
図63-443	XⅢB-199	沢	深鉢	頸~胴上	LR横位押圧、隆帯文(上にLR押圧)	異原羽状	異原羽状	ナデ	I		1115	1114
図63-444		沢	深鉢	口	縄文、沈線文		LR斜行	ナデ	Ⅱ			1138
図63-445	XⅢG-206	レキ	深鉢	口	ヒレ状突起、内面スス付着			ナデ+ミガキ	Ⅱ			1273
図63-446	XⅢC-203	沢	深鉢	口	縄文、沈線文		LR斜行	ナデ	Ⅱ			1131



遺構外土器観察表 8

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面調整	分類(時期)	備 考	同一	整理 No.
図63-447		沢	深鉢	口	縄文		RL斜行	ナデ	Ⅱ			1472
図63-448	XⅢC-202	沢	深鉢	口	無文			ナデ	V			397
図63-449		沢	深鉢	波状部	大波状口縁、波状部、突起側面に沈線			ナデ	Ⅳ			1323
図63-450		沢	深鉢	口	異原羽状		異原羽状	ナデ	V			1400
図63-451	XⅢG-206	レキ	深鉢	口	条痕文		条痕文	ナデ	V			1162
図63-452		沢	深鉢	突起	口縁部に動物形突起、粘土紐貼付、縄文		LR斜行	ナデ+ミガキ	V		512	1337
図63-453		沢	深鉢	口	口唇部に小突起、沈線文、瘤			ケズリ+ナデ	V			1328
図63-454		沢	壺か注口	胴上		有孔把手状突起、沈線文、突起部上割			V			1326
図63-455		沢	壺	胴上		縄文帯、上割瘤、内面スス付着	RL斜行	ケズリ+ナデ	V			1394
図63-456		沢	壺	口	縄文、沿口沈線、貼瘤、口唇にわずかに粘土貼付(小突起?)、内面に瘤		RL・LR斜行	ナデ+ミガキ	V			1296

遺構外土器観察表 9

図版番号	番号	出土地	層位	器種	部 位	口頸部裝飾	胴 部 装 飾	地 文	内 調	分類(時期)	備 考	同一	整理 No.
図70	457	13C-196	I	深鉢	口~胴上	平行沈線5本	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線単位4本/10mm、外面炭化物付着		1522
図70	458	13D-196	I	深鉢	口~胴上	平行沈線5本	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	内面炭化物付着		1368
図70	459	13C-196	I	深鉢	口頸	平行沈線3本			不明	Ⅶ			1513
図70	460	13A-199	I	深鉢	口~胴上	平行工字文(瘤貼付によるもの)	縄文	RL縦走	ミガキ	Ⅶ	沈線太く、断面はV字形、厚手の土器		1028
図70	461	13C-196	I	深鉢	口~胴上	二個一対の突起・平行工字文	縄文	RL斜行	不明	Ⅶ	外面炭化物付着		1459
図70	462	13D-196	I	深鉢	口~胴上	口縁薄手無文	縄文	RL縦走	ミガキ	Ⅶ	外面煤付着		1127
図70	463	13C-195	Ⅱ	鉢	口~胴上	無文	無文		ミガキ	不明			455
図70	464	13C-191	Ⅱ	深鉢	口頸	押圧波状口縁・無文				Ⅶ			1460
図70	465	13E-192	Ⅱ	深鉢	口~胴上	無文	条線文	条線文		Ⅶ	条線単位5本/13mm、口縁押圧波状		483
図70	466	13C-196	Ⅱ	深鉢	口~胴上	条線文	条線文	条線文	ナデ	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭		1387
図70	467	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	無文		ミガキ	Ⅶ			480
図70	468	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	無文・雑な平行沈線・縄文		LR斜行	ミガキ	Ⅶ			472
図70	469	13B-195	Ⅱ	深鉢	口頸	平行沈線(4本)・縄文		LR斜行	ミガキ	Ⅶ			451
図70	470	13E-191	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(3本)	条線文	条線文	粗雑なミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着		714
図70	471	13C-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(3本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ			476
図70	472	13E-193	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(5本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線4本/12mm		453
図70	473	13C-192	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線単位4本/13mm		465
図70	474	13C-192	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線単位4本/11mm		469
図70	475	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ			470
図71	476		Ⅱ	深鉢	口~胴下	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	内面炭化物付着、条線単位5本/20mm		699
図71	477	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ケズリ+ナデ	Ⅶ	条線単位8本/13mm		664
図71	478	13C-192	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	不明	Ⅶ	条線単位5本/11mm		475
図71	479	13E-191	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ			464
図71	480		Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ			474
図71	481	13F-191	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	不明	不明	ミガキ	Ⅶ			452
図71	482	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)		不明		Ⅶ			456
図71	483		Ⅱ	深鉢	口頸	平行沈線	不明		不明	Ⅶ			481
図71	484	13B-195	Ⅱ	深鉢	口頸	平行沈線(4本)	不明	不明	ナデ	Ⅶ			454
図71	485	13B-195	Ⅱ	深鉢	口頸	平行沈線(4本)	不明	不明	不明	Ⅶ	内面沈線有		479
図71	486	13B-198	Ⅱ	深鉢	口頸	口唇斜め刻み・平行沈線4本		不明	ミガキ	Ⅶ			457
図71	487	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	雑な平行沈線4本	条線文	条線文		Ⅶ			460
図71	488	13E-192	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	無文		ナデ	Ⅶ	外面炭化物付着		463
図71	489	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	頂部二つの突起・平行沈線7本	条線文	条線文		Ⅶ	条線単位7本/20mm		447
図72	490	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴下	押圧波状口縁・平行沈線4本	条線文	条線文	ナデ	Ⅶ			
図72	491	13B-195	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線4本・連続短沈線	縦方向条線	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線単位3本/10mm・文様施文後条線施文		437
図72	492	13C-196	Ⅱ	深鉢	口頸	平行沈線(5本)	不明		不明	Ⅶ	内面沈線有		482
図72	493	13F-191	Ⅱ	深鉢	口頸	縄文・平行工字文		RL縦走	ミガキ	Ⅶ	2個一対の突起		473
図72	494	13G-212	Ⅱ	深鉢	口頸	無文帯・平行沈線				Ⅶ			1370
図72	495	13B-198	Ⅱ	深鉢鉢	口頸	無文帯・流水状工字文			ミガキ	Ⅶ			1027
図72	496	13C-196	Ⅱ	深鉢	頸胴上	平行工字文・縄文		RL斜行	ミガキ	Ⅶ	φ8mmの瘤貼付		448
図72	497	13C-195	Ⅱ	深鉢	胴下底		条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	底部付近横方向のナデ		489
図72	498		Ⅱ	深鉢	胴下底		縄文・横走沈線		ミガキ?	Ⅶ			486
図72	499	13C-195	Ⅱ	深鉢壺	胴下底		無文		不明	Ⅶ			485
図72	500	13E-191	Ⅱ	深鉢	口~胴上	平行沈線(2本)		RL斜行	ミガキ	Ⅶ			495
図72	501		Ⅱ	深鉢	口~胴下	平行沈線(6本)	縄文	LR斜行	不明	Ⅶ	内外面炭化物付着明瞭		698
図72	502	13F-191	Ⅱ	鉢	胴下		平行沈線+縄文	RL斜行	ミガキ	Ⅶ			478
図72	503	13E-197	Ⅱ	鉢	鉢		波状工字文の一部・縄文	不明	不明	Ⅶ			1026
図72	504	13B-195	Ⅱ	鉢	口~胴上	2個一対の突起・変形工字文			ミガキ	Ⅶ	外面赤色顔料付着		459461
図72	505	130E+193	Ⅱ	浅鉢	口~胴上	変形工字文・縄文		LR斜行	ミガキ	Ⅶ			468
図72	506	13B-195	Ⅱ	浅鉢	口~胴上	平行工字文		RL縦走		Ⅶ	内面沈線		458
図72	507	13B-195	Ⅱ	浅鉢	口頸	変形工字文			ミガキ	Ⅶ	口唇にも沈線		467
図72	508	13F-191	Ⅱ	鉢	口~胴上	平行沈線・縄文			ミガキ	Ⅶ			462
図72	509	13E-191	Ⅱ	壺	頸胴上	横走沈線・無文			不明	Ⅶ			438
図72	510	13E-193	Ⅱ	台部	台		無文		不明	Ⅶ	台付(深鉢?)		488
図72	511	13E-191	Ⅱ	台部	台		縄文・横走沈線	LR横走	ミガキ	Ⅶ	台付(深鉢?)		487
図73	512	13A-198	沢01	深鉢	口頸	押圧波状口縁・縄文		RL斜行	ナデ	Ⅶ			1404
図73	513	13A-198	沢01	深鉢	口~胴上	平行工字文	縄文	RL斜行	ミガキ	Ⅶ	沈線非常に浅い		1379

遺構外土器観察表10

図版	番号	出土地	層位	器種	部位	口頸部装飾	胴部装飾	地文	内調	分類(時期)	備考	同一	整理No
図73	514	13A-197	沢01	深鉢	口~胴上	平行沈線(4本)	縄文	RL斜行	不明	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭		1412
図73	515	13A-197	沢01	深鉢	口~胴上	二個一対の突起・平行工字文・瘤		RL斜行	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭		1132
図73	516	13A-197	沢01	深鉢	口~胴上	指頭状の押圧波状口縁・口縁縄文帯・無文帯	縄文	RL縦走	粗雑なミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着		1227
図73	517-518 519	13D-200	沢01	深鉢	口~胴下	押圧波状口縁・無文帯・平行沈線	縄文	LR縦走	ミガキ	Ⅶ	砂粒多、沈線幅太く半円形(砂沢式的)		1186
図73	520	13A-198	沢01	深鉢	口頸	縄文帯・無文帯・平行沈線		RL斜行	ナデ	Ⅶ	外面無文部ミガキ		1531
図73	521	13A-197	沢01	深鉢	口~胴上	二個一対の突起・平行工字文・瘤		RL斜行	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着		1135
図73	522-523	13A-198	沢01	鉢	口頸	工字文・縄文		LR斜行	不明	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭	466	1353
図73	524	13A-198	沢01	浅鉢	口頸	二又突起・列点文・直線形雲形?				Ⅶ	内面沈線		1330
図73	525	13A-198	沢01	浅鉢	口頸	二個一対の突起・口唇沈線・変形工字文			ミガキ	Ⅶ	瘤明瞭ではない		1346
図73	526	13A-198	沢01	鉢	口~胴上	円板状突起・平行工字文?・瘤貼付			ミガキ	Ⅶ			1343
図73	527	13B-198	沢02	深鉢	口~胴上	無文部・2条沈線	縄文	直前段反巻?	ナデ	Ⅶ	口縁無文部ミガキ		498
図73	528	13A-190	沢02	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	条線文	条線文	ナデ	Ⅶ	外面炭化物付着		1520
図73	529	13B-198	沢02	鉢	口~胴上	変形工字文			ミガキ	Ⅶ	変形工字文頂部と中点部の瘤間斜突	1353	466
図73	530	13B-199	沢02	鉢	頸胴上		変形工字文・縄文	LR横走	ミガキ	Ⅶ			484
図73	531	13B-199	沢02	深鉢	口	横走沈線・縄文無文			ミガキ	Ⅶ			477
図73	532	13E-204	沢02	台部	胴下台		縄文	RL縦走	不明	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭		1495
図73	533	13A-196	沢03	8	口~胴上	縄文		LR斜横	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭		1409
図73	534	13B-203	沢03	深鉢	口~胴上	平行沈線5本	縄文	L R斜縦	ナデ	Ⅶ	砂粒多、口縁まで縄文施文後、平行沈線施文		1234
図73	535	13B-196	沢03	深鉢	口~胴上	沈線文	縄文	LR斜行	不明	Ⅶ			1281
図73	536	13B-203	沢03	深鉢	口頸	平行沈線・縄文		RL斜行	ナデ	Ⅶ			1405
図74	537	13A-196	沢03	深鉢	口~胴上	口唇斜め刻み・平行沈線4本	縄文	LR縦走	ナデ	Ⅶ			1018
図74	538	13A-196	沢03	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線単位4本/10mm		1122
図74	539	13A-197	沢03	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着明瞭		1229
図74	540	13B-196	沢03	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ	条線単位幅15mm		1226
図74	541	13B-196	沢03	深鉢	口~胴上	平行沈線5本	条線	条線文	粗雑なミガキ	Ⅶ	条線単位3本/14mm、外面炭化物付着明瞭		1235
図74	542	13B-196	沢03	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	不明	不明	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着		1292
図74	543	13B-196	沢03	鉢	口~胴上	平行工字文上下2段			ミガキ	Ⅶ	内面沈線		1345
図74	544	13B-197	沢03	浅鉢	口~胴上	変形工字文の一部φ7mm程の粘貼			丁寧なミガキ	Ⅶ	沈線幅4mmと太く、断面半円形、器面研磨著しく砂沢式的		1020
図74	545	13B-196	沢03	台部	台		無文		ナデ	Ⅶ			1439
図74	546	13B-196	沢06	深鉢	口~胴上	縄文		RL斜行	ミガキ	Ⅶ	2個一対の突起、口縁部内側肥厚		1169
図74	547	13B-196	沢06	深鉢	口~胴上	条線文	条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ			1147
図74	548	13B-200	沢06	深鉢	口頸	頂部二又の突起・平行沈線3本	不明	不明	粗雑なミガキ	Ⅶ			1299
図74	549	13C-198	沢06	深鉢	口~胴上	平行沈線3本	縄文	RL縦走	ナデ	Ⅶ	口縁まで縄文施文後、平行沈線施文		1225
図74	550	13C-198	沢06	深鉢	口~胴上	平行沈線3本	縄文	LR斜行	ナデ	Ⅶ	口縁まで縄文施文後に、平行沈線施文		1499
図75	551	13C-199	沢06	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	縄文	LR斜行	粗雑なミガキ	Ⅶ	接合、口縁部外面ミガキ		1133
図75	552	13C-198	沢06	深鉢	口頸	頂部二又の山形突起・平行沈線4本	条線文	条線文	ナデ	Ⅶ	条線文施文後に、平行沈線施文		1519
図75	553	13C-198	沢06	深鉢	口~胴上	頂部二又の突起・平行沈線7本	条線文	条線文	ナデ	Ⅶ	条線単位7本/20mm		446
図75	554	13B-196	沢06	深鉢	口~胴上	平行沈線3本	不明	不明	ナデ	Ⅶ			1159
図75	555	13B-196	沢06	深鉢	口頸	平行沈線4本以上			ミガキ	Ⅶ	内面沈線		1165
図75	556	13P-196	沢06	鉢	口頸	変形工字文?	不明	不明	ミガキ	Ⅶ			1176
図75	557	13B-196	沢06	深鉢	口~胴上	波状工字文又は矢羽根状文・縄文		不明	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物明瞭に付着		1287
図75	558	13B-196	沢06	深鉢	胴下底		条線文	条線文	ミガキ	Ⅶ			1148
図75	559	13B-196	沢06	浅鉢	口~胴上	変形工字文完結型	無文		ミガキ	Ⅶ	変形工字文中点と底角部掘り込み手法、沈線断面V字形に近い		1348
図75	560	13C-199	沢06	浅鉢	口~胴上	頂部二又の山形突起・流水状工字文・刻目	不明	不明	不明	Ⅶ	器面磨耗著しい		1134
図75	561	13B-197	沢13上	深鉢	口~胴上	平行沈線7本	縄文	LR縦走気味	ミガキ	Ⅶ	内面沈線		1374
図75	562	13B-198	沢13上	深鉢	口頸	波状口縁・平行工字文・瘤貼付			ミガキ	Ⅶ			1372
図75	563	13A-196	沢13上	深鉢	口頸	上端S字状突起・縄文帯・無文帯・平行工字文・瘤貼付		RL斜行	不明	Ⅶ			1375
図75	564	13B-137	沢13上	鉢	口~胴上	流水状工字文?	不明		ミガキ	Ⅶ	流水文反転部に刺突		1376
図75	565	13B-198	沢13上	深鉢	口頸	隆線による隅丸三角形モチーフ・内面沈線有			ミガキ	Ⅶ	砂粒多		1009
図75	566	13A-197	沢13上	台部	台		平行沈線		ミガキ?	Ⅶ	台付深鉢?		1106
図75	567	13A-196	沢13	深鉢	口頸	無文				Ⅶ			1500
図75	568	13B-199	沢13	深鉢	口頸	口縁無文	縄文	RL縦走	ナデ	Ⅶ	外面炭化物付着		1478
図75	569	13B-198	沢13	深鉢	口~胴上	縄文		LR縦走	ナデ	Ⅶ	外面炭化物付着		1170
図75	570	13B-198	沢13	深鉢	口頸	小波状口縁	縄文	LR縦走気味	ナデ	Ⅶ	押圧波状口縁、やや斜めに押圧		1087
図75	571	13A-197	沢13	深鉢	口~胴上	平行沈線4本	縄文	LR斜行	ミガキ	Ⅶ	外面炭化物付着、口縁まで縄文施文後、平行沈線施文		1230
図75	572	13C-207	沢13	深鉢	口~胴上	平行沈線6本	縄文	LR斜行	不明	Ⅶ	外面炭化物付着、口縁まで縄文施文後、平行沈線施文		1233
図75	573	13A-196	沢13	深鉢	口~胴上	口縁縄文帯・平行沈線7本	縄文	LR縦走	ナデ	Ⅶ			1232
図75	574	13A-196	沢13	深鉢	胴上	無文帯・平行工字文		RL縦走	ナデ	Ⅶ			1150
図75	575	13B-197	沢13	深鉢	口~胴上	山形突起・縄文		LR斜行	不明	Ⅶ			1157
図75	576	13A-196	沢13	深鉢	口頸	縄文帯・無文帯		RL斜行	ミガキ	Ⅶ	砂沢式期に特徴的な煮沸形態		1149
図75	577	13A-196	沢13							Ⅶ			1060
図75	578	13A-196	沢13	壺	頸胴上	頸部無文・胴部平行工字文12単位・波状工字文6単位・刻み・波状モチーフの反転部に刻み		R L縦走?	ケズリ・ナデ	Ⅶ	波状モチーフの沈線は途切れずに一周する。		1057
図75	579	13A-198	沢13	台部	台		無文		ナデ	Ⅶ			1166
図75	580	13A-197	沢14	台付鉢	口頸	頂部二又の山形突起・平行沈線・列点文			ミガキ	Ⅶ			1530
図76	581		沢	深鉢	口~胴上	平行工字文(縦の刻みによる)	縄文	LR縦走	不明	Ⅶ			1479

遺構外土器観察表11

図版	番号	出土地	層位	器種	部位	口頸部裝飾	胴部裝飾	地文	内調	分類(時期)	備考	同一	整理No.
図76	582		沢	深鉢	口～胴上	平行沈線4本	縄文	LR斜行	ナデ	VI			1354
図76	583		沢	深鉢	口～胴上	平行沈線4本	条線文	条線文	不明	VI	外面炭化物付着		1231
図76	584		沢	深鉢	口頸	口縁縄文帯・平行工字文	縄文	RL縦走	ミガキ	VI	内外面に炭化物付着明瞭		1228
図76	585		沢	台付鉢	完形	頂部二又の突起・列点文・波状工字文	縄文	LR縦走	ミガキ	VI	内外面に炭化物付着明瞭・波状モチーフは連続しない		1444
図76	586		沢	(台付)鉢	口頸	おそらく波状工字文・突起下や文様間と刺突で充填			ミガキ	VI	沈線幅太く半円形(砂沢式的)		1528
図76	587		沢	台部	台		横走沈線・楕円文4単位(平行工字文)・縄文	LR斜行		VI	楕円文で平行工字文を表している		1440
図78	588	12T-194	I	深鉢	口頸	縄文		RL斜行		II			1398
図78	589	12T-196	I	深鉢	口～胴上	縄文		RL斜横	ナデ	II			1126
図78	590	12O-211	II	深鉢	口頸	網目状摺文		←	ミガキ	III			1105
図78	591	12P-211	II	深鉢	頸	網目状摺文		←	ミガキ	III			1103
図78	592	12R-212	II	深鉢	口頸	網目状摺文		←	ミガキ	III	口唇平坦		1104
図78	593	13E-199	I	深鉢	口～胴上	楕円文	楕円文	RL斜行	ミガキ	III	沈線深くシャープ		1378
図78	594	12Q-213	II	深鉢	口～胴上	楕円文	楕円文		ミガキ	III	沈線深め、切り合い明瞭		1011
図78	595	13B-219	II	深鉢	口頸	楕円文				III	沈線深め		1101
図78	596	13Q-213	II	深鉢	口頸	楕円文			ミガキ	III	沈線深め		1265
図78	597	12T-216	II	深鉢	口頸	楕円文・弧線文・突起頂部にも楕円文			ミガキ	III	口縁内面沿口沈線3本		1361
図78	598	12S-215	II	深鉢	口頸	口唇沈線・楕円文・刺突有			ミガキ	III			1266
図78	599		II	深鉢	突起	波状口縁頂部・楕円文・口唇沈線・口縁内面沿口沈線3本外面は楕円文・縄文		不明	ミガキ	III			1083
図78	600	13A-213	II	深鉢	口～胴上	楕円文			ナデ	III	沈線切り合い明瞭		1102
図78	601	12S-214	II	深鉢	口	突起部分に、縦の隆線貼付・口縁内面沿口沈線				III			1080
図78	602	13L-175	II	深鉢	口頸	縦方向のメガネ状隆帯				III			1012
図78	603	12T-214	II	深鉢	口頸	山形突起部に、縦方向の隆帯貼付・沿口沈線			ミガキ	III			1076
図79	604	13B-219	II	深鉢	口頸	楕円文			ナデ	III	外面ヘラミガキ		1100
図79	605	12P-213	II	深鉢	口頸	楕円文等			ミガキ	III	沈線切り合い明瞭		1081
図79	606	12Q-206	II	深鉢	口頸	口縁内外に折り返し・沈線文			ミガキ	III	沈線断面V字形		1123
図79	607	13S-215	II	深鉢	口胴下	内外面沿口沈線3本以上・口唇沈線・縄文	同心円文?・縄文	RL斜行	ミガキ	III			1039
図79	608	13C-212	II	鉢	胴下		楕円文・その他		不明	III			1038
図79	609	12T-216	II	壺	口	楕円文			ミガキ	III	大型壺		1140
図79	610	12T-215	II	壺	把手	楕円文			ナデ	III	橋状把手		1142
図79	611	12T-204	II	深鉢	口～胴上	無文			不明	V	外面指調整痕明瞭		1384
図79	612	12T-214	II	深鉢	口頸	無文			ナデ	V			1465
図79	613	13F-213	II	深鉢	口～胴上	無文	上割瘤		ミガキ	V			1063
図79	614	13F-213	II	深鉢	頸	無文			ミガキ	V			1069
図79	615	12T-216	II	深鉢	口頸	無文			ナデ	V	外面煤付着		1258
図79	616	12T-204	II	深鉢	口頸	無文			ナデ	V	外面一部ヘラミガキ		1390
図79	617	13B-219	II	深鉢	口～胴上	無文	無文			V			1383
図79	618	12T-216	II	深鉢	口頸	無文			ミガキ	V			1079
図79	619	13T-204	II	深鉢	口～胴上	無文・横方向の粗雑なナデ	無文・横方向の粗雑なナデ		ナデ	V	外面指オサエなどで凹凸激しい		1031
図79	620	12S-216	II	深鉢	口頸	横方向の条痕		条線文	条痕	V			1380
図80	621	12T-206	II	深鉢	口～胴下	縄文	縄文	異原羽状	粗雑なミガキ	V			700
図80	622	13J-216	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	粗雑なミガキ	V			1130
図80	623	13B-209	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V	外面炭化物付着明瞭		1402
図80	624	12T-213	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V			440
図80	625	12T-213	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	口唇内傾、肥厚		449
図80	626	12S-215	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	口縁内側肥厚		1415
図80	627	13B-217	I	深鉢	口～胴上	縄文		異原羽状	ナデ	V			1475
図80	628	12T-214	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ミガキ	V	外面炭化物付着明瞭		1411
図80	629	13H-214	II	深鉢	口頸	縄文		異原羽状	ナデ	V	口唇内面肥厚		1525
図80	630	13J-216	II	深鉢	口～胴上	瘤状突起多数・縄文	縄文	異原羽状	ミガキ	V			1532
図80	631	12R-212	II	深鉢	口頸	縄文		RL斜行	ミガキ	V	口唇平坦、肥厚		1410
図80	632	12T-214	II	深鉢	口頸	内面刻み突起・瘤・縄文		RL斜行	粗雑なミガキ	V			1401
図80	633	12T-214	II	深鉢	口頸	縄文帯構成文・縦長瘤・瘤		異原羽状	ミガキ	V	縄文施文後に瘤貼付、内面炭化物付着		1416
図80	635-635	13C-214	II	垂注口	頸	入組帯縄文・瘤・上割瘤・縄文		異原羽状	ミガキ	V	入組帯状文内スリットで2分割		1093
図80	636	13G-219	II	深鉢	口～胴上	瘤多数・瘤状突起・入組帯状文		LR斜行	ミガキ	V	口唇内傾肥厚		1431
図80	637-638 639	13F-191	II	深鉢	口頸			RL斜行	不明	V	φ13mm円形と、7×9mm楕円形瘤有		492
図80	640	12T-206	I	深鉢	底				ナデ	V			499
図81	641	13D-204	II	深鉢	突起	沈線文・縄文		LR斜行	ミガキ	IV	中空		1001
図81	642	12Q-213	II	深鉢	突起	沈線文			ミガキ	IV			1011
図81	643	13A-215	II	深鉢	口	大型突起・沿口沈線・3条		RL斜行	ミガキ	IV	突起上部破損		1016
図81	644	12R-216	II	鉢	口～胴上	無文	無文		ミガキ	V	外面炭化物付着顕著		1257
図81	645	12T-206	II	鉢	完形	無文	無文		ミガキ	V			501
図81	646	12S-212	II	鉢	口～胴上	無文			ナデ	V			1386
図81	647	13C-218	II	鉢・壺	口～胴上	刻目帯3条			ミガキ	IV	外面ミガキ		1349
図81	648	13A-213	II	鉢	頸胴上	刻目帯2条	縄文帯構成文様	LR斜行 RL斜行	ナデ	V			1021
図81	649	不明	不明	高坏	完形	内面に4mmの竹管状の刺突多数・外面無文	外面無文		ミガキ	V	袖珍土器		1341
図81	650	13A-215	II	壺	口頸	無文			ナデ	V			1388
図81	651	13C-215	II	壺	口頸	無文			ミガキ	V			1189
図81	652	13Q-215	II	壺	口頸	山形突起・無文			ミガキ	V	砂粒多		1255

遺構外土器観察表12

図版	番号	出土地	層位	器種	部位	口頸部裝飾	胴部裝飾	地文	内調	分類(時期)	備考	同一	整理No
図81	653	12T-214	II	壺注口	口頸	平行沈線・瘤			不明	V	瘤8単位		1263
図81	654	13Q-212	II	壺注口	頸	瘤(φ9mm程)				V			1017
図81	655	13C-212	II	壺注口	頸胴上	無文・瘤多数(縦・横・高さ=9×9×4mm・10×8×6mm・12×13×14mm)			ナデ	V	瘤の高さ顕著		1095
図82	656-657	13A-204	沢03	壺注口	胴下	縄文帯構成の入組文・大小瘤の正面に刺突又はキザミ		RL斜行	ナデ	V			1034
図82	658-659	13A-213	II	壺注口	胴上下	木葉状弧線文・瘤・上割瘤・穿孔瘤		LR斜行	ナデ	V			1010
図82	660	13J-215	II	注口	注口	木葉状連結弧線文・横長瘤	入組帯状文・瘤・上割瘤・無文	LR斜行 RL斜行	ナデ	V	文様上下共4単位		1428
図82	661	13A-213	II	鉢	口頸	沿口刻目帯・沈線文・縄文		異原羽状	ナデ	V			1019
図82	662	13B-210	II	壺	胴下底		平行沈線		ナデ	V	上底		1514
図82	663	12T-214	II	注口	注口付根		縄文	LR斜行	ナデ	V			1078
図82	664 665	13A-213 215	II	香炉	頸胴上	微隆起線による入組文(φ2mmの、微小瘤貼付)・最大径付近の2条の刻目帯間に、微細沈線によって矢羽根状モチーフ・瘤・大型瘤・X字状隆線入組文・矢羽根文共途中で方向逆転			ナデ	V	赤色顔料外面に残存明瞭、外面丁寧なミガキ		1015
図82	666	13A-214	II	台部	台		縄文		ナデミガキ	V			1332
図82	667	13B-219	II	台部	台		無文		ナデ	V	沈線状の工具痕有		1331
図82	668	13F-215	II	台部	台		縄文帯	異原羽状	ナデ	V			1024
図82	669	12Q-214	II	台部	台		無文		ナデ	V	接地部肥厚		1256

遺構外石器観察表 1

図版	掲載No	器種	素材形態	石質	出土地	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	整理No
図50	S1	石鏃		玉髓質珪質頁岩	XⅢC-202(103集)	沢3	17	10	3.5	0.4		116
図50	S2	サイドスクレイパー	剥片	玉髓質珪質頁岩	XⅢC-202(103集)	沢10	27	23	6.2	4.5		69
図50	S3	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢC-201(103集)	沢2	35	25	4.7	4.4	下半部欠損	37
図50	S4	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢC-201(103集)	沢2	42	64	9.9	14.2	主要剥離面打点横位置	38
図50	S5	石匙?	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢC-202(103集)	沢2	74	36	12.4	29.3		76
図64	S6	石鏃		珪質頁岩	XⅢB-204	沢3	37	12	3.7	0.9	有茎平基・片面下半欠損	10
図64	S7	石鏃	剥片	珪質頁岩	XⅢB-204	沢10	33	15	5.6	2.7	有茎凸基	15
図64	S8	石鏃		珪質頁岩	XⅢA-204	沢3	22	15	5	1.2	有茎凸基	11
図64	S9	石鏃		玉髓質珪質頁岩	不明	沢13	17	13.5	3	0.5		97
図64	S10	石鏃		珪質頁岩	XⅢA-204	沢3	56	15	6.2	3.8	有茎凸基・付着物有	12
図64	S11	石鏃	剥片	珪質頁岩	XⅢB-205	沢3	24	11	2.9	0.5	有茎凸基・主要剥離面表裏残	14
図64	S12	石鏃 未製品	両極剥片	珪質頁岩	XⅢB-205	沢3	18	13	3.2	0.8	自然面・主要剥離面残、未製品	13
図64	S13	石鏃	剥片	珪質頁岩	XⅢB-200	沢11	32	17	4.3	2	無茎凸基・自然面・主要剥離面残	16
図64	S14	石鏃	剥片	玉髓質珪質頁岩	XⅢD-204	沢13	37	13	7.3	2.6	無茎尖基	17
図64	S15	石鏃		珪質頁岩	XⅢB-202	沢1	38	12	9.6	3.6	先端部に磨耗痕	32
図64	S16	石鏃	剥片	珪質頁岩	XⅢC-201	沢10	28.5	17	7.5	2.9		102
図64	S17	石匙	両極剥片	玉髓質珪質頁岩	XⅢB-204	沢3	47	32	12.4	12.7	先端部非常に厚い	41
図64	S18	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢF-205	沢13	63	34	8.7	20	つまみ部に打面残	48
図64	S19	石匙	両極剥片	玉髓質珪質頁岩	XⅢE-205	沢10	38	36	10.8	14.4	つまみ部に自然面残・下半欠損	45
図64	S20	石匙	剥片	玉髓質珪質頁岩	XⅢB-203	沢3	29	16	4.5	1.2	二次調整片側のみ	40
図64	S21	石匙	横長剥片	珪質頁岩	XⅢC-201	沢10	46	80	9.7	23.7	つまみ部に自然面(打面)残	44
図64	S22	石匙	剥片	珪質頁岩	XⅢA-204	沢10	31	48	8.3	7.8		43
図64	S23	石匙	横長剥片	玉髓質珪質頁岩	XⅢC-202	沢2	36	42	9.3	11.9		39
図65	S24	石匙	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢB-205	沢13	41	52	8.6	15.6	主要剥離面打点横位置	47
図65	S25	ヘラ状石器		鉄石英(赤碧玉)	XⅢA-201	沢1	34	20	7.6	5		62
図65	S26	スクレイパー	剥片	珪質頁岩	XⅢB-202	沢10	33	21	3.4	2.2		87
図65	S27	スクレイパー	剥片	珪質頁岩	XⅢB-204	沢3	35	38	8.9	11.1	被熱	79
図65	S28	二次加工ある剥片	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢG-201	沢1	85	45	16.4	51.2		111
図65	S29	使用痕ある剥片	剥片	珪質頁岩	XⅢB-209	沢2	92	31	12.5	30.2	石刃状縦長剥片・微細剥離痕有	85
図65	S30	石核		珪質頁岩	XⅢB-201	沢10	100	92	34.1	90.5		91
図66	S31	石核		珪質頁岩	XⅢA-204	沢13	36	40	26.8	32.6		89
図66	S32	異形石器	縦長剥片	珪質頁岩	XⅢB-202	沢10	49	31	7.3	6.3		66
図66	S33	チョッピングツール	礫	頁岩	XⅢA-205	沢3	72	100	46.8	366.4		96
図66	S34	チョッピングツール	礫	頁岩	XⅢB-203	沢10	66	77	23	148.7	表裏共自然面多く残る	82
図66	S35	凹石		凝灰岩	XⅢG-205	沢1	77	65	45	282.5		169
図66	S36	凹石		石英安山岩	XⅢB-205	沢3	109	79	25	314.9		167
図66	S37	叩凹石		石英安山岩	XⅢE-206	沢10	105	73	44	397.8		168
図66	S38	磨凹石		石英安山岩	XⅢD-205	沢13	155	77	47	797.1		157
図66	S39	叩凹石		石英安山岩	XⅢB-206	沢10	98	80	68	640.1		156
図67	S40	叩凹石		石英安山岩	XⅢB-205	沢3	89	74	56	466.8		170
図67	S41	磨石		石英安山岩(きれいなもの)	XⅢT-201	沢1	121	94	62	1062.8		179

遺構外石器観察表 2

図版	掲載No.	器種	素材形態	石質	出土地	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	整理No.
図67	S42	叩凹石		流紋岩	XⅢE-206	沢10	154	56	39	476.2		159
図67	S43	叩凹石		流紋岩	XⅢE-202	沢2	143	52	30	290.8	表面焼けハジケ多数有	163
図67	S44	凹石		石英安山岩	XⅢA-202	沢3	143	58	43	447.4		165
図67	S45	叩凹石		流紋岩	XⅢE-206	沢10	162	52	31	357.5		160
図67	S46	磨叩石		石英安山岩	XⅢE-206	沢10	116	78	67	964.3		172
図68	S47	磨叩石		石英安山岩	XⅢC-206	沢13	114	92	66	959.1		177
図68	S48	石皿		凝灰岩	XⅢB-202	沢1	161	190	31	718.5		183
図68	S49	砥石				沢	185	64	48	822.9		198
図68	S50	石棒?		頁岩	XⅢB-206	沢10	95	38	37	214.9		184
図68	S51	石刀?		凝灰岩	XⅢB-205	沢3	111.5	32.5	16.5	59.3		194
図76	S52	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢA-197 (101集)	I	26	15	3.9	1	有茎凸基	18
図76	S53	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢG-192 (101集)	II	37	19	8.7	4.1	主要剥離面残	31
図76	S54	石匙	縦長剥片	珩質頁岩	XⅢD-192 (101集)	II	73	39	9.2	24.5	つまみ部斜め向き	36
図76	S55	サイドスクレイパー	剥片	珩質頁岩	XⅢC-195 (101集)	II	64	29	14.7	24		81
図76	S56	使用痕ある剥片	剥片	珩質頁岩	XⅢE-193 (101集)	II	55	63	1.4			83
図76	S57	石鏃		黒曜石	XⅢB-198	沢1	30	14	3.8	1.1	有茎平基	9
図76	S58	石匙	剥片	珩質頁岩	XⅢC-199	沢6	31	33	5.9	5.1	つまみ部に自然面(打面)残	42
図76	S59	石匙	縦長剥片	珩質頁岩	XⅡT-197	沢13	56	38	12	22.1	つまみと直角方向の両極打法による素材	46
図77	S60	スクレイパー	剥片	珩質頁岩	XⅢA-196	沢10	71	55	14.6	51.2		84
図77	S61	ヘラ状石器	横長剥片	珩質頁岩	XⅢC-198	沢6	53	28.5	8	10.8		101
図77	S62	使用痕ある剥片	剥片	珩質頁岩	XⅢA-197	沢13	74	77	15.3	64.6		67
図77	S63	?		細粒凝灰岩	XⅢC-198	沢1	188	146	28	586.9		186
図83	S64	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢH-220	II	45	15	5.5	2.9	有茎平基	25
図83	S65	石鏃	剥片	玉髓質珩質頁岩	XⅡT-214	II	36	12	4	1.6	有茎凸基	27
図83	S66	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢH-220	II	18	9	2.7	0.3	有茎凸基	24
図83	S67	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢF-215	II	29	11	3.3	0.8	有茎凸基・側辺部中位挟り(?)	23
図83	S68	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢE-201	II	20	10	2.7	0.3	有茎凸基	21
図83	S69	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢB-214	II	27	15	4.7	1	有茎凸基	19
図83	S70	石鏃	剥片	珩質頁岩	XⅢC-213	II	25	12	3.7	0.8	有茎凸基	20
図83	S71	石鏃 未製品	剥片	珩質頁岩	XⅢR-215	II	35	13	4.3	1.7	無茎・両側面に挟り有	26
図83	S72	石鏃	剥片	玉髓質珩質頁岩	XⅢF-213	II	21	12	3.8	0.9	有茎平基・自然面残	22
図83	S73	石匙	剥片	珩質頁岩	ⅧS-201	I	77	39	11.3	37		59
図83	S74	石匙	両極剥片	玉髓	IXC-200	I	62	36	10.5	18.6	つまみ部に自然面残	49
図83	S75	石匙	縦長剥片	珩質頁岩	XⅢE-202	I	72	33	12.2	19.7	つまみ部に主要剥離面残	53
図83	S76	石匙	剥片	珩質頁岩	XⅢI-215	II	58	31	13.4	22.6	主要剥離面打点斜め方向	56
図83	S77	石匙	剥片	珩質頁岩	XⅡR-206	II	34	27	7.4	5.4		57
図83	S78	石匙	剥片	珩質頁岩	XⅢF-215	II	41	21	4.8	4.3	主要剥離面打点つまみ部の反対側	54
図83	S79	石匙	縦長剥片	珩質頁岩	XⅢC-218	II	64	34	9	10.3	主要剥離面打点つまみの反対側	51
図83	S80	石匙	剥片	珩質頁岩	XⅡT-214	II	42	39	8	8.2	つまみ部に打面残	50
図83	S81	石匙	剥片	玉髓質珩質頁岩	XⅡR-213	II	39	18	4.5	2.7	小礫素材	58
図84	S82	石匙	横長剥片	珩質頁岩	XⅢD-202	I	44	28	6.5	5.5	主要剥離面打点斜め方向・薄い剥片利用	52
図84	S83	石匙	剥片	頁岩	XⅢH-214	II	35	27	2.9	2.2	主要剥離面打点横位置・薄い剥片利用	55
図84	S84	石匙	横長剥片	珩質頁岩		表採	46	62	9.7	17.8		60
図84	S85	石鏃	縦長剥片	珩質頁岩	XⅢA-213	II	38	24	6.5	7.4		63
図84	S86	スクレイパー	剥片	珩質頁岩	XⅢB-214	II	40	41	13.2	23.6		71
図84	S87	サイドスクレイパー	剥片	珩質頁岩	XⅢH-215	II	70	27	8.2	13.9		74
図84	S88	サイドスクレイパー	剥片	珩質頁岩	XⅢA-213	II	94	70	14.8	99.1		86
図84	S89	スクレイパー	剥片	珩質頁岩	XⅢA-213	II	61	29	6.5	14.7		72
図85	S90	使用痕ある剥片	横長剥片	珩質頁岩	XⅢH-215	II	39.3	51	12.8	17.7		109
図85	S91	スクレイパー?	横長剥片	珩質頁岩	XⅡQ-207	II	56	32	3.2	18.7	表裏共自然面多く残る	78
図85	S92	チョッピングツール	礫	頁岩	XⅢE-201	II	87	84	48	445.9		180
図85	S93	異形石器	縦長剥片	珩質頁岩	XⅢB-214	II	60	25	8.5	7.8		65
図85	S94	石製チョッピングツール	礫	珩質頁岩	XⅢA-204	II	60	89	36.9	169.5		93
図85	S95	石斧		安山岩	XⅢF-213	II	113	55	28	266.5		189
図85	S96	石斧		安山岩	XⅢF-213	II	135	52	28	299.1		188
図85	S97	石斧		緑色細粒凝灰岩	XⅢH-220	II	66	41	16	80.2		187
図86	S98	凹石			XⅡS-213	II	99	83	56	572.1		207
図86	S99	凹石		砂岩	XⅢB-213	II	98	78	45	431.8		158
図86	S100	凹石		流紋岩	XⅢC-217	II	126	43	28	230.9		161
図86	S101	叩凹石		流紋岩	XⅡR-218	II	138	48	32	265.8		162
図86	S102	磨叩凹石			XⅡT-198	II	167	63	64	1470.4		199
図86	S103	磨石		安山岩	XⅡR206	II	113	36	75	497.1		171
図87	S104	叩石		石英安山岩	XⅢD208	II	132	89	62	995		175
図87	S105	台石?		凝灰岩(きれいなもの)	XⅡS~T-216	II	191	190	36	176.6		182
図87	S106	石製品		細粒凝灰岩	XⅡR-210	I	49	37	12.5	31.2		191
図87	S107	石製品		細粒凝灰岩	XⅡT-206	2	46.3	40.2	13	21.3		192
図87	S108	石製品		凝灰岩	XⅡS-212	II	29	29.5	10	8		193

## 第6章 まとめ

今回の調査では、遺構は竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、土坑30基、溝状土坑2基、ピット群2基を検出した。また、遺構ではないが、遺跡の北西側に縄文時代後期後葉・晩期後葉を主体とする旧河川跡を検出した。

遺物は段ボール箱にして約200箱分が出土した。そのうち160箱は旧河川跡からの出土である。以下、これらの遺構・遺物についてまとめ、若干の考察を加えてみたい。

### (1) まとめ

#### 1. 遺構

##### [竪穴住居跡]

竪穴住居跡は、C区で1軒検出した。出土遺物から縄文時代後期中葉から後葉にかけての遺構と思われる。遺構の約半分は市道にかかるため調査できなかったが、円形か楕円形になるものと思われる。炉は遺構のほぼ中央になるとと思われる部分に地床炉の一部を検出した。出土土器は、南郷村馬場瀬(1)遺跡の第Ⅲ群土器と同時期のものと考えられる。

##### [竪穴状遺構]

D区で1基確認した。平面形は長方形を呈する。時期は不明である。

##### [土坑]

土坑はA・C・D区で検出した。四角形か鍋底状のものが主体である。時期は縄文時代中期末葉から後期後葉にかけてのものである。A区では縄文時代後期後葉のものが主体である。C・D区では、遺物もほとんど出土せず、時期を決定するまでには至らなかった。

[土坑群] A区のXⅡQ-214～XⅡT-216グリッドの約12m四方において、15基の土坑を検出した。縄文時代後期前葉と後葉の遺物が出土した。主体を占めるのは、後期後葉の遺物で、従来の編年では「十腰内V群」相当であり、鈴木克彦の編年では、「十腰内5式」～風張式相当であろうか。遺物出土は覆土上位で目立ち、第113号土坑では覆土中位付近で盛んに火を焚いたためか、厚い焼土層が形成されている。一部の土器には縄文帯の幅狭化や粗雑な沈線文・器面調整という傾向が見られ、後期後葉でも新しい様相を示すものと思われる。148土-17(図21)は、弘前市鬼沢猿沢遺跡第2号出土土器2と同様の形態と考えられる。

土坑は底面から若干開くように立ち上がるものが多いが、一部オーバーハングし、フラスコ状の断面形態をとるものもある。当初貯蔵穴として機能していたものが、土坑の廃絶によって、ごみ捨て場や屋外炉のような場として利用された可能性がある。

##### [溝状土坑]

D区で2基確認した。時期は不明である。

##### [ピット群]

A区・D区で1基ずつ検出した。A区のもの、10基のピットが環状に配されており、D区のもの、約1,000㎡の区域に規則性を持たずに110基のピットが散らばっていた。どちらも用途・時期は不明



である。

## 2. 遺物

### [縄文時代中期から後期にかけての土器]

旧河川跡からは多量の土器が出土したが、そのほとんどは縄文時代後期後葉の深鉢であり、全体の約80%以上を占めている。中期の土器では、末葉のものが少量出土しており、後期の土器では、初頭から前葉・中葉のものが少量出土している。また、後期後葉の土器の器種は深鉢・鉢・壺・注口であるが、深鉢が全体の80%以上を占めている。特徴としては、無文・地文のみを施した土器が全体の65%以上にのぼり、その約半数には炭化物・ススが付着しているという点である。これは、生活に使用した土器がここに廃棄、または流れ込んだことを意味していると思われる。

### [縄文時代晩期の土器とA区の遺構外土器]

XⅢB-195グリッド付近とそれに隣接した旧河川内堆積土中から、縄文時代晩期後葉の土器群が出土した。有文の精製土器の出土は僅かであるが、変形工字文は完結型で、文様帯幅が狭いものが見られる。沈線も砂沢式のように断面半円形で太いものではなく、細いものが主体である。煮沸用の深鉢には、口頸部の平行沈線との組み合わせで盛んに縦位の条線文が施され、これは津軽地方に特徴的な煮沸形態であり、中部高地の浮線文土器群の「細密条痕文」(小林 1994)と同様の技法であろうか。小林青樹は、「細密条痕文」は、深鉢の撚糸文施文の模倣であり、土器製作過程の簡略化・手抜きを指摘している。両地域間での交流の有無は不明であるが、浮線文土器分布圏は、西日本と亀ヶ岡文化圏を結ぶ地域として、稲作受容のルートとしても注目されている。東北地方北部では、平行沈線文+縦走縄文の土器が晩期中葉に多く見られるが、縄文施文の面積が大きい煮沸用の深鉢が選択され、調整+縦走縄文の代用として成立した可能性も考えられる。

砂沢式期の遺物も少量見られるが、概ね、大洞A'式古段階・名川町剣吉荒町遺跡Ⅱ群土器の特徴を有するものと言えよう。

### [石器]

石器は、石鏃、石錐、石匙、石篋、篋状石器、大石平型石篋、石槍、スクレイパー、使用痕ある剥片、二次加工ある剥片、チョッピングツール、礫石器、石製品等が出土している。出土土器と同様に、縄文時代後期前葉・後期後葉・晩期後葉に属するものと思われる。

まず石匙については、1999年に刊行された『山下遺跡・上野尻遺跡』の、杉野森の指摘を追認する形となるが、石匙の剥片素材の利用の仕方に特徴があり、素材剥片剥離時の打面側につまみを作成するのではなく、打面を刃部の一端に配置する。そのため、つまみは通常の剥片利用法では厚みを有するのにならば、当遺跡例では、刃部側に最大厚みを有するものが多く見られる。この製作技法によって製作されるのは、縦長剥片を素材にした横型石匙である。石器全体の素材剥片中に、横長剥片を素材とするものは、横型石匙などに存在するが少ない。目的的に横長剥片を剥離することが困難であった為、縦長剥片を用いてわざわざ横型石匙を製作したという解釈も考えられようが、機能的側面より考えれば、つまみ部の強度よりも、刃部側の厚みを重視した結果であるとも考えられる。つまみは着柄部ではなく、宮城県山王圀遺跡出土例のように、紐で結び携帯するための部位であるため、強度を必要とせず、むしろ使用時の刃部の強度や手に持って使用する場合の握りやすさを狙ったものである可

能性がある。平成9年度調査時には、ほぼ縄文時代後期後葉の土器群とともに出土しており、この時期に特徴的な素材剥片利用法であると考えられる。他の遺跡にも類例は存在するようである。また非常に薄い剥片を用いた石匙も、数点存在する。

他に注目されるものとして、沢から出土した石刀の下半部があげられる。凝灰岩を丁寧に加工したつくりの良い例である。祭祀行為を含めた使用による欠損品であろうか。なお、縄文時代後期と晩期で、石材の利用法における違いを見出すことはできなかった。

### 3. 遺跡のまとめ

今回の調査区では、縄文時代後期後葉を主体とした遺構・遺物が検出された。縄文時代の河川跡からは、生活に使用したと思われる遺物も多量に発見されている。これらの点より、この遺跡は縄文時代後期後葉を主体とする集落跡であったと思われる。未調査部分が残っており、今後の調査により今回確認された遺物を使用した人々の集落跡が確認されることを期待したい。

(工藤 由美子、永嶋 豊)

#### (2) 『東北地方北部における縄文時代後期後葉研究について』

上野尻遺跡から出土した土器の主体を占めるのは、縄文時代後期後葉の所謂「瘤付土器」とされる一群である。旧河川や土坑中に廃棄された遺物には、煮沸用の粗製土器が圧倒的に多く、ここが生活の場であった事が理解される。

該期の東北北部の土器型式は、磯崎正彦らによる弘前市十腰内遺跡の調査により本格的に始まるが、近年、岡田康博(1986)、関根達人(1993)、金子昭彦(1994a・1994b)、鈴木克彦(1997・1998a・1998b)らによって、土器型式の再検討および編年の整備が進められている。また、宮城県域では、気仙沼市田柄貝塚の調査報告(手塚 1986)によって、概ね研究者間で共通の理解が得られており、それを受けて高柳圭一の「瘤付土器四段階区分案」が提示されている。

磯崎の十腰内遺跡出土土器群の型式内容としての不備については、多くの研究者が指摘しており、そのため資料の再評価または編年的位置に関しては、各研究者間の編年観の違いにも起因して、各土器群のとらえ方に混乱が生じており、該期研究の足かせとなっているのが現状である。

東北地方北部では、該期の土器の出土量および住居跡床面出土資料を中心とした一括出土資料は比較的豊富であるが、貝塚やそれに準ずる良好な層位的出土例に乏しい。そのため、遺構内出土の一括性を有した資料を用い、編年案の確立された他地域(主に宮城県地方)との比較や各研究者の考える前後関係に基づく資料の羅列といった方法で、磯崎以後のいわゆる「十腰内編年」の再整備が図られており、一定の成果をあげつつあると評価できよう。

ここでは、縄文時代後期後葉の生活様式・上野尻遺跡の生活景観の復元を目的に、縄文時代後期後葉期の青森県を中心とした研究を概観しておきたい。

磯崎は十腰内遺跡の調査報告において、縄文時代後期の土器群を第Ⅰ～Ⅴ群へ分類した。磯崎自身は、この土器群をそのまま型式名として用いることに、消極的な姿勢であったが、1964年刊行『日本原始美術』内で型式名として、「十腰内1～5式」として用いているらしい(金子 1999)。

その後、青森県内では、青森市蚩沢遺跡(1979)、南郷村馬場瀬(1)遺跡(1982)、平舘村尻高



(4) 遺跡 (1985)、八戸市丹後谷地遺跡 (1986)、八戸市風張 (1) 遺跡 (1990 a・b) 等が調査され、縄文時代後期後葉期の資料が蓄積され、報告書内において十腰内土器群への比定が盛んに行われている。また出土資料の型式学的特徴の検討および編年的位置の検討を、報告書内で行うことによって、研究の進展が見られた。

中でも北林八洲晴によって、「十腰内Ⅳ群」に併行するものとされた馬場瀬 (1) 遺跡の第Ⅲ群土器は、一括性の高い資料であり、その後の後期後葉の土器型式理解に欠かせないものとなっている。

いずれの報告書も南東北や関東といった他地域との広域編年の問題には触れるものの、不備とされる「十腰内編年」を抜け出せない感は否めない。

しかし、出土土器群の型式内容・同時性の把握は着実に進展し、各報告書内での検討の成果が、後の岡田・関根・金子・鈴木らの、「十腰内編年」の再検討・再評価につながる。

また緊急調査の増加に伴い、蛭沢遺跡・丹後谷地遺跡・風張 (1) 遺跡・むつ市大湊近川遺跡・大畑町水木沢遺跡・平館村尻高 (4) 遺跡・岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡・馬場野Ⅱ遺跡等の調査で、該期の集落構成・竪穴住居跡の構造の一端が明らかになった。特に、風張 (1) 遺跡では、集落の各要素 (土坑・掘立柱建物跡・竪穴住居跡) が、環状構成をなすことが明らかにされた。縄文時代研究史においても特記される成果であり、集落の全体像の解明が待たれよう。また、尻高 (4) 遺跡、大湊近川遺跡等の主に半島部の遺跡を中心に、北海道に見られる「突瘤文」が施文される土器が見られ、海峡を越えた交流が推定されている (岡田1986・鈴木 1997ほか)。

岡田康博は、「十腰内編年」を尊重しつつ、型式設定の経緯に問題がある「十腰内Ⅲ群土器」・「Ⅳ群土器」・「第Ⅴ群土器」の再検討を行い、それぞれに資料を比定し、「Ⅴ群土器」の三段階への細別案を提示している (岡田 1986)。「第Ⅴ群第Ⅰ期」として丹後谷地遺跡他を、「第Ⅱ期」として蛭沢遺跡を、「第Ⅲ期」として平賀町石郷遺跡出土資料をあてている。磯崎によって時間幅を持つとされた「十腰内Ⅴ群土器」の細別案として注目されるが、馬場瀬 (1) 遺跡第Ⅲ群土器を「十腰内Ⅳ群土器」に比定した岡田の論には、より後出する土器群 (「西ノ浜式」 or 「十腰内5式」) に併行すべきとする関根達人と鈴木克彦らの批判がある。

1986年の田柄貝塚の調査報告 (藤沼・手塚 1986) により、仙台湾を中心とした編年が整備され、研究者間でも一応の共通認識が得られた。「田柄編年」を受けて、高柳圭一は仙台湾地方の縄文時代後期竪穴土器の4段階の変遷案を提示しており (高柳 1988)、仙台湾周辺のみならず該期の東北地方北部の編年理解にとっても不可欠のものとなっている。また該期の研究史は、小林圭一の論考に詳しい (小林 1999)。

関根達人は、研究史をたどった上で、後藤勝彦の「西ノ浜式」の型式内容を再検討し、宮城県を中心に併行する土器群の検証を行っている (関根 1993)。「十腰内編年」の不備を指摘した上で、仙台湾周辺の土器型式変遷を軸に、各地の一括資料を各段階に比定し、東北地方太平洋側を中心とした編年表を作成している。東北地方北部 (主に馬淵川・新井田川流域) では、住居跡出土の一括出土土器を検討し、「西ノ浜式」併行の土器を新旧2段階に細分し、「十腰内Ⅳ群土器」は「西ノ浜式」以前に位置付け、「十腰内Ⅴ群」は「西ノ浜式」「宮戸Ⅲa式」両段階併行の時間幅を有するものと述べている。田柄貝塚の手塚の論考とともに、東北地方南部と北部の編年関係および地域性に迫った論考である。

金子昭彦は、田柄貝塚「第Ⅲ群土器」と「第Ⅳ群土器」をそれぞれ新旧2段階に細別し、その上で宮城県・岩手県・青森県・秋田県の該期の資料の検討を通して、型式学的特徴を明らかにしている。

「田柄編年」を物差しとした、手塚・関根・金子らの論考によって、従来の「新地編年」・「十腰内編年」を発展的に消化し、縄文時代後期中後葉期の東北地方の土器型式編年・地域性が解明されつつある。

また近年、鈴木克彦により十腰内遺跡出土土器群とその型式内容の再評価が積極的に行われ、青森県および隣県遺跡の遺構内出土遺物の検討によって、新たな編年案が提示されている（鈴木 1997 1998 a 1998 b）。現段階で貝塚やそれに類する厳密な意味での良好な包含層出土例がない割に、住居・土坑などの検出例が比較的豊富な本州北端域においては、遺構内一括資料の羅列は妥当な方法ではあるといえようが、地域間での同時性・地域性の検証という問題を解決できるかが、課題といえよう。

鈴木は「十腰内式」の不備を訴える他者の研究姿勢を批判し、「磯崎正彦の十腰内式」の再検討を行い、「十腰内式」が土器型式足りうるという立場をとり、該期土器群の編年作業を行っている。

また東北地方北部の縄文時代後期末の土器型式として、「十腰内5式」に続く「5c類」→「風張式」（紐状入組み文群）→「大湊近川式」（幾何状入組み文群）→「6式」（入組み帯状文群）を提唱しており、亀ヶ岡式土器成立直前期の土器型式変遷を理解する上で、非常に魅力的な編年案であるが、今後、青森県域での再検証とともに他地域での同様の変遷の立証が待たれる。

鈴木編年案を評価・批判できる研究者が青森県内に皆無であること自体問題であるが、今後は鈴木編年案を彼自身が咀嚼しわかりやすい形で提示し、他の研究者が彼の編年観・編年案を共有できるかどうか、当地の後期後葉土器群変遷の理解には欠かせない新たな問題である。

青森県の該期研究の課題として、鈴木克彦が想定する青森県域での土器型式変遷と仙台湾編年を基軸に据える研究者間で、整合性をもった共通理解の構築が望まれる。また北海道に面した地理的条件にあり、北海道系の技術とされる突瘤文の施された土器が出土するのは、青森県のみである。上野尻遺跡でも、北海道系の技術の可能性が高い爪形の刺突が充填される土器が出土しており（P78 173など）、これは大湊近川遺跡でも見られるが、北海道地方の「堂林式」に後続し、「御殿山式」に先行するとされる「三ツ谷式」に特徴的な技術の可能性もあり、今後の慎重な分析が必要とされよう。

今後、東北地方北部での土器型式変遷を再検討し、周辺地域との対比において、互いの土器編年への共通認識を確立することが求められよう。小林圭一も述べているが（小林 1998）、文様・装飾手法・形態等の研究者間での呼称の差異が、土器研究の障害となっていることは事実である。本報告書においても、最適な名称を与えることができなかったが、研究者間で、それらについては様々な主張があるだろうが、的確な用語への統一が望まれる。

各時期の物質文化・遺跡立地・遺構の構造および構成・生業形態等について、緻密な分析・調査を行うことによって、該期の生活様式解明に迫ることができると思われる。

（永嶋 豊）

## 引用・参考文献

- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 1979 『蛭沢遺跡』
- 青森県教育委員会 1977 『水木沢遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 青森県教育委員会 1980 『永野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 青森県教育委員会 1980 『金木町 神明町遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第58集
- 青森県教育委員会 1982 『馬場瀬遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第70集
- 青森県教育委員会 1983 『鴨平(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
- 青森県教育委員会 1984 『弥栄平遺跡(2)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会 1984 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第100集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会 1987 『大湊近川遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第140集
- 青森県教育委員会 1988 『上尾駮(2)遺跡Ⅰ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 青森県教育委員会 1988 『上尾駮(2)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
- 青森県教育委員会 1989 『ニッ石遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第117集
- 青森県教育委員会 1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第258集
- 青森県教育委員会 2000 『山下遺跡Ⅱ・米山(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第274集
- 浅川滋男編 1998 『先史日本の住居とその周辺』 奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
- 安孫子昭二 『瘤付土器様式』 『縄文土器大観4』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第99集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第100集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 ー第2次～第5次調査ー』  
岩手埋文調査報告第225集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第259集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『椈の木遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第263集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 ー第6次～第8次調査ー』  
岩手埋文調査報告書第273集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告書第336集
- 金子昭彦 1994a 「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器ー新山権現社遺跡Ⅲ群1～3類土器ー」  
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XIV』
- 金子昭彦 1994b 「十腰内Ⅲ式とⅣ式の境界ー東北地方北半部における縄文時代後期中葉から後葉への土器変遷ー」  
『岩手考古学』第6号
- 金子昭彦 1995 「十腰内Ⅰ式と大湯式における型式としての諸問題ー細分、組成、併行型式の問題ー」  
『岩手考古学』第7号
- 金子昭彦 1996 「十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方ー新しい部分と最も新しい部分の分離」  
『岩手考古学』第8号
- 金子昭彦 1997 「十腰内Ⅰ式と「大湯式」における壺形土器の変遷」 『岩手考古学』第9号
- 金子昭彦 1999 『東北地方 後期前半』 縄文時代10 第1分冊 縄文時代文化研究会

- 小林圭一 1999 『東北地方 後期(瘤付土器)』 縄文時代10 第1分冊 縄文時代文化研究会
- 鈴木克彦 1989 「亀ヶ岡式土器」 『縄文文化の研究4』
- 鈴木克彦 1997 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・3  
 -十腰内5式以降, 後期終末型式の研究-」 『北奥古代文化』 第26号
- 鈴木克彦 1998a・b 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)(下)  
 -十腰内3, 4, 5式土器の研究-」 『考古学雑誌』第83巻 第2・3号 日本考古学会
- 須藤 隆ほか 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』 東北大学文学部考古学研究会
- 須藤 隆 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』 纂修堂
- 関根達人 1993 「『西の浜式』とその周辺」 『歴史』 第81輯
- 高柳圭一 1988 「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」 『古代』第85号
- 成田滋彦 1981 「後期の土器 青森県の土器」 『縄文文化の研究4』
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内土器様式」 『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』
- 八戸市教育委員会 1984 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書-牛ヶ窪遺跡-』 八戸埋文調査報告13集
- 八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-丹後谷地遺跡』  
 八戸埋文調査報告書15集
- 八戸市教育委員会 1988 『田面木平遺跡(1)』 八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ  
 八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 八戸市教育委員会 1988 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』  
 八戸市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡Ⅰ』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡Ⅱ』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 八戸市教育委員会 1995 『八戸市内遺跡発掘調査報告書7-坂中遺跡-』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- 弘前市教育委員会 1988・1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書-図版編・本文編-』
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚Ⅰ』 宮城県文化財調査報告書第111集



# 写真図版



遺跡遠景



調査区 N→



調査区 SW→



調査風景 N→



調査風景 SW→



調査風景 SE→



A区基本層序(XIII I - 219) S→



第101号土坑 遺物出土状況 S→



第101号土坑 セクション W→





第101号土坑 完掘状況 S→



第101号土坑・第104号性格不明遺構・第101号ピット 完掘状況 S→



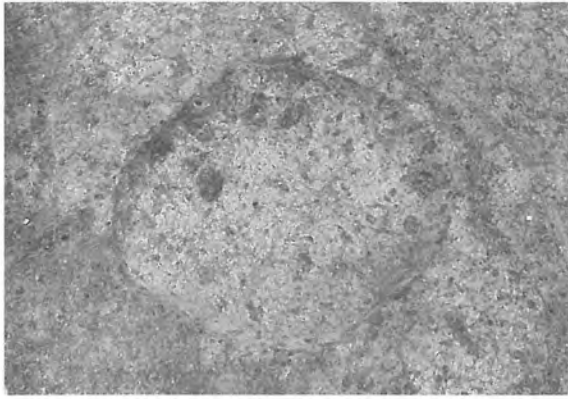
第102号土坑 完掘状況 S→



第103号土坑 セクション S→



第105号土坑 炭化物検出状況 S→



第103号土坑 完掘状況 S→



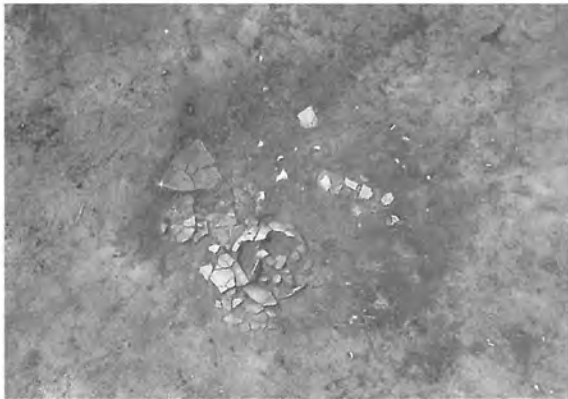
第105号土坑 セクション S→



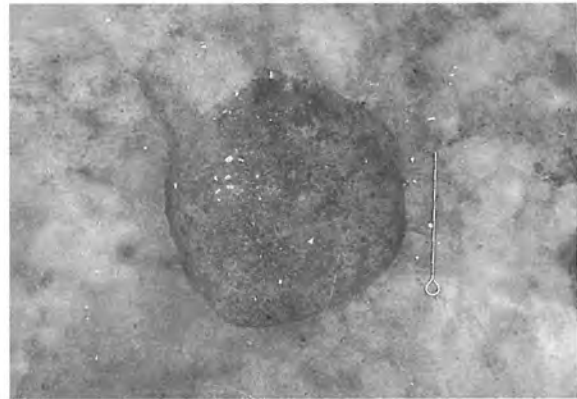
第105号土坑 遺物出土状況 S→



第105号土坑 完掘状況 S→



第106号土坑 遺物出土状況 E→



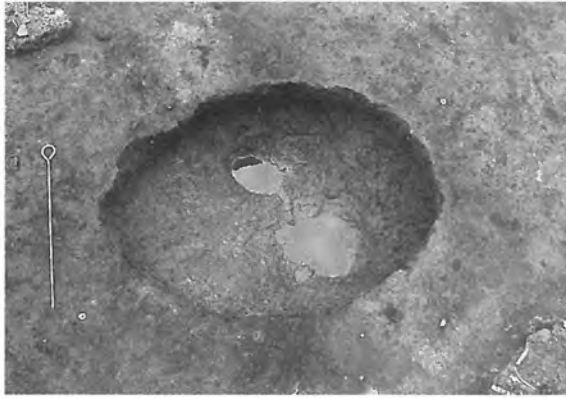
第106号土坑 完掘状況 S→



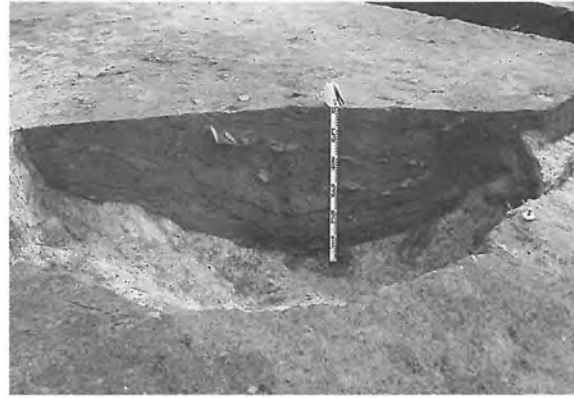
第110号土坑 セクション W→



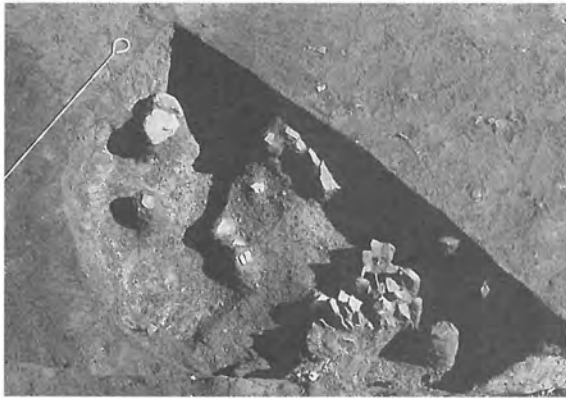
第110号土坑 完掘状況 S→



第118号土坑 完掘状況 N→



第113号土坑 セクション N→



第113号土坑 遺物出土状況 NW→



第113号土坑 完掘状況 N→



第113号土坑 遺物出土状況 N→





第114・148・149号土坑 A-Bセクション NW→



第148号土坑 セクション SE→



第114・115号土坑 G-Hセクション NE→



第148号土坑 E-Fセクション SW→



第149号土坑 4層遺物出土状況 W→



第115号土坑 セクション SW→



第115号土坑 完掘・遺物出土状況 E→



第115号土坑 遺物出土状況 W→



第148号土坑 火山灰検出状況 SE→



第148号土坑 完掘状況 SE→



第148号土坑 4層遺物出土状況 E→



第149号土坑 遺物出土状況 NW→



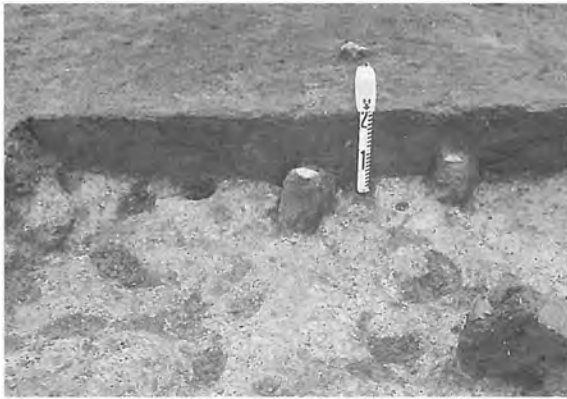
第148・149号土坑 遺物出土状況 NW→



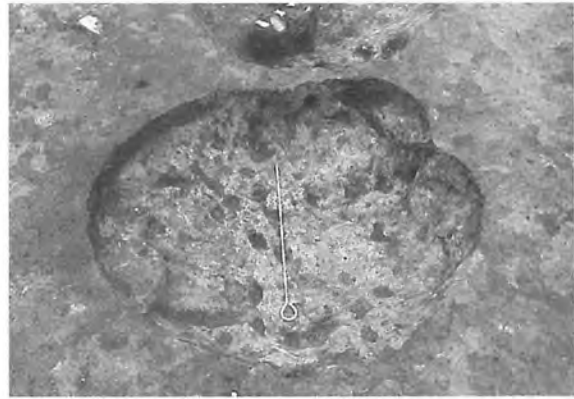
第149号土坑 C-Dベルト2層遺物出土状況 SW→



第149号土坑 完掘状況 NW→



第124号土坑 セクション E→



第124号土坑 完掘状況 S→



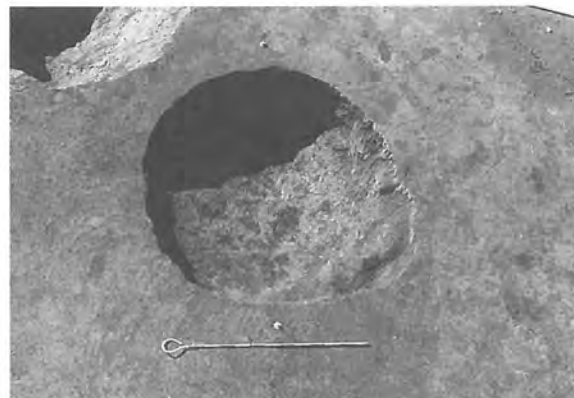
第124・123号土坑 完掘状況 E→



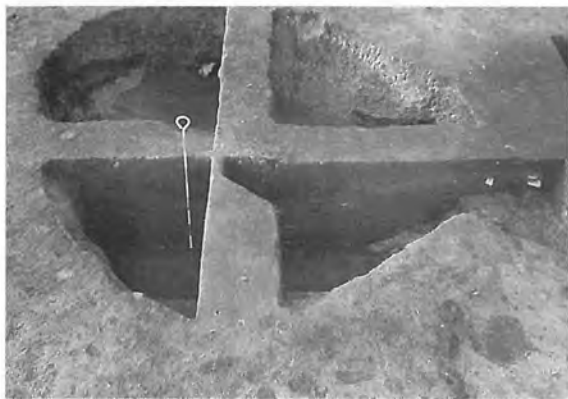
第125・126・141号土坑 セクション SE→



第125・126・141号土坑 完掘状況 NW→



第127号土坑 完掘状況 E→



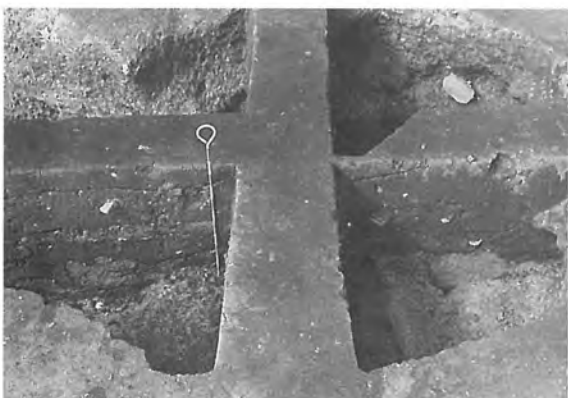
第129号土坑 A-Bセクション SE→



第129号土坑 C-Dセクション SW→



第129号土坑 礫・小型壺(70) 出土状況 S→

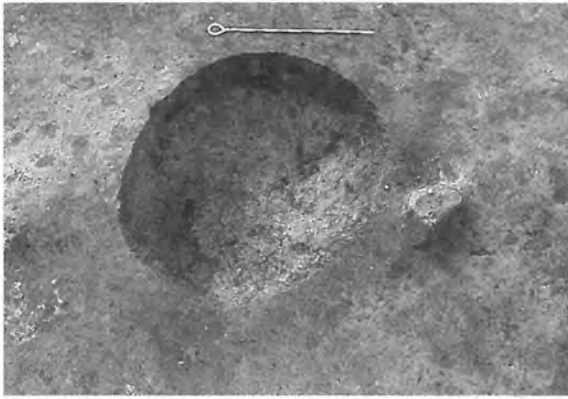


第131号土坑 A-Bセクション SE→

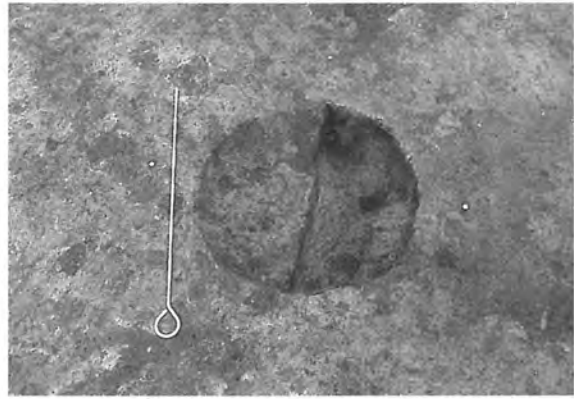


第129・131号土坑 完掘状況 E→

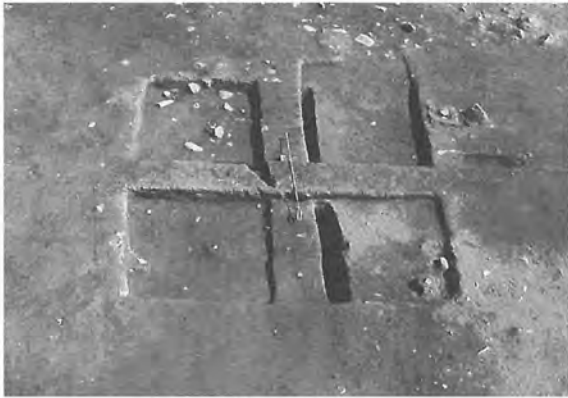




第142号土坑 完掘状況 E→



第143号土坑 完掘状況 S→



第101号性格不明遺構 S→



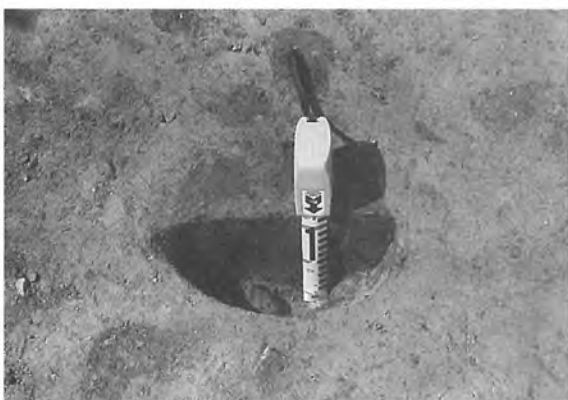
第108号性格不明遺構 完掘状況 E→



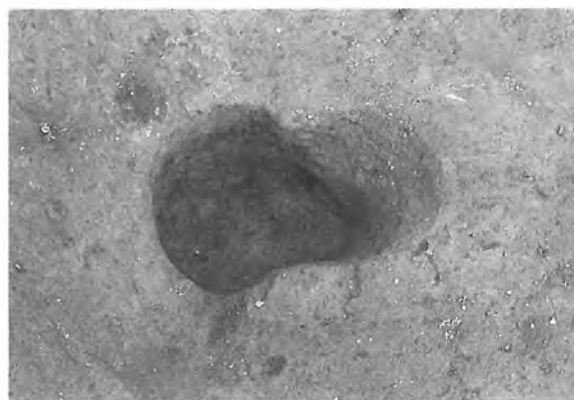
第106号性格不明遺構 完掘状況 NE→



第107号性格不明遺構 完掘状況 S→



第101号ピット群 ピット1セクション S→



第101号ピット群 ピット2完掘状況 S→





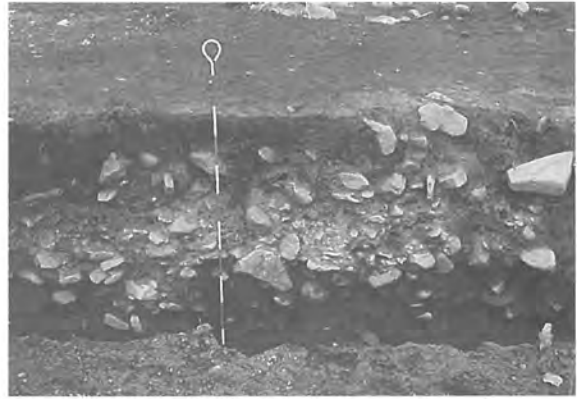
旧河川跡 調査風景 W→



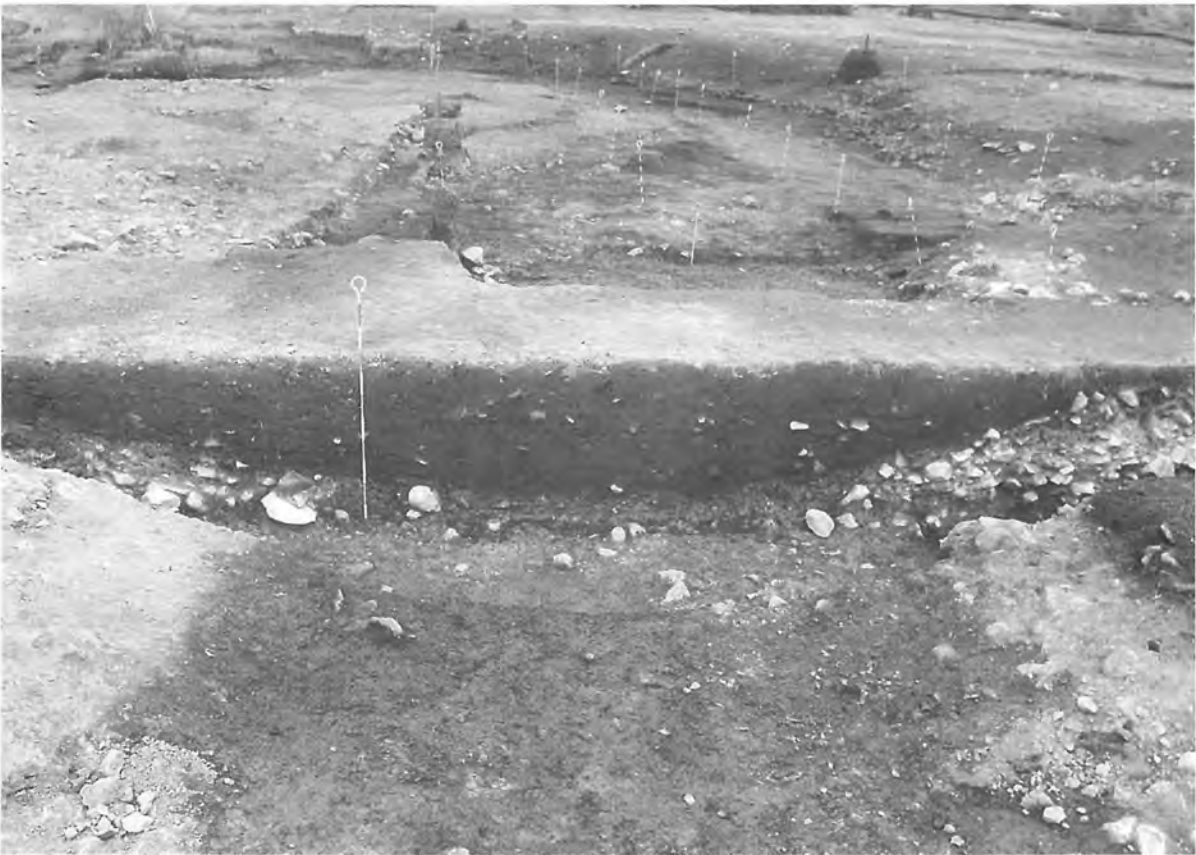
旧河川跡 基本層序CDセクション SW→



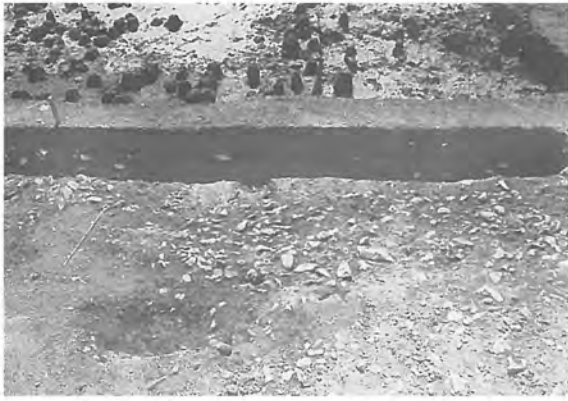
旧河川跡 基本層序HGセクション N→



旧河川跡 礫堆積状況 W→



旧河川跡 基本層序EFセクション W→



第103号遺物集中区 遺物出土状況 N→



第103号遺物集中区 遺物出土状況 W→



旧河川跡 遺物出土状況 E→



旧河川跡 遺物出土状況 E→



旧河川跡 遺物出土状況 E→



第101号遺物集中区 遺物出土状況 S→



第101号遺物集中区 遺物出土状況 W→



C区基本層序(VIII P-202) SW→



第101号竪穴住居跡 炉検出状況 NE→



第101号竪穴住居跡 完掘状況 NE→

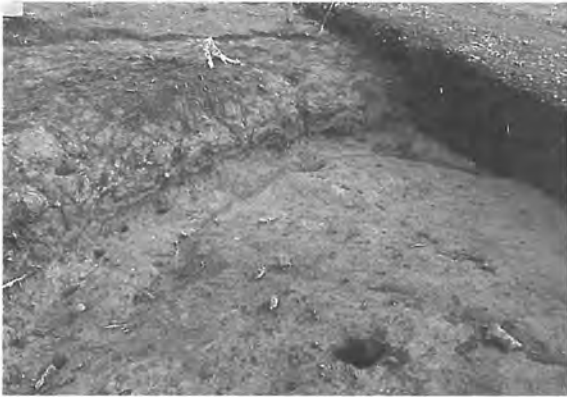




第101号竪穴住居跡 土器出土状況 E→



第101号竪穴住居跡 土器出土状況 NE→



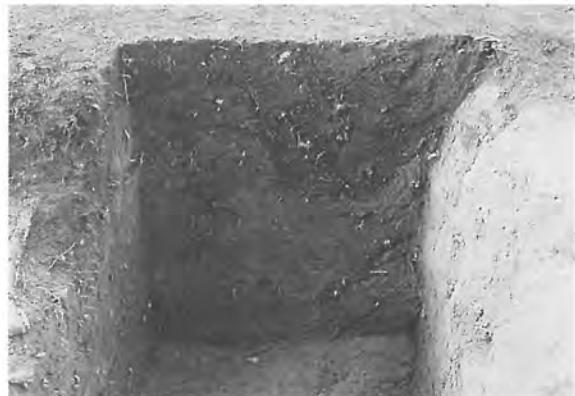
第101号竪穴住居跡 溝跡 N→



第101号竪穴住居跡 ピット14セクション NE→



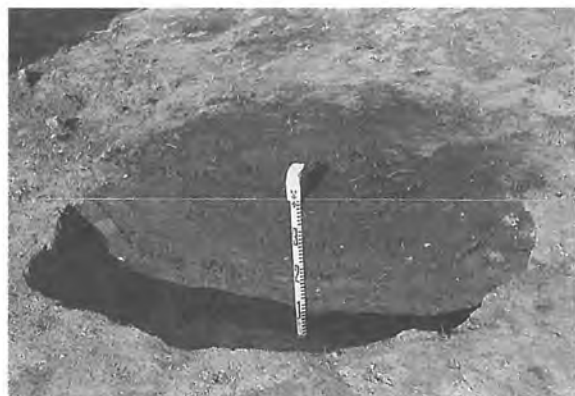
第101号竪穴住居跡 ピット15完掘状況 SW→



第128号土坑 セクション E→



第128号土坑 完掘状況 N→



第138号土坑 セクション SE→



第138号土坑 完掘状況 SW→



第139号土坑 完掘状況 NW→



第145号土坑 セクション W→



D区基本層序(VIII-T-175) NW→



第101号竪穴状遺構 東西セクション N→



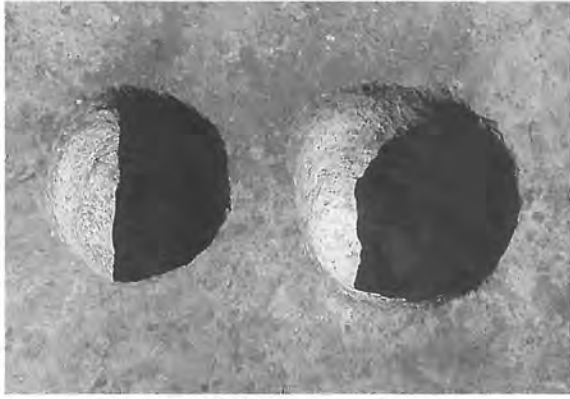
第101号竪穴状遺構 完掘状況 E→



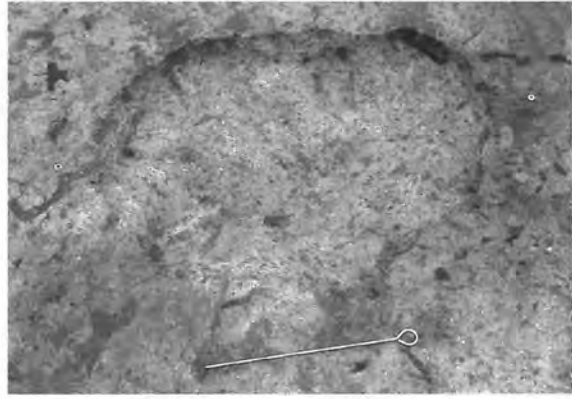
第121号土坑 セクション E→



第122号土坑 セクション E→



第121・122号土坑 完掘状況 W→



第130号土坑 完掘状況 E→



第101号溝状土坑 セクション W→



第101号溝状土坑 完掘状況 E→



第102号溝状土坑 完掘状況 E→



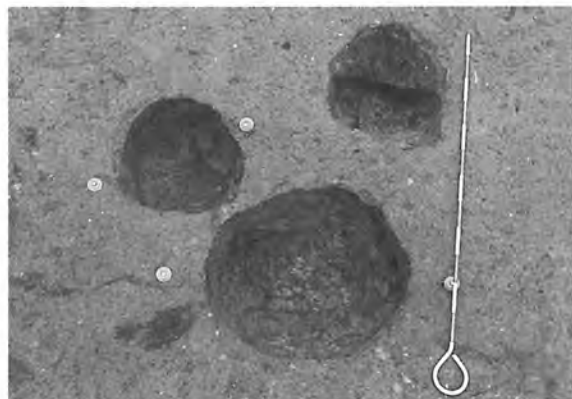
第102号ピット群 SE→



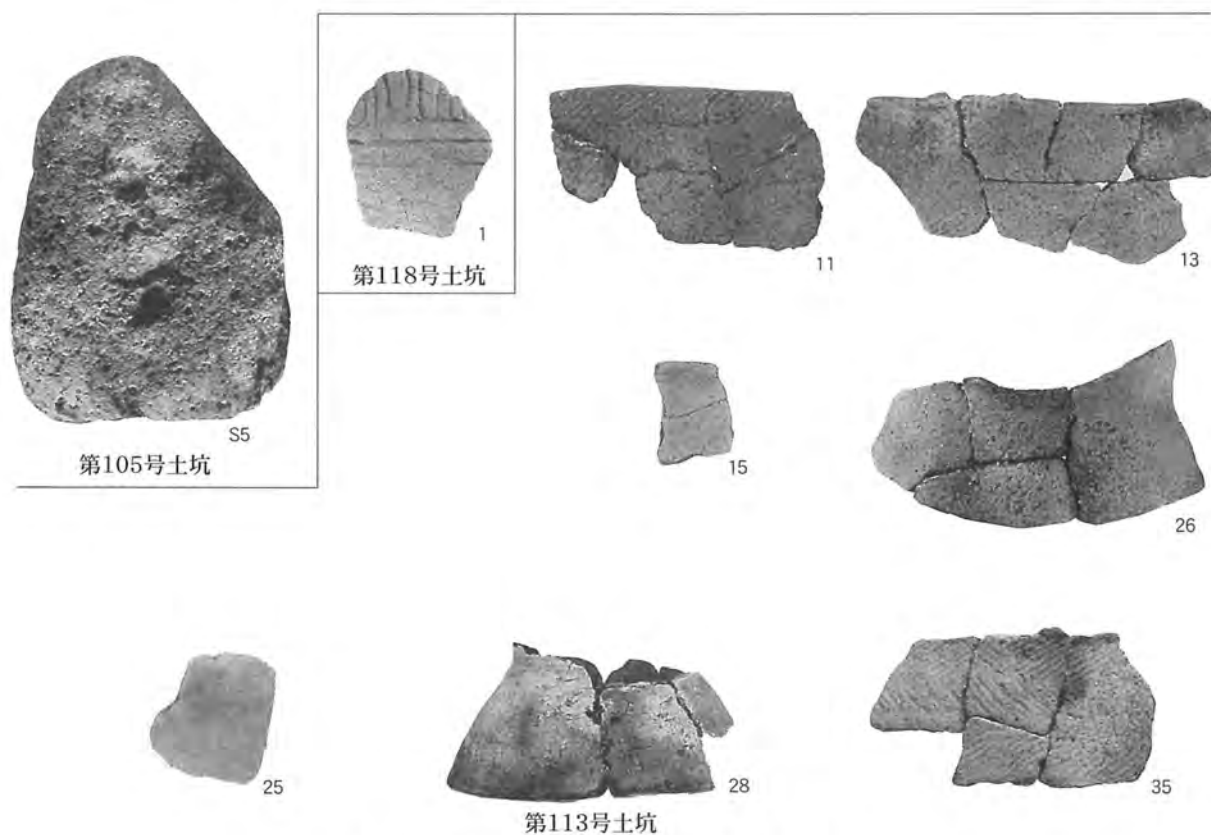
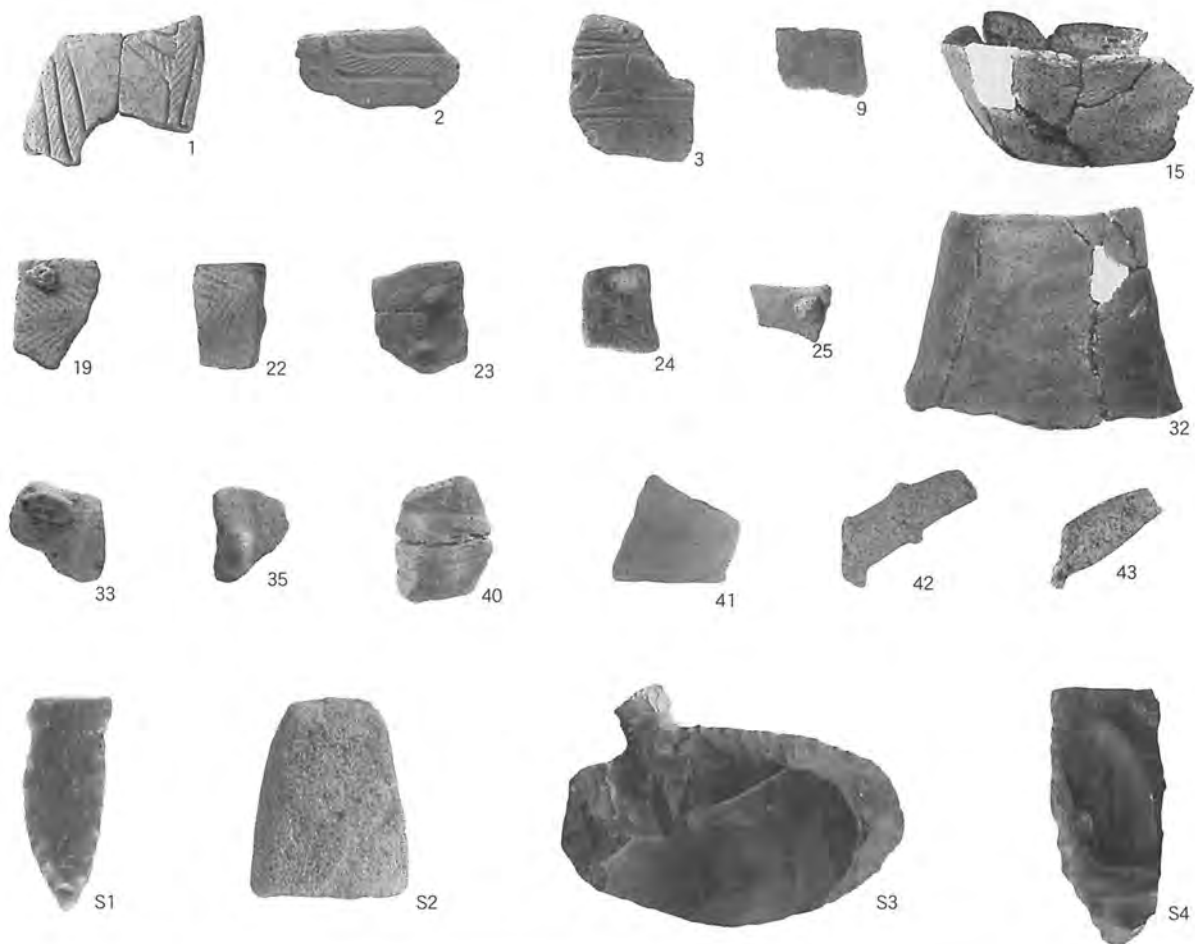
第102号ピット群 ピット54セクション S→



第102号ピット群 ピット27セクション S→



第102号ピット群 ピット完掘状況 S→

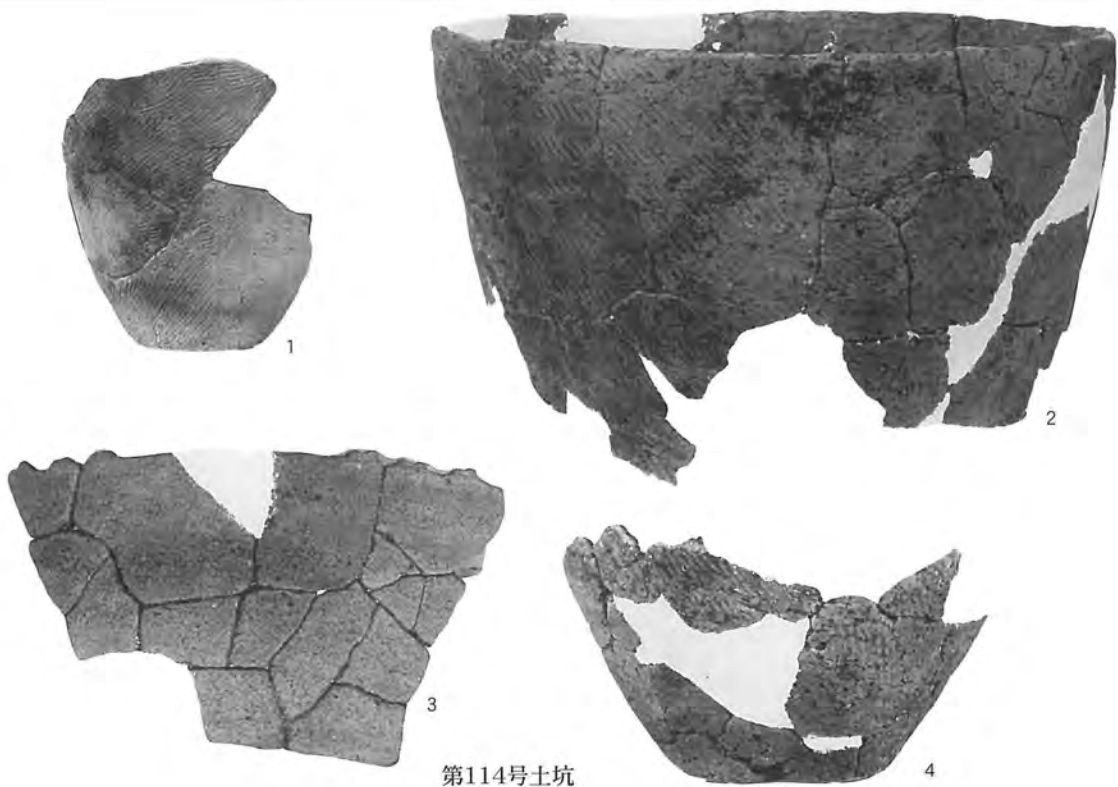


写真図版 17 第105・118・113号土坑出土遺物





第113号土坑

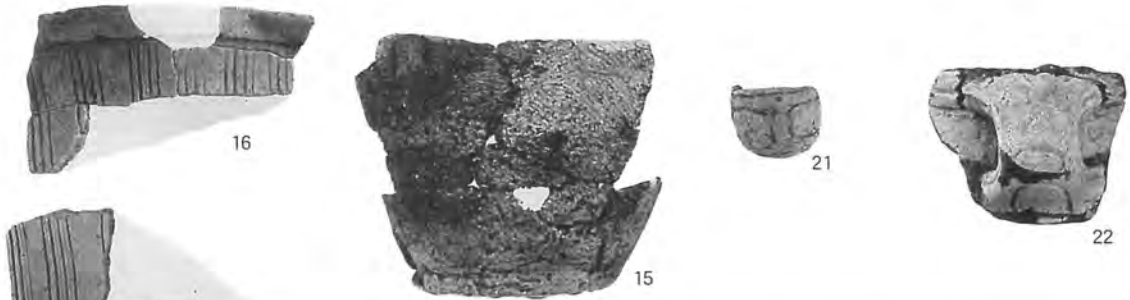


第114号土坑

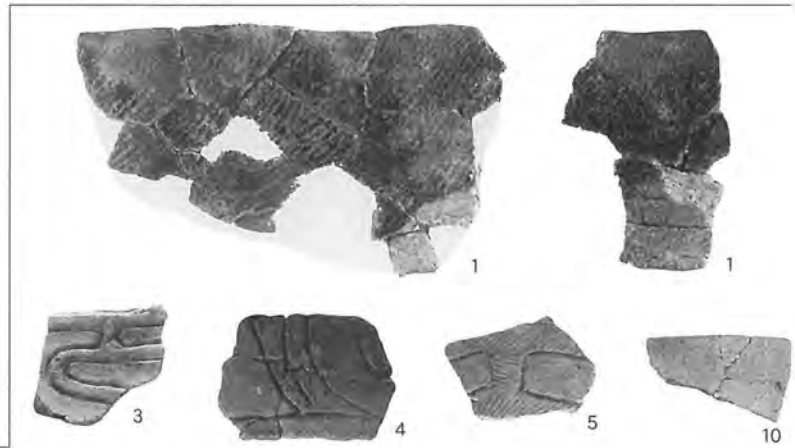




第114号土坑



第115号土坑



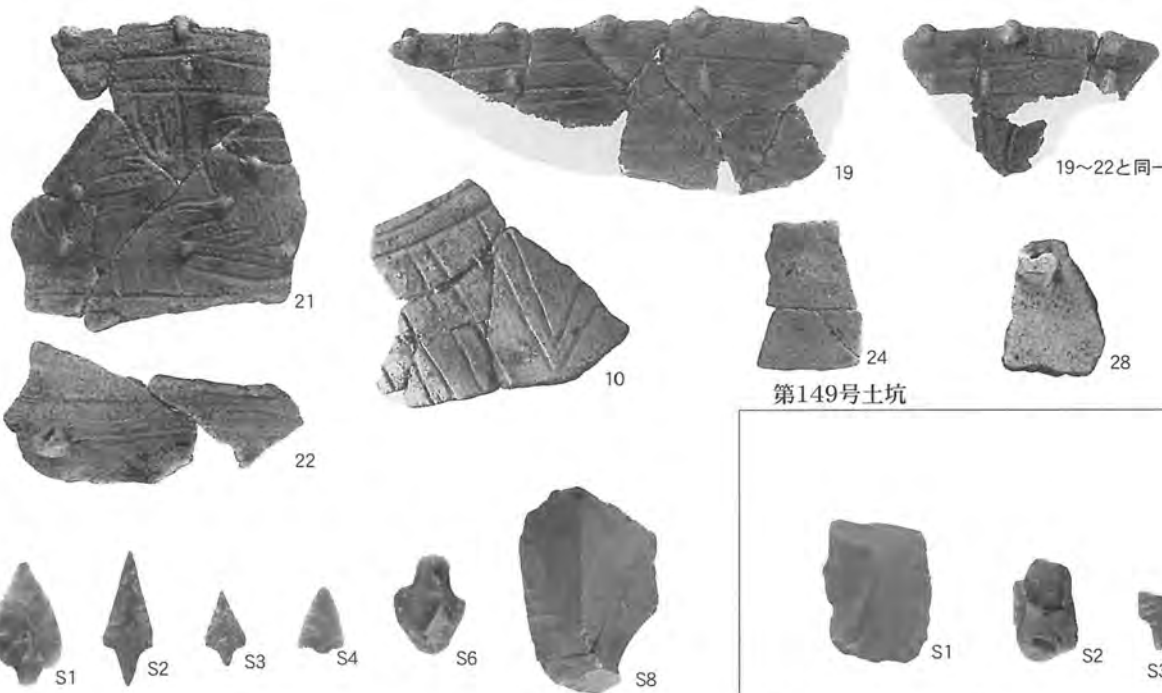
第148号土坑



第148号土坑



第149号土坑



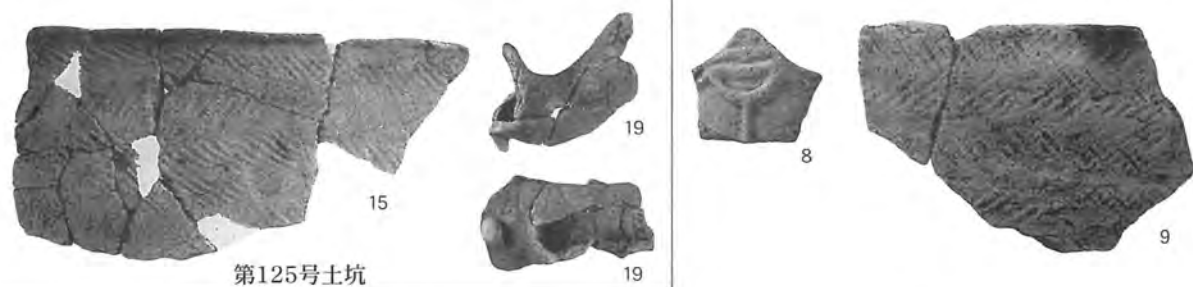
第149号土坑

第111号性格不明遺構



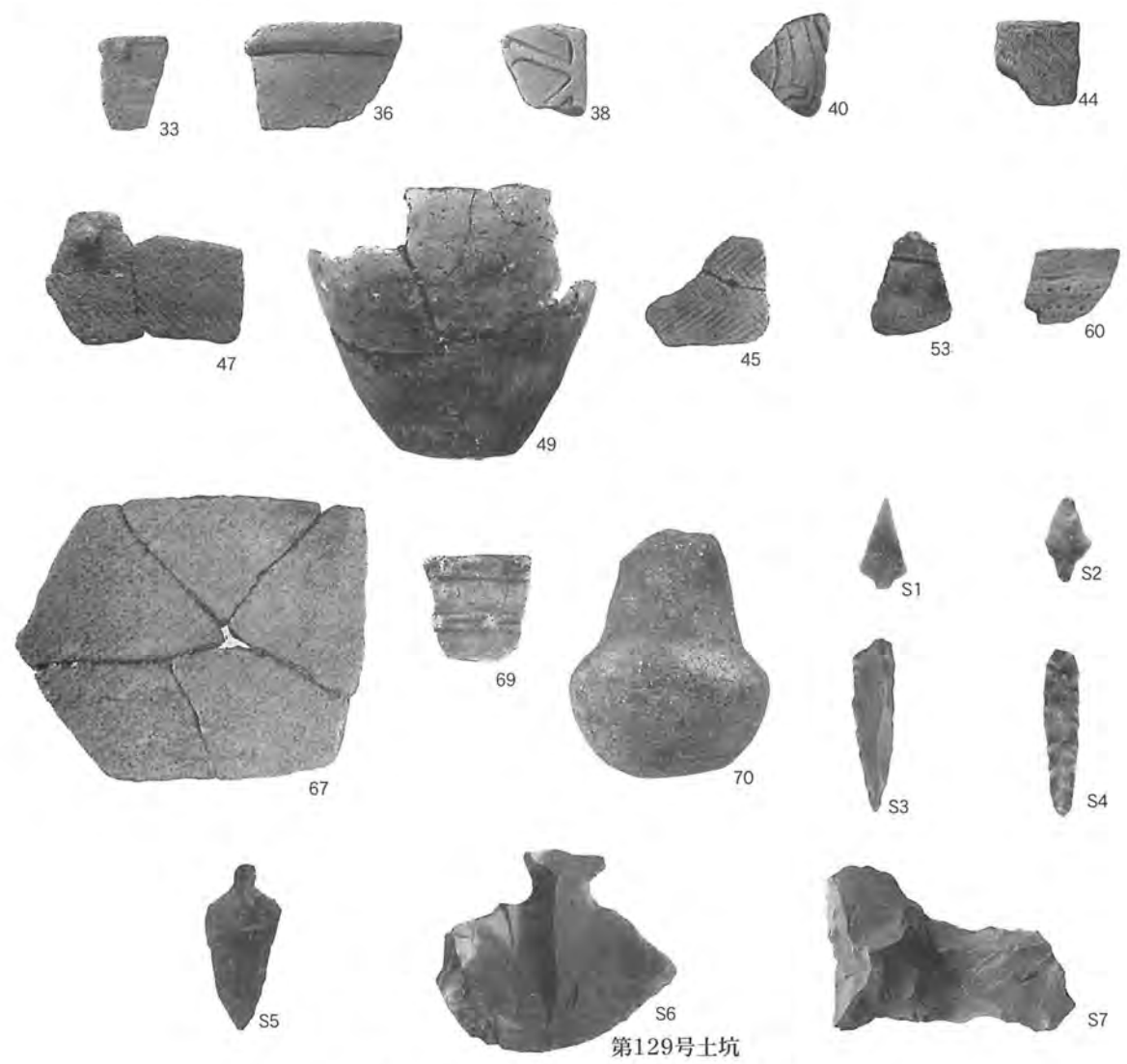
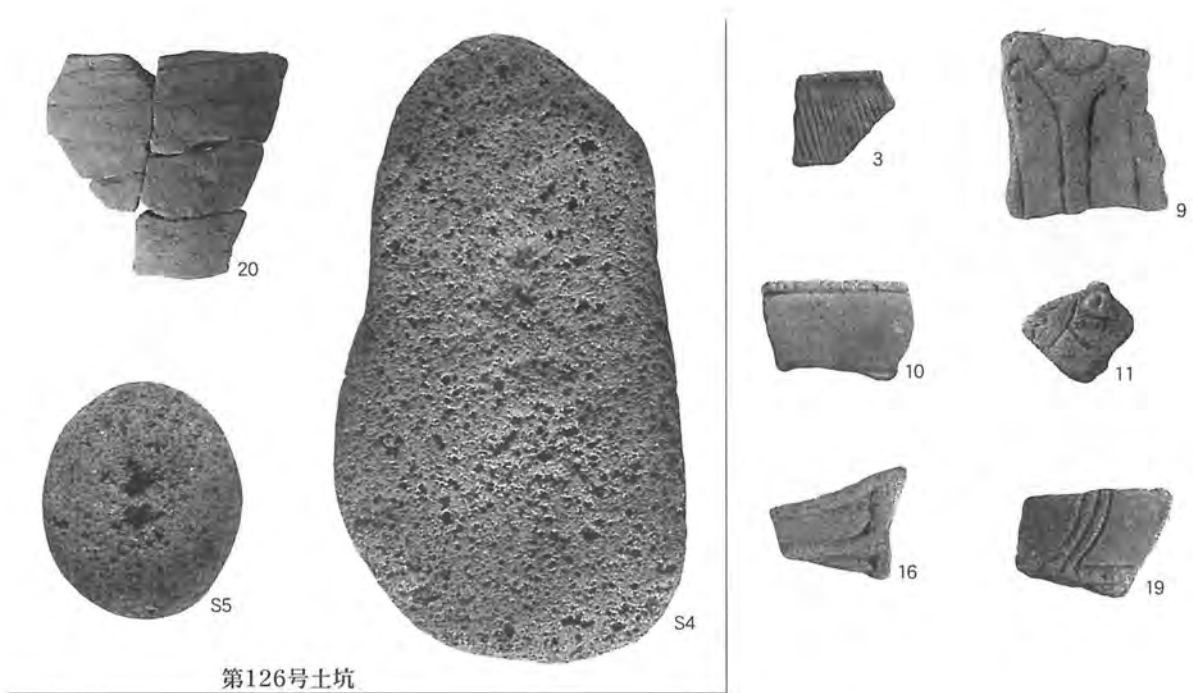
第123号土坑

第124号土坑



第125号土坑

第126号土坑



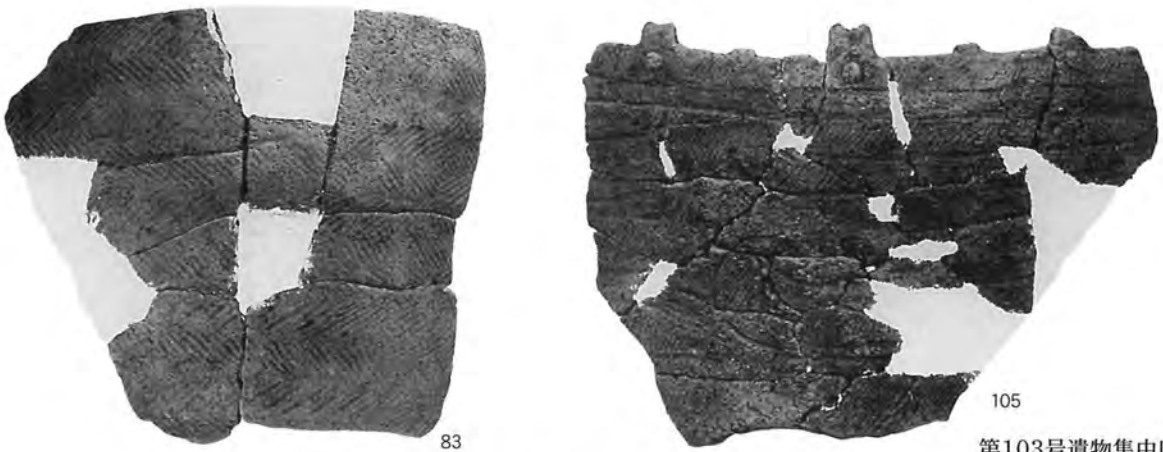
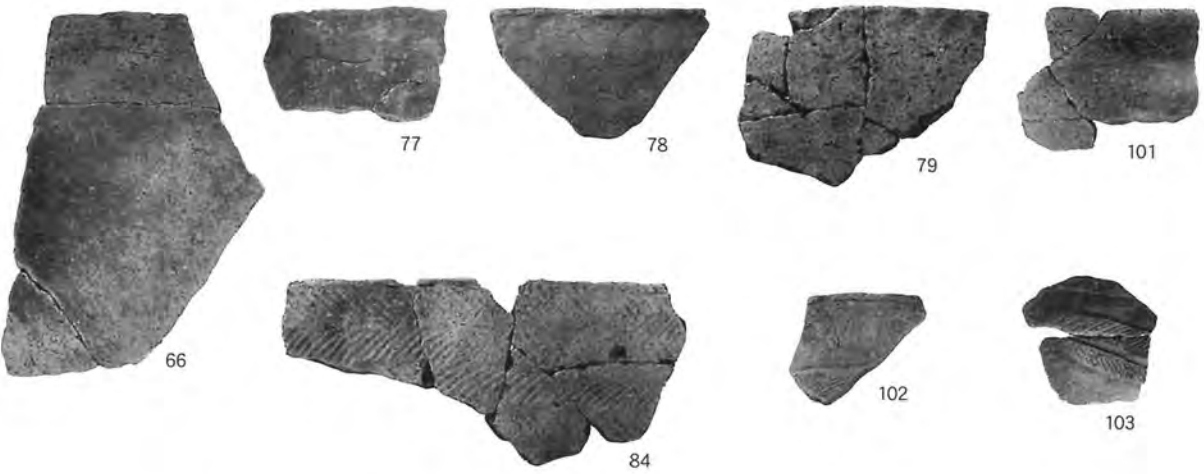
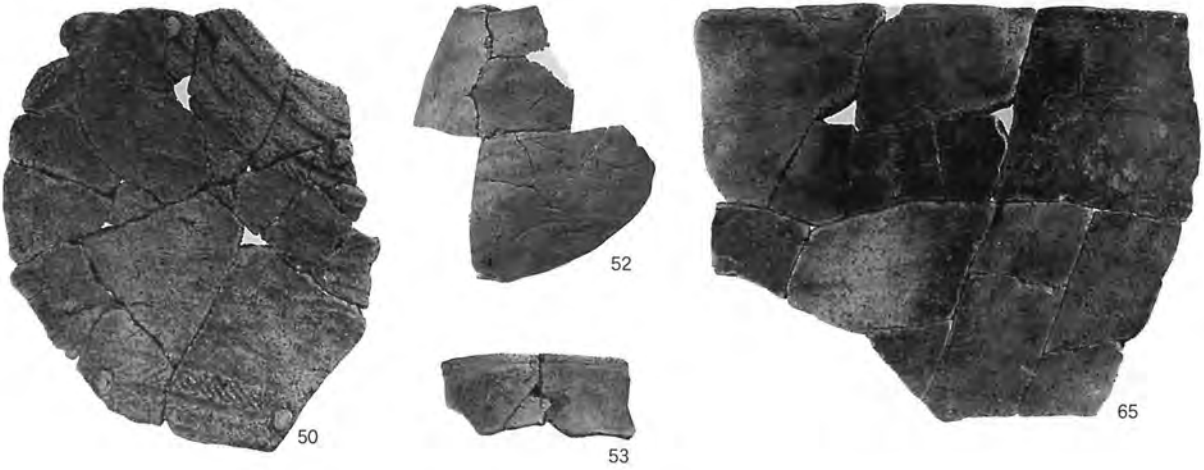
写真图版22 第126·129号土坑出土遗物



第131号土坑

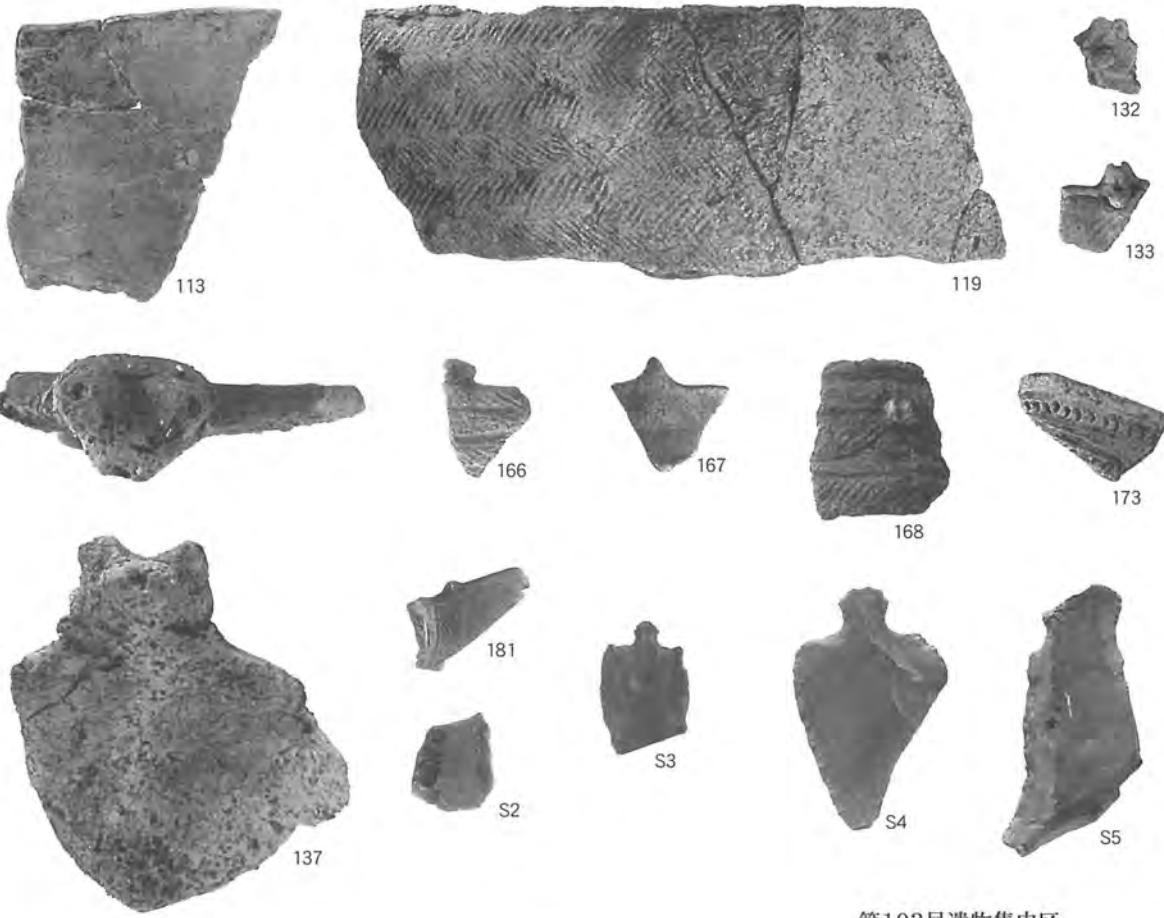


第103号遺物集中区



第103号遗物集中区

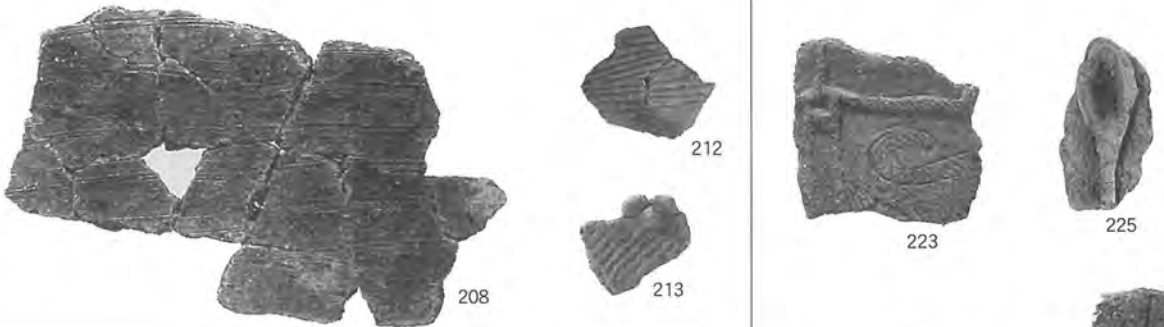




第103号遺物集中区



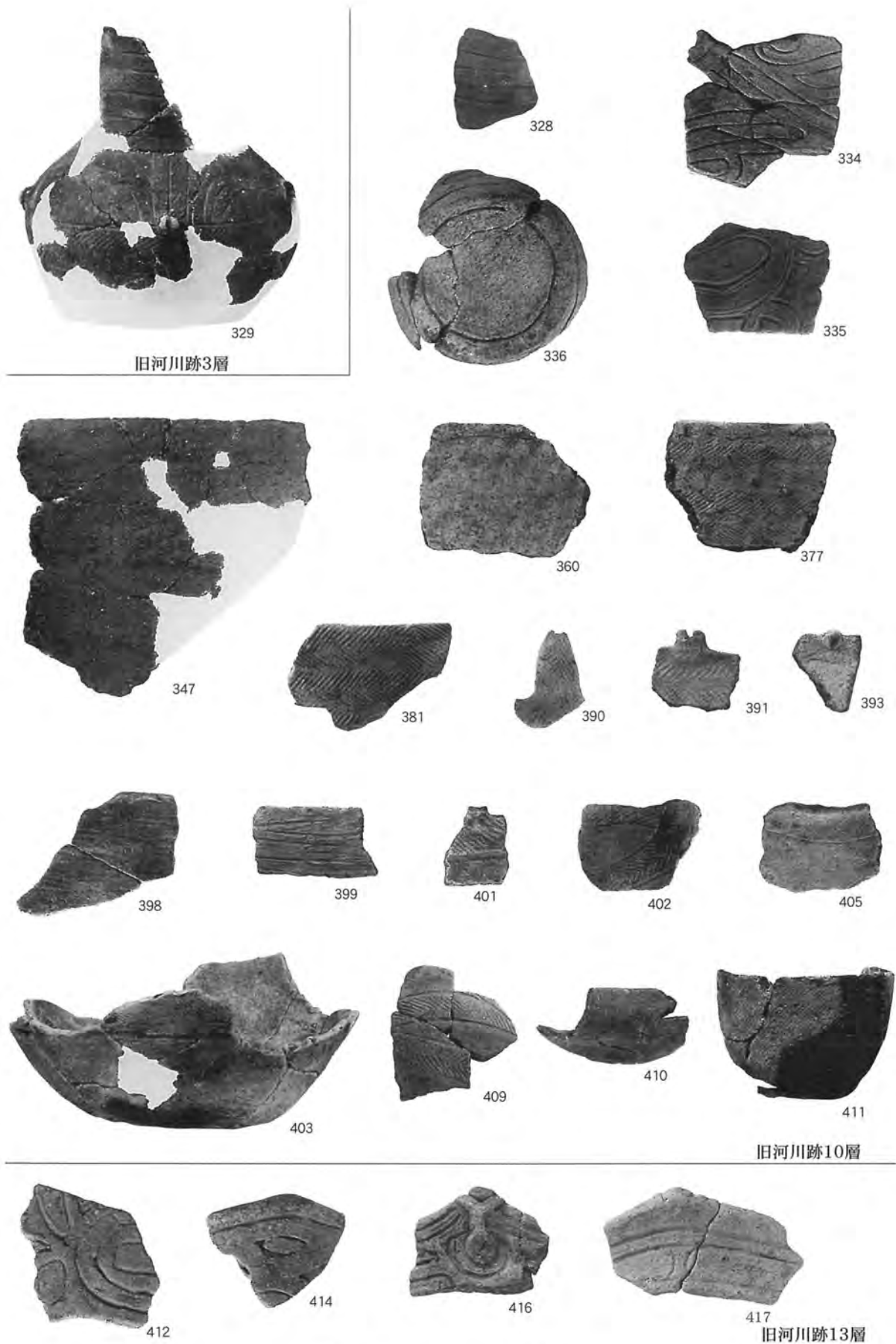
旧河川跡1層



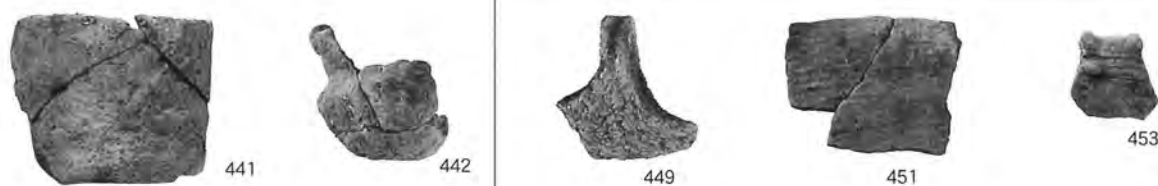
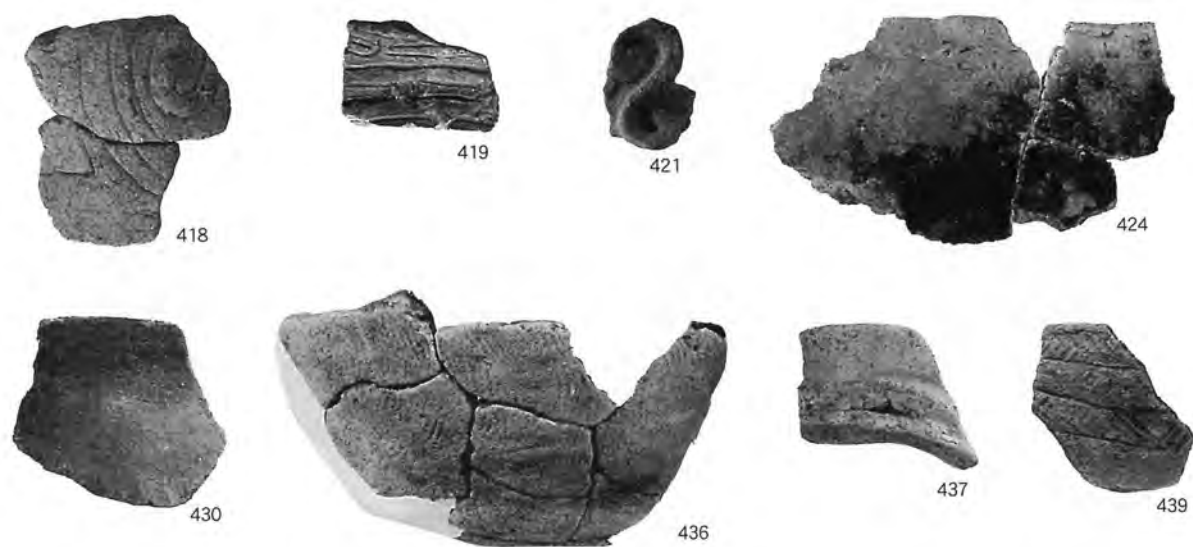
旧河川跡3層



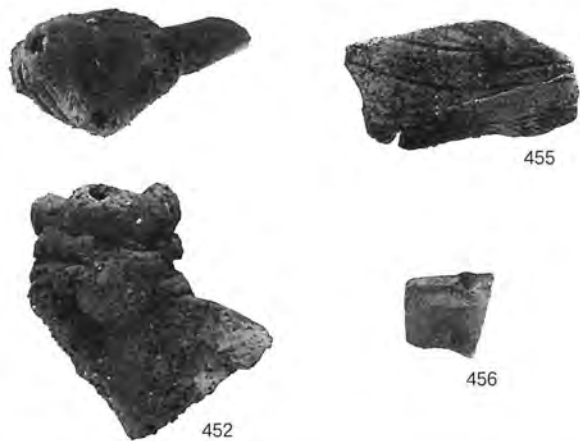




写真図版27 旧河川跡出土遺物

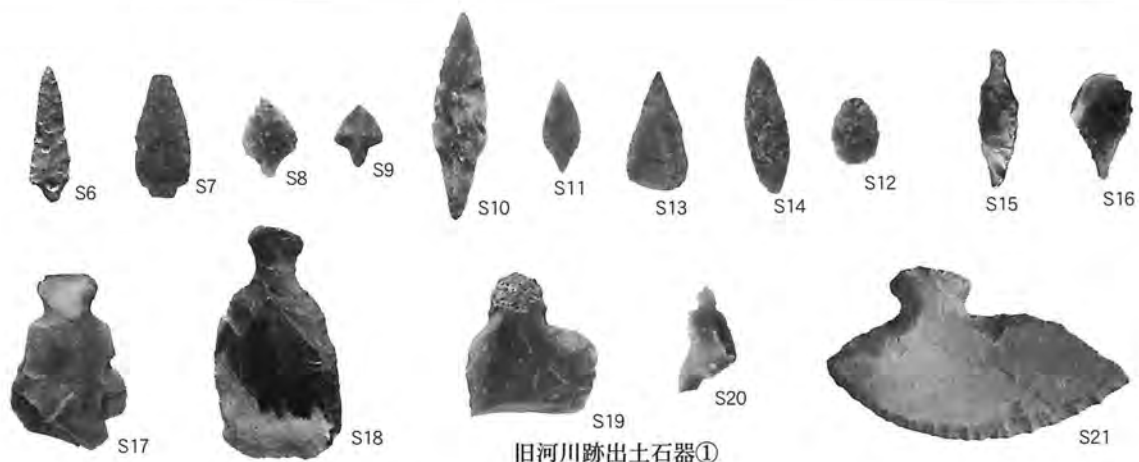


旧河川跡13層

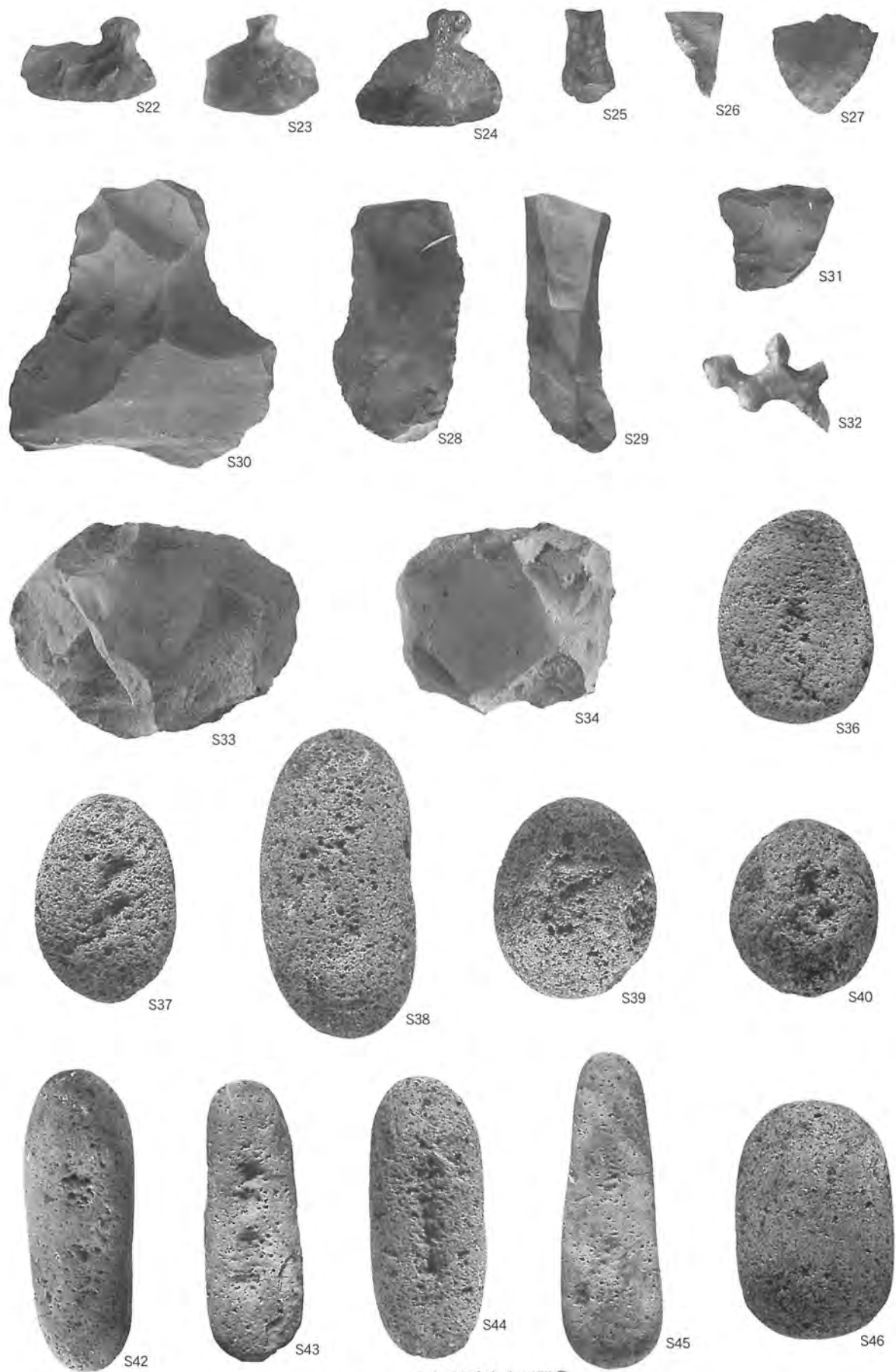


456

旧河川跡一括

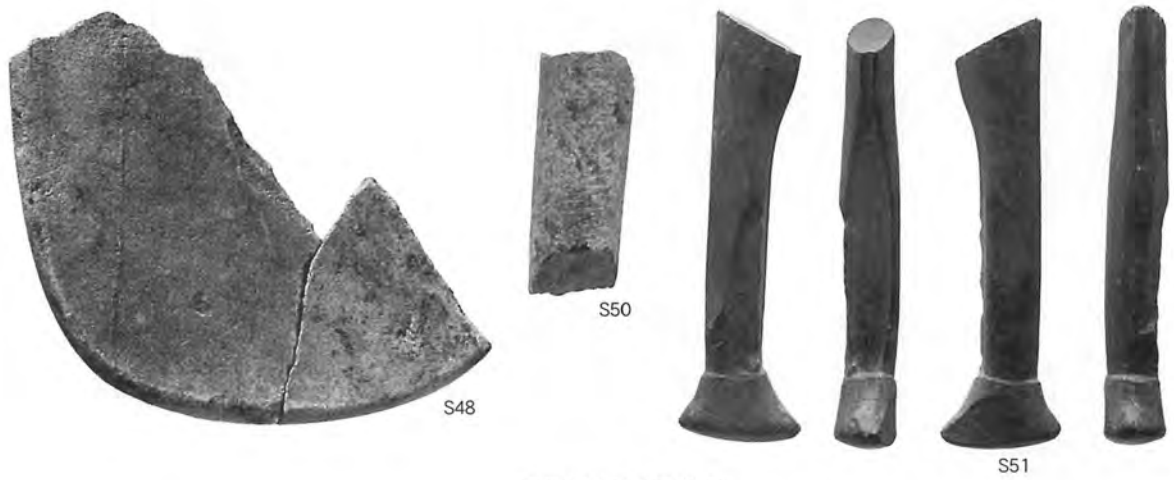


旧河川跡出土石器①



旧河川跡出土石器②

写真図版29 旧河川跡出土遺物



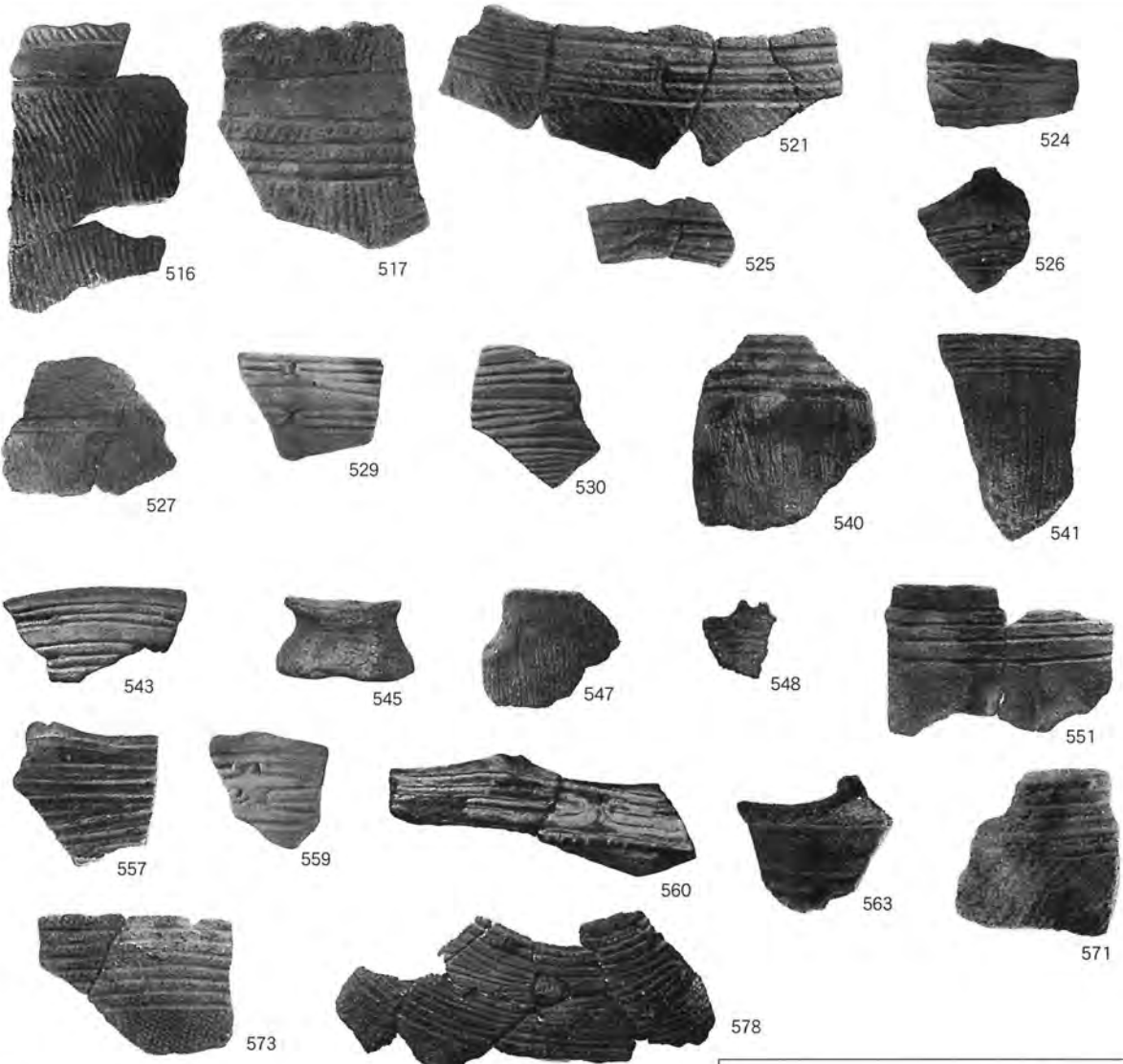
旧河川跡出土石器③



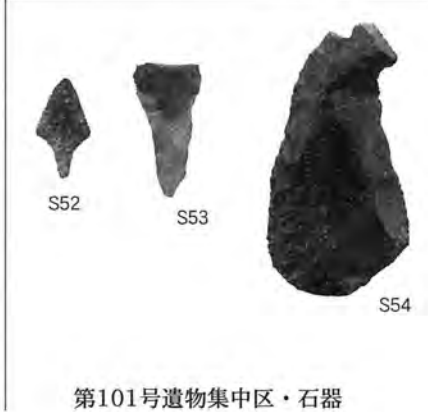
第101号遺物集中区①



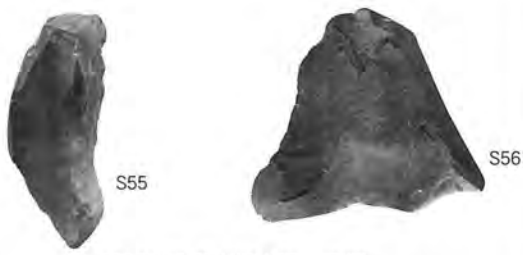
第101号遺物集中区②



旧河川跡西半部①



第101号遺物集中区・石器



第101号遺物集中区・石器



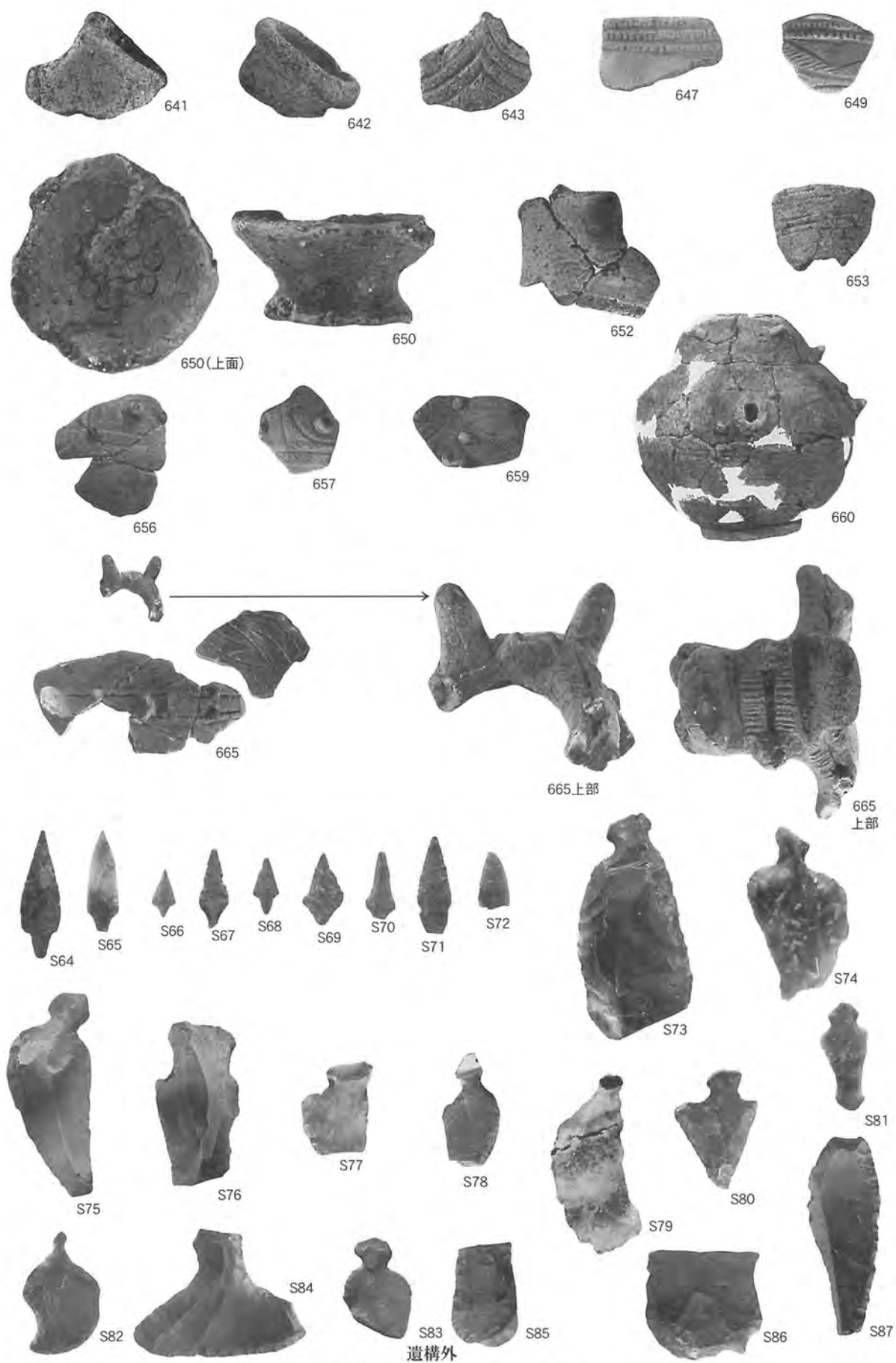
旧河川跡西半部②



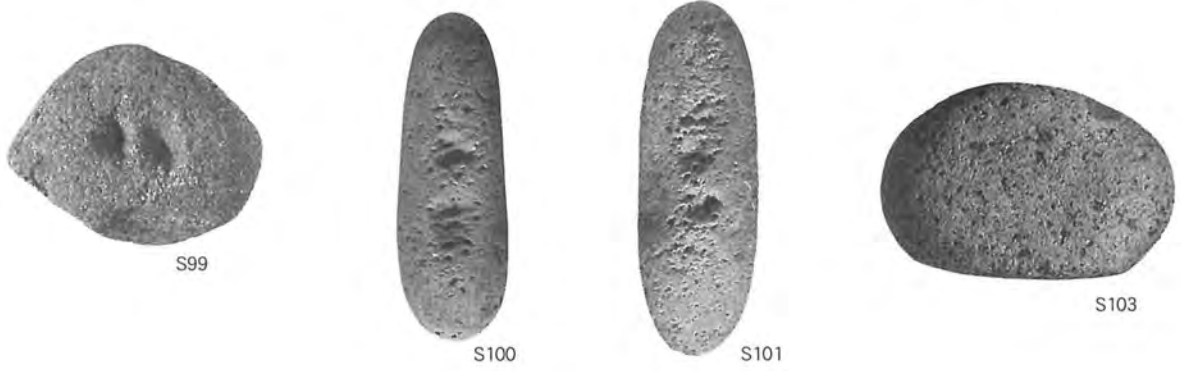
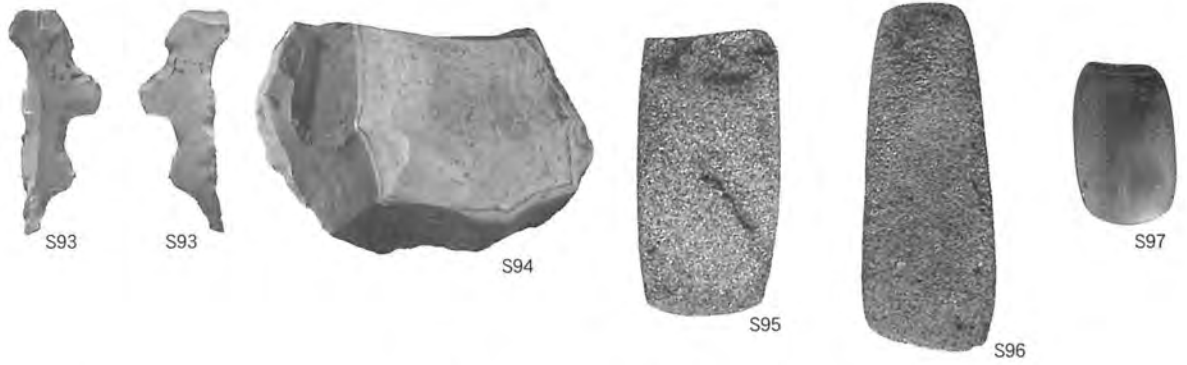
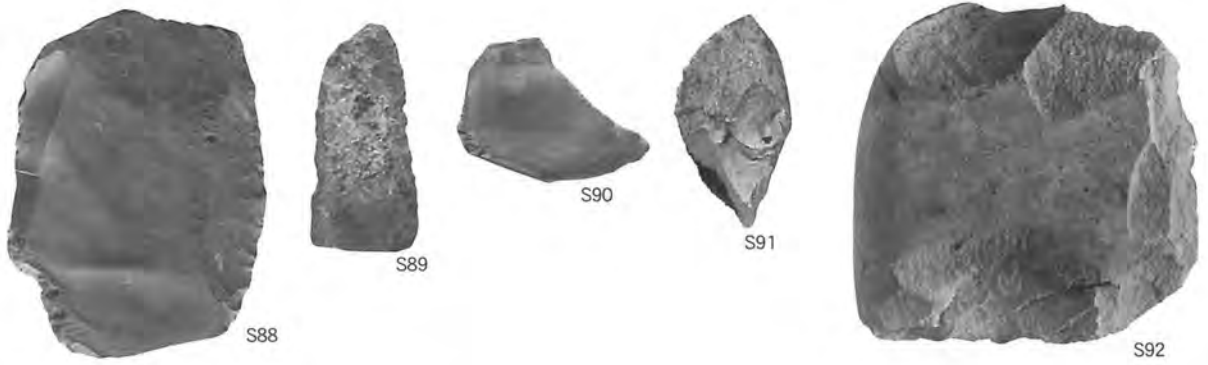
遺構外

写真図版32 第101号遺物集中区・旧河川跡(西半部)・遺構外出土遺物



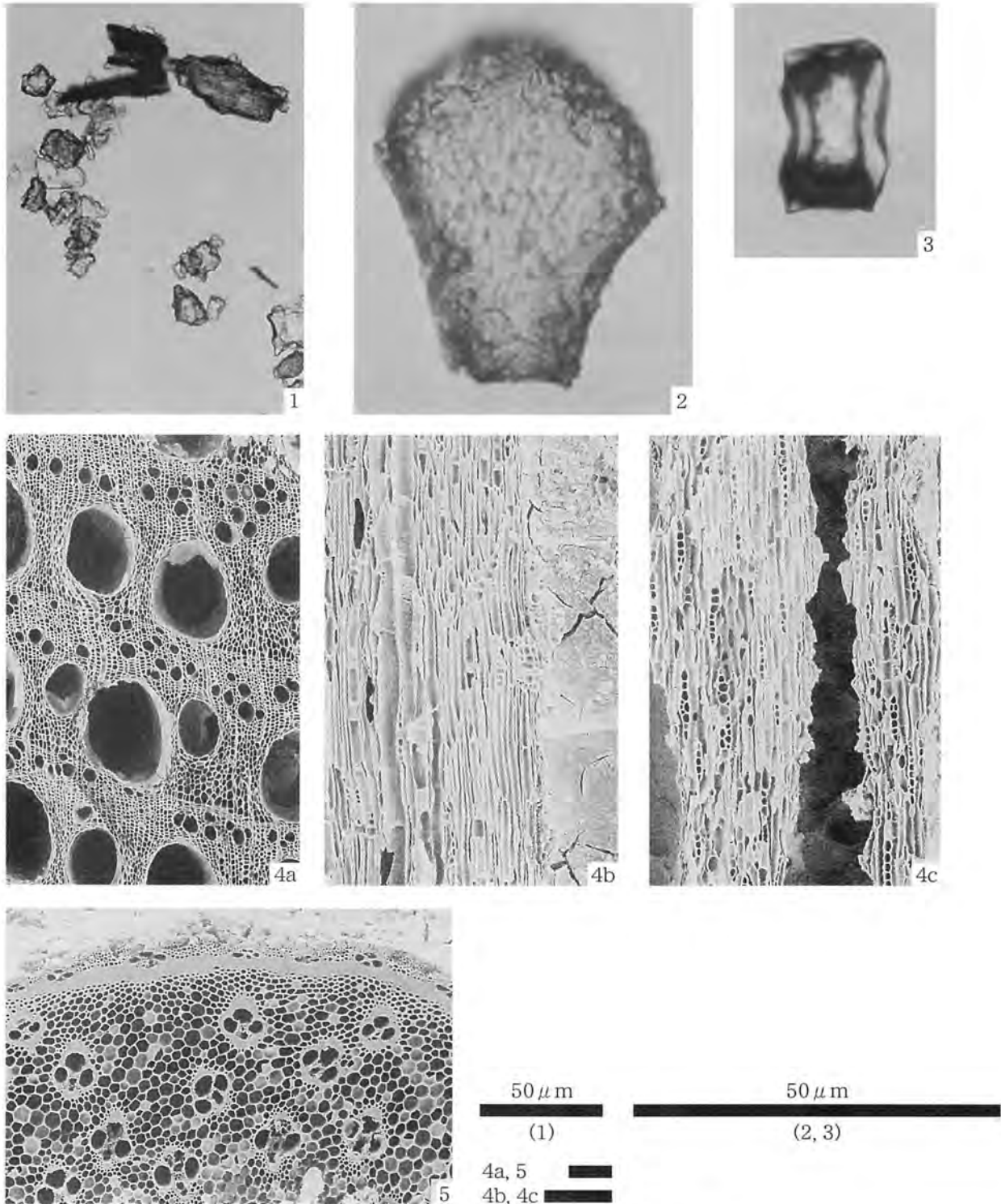


写真図版33 遺構外出土遺物



遺構外





1. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真(第105号土坑;サンプルB 8層)  
 2. タケ亜科機動細胞珪酸体(第105号土坑;サンプルB 8層)  
 3. タケ亜科短細胞珪酸体(第105号土坑;サンプルB 8層)  
 4. クリ(第105号土坑;サンプルB 8層) a: 木口, b: 柀目, c: 板目  
 5. イネ科タケ亜科(第105号土坑;サンプルG 3層)横断面

## 報告書抄録

ふりがな	かみのじりいせき に							
書名	上野尻遺跡Ⅱ							
副書名	青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第302集							
編著者名	工藤由美子・永嶋 豊							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのじりいせき 上野尻遺跡	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 おおあざや だあざ 大字矢田字 かみのじり 上野尻54、他	02201	01278	40° 50′ 28″	140° 50′ 58″	19990421 ～ 19991112	8,000	青森県新総合運動公園建設事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野尻遺跡	集落跡	縄文時代 後期	竪穴住居跡 土坑	1軒 30基	縄文土器（中期・後期）、石器			
		時期不明	竪穴状遺構 溝状土坑 ピット群 性格不明	1基 2基 2基 5基	縄文土器（中期・後期）、石器			
	旧河川跡	縄文時代 後期・晩期			縄文土器（中期・後期・晩期）、石器			

---

青森県埋蔵文化財調査報告書第302集

## 上野尻遺跡Ⅱ

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成13年3月30日  
発行 青森県教育委員会  
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1  
編集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印刷 株式会社 誠 工 社  
〒030-0112 青森市八ツ役字上林78-42  
TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188

---







活彩あおり  
—輝くあおり新時代—